女子文壇

第七年第拾壹號

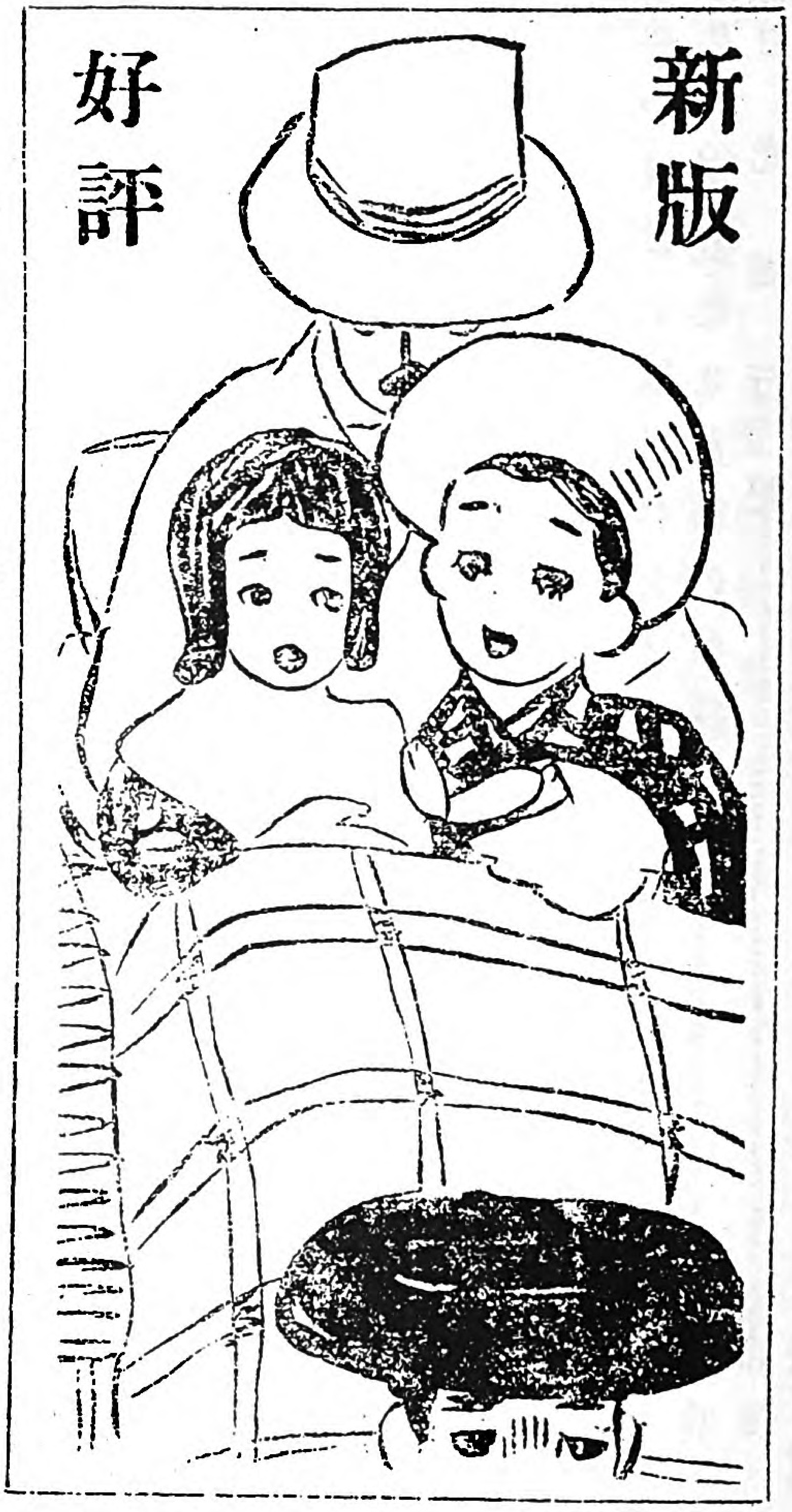


明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

二人やんちやん

いたづら小僧日記の著者
佐々木邦君著

武田壽氏彩色畫數葉



新版
好評

全一冊美裝 石版極彩色 木版色刷 畫插入

正價參拾五錢 送料六錢

これは、兄と妹の二人やんちやんが、天下無類の滑稽な奇抜ないたづらをして跳ね廻ることを、面白可笑しく書いたもので、一度讀みかけたら終まで讀んで了はねばおけないと云ふ大評判の本です。この本を讀んだら閻魔さんでもきつと笑はずには居られません。

◀製本發賣▶

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版 捌賣 全國各地書店取次販賣
（振替口座東京第壹七貳九番）

女子文壇九月號（第七年第拾壹號）目次

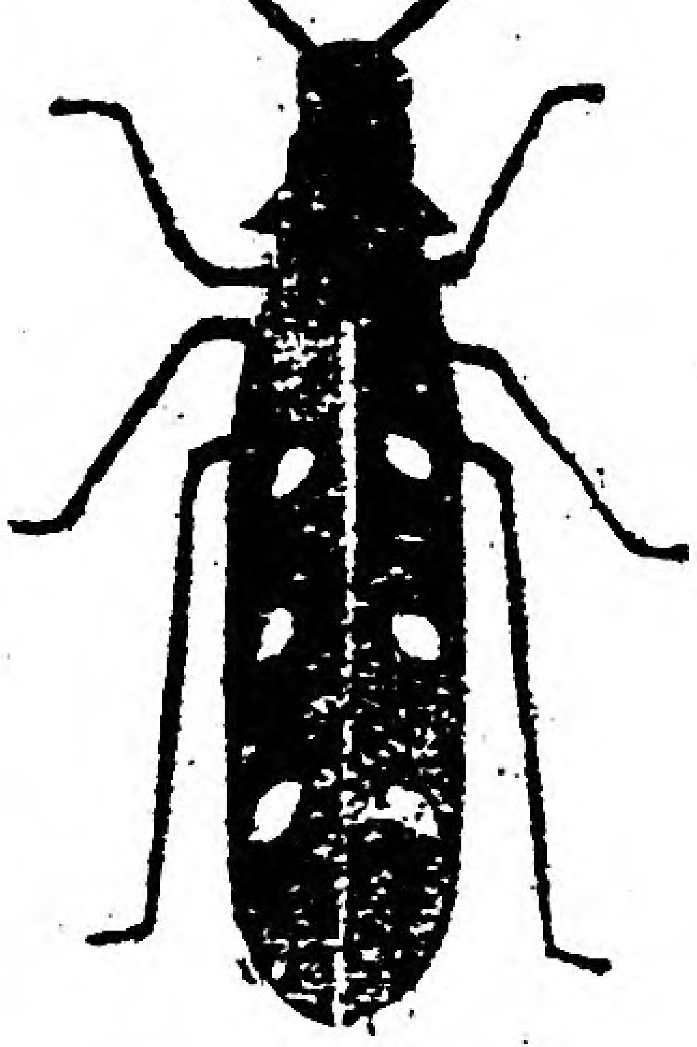
口繪

本欄

【德富蘆花論】

殘暑





九月十五日より

友禪モスリン新柄陳列會

の開會を期としモスリン類の大賣出し仕候。

十月一日より

第廿二回新柄陳列會

第二回美術及美術工藝品展覽會

雜貨新製品陳列會。

諸大家新作美人畫展覽會

懸賞裾模樣圖案陳列。

懸賞寫眞「少女」陳列

寄切れ見切反物大賣出し

右何れも特別盛大に開會仕候間、賑々しく御來觀被下度奉願上候。

東京 三越呉服店 駿河町



公爵九條道實氏夫人

公爵三條公美氏夫人千代子



禮装



鍋島子爵令嗣直縄氏夫人政子

羽仁もと子主筆

婦人之友

九月一日發行 第四號 一冊金十五錢 郵稅一錢五厘（六冊前金九十錢 十二冊一圓七十五錢）郵稅共

◉家庭に於ける婦人の職業問題……羽仁もと子

▲理想の生活 花子の巻……羽仁もと子
▲近來の一佳話……久留島武彦
▲昔の趣味と今の流行……岩村透
▲美服、家を亡す……安宮永輔
▲子供の結核に就て……醫學博士加藤照麿
▲家人の小遣は如何にすべきか……
▲女中訓（賢い女中と愚かな女中）……

▲名畫の子供……倉橋惣三
▲歌ものがたり……遠山稲子
▲鉛筆畫の描き方……大下藤次郎
▲假名の習ひ方……星野天知
▲文藝その月々……河井醉茗
▲フロスの水車場……松本雲舟
▲立志傳に入るべかりし女……
▲神經痛治療の經驗……
▲鮑の料理法……
▲家政問答……羽仁もと子
▲讀者消息……

◉良妻賢母とホーム……三宅雪嶺

▲我家の家具保存法……田中米子
▲着物の繰廻しの上手下手……延子
▲服装に就てのきまり……水町たづ子
▲二十七錢で出來る帶留……
▲ひね蠶豆を軟かく煮る秘訣……
▲二つの鷄卵で十二のワップルを作る……
▲九月の惣菜（三十一日分の献立）

▲葡萄（石川寅次筆）……
▲溪流（大下藤次郎筆）……
▲慈母觀音の圖（狩野芳崖筆）……
▲家庭の月見（畫報）……
▲山脇夫人と愛甥愛孫（畫報）……
▲衣服整理法講習會（畫報）……
▲蟲鳴く宵（畫報）……
▲とんぼとり（畫報）……
▲姉と妹（畫報）……
▲子供の一日（畫報）……
▲初秋の田園（畫報）……

◉北海に投身せる可憐の二少女……綱島佳吉

東京小石川雑司ヶ谷町 婦人之友社 振替口座東京壹壹六〇〇番

毛ぬき 新劑

從來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘルーピンを發明せるに多數實驗の成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
定價 壹圓
特製 參圓
内地送料十五錢
海外 三十五錢

飲で色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確効あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ピオール錠は極て強度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ピオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
内地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地
百合園製藥所

人若し藥を需めんとせば須く撰擇を要す

清心丹の三大特色は

一 効能の確實
二 品質の善良
三 價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過酒過食、惡心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下痢疝痢、舟車不快、咯痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價 壹圓箱入 五拾錢箱入 參拾錢罐入 拾五錢罐入 拾貳錢瓶入 貳拾錢紙包 拾錢紙包 五錢紙包

本舖 東京市日本橋區元大阪町八番地 高木與兵衛

盛裝



博文館主大橋新太郎氏夫人須磨子





醫學士高橋要助氏夫人梅子及び秋川ひで子



姉　　妹



紳商服部金太郎氏令嬢幸子、勢以子

若き婦人の誇

女子文壇 七月十日増刊 好評

新文章

紙數二百頁美裝
定價廿錢 送料壹錢五厘

◉一呼吸

▲生の斷片
▲覺め際の淋しみ
▲自ら警める記
▲學生の都會
▲初夏の人々
▲寢息

○男子の手紙に迷ふ
○不纏綴な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○小尼になつた若い女の記
○楊子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

◉七色の虹

◉轉宅（小說）

◉淋しい道（小說）

◉溫泉宿（小說）

▲梅雨日記
▲姉の家
▲心の離散
▲黑き洋傘
▲別れてゐる間

◎呪ふべき時代
◎年のあぢはひ
◎生立のつらさ
◎解けし謎
◎五月の水邊
◎繪筆

◉課題

△顏△髮△浴場△山△海△劇場

◉和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子　早川花子　長曾我部菊子　小川夢の女　小笠原ゆり子　太田喜志子　若杉はま子　河野槇子　加藤筆子　高橋りう子　田中港の女　内藤千代子　野村きやう子　山田邦枝子　八代やゑ子　松田梅子　松田妙子　前島優梨子　松村らく子　月[illegible]子　江森美子　佐藤滿壽子　佐分華影　木村あやの　夕はし　三宅やす子　三島よし子　平塚白百合　ひなげし　鈴木春子

發行所 東京市京橋區大鋸町十番地 女子文壇社 （振替口座第壹七弍九番） 賣捌 全國書店

對照



神崎久子孃
（東京女學館出身）





西ノ宮初子孃
（東京女學館出身）



男爵杉溪言長氏令嗣と夫人若子



今村繁三氏令弟英助氏と夫人（跡見女學出身）



田中友二郎氏と夫人園子（京都第一女學出身）



法學士宮本英治氏と夫人望子（實踐女學出身）

高潮號原稿募集

秀才文壇定期増刊（十月十五日發行）

原稿募集締切　九月十日最終便

甲種

評論文（二十四字詰七十行以内）松原至文選

公開狀（二十字詰百四十行以内）編輯局選

紀行文（同上）吉江孤雁選

表紙畫（三色配合）正宗得三郎選

口繪（四色限）正宗得三郎選

特殊原稿

△短篇小說（二十三字詰二十行十三枚以内總振假名付）……德田秋聲選

△現代青年の告白（實生活の狀態、現在の突詰めた心持、苦闘等）（二十四字詰二十行十枚以内總振假名付）編輯局選

△小品（二十二字詰二十行五枚以内總振假名付）……水野葉舟選

△長詩（五十行以内）……三木露風選

△短歌（十五首以内）……前田夕暮選

乙種

書簡文（二十四字詰六十行以内）前田夕暮選

小品文（同十五行以内）三津木春影選

六號文壇（二十一字詰六十行以内）編輯局選

丙種

スケッチ（半頁以内）竹久夢二選

俳句（十句以内）高田蝶衣選

投稿注意

投稿さるゝ諸君は第一、規定字詰と行數枚數を間違へぬやうに、又締切期日に遲れぬやうに注意せられたし

投稿封書に高潮號原稿と必らず朱書することと普通懸稿と取紛れぬ樣注意ありたきことと

原稿に二枚以上のものは一箇所乃至二箇所を綴り原稿種目（例へば小品とか短篇小說とか）朱書すべし

斷じて政事的時論に亘るべからず

葉書半切洋罫紙等を用ふべからず、用紙は總て半紙又は原稿用紙とす

賞與規定（發行翌月以後贈呈）

特殊原稿　掲載の作品には相當の原稿料を呈す

甲種　一等金二圓五十錢　二等金一圓五十錢　三等金五十錢（但し圖書切符のこと）

乙種　一等一圓　二等五十錢　三等三十錢（本社見計の上書籍にて呈上す）

丙種　一等本誌三冊　二等本誌二冊　三等本誌一冊

發行所　東京神田旅籠町一丁目（振替東京一九五五）文光堂

賣捌　東京堂　東海堂○北隆館　良明堂○上田屋　至誠堂

新學期開始

◎本會は眞面目に短歌を研究し試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的智識を供給する。
短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人々の入會を待つ!

本會執筆講師

尾上柴舟　○金子薫園　○水野葉舟
太田水穗　○岩野泡鳴　○三木露風
窪田空穗　○若山牧水　○前田夕暮
其他有名大家數名擔任

和歌講義錄

此際至急入會者に限り入會金を免除す

見よ!!! 舶來ラフ紙印刷は本講義錄唯一也

全國新聞批評

◉近年敷島の道を學ぶ者都鄙益々多きを加へ來れるは喜ぶ可き事なるも其作往々杜撰に流れて傑作を得るに難きは斯界の通弊たり今や大日本短歌會なる者設立され之が好指導たらんとす、其內容に輯錄せる材料悉く時代の要求を滿し、講述叮嚀眞簡初學者の良師友たり(小樽)◉新派和歌を學ばんとする者の好楷梯たるべし(山梨)◉苟くも和歌研究者には無二の良師友たり(北海タイムス)◉中學生程度の短歌初心者に便利なる點多し(新每)◉和歌講義錄として斯程新しく而白きは類ひ稀なり(福民)◉我國歌壇の名士が揃へて講義振り頗る親切なり(根室)◉作歌法の指導に頗る懇切を極む、國風に志す者の是非とも必讀すべきものなり(北國)

見本附き會則申込次第無代送呈

東京市神田區旅籠町一丁目
大日本短歌會
振替東京一九五五番

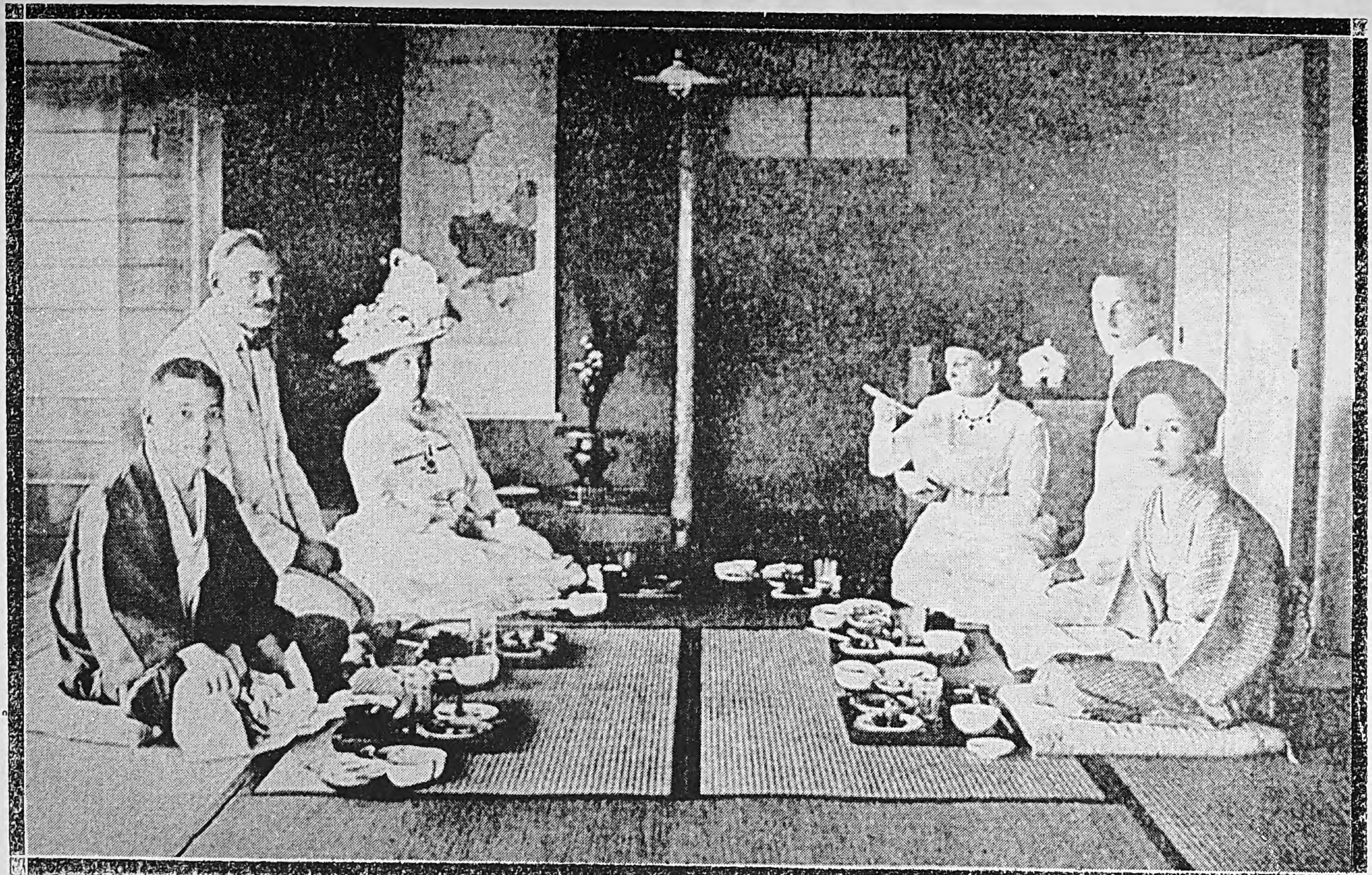
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あさがほ



中山米子嬢　鈴木うめ子嬢　遠山英子嬢

外人の饗應



木下氏夫人

（鐵道院營業部長工學士木下淑夫氏邸宅に於て）

木下氏

簡易殺鼠劑

Common Sense Rat Exterminator.

コンモンセンスラツトエキスタミネートル

本劑は北米加奈太コンモンセンス製造會社の製造に係るものにて曩きに同國農務大臣ジヨンドライデン氏が其効力の卓絶なるを賞賛の餘り世界公益の爲め各國政府に是れが試用を勸奨紹介せられ我日本政府も亦之れが配付を受け西ケ原農事試驗場に於て試驗せしに其効力著しく其後本社發賣以來一般使用者の實驗上孰れも豫想外の効果を得て驚嘆せざるものなし故に本劑の効力に就ては今更茲に喋々せず大方の諸彦邦家の爲め速に本劑を使用し鼠族の撲滅に努められん事を切望す



半オンス入 五十五錢
一オンス入 一圓
三オンス入 二圓九十錢

女子文壇愛讀者に限り送費無料

●使用法は現品に添付せるも參考の爲め御入用の方は本劑に關する詳細なる說明書進呈すべし

本社發賣品 蠶具製絲諸器械詳細圖解目錄 無代進呈

東京市下谷區仲御徒士町三ノ五九

東洋一手販賣元 日本蠶業株式會社藥品部

電話下谷一二五四番

振替口座東京五一二六番

蠶具問屋

蠶業諸器械何でも有ます

圖解目錄無料で差上ます

東京市下谷區仲御徒士町三丁目五十九

日本蠶業株式會社

振替貯金東京五一二六番

電話下谷一二五四番

婦人畫報

九月一日發行　九月の卷一冊廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共貳圓八拾八錢

畫報

□攝子女王殿下御昇棭

□湘南に於ける閑院宮御別邸

□李王妃殿下の御養蠶

□歸省中の女學生□握手

□輕井澤に於ける江木欣々女史

□檣頭の月□村井嬢の結婚

□西洋料理の食べ方……

揮毫中の中澤畫伯……
西洋婦人の表情……
小笠原子爵の家庭……
扇子のこしらへ方……
嚴妃殿下の葬儀……
美神の祭□初秋の子供……
盆栽と盆石□令嬢と書……
鳥料理とむきもの……
大隈伯別邸と清浦氏邸……
十數名家の令嬢……
少年少女の東京見物……
盲啞生の體操とマッサージ……
避暑寮に於ける女子大學生……
東西の女流聲樂家の握手……

優美なる寫眞　八十有餘

最優絶にして而かも家庭的なるは本誌の特色なり

讀物

子供と自然物……倉橋學士
昔の婦人の髪……齋藤學士
女記者の訪問を受けて　某若夫人
彈正と呼んだ鳩……野上彌生子
髪の毛の養生……北原十三男
秋の蟲いろいろ……西村醒夢
小兒と果物……榊博士
家事の整理……井上秀子
古今の女歌人……佐々木博士
美神の祭……菅原學士
夏の山と海……女記者
輕便なおしめ おさ……ミシま子
ての頃の料理……吉村里

□婦人が毎日一時間だけ經濟的に働かば……中島博士

□日本人より見た歐洲婦人……岡村博士

□艶麗な不具婦人……上杉博士

□大切な娘時代……下田歌子

□家庭と書生……鳩山春子

□其日其日……三宅花圃

□飯阪から東山へ……與謝野晶子

□つなみの後……長谷川時雨

芙蓉　高村眞夫筆三色版

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一八一八番

最新版＝特賣提供＝好機不可逸

わらび山人作
緑水氏畫
家庭小說 **新小公子**
二百餘頁 中判美裝
賣價廿五錢 送料四錢

わらび山人作
紅雲氏畫
家庭小說 **中將姫**
二百廿餘頁 中判美裝
賣價廿八錢 送料四錢

三宅青軒先生作　緑水氏畫
素顏の蓮子
二百八十餘頁 中判美裝　賣價廿八錢　送料六錢

巖谷小波先生著
清方氏畫
お伽十夜噺
二百廿頁 中判美裝
賣價廿六錢 送料四錢

ビヨルンソン氏原作 三浦關造先生譯
馬場孤蝶氏序 素明氏畫
家庭小說 **喜び**
二百卅餘頁 中判美裝
賣價廿八錢 送料四錢

專賣元　東京市京橋區大鋸町十一　女子文壇社　(振替口座壹七貳九)

「婦女界」の懸賞募集

婦女界―第四巻第三號、九月號既に出來各書店にあり

雜誌「婦女界」は教育ある婦女子の好伴侶として淸新なる趣味を說き、堅實なる思想を皷吹し、又實務に關する多趣多樣の記事を滿載し、更に每月左の如き各種の懸賞募集をしてゐます

△家庭日記　賞一篇一圓宛
△寫眞　一等五圓
△和歌　一等三圓
△俳句　一等三圓

△繪畫　一等三圓
△習字　一等三圓
△家庭實驗　一章五十錢宛

別に餘興として、何人にも面白く、何人にも解答し易き新題を募集してゐます、

九月廿五日〆切の分は卽ち

▲お友達の數を問ふ　一等五圓以下數等

と云ふのでございます、お友達の一人でも二人でもある人には容易に答へられて其方法は極めて面白く出來て居ります

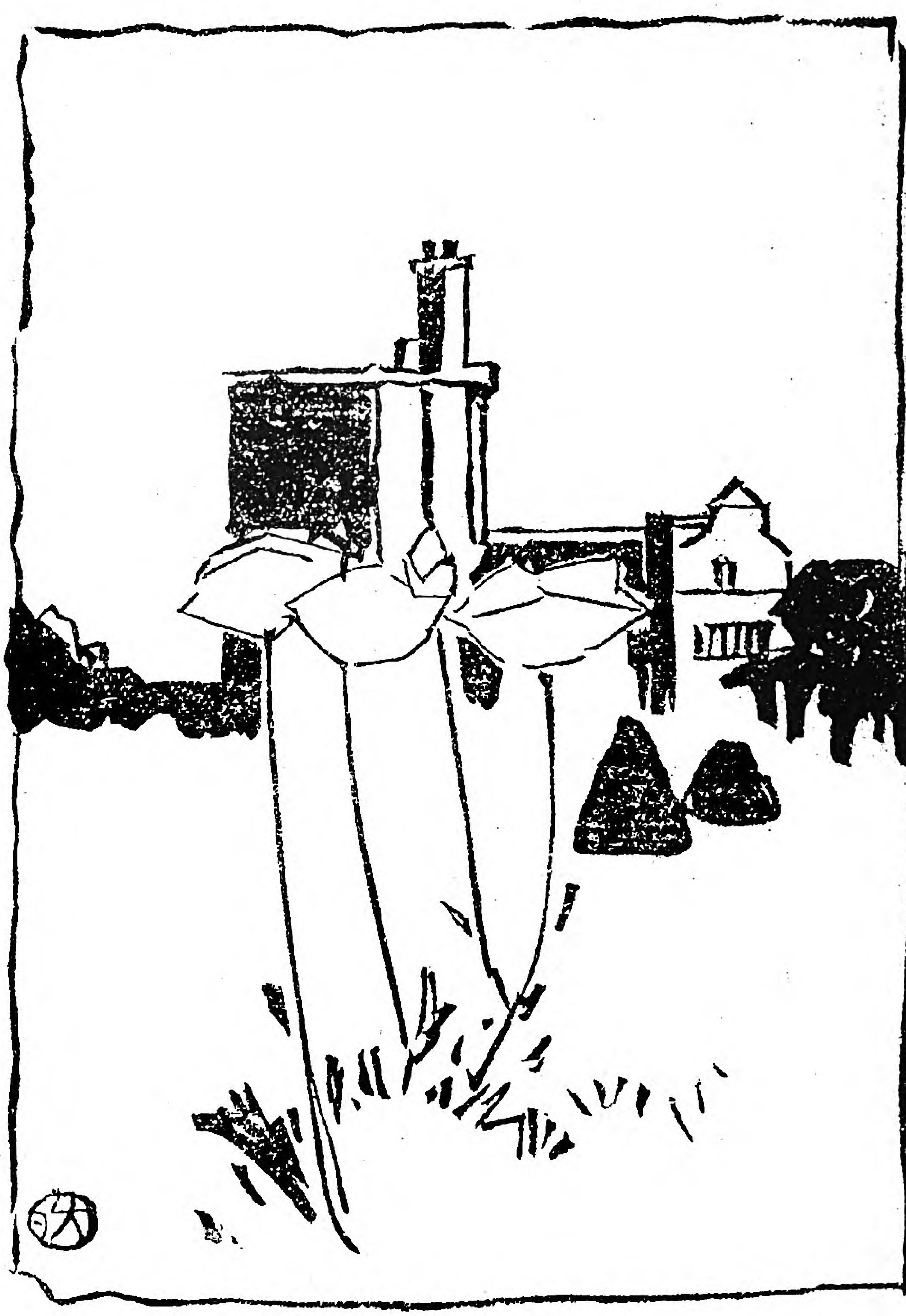
「婦女界」一冊十五錢稅一錢五厘

發行所　東京神田區表神保町二番地　振替口座東京一三五番　同文館

女子文壇

第七年第拾壹號

明治四十四年九月一日發行





不如歸著者 德富蘆花論

蘆花氏の一面は情の人

佐野天聲



六月二日の朝女子文壇社から德富氏に接近した以來の感想を私に話せとの注文が來た。私は自分の一隻眼に映じた氏の平生を毎時の運筆に似合はず、二晩かゝつて書上げたが讀返して見ると飽足らぬ節多く、論旨や〻水平を失し、吾佛尊き匂ひのいさゝかながら遁竄せざるにもあらぬ虞れを發見したので、折角指定の紙數に迄書上げたものを、捨てるのは惜しかつたけれど、斷然引破つて其代りに、私が最も記憶すべき思出の一つとして頭顱の碑帖に鏤刻して忘れ得ない左の事實譚を少しも文飾せずに認めて而して責を塞ぐ事とした。之ならば聊かも懸念する所無く、氏の情的方面の發動力如何を忖度する事が出來ようと思ふ。

一昨年の暮、妻の姉婿が情の葛藤から生じた三年越しの懸案を、西比利亞鐵道に載せつゝ歸朝するといふ報に接した私は、私の結婚に媒妁の勞を執られた關係から、此懸案に多少の因縁を有さるゝ德富氏を粕谷に訪ひ、自己の所信の當不當を裁斷して頂く必要を感じたので、前夜略其心積りをして寢に就いた。さて翌朝

つとめて早起きする考へがつひ寢忘れて毎時の時間に眼が覺めると枕元に手紙がある。某書店主人から來た親展書だ。封を切つて讀む。金融逼迫といふ文字が先づ目に入る。殘念ながら此度は御容赦被下度候云々。一陽來復の後御埋合せ仕るべく候云々。玉稿を謹で御返璧申上候云々。頗る婉曲に書いたものだが頗る要領を得た斷手紙である。此頃私は原稿生活をして居たから、彼方向になつた後禿頭翁に對して忸怩たるものあると同時に、又恐慌せざるを得なかつた。姉婿對自分の關係は頗る紛糾を極めてゐる。場合によれば敦賀までも行かねばならぬ。淹留何日、旅費若干、年の瀬の徒渉質幾何、曰何、曰何、僂指する毎に指頭唯金聲の戛々を聞く、これは粕谷行よりも金策が專一と、其處に氣はついたけれど差當り正當の權利を主張して當面の難關を突破する手段が無い、で、已むを得ず、窮卽通の危道を踏み、本郷の伯父の許へ金借に出掛けた。伯父といふのは母の兄で、國學者だけれど貨殖の道に暗からぬ老人、筆を舐りながら一代に寢てゐて食べられるだけの身代を拵へた位の人だから無論金錢には綺麗で無い、が、書生時代を除くほか七八年來一度も無心がましい事を言はず、且書生時代に借りた金も期限には間違ひ無くちやん／＼と返してあるから、事情を述べて泣付いたら否とは言ふまいと十二分に確信してやがて伯父に逢つて――伯父は其時黄疸病を患つて居た――伯父に逢つて、かく／＼の次第で歳暮に迫つて旅行せねばならぬに就ては差當り若干かの金を要する原稿を書いて書肆に賣つても急場の間にあはぬから甚だ申兼ねるが暫時十五圓程拜借は出來まいかと言ひ入れた。すると伯父は居丈高になつて、貴樣の妻の姉婿と俺と何の緣因がある、金が無くば敦賀邊まで行かずとも新橋で逢へば澤山、其樣理由の立たぬ金を貸す義務は無いと權もほろゝの挨拶、氣の短い私は、つひ顏色が變つたが、ぢッと怺へて徐ろに三年越しの懸案を語り、敦賀迄も行つて誰よりも先に面會せねば、事によると姉夫婦の關係に至大な影響を及ぼさぬとも限らぬ事情を述べ、今一應お考へ直しを願ひたいと、つと

めて自己を沒し、我を捨てゝ賴んで見た。頭の高い私の平生を殆ど遺憾なく滅却した姿で賴んで見た。けれども其れは全然無効で、伯父は無情くも頭を横に振つた。「貸さんといふたら骨が舍利になつても貸さん、俺の家は金貸ぢや無いで喃。」

漫性胃弱の變症になやんで眞黄な顔してゐる六十九の老人は恁う言つて私の願意を拒絶た。人情の沒却、不慈の拒否、黄金色の怪光が瞳の底からぱッと射す。病氣の故だけれど妙な方へ聯想が飛ぶ。子供の時讀んだ守錢奴と糞壺の比喩談が記憶から喚起される。恁うなると甚く頭が冷靜になつて、興奮かけた神經も忽ちをさまり、前には強ひておちつけた我を今は自然に沒却して、間も無く暇乞して外へ出た。歸宅したのは正午過、其れから直ぐ粕谷へと思つたが、三里の道を歩いて行くと日一杯に往復することは不可能、冬の夜を武藏野の寒月に照らされて踽々然として歩むとなると第一健康と相談せねばならない程羸弱な私だから、大事をとつて其日は某方面に少しの活動を試みたばかり何もしなかつた。さて翌日は愈粕谷行、昨日の失敗を見事今日は恢復して正午少し前に先方へ着いた。毎時の通り疊まく欲しい團欒の一員となつた私は直ちに姉婿歸朝の一條を告げて高見を敲いた。氏は今夜の終列車を利用し明日の朝大阪の地を踏むの策を得たるものなる事を說き示され、大阪に行つて敦賀着の時日が大阪敦賀間に一往時を剩す餘裕があらば顧慮せず躊躇せず誰よりも先に新歸朝者を敦賀埠頭に迎へよとまでに激勵された。私は謹んで命を領した。先んじて必ず或者を獲得すべき旨を答へた。話頭は忽ち文壇の現況に一轉したが、再轉した時には私は懷にして來た二宮尊德の脚本を氏の前に披露して居た。昨日某書店主人から眞綿で頸のじわ〳〵と斷られた原稿である。私は此作の來歷を巨細に述べて、作業時間の休止から生ずる物質的缺陷の補ひを此作によつて贏得る手段があらば御示し願ひたいと懇請した。氏は熟考の後、警醒社主福永君に推薦し見るべしと快諾され、咄嗟に筆をはしらせて添書を認めて下すつた。時に午後二時。新宿

通ひの終馬車は赤坂山へかゝらぬ頃だ。「せきたてる樣で大に妙で無いが、今から直ぐ警醒社へ行つて原稿の始末をつけ其足で夜汽車に乘る樣にしたら何うか。」と懇ろに注意された。私は卓上の原稿と添書とを袱紗に包み「御高見に従ひませう。」と答へて座を立つた。奥さんが母屋から出て來られる。書齋の障子を右左におしあけ椽から靴脱に下立たれた氏は突如私に向つて失禮だが旅費はあるか、多分の事は出來ぬが、少許なら融通してもいゝと言はれた。有體に



いふが私の懐中には此時一錢一厘の貯へも無かつた。昨日の小活動は文壇の某先輩に縋つて幾分の補助を仰いだのであるが、これは月末迄に貸すといふ條件付で、承諾を得たのだから、今此情ある言葉を聞いて私は自分の耳を疑ふ程に喜んだ。が、謝すべきか應ずべきかの去就に幾分不安の念を有つて居たので、暫時佇立んだまゝ沈思した。咽喉から手が出ると云へば野卑である。落語家の口調めいてゐる。然れども聖人で無い私は此時其れに類した感じが胸に湧

いた。不愉快でたまらなかつた。殘念で堪らなかつた。併し其殘念も不愉快も詮ずる所無勢力で、結局去を棄てゝ就に就かねばならぬ力の發動を烈しく感じた。で決然頭をあげると、其處に既氏の姿は無かつた。障子越しの次室から金屬製の器の相觸れ相軋る響が聞える。間も無く氏は鼠色の一重封筒を手に提げて出て來られた。「多分ではありませんぞ、ほんの旅費だけ。」語を言ふと涙が溢れさうだから默禮を謝辭に代へて、恭しく件の封筒を手に受けた。黒眼鏡越しに透いて見える氏の眼と私の眼とが宙でぶつかつた時、私は昨日の不快極まる伯父の黄金色の怪光を想起した。其折蒙つた心のいたみは、今氏によつて醫やされたのであるが、爲すべき一切の事を爲し果へて歸宅した其日の薄暮、待兼ねて居た妻子の前で、鼠色一重封筒の在中物を開けて見て、其れが三十圓の紙幣だつた事を發見した時の心持は形容の限りで無かつた。癒された傷を彌が上に又癒されたと云つてもなほ云ひ足らぬ。況や此三十圓の腰纏が、一週日の後非常な勢を以て大阪と其附近（敦賀には行かなかつた）とに發動し、三年越しの情の懸案を解決し盡して好風忽ち青山を吹出し了したに就いては、もう多くの文字を弄ぶ必要を見ぬ、歸納すべき德のポイントが黄金色の不快な怪光で無かつた事を告白して、爰に此事實譚の筆を擱く。

＊　＊　＊　＊　＊

『不如歸』を讀む

日向きむ

「色白の細面、眉の間やゝ蹙りて、頬のあたりの肉寒げなるが、疵と云へば疵なれど、瘠形のすらりとして靜淑らしき人品、此れや北風に一輪勁きを誇る梅花にあらず、また霞の春に蝴蝶と化けて飛ぶ櫻の花にもあらで

夏の夕闇にほのかに匂ふ月見草、と品定めしつ可き婦人なり」巻頭にある是丈の文章で、私は未だ何も讀まぬうちから、知らぬ間に浪子に同情を持て終つた「…果は山も空もただ一色に暮れて三階に立つ婦人の顔のみぞ夕闇に白かりける」此處で又其如何にも柔い感じが、はかない思ひ出の源氏夕顔の上の印象と一つになつて、何處かで何時か見た人の樣な他人とは思はれぬ樣な、なつかしい思ひさへ添ふて來た。夏目氏の虞美人草でも、初めは何とも思はなかつた平凡な小夜子を、菫とも鷺草ともつかぬ小さい草の花は、彼女の樣だと甲野さんの評した言から、好きになつたのと同じ事でせう。



此小説を初めて讀んでから九年經つた今日、此頃出して見ても何となく親しい感じのするのは、其文章や會話の上のある一種の調子や、詩の樣な叙景や、聞える樣な物の音など

にもよるだらうし、殊に私には故郷のなつかしい山や川の名が、春の日の長閑な空氣の中に幾度か繰返し呼ばれて、思ひ出多い景色の畫とばかり眼の前にひろげられて居るのにもよるであらうが、要するに篇中の人物の性格が、一人一人如何にもよくあらはれて居る事と、敵も味方も(假にさう云ふ)著者が偏りない同情の筆をもつて描出して居る處に生きた脈が通つてゐるのだと思ふ。

先味方と云ふ浪子、武男、片岡中將、加藤子爵夫人千鶴子、幾はいはずもがな、敵方となつてゐる、川島未亡人、千々岩安彥、山木親子、片岡夫人と一人一人其人の心のはたらき、あらはれる行爲にも如何にも無理のない處が讀んで行く者の知らず〳〵讀まれて行く處だらうと思ふ。無邪氣に快活に青春の樂しさの溢れて居る伊香保の遊、長恨歌の文月七日の夜をさながらの不動祠畔の誓、片破月の影冷かに磯馴松に懸る逗子の夕の別れ、扨は沈默に瞑想に、人知れぬながき相思の銀の絲の兩端が期せずして相觸れた山科驛の一瞬間戀も悲哀も共に最高調に達した若い男女の、慰めかねた心のうちは、おしはかりにも餘るだらうが、こゝに私には特に氣の毒に思はれて折々思ひ出す或る章がある、夫は武男の母即ち川島の隱居に就ての處なので、

『母は武男が常によく孝にして吾意を迎ふるに勗めざるを知りぬ、知れるが故に其浪子に對するの愛固より淺きにあらざるを知りつゝも、其兩立する能はざる場合には一も二もなく彼の愛を捨てゝ此孝をとるならんと思へり、思へるが故に其仕打のわれながら寧果斷に過るを思はざるにあらざりしも、猶家の爲武男の爲と謂ひつゝ獨斷もて浪子を離別せるなり。武男の憤の意外に烈しかりしを見るに及んで、母は初めて吾違算を悟れり、同時に所謂母なるものゝ決して絕對的權力を其子の上に有するものにあらざるを知りぬ。さきには其子の愛の浪子に注ぐを一種不快の眼をもて見たりしが、今は母の愛、母の威光、母の恩を以てして猶死に瀕したる一浪子の愛に勝つ能はざるをみるに及びわが威權全く墜ちたる樣に、其子をば全く浪子に奪ひ

去られし樣に感じて、且つは武男を怒り、且つは實家にかへり去れる後までも獨浪子を罵れるなり(中略)吾意を知れば、人は怒る、武男の母はこれが爲に抑へ難き怒は猶更悶を加へて、いよ〳〵武男の怒るべく、浪子の惡むべきを覺えしなり武男は席を蹴つて去りぬ、一日又一日彼



は來りて罪を謝するなく、詫の書だも送り來らず、母は胸中の悶々の漏すべき唯一の道をして其怒を恣にして纔に自ら慰つ、武男に怒り浪子に怒り詮方なきにまた怒り、怒り怒りて怒りの疲勞に漸く夜も睡るを得にき』是丈でも、よるべない、せまい女心の煩悶の程も推せられるのに、『お豊が來りしより武男が母は

新に一の懊惱をば添へぬ、失へる玉は大にして去れる婦は賢なり、比較になるべき人ならね共、お豐が來りて身近く使はるゝに及びて爲る事毎に氣に入るはなくて、武男の母は堅く其心を塞げるに拘はらず、ともすれば昔わが叱りもし罵りもせし其人を思ひ出でぬ、光を韜める女の言葉數多からず、たちゐも靜淑なれば、みたる所は眼より鼻にぬける程、華手には見えねど不馴ながらもよく此方の氣を飲み込みて、機轉も聞き第一心がけの殊勝なるを圖に乘つては口汚く罵りながら心の底には彼の年頃でよく氣がつくと暗に白狀せし事もありしが、今眼の前に同じ年頃のお豐を置きて見れば、是非なく比較はとれて、事毎に思ふまじと思へるい、い、い、い、い、い、い、い、人を思ふなり（中略）「ぢやて病氣をすつが惡かぢやなつか」と幾回か陳辯すれば猶妙に胸先に込みあげて來るものを自己は怒りと思ひつゝ果は又大聲あげてお豐に當り散しぬ」と云ふに至つては、其憐むべき心の狀態を何とたとへて宜いかわからない。

彼の冷い墓石と化してからも、戀しい夫と懷かしい父とを自己の名によりて永遠に結びつけ、其心の中にかぎりなく生きた計りか、尊くも又悲痛な男の涙を雨とそゝがれて、墓の彼方で淋しい笑を其白い片頰に浮べて居るかも知れぬ浪子の、現世ではかなかつた戀を悲むよりも、此常に我とわが良心の法廷にたつて、終に無罪の聲の慰めを聞く事の出來なかつた老夫人のよりどころなき心中を思ふと氣の毒と云ふよりは可愛想になつて來る。

露西亞肌と英國肌

中村春雨

私は個人的に蘆花君を知らないが、其作物を通して見るのに、蘆花君は今、トルストイ崇拜で居られる。

然し一面からあゝして自然に親んで居られる處を見れば、ウオルズオースのやうな面影があり、又野の土を嚙る野鼠ともいふべき、バーンスといふやうな人を聯想される。
要するに西露亞肌と英國肌との混交つた人格、といふやうな感じがある、作物の上にも性行の上にも然ういふ影が閃いてはゐまいかと私は思ふ。
『不如歸』といふやうな作は、文藝上の價値から云へば兎に角、江湖に非常な歡迎を受け、人氣を得た事は空前のことゝいふべきである。そして國民的な讀物となつてゐる事も、記錄すべき事である。其後の『黒潮』にしても、『寄生木』にしても、所謂自然主義等の一方に持囃されて居るのにも係らず、あゝいふ廣大な讀者の領域を開いた、ポテラリテーといふ事も、何か硏究して見たら面白い理由を發見するかも知れない。
一體斯うした作物に現はれた蘆花君は、一々モデルを用ひて書いて居られる。但しさういふ態度は、自然



派などの文學の先蹤をなして居る。唯その材料の取扱ひ方が違つてゐる。蘆花君の性格とか修養とかいふやうなものが、自然派の文士と範圍を異にしてゐるから、さうなつて來たのであらう。

自分は此處に價値の議論を避けて、傾向を云つて置く丈に止める。矢ッ張り同君の作中で面白いのは、『自然と人生』といふやうな小品文で、世間の評が適中してゐる。あゝいふものは、何時讀んで見ても感興が湧いて來るやうに思ふ。

で、兎に角蘆花君が一種の實行家で終るといふよりも、新たに文壇方面に活動せられん事を希望する。

大きい生活

澤田撫松

△民友社の新年宴會

僕が民友社へ入社した時は、蘆花君は民友社と關係を絕つた後であつたから、編輯局では一度も逢つたことがない。新年宴會に芝公園の福住樓で逢ふたきりである。國民新聞社の新年宴會は世間の所謂新年宴會とは餘程趣を異にして居る、社員は編輯の者も事務の者も皆家族を伴れて行くのである、老人も子供も、細君も娘も伴れて行くのである。雜然と老若男女が集る。會場は芝公園の福住樓で、時刻は午後一時から、夜の十時頃まで引續て餘興がある。會場の正面が舞臺で、此所で餘興があるのだ。會場に集つたる者は皆〻の餘興を見て茶を飲み菓子を食ふのである。晝餐と夕餐とには折詰が出る、無論日本酒は固よりビー…も出ない・御茶を飲んで折詰を食べて、そして餘興を見て一日を樂しく送るのである。此宴會には蘆花君はやつて來る

そして無語で餘興を觀て居る、面白いところになると獨りて笑ふて居る。宴會の席上では斯うして逢ふて居たけれど、話をする場所でもないから、この時は蘆花君と親しく話をしたことがなかつた。

△文士の理想的生活

僕が蘆花君と親しく話をする樣になつたのは、粕谷の閑居を訪れる樣になつてからである。蘆花君の家へ行くのは每も新宿から俥で行くのだが、片道一時間かゝる、雨天なら一時間半かかる。斯うした不便な所に蘆花君は住むで居ても隨分人が來る、中には新宿から二里の道を歩て來る者さへある。蘆花君の閑居は街道から少し左へ入つた所だ、母屋と離れ座敷とあつて、蘆花君は每も離れの書齋に居る。蘆花君は常にさう言ふて居る。斯う言ふ靜かな所に住むで居ると、渦巻に巻き込まれた樣な市內生活が思ひやられると。成程あゝ言ふ所に住むで居たら呑氣でよからう斯う言ふ呑氣な所に住むで、蘆花君は如何いふ生活をして居るかと言ふに。



蘆花君と細君と子供とバアヤと親戚の娘二人（内一人は僕の友人で法科大學に居る男と結婚した）とが頗る質素に暮して居る。肴屋は廻らず、肉屋はなく、豆腐屋さへも近くにない所だから。自分の畑で作つた物か乾物ものが三度の副食物で、酒は飲まず煙草はのまず至つてシンプルな生活である。そして生活費は著書の印税からあがつて來るのが隨分の金高であるから、生活には何等顧慮するところがない。蘆花君は確に文士の理想的生活をして居る人である。

△蘆花君の生活は大きい

蘆花君の生活は斯く文士として理想的の生活であるから、幾等でも讀書することが出來る、であるから蘆花君は絶えず讀書して居る。然し蘆花君は僕に斯う言ふ話をした『自分は蛇の樣な人間だ、一年の内半年は殆ど眠らないで勉强する、あと半年は勉强も何もしないで、半眠狀態で居る。何のことはない蛇の樣だ。』蘆花君は一年を大きな一日として、半年を晝、半年を夜として居るのであらう。斯うして大きな一日を以て生活して居るから蘆花君の作品にも何となく大きいところがある、『思出の記』にしても、『不如歸』にしても、『寄生木』にしても、何所となく大きなところのあるのは、確に蘆花君の生活が大きいからである。蘆花君はよく人を世話する、廣くは世話しないが深く世話する、誰でも彼でも世話すると言ふ風ではないが、一度人を世話した以上は結局まで世話せねば置かぬ人である。蘆花君は弱者に同情する人である一面識もない彼の男三郎にさへ「肉に死して靈に生よ云々」と言ふ書面を送つて慰める位であるから、世間の人間が悉く憎む程の人物でも、弱者であれば蘆花君は必と同情する。蘆花君が斯う言ふ風に弱者に同情する人であるから、蘆花夫人も亦弱者に同情する人である。彼の野口事件の時も、曾恵が男三郎に對して少も同情のないのを憤慨して、夫人自ら野口家へ乘込んで行つて、假令惡人にしても夫たる以上はそんなものでないと、曾恵に懇々説諭した相だが、曾恵が如何しても聞入れないのを見て

憤然席を蹴つて歸つた事さへある。斯う言ふ樣に蘆花君も夫人も共に弱者に同情する人であるから、粕谷附近の百姓が蘆花君夫婦を尊敬して居ることは非常なものである。鎭守の神樣以上に尊敬して居る。

武藏野に蘆花氏を訪ふ

河井醉茗

私が初めて『思ひ出の記』や『自然と人生』とを愛讀した頃は、其著者たる德富蘆花氏に就いては何事も思はなかつた。

其後、何かの機會から蘆花と云ふ人を考へ初めた。蘆花氏は屹度普通の人ではあるまい、何處か異つた處のある人に相違ない、何う云ふ風に異つた人であらうか知りたいと思つた。然う思ひ初めた頃には、氏は私の住んでゐる原宿には居なかつた。

それから後、少し用事もあり、其用事は何うなつても兎に角氏に一度面會してみたいと思ひ立つたので、正午前から郊外に出かけた。

郊外と云つても氏の住居はなか〳〵遠い。併し私は秋の郊外、殊に武藏野の女郎花咲く野原をぶら〳〵歩くのが大好であるから、どんなに遠くても苦にはならないと思ひながら、新宿を出はづれて、甲州街道をぶら〳〵と歩いて行つた。確か九月の末か十月の初めであつた。

二里も歩いたかと思ふ時分、漸く氏の住居を尋ね當てた、街道からは少し左に入つた畑の中に氏の家はあつた、丘がある、森がある、林がある、武藏野のカラーは能く表はれて居る。

折柄、氏の家の周圍はダリアとコスモスで取りまかれてゐた、建物よりも、此花畑の方が廣いので、何うしてもコスモスの花の中の家と云ひたいやうであつた

私の最も好きな花で取り圍まれてゐる蘆花氏の家は、もう其家に入らぬうちから私に充分の親みを與へたのであつた。

夫人に案内されて、小さな書齋で暫く待つてゐた、氏は今畑に出て働いてゐられるのであつた。見ると椅子の上に、猫と犬とが仲好く遊んでゐる、私は主人なり夫人なりの感化力の強いことを想つた。

間もなく蘆花氏と卓を隔てゝ談話した、天竺木綿の兵兒帶を無雜作にぐる／＼と捲きつけて、紺絣の着物を着た巨大な人、色眼鏡を懸けて莞爾に話される、一見して立派な男子だと思ふ、如何にも想像した通り人物としても異つてゐるが、變に異つてゐないのを非常に快く感じた。

用談の事は多くも語らず、いろ／＼の座談をした、氏は其簡易なる原野生活に就いて語つた、何處となく世に超然たる處があつて、其が慕はしい感じを與へた暫くして夫人は『畑に出來たのです』と云つて、赤いトマトをすゝめられた、主人も私も鹽をつけて、取りたてのトマトを食べた。

氏が海岸に生活してゐた頃の紀念として、書齋の一隅に美しい貝殼が澤山飾つてあつた、原野にゐて、海の聲をも聞かうとする氏の用意を思つた。

それから氏は起つて、畑の方を案内された、いろ／＼の花や果物が作つてある、耕耘に勞働する興味と、困難とを巨細に語る。氏は文士でも小說家でもない、一個の百姓である、トルストイ伯を訪問して來た世界的百姓である。

秋の日の傾き易いのを惜んで、私は氏に暇を告げた氏は手づから色の好い紅白のコスモスを澤山に摘んで別に黃や、紫や、紅のダリアを交ぜて、渡された。私はそれを新聞紙に包んで、花に圍まれたる家を辭した道は世田ケ谷方面へ出る方が早いと云つて、道の分るところまで、氏はわざ／＼送つて來られた。細い畦道を步きながら、氏は、斯んな生活をしてゐると、兎に角時間と、太陽と、土とだけは都會に住むよりは自由ですと言はれた、私は羨しく思つた、併し道はだん

だん廣く都會の方へついてゐるので、氏に厚く禮を述べて別れた。

それから今日まで二年になるが、私は再び蘆花氏に會ふ機會を得ない。

噫！蘆花君の失戀

叡麓生

△初戀

德富蘆花君は多情多感の人である、一度筆を執れば『思出の記』となり『不如歸』となり『寄生木』となる。この多情多感なる蘆花君が、郷里熊本を出でゝ山紫水明の京都に來り、風清く松綠なる相國寺畔の同志社に學ぶ身となつた頃、一條の戀物語がある。

同志社は故新島襄氏の設立せる私學校で、早稻田大學の前身早稻田專門學校は今日の如く盛ならず、日本に於ける二大私立學校と言へば、東京に於ては慶應義塾と、京都の同志社を指したのである。慶應義塾は故福澤翁の拜金主義の下に實用的の人物を養成して居るに反して、新島氏の同志社にては精神的教育の下に思想家を養成して居たのである。多情多感なる蘆花君が水の流れにも、そよ吹く風にも情の籠れる京の地に身を置いて、熱烈なる同志社的教育を受けたのであるから戀を知つたのも蓋し自然の勢である。

蘆花君の同志社に在るや、ダンテの戀に泣き、ジヨンソンの戀に涙を注いで居た。蘆花君は戀の人であつた、若し蘆花君に戀の對象が出來たならばそれこそ唯事では濟まぬのである。果然蘆花君に戀の對象が出現した、蘆花君がダンテとなりジヨンソンとなる運命となつたのである。蘆花君の戀の相手を誰かと言ふに、それは外ならぬ新島襄氏夫人の令妹則ち山本覺馬氏の

令孃であつた。蘆花君は令兄猪一郎蘇峰君と共に同志社に於ける俊才であつたので、新島襄氏にも可愛がられ、新島一家の信用も頗る厚かつた。事情斯くの如くなれば蘆花君も新島家へ出入することが繁くなつて、令孃とも話をする樣になり、從て双方の氣心も分つて來た。令孃は京の水で產湯を使ふた艶麗花の如き美人で、而かも蘆花君は前途有望なる校中第一の俊才であるから、落花自ら流れに花の薫を留めて、互に相思ふ仲となつたのである。

△校長夫人の令妹

蘆花君は山本氏の令孃と相思の仲となつたが、互に若い同士であるから、うちつけに胸の思ひをあかし合ふことが出來なかつた。此時の心持を蘆花君は『思出の記』に次の如く書いて居る。

……審美學の卷上にもお敏君（松村敏とは蘆花君が思出の記に書く爲めにつけた令孃の假名である）の莞爾笑を含んだ姿が立顯はれる。謎尋物をしかけて、何時か筆は原稿紙の端に松村敏、松村敏・お敏、お敏、など樂書をして居る。新聞雜誌を見ても松村とか敏とか言ふ字は電の如く眼に閃めく。日曜にはお敏君がよく行く親戚の近邊を用なきにぶらついて見たり、お敏君が寄宿する學校を眺めて見たり（同志社には別に女學校が今出川にあつて當時令孃は此今出川の女學校に在學中であつた）母への土產物を託するに言よせてわざ〳〵半日の課を廢して松村老人の出發を新橋に見送つたり。せめてお敏君の同樣の消息など聞く積りで中島の宅へ出かけながら、鈴江君の顏見ては松村とも敏とも言ひ兼ねて、大樣な鈴江君にすら「貴君如何かなすつたの、變だわ」と怪しまれたり。下手な肖像を鉛筆で書いて見たり。お敏君を讃美する歌百首を一夜の中に作つたり。白茶の帶に胸を轟かし、揚巻に肝を冷し、縞お召の着物に眼から電を出し、花色の洋傘に道に立ちすくみ、無い髯を剃らしたり、顏の皮をすり剝いたり、支那の女が穿きさうな靴をはいて見たり、要するに此の頃の僕は實際正氣ではなかつた。誰が發狂せしめたか。松村敏の罪當に誅すべしである。僕は從來小說では戀物語も讀み、芝居では戀の幕も見、實際の舞臺でも友達なぞが半狂になつて躍るのを冷やかに笑ふて見物して居た、然るにお鉢は今や僕にまはつた、五尺何寸の男、見事戀の奴となり了へたのである。此時若しお敏君が雙手をあげてさし招いたなら、僕は奈落の上の一足飛をしたのであらう。幸にして、若しくは不幸にして、僕もお敏君も學業暇なく、暇があつても相會ふ機會少なく、僕も初戀の唯意氣地なく羞かしくて、うちつけにずう〳〵しく其と明かす勇氣もなく稀に〳〵顏が合へば默つてしまひ、言へばぶる〳〵顫ひ、而して別るればやるせなく思ふ位、先樣は多分御存じなしの片思ひ、あゝ馬鹿らしい、男が立つか、意氣地がない、咄と叫び、喝と罵り、斯うしたら熱が冷えるかと井戶側に行つて頭から冷水を浴び、夢なら醒めろとペン先で膝頭をつゝいたりして居た。

以上は蘆花君が小說として多少舞文した點はあるにしても、蘆花君が令孃に對する初戀に煩悶して居た狀態は略うかゞふことが出來る。

△戀の成立

斯くの如くにして蘆花君と、令孃との戀は不言不語の間に芽を伸ばしてゐた、好機會！、二人の爲に或る好機會が來た、それは有馬の温泉で兩個が落ち合つたことで、其時兩個は夢のやうな談話を交した、表面には表はさなかつたけれど兩個の心は能く通じた、『思出の記』には其邊の消息が美しい戀物語として描かれてゐる。

二人の戀の成立したことは確であるが、此戀を遂げるのは容易な事でない。身は未だ在學中の學生であるし、相手も未だ修業中の身なり、殊に校長夫人の令妹とあつては、在學中の身を以ては此戀容易に遂げ難しと、二人は互に心を痛めた。されど肝心の二人の心が結びついた以上は、この上は自然のなり行にまかして來るべき機會を待つのみと、月日のたつのを樂しみにして居た、此時の心持も亦蘆花君の筆に在り。

あゝ敏君の心底は解つた、誰が何と言つても敏君は僕の妻である、妻である、妻となるべき者である。併し世間晴れての妻となるまでにはまだ幾多の時日を經、幾多の順序を踏まねばならぬ事は、無論當初から僕の心に浮むだ所であつた。其處の砂上に横はる船を見ても其は分る。海を懷ふは舟の心、舟を浮べたいは海の情である、併し海が舟を得舟が海を獲るまでには、潮時も待たねばならず、枕木を敷いて押し出す人の力も待たなければならぬ。彼方の心底を吾知つて、吾眞情を彼解した上からは、餘は何事もうまくはつて行く時日と言ふものゝ手を借らなければならぬし、僕等の益を思つて呉れる人々の腕もまた煩はさなければならぬ。情は情として身を切る樣に切なくとも、禮は禮として岩の如く堅く守らねばならぬ。愛して忍び、信じて待つ、此外に僕等の踏む可き道はないのだ。戀ふる所は情を恣にして業に荒み吾短氣ゆゑに自づから成るべき事を毀つのである。此は僕のみならず敏君も正に其樣思つたであらふ。故に彼月夜の翌日、僕等は相會つても唯きまり悪く默然として居た。其翌日藤澤停車場に別るゝ時も敏君の凉しい眼に暗涙の宿るを見て、心は裂くるが如くであつたが、雙方唯目禮して別れたのであつた。兄妹が歸省して居る間も、松村へ出す手紙は、令妹に宜敷とだに書かず、彼等兄妹が歸京して後も日曜に石川の宅へ行けば十に八九敏君に會はれるとは知りながら、つとめて足を遠くし、稀に會つても言葉少なに挨拶し、鈴江君が其話を持出しても忽ち傍へそらして居た。若し淺人の眼から見たらば、喧嘩でもしたのか、非常に遂々しくなつた樣に、觀察したかも知れぬ。併しながら

僕も敏君も斯く背いて反對の方向に行くのも、終に地球の一角で正に相逢ふことを知つて居たのである。松村と鈴江君との結婚は、實に僕等の爲めに目出たい序幕を出したのである。結婚濟みの報に接し僕の心は（敏君の心も蓋し）未だ蕾勝の吾庭の梅に對して、隣の梅花が咲いた噂を聞く樣であつた。後れて殘念とは謂い、春は最早隣家まで來て居るではないか。

蘆花君は令嬢の心を知つて以來、春が隣家に來た心地で居たのである。

△悲しき結末

嗚呼！蘆花君は春が隣家に來た心地で居たのである然るを何事ぞ、悲風慘雨交々至つて、春は永久に此家へは來なかつたのである。令嬢と蘆花君の相思は遂に人の知るところとなつた、新島校長の耳にも入つた、校中の評判となつた。事こゝに至つては最早何等かの結末を見ねばならぬ、而かも其結末は蘆花君に取つては終生忘れることの出來ない悲しむべき結末であつたそれは蘆花君は同志社の生徒なり、令嬢は同じく同志社女子部の生徒なれば、我同志社の生徒同志が在學中に戀の關係を作るは、學校の風紀を保つ上に其まゝに置くことが出來ぬと言ふので、令嬢も蘆花君も退校を命ぜられた（蘆花君此時本科二年生であつた）。退校處分を受けたのは仕方がないとして、さて令嬢と蘆花君との相思の關係は如何なつたかと言ふに、校長の命令に依り退校を命じた程であるから、此戀を遂げさすことは出來ぬと言ふとに決定つた。無論事のこゝに至るまでには蘆花君の爲めに計る人達が、種々令嬢と蘆花との戀を纏め樣と盡力したけれど、もの堅い校長は何と言ふても聞き入れぬ。同志社の風紀の爲めには二人を犧牲にすると言ふて頑として應じなかつたので、哀れ令嬢と蘆花君の戀は永久に破れねばならぬ運命となつたのである。蘆花君は同志社を退校されると、再び令嬢に逢ふことを許されなかつた。令嬢に逢ふ總ての機會を奪れた蘆花君は思出多き然しながら怨み多き京都の地を去つて故山に歸臥することゝなつた。令嬢は同志社を退校されて行くべきところがない、命までもと思ひ込んだる蘆花君とは、暖き一睡の夢も結ばずして永久に別れるべき身となつて、死ぬに死なれず生る

に生られざる一身の處置に困つた。思ひ悩むだ末遂に尼になつた、此世を捨てた尼になつた。尼になつた令孃は河原町の天主教會へ入つて一生を神につかへて暮すことにした。哀れ叡麓の名花は京の春に逢はで深山に移されたのである。

春の花、秋の紅葉も令孃の眼に入らばこそ、悲しき月日も長からで、蘆花君に焦れて、焦れて、遂に焦れ死に死んだのである。



洗禮

横瀬夜雨

一

母に負はれたのは二十何年ぶりであつた。
久しく土を踏まぬ爲に、絹のやうに柔かくなつてる足の平がこそつばかつた。扶けられて湯殿に行き、湯槽にはひらうしたが、疲れ切つた體を支へかねて、甃の上に倒れようとしてから、たゞ靜かにしてをつたけれど、八日の午過に、茶の間から室へ行かうとして、仕切の廻し戸を明けると、母の部屋の前に車百合の鉢が置いてあつた、鈴蘭と一しよに花兄七の持つて來たのがはじめて咲いたのである、沓脱には赤土の素燒に採れるホクシヤもあつた。庭をへだてゝ斜に、自分の座敷に對つて、冷々とした縁に座つてゐた。

其時！はじめて血を見た。
痛むのは左の乳の周であつた、四角な箱の中へ無理におし詰められて、前よりうしろより壓痛を受くるしゝむらは、鮮紅の血をしぼりて唇を染めるのである。
ひやゝかににじむ額の汗。
暈れるめがね。
ふるへる手。
母の汲んで來た水で口をすゝいでから、枕に就いた、枕もシーツも上にかけた毛布も白い。
蚊帳越しに、二つばかり咲ける山百合を見ながら、別に泣くべき涙も無かつた。
文庫藏の觀音開きこそ廂の陰に暗くなつて見えるけれど、白壁に一點のしみをも留めず、あか〳〵と夕日

に輝いてまぶしいやうである。夕日がこの壁をうかゞふ時は、村の西に姿を沒する時である。自分はいつも薄暮になるたび、縁がはに出て寂然として座つてゐるのが、昨までのならはしであつた。騷々しい母屋と違つて一人あるにはふさはしい室でもあり、紅の帶や青ききぬや花やかなりし嫁ぎみ達は、皆この室に籠められたのだから、一人一人その幻影を追ふのが好きだつた。

それを今日は忘れた。

月が出たらしい。

深き軒を越して山百合の花が遠くから匂ふて來る。母家の大きな家根と文庫藏の廂にさへぎられて、月光は天にあれど、わが庭は檜もある、柘榴もある、物の蔭にのみ花をつゝんで居る。

左枕にすれば肋がいたいけれど、右はたゝき挫かれたやうに痛いから、左枕に改めて『白樺』の『濁つた頭』をよんで見た、牧師は若い美しい細君を有つてゐる。そしてあつまり來る青年に對しては姦淫は罪なりと說くのであつた。自分の友人が自分を『いつきのみこ』たらしむべく勸めたのと似てゐる。それから知り得たる秘密のはかなさ味氣なさを書いてあつた。

『白樺』をうつちやつてアルバムを引きよせた、疲れた時にいつも開いては千紫萬紅花いろ／＼の美しき人人にむかふのである、詩を思ふといふ女もあつた、文學に一身を委ねるといふ女もあつた、安價の涙を賣りて生ける女もあつた、七人の男に唇を許せる女もある

七つ小女郎の茶色髮、
いつか五尺の肩過ぎて、
人の妻とはなりけらし。
女は戀の翫弄者。
　あはれ、出雲八重垣。
見よ、簸の川の上に散る、
夢の落葉の五つ三つ、
金色なるが音もせず。
女は戀の翫弄者。

あはれ、出雲八重垣。

てたび血を見たのは重たいアルバムを右から左に持ちかへて、右枕に寝反した時であつた。日暮に讀んだまゝ巻きかへさずにおいた梶原重子の手紙を、つと掴んで口をおさへた。……

鮮明なる色よ！

森然たる庭の暗を隔てゝ母家の灯が遠い國の明のやうに見えた。

けれど自分は人を呼ばうとは思はなかつた、立ち得る限り立ち、動き得る間は動いて、三斛の血を失ひ盡すまで默つてゐるのも面白からう、わが三十年の歴史は不運の連續であつた、血を以て『をはり』の三字を誌すべき時が來たのだ、一人あるべく與へられた室に一人住む、それで澤山ぢやないか。

母の外には自分に使はるゝ者は無い。机の周りを人にかたづけさせ、硯の水を人に汲ませるやうな『自由』は夢にも得られぬ。嘗て水戸の家で病んだ時、一夜を山田邦子の手にいたはられたことがあつた、今は無い。……

血よ、すべてを清め去れ。

滴瀝として落る血を紙ごと口を覆ひてじつとして片肱を突いてゐたそれを。雨戸を引きに來た花兄七が見つけて母に告げたらしい。母も驅けて來た。

この夜は弟に護られて、案外平安に過すことが出來た、身動きすると咳が出るので外を向いたきり夜明まで動かずに居つた。弟は十分間おき位に頭を擡げては自分の顔を覗いて、ねむらなかつたらしい。

二

靈まつりの夜、更けて。

桔梗の花紫に咲いて山の南なつかしく、月深更より輝きて夢のやうなる世界にも候かな。いひしらず人の戀しさにねむらぬ夜の多かりしに、今また病みて…一時として流るゝ涙、あゝ何の涙。

かつては神に縋りてあまりに遠き淡さを感じ、自然

に慰められんとして餘りに世の隔りたるを悲み、今は嘲り玉ふな、病める少女を、

人の情の露に息つき居りしに候。

神よ今わが心にうつる人々の信を永久に我に把持せしめよ人よ、あゝ終に心の仇なるを見せざらしめよ。

われは願ひつゝ祈りつゝ逝かんのみ。

人の心のうれしさよ。

わが信のたのもしさよ。

師よ、再われを泣かしめたまふな。



學に生きんとして、神の惠うすく、生きながら死せる心よ。

よき衣はもとより望まず。

輝ける寶玉も何かせん。

病みては我も亦父には子の數にかがなへられず、われもまた背いて。

冷嘲熱罵？

時には布團かぶつて涙おつれど。

去り行く人を見ては復讐の念炎となれど、身はつねに靜に候。

憤怒を面にせず、極度の悲痛は血になりて今流れ落

つ

人に向ひていつも同じき靜けさにあるはわが性にしも候はんか。

われ自らわれを許すべき客觀的冷かさはもてり。

生れて學に志し父に思をやり、中ごろにして病に泣き、かくて病に死すべき武藏少女の心は、あゝ終にかたくなるまゝに進まんとして。

されど詩は捨てじ。

神には一髪のうたがひだにいれじ。

神を祭りて祈り、燭をかゝげてひざまづく。

順なる心はむかしより失はず。

人に捨てられてもなほ誠ある人の涙に涙する軟き少女心を抱いて。荒まずに〳〵と我靈をわれまもり、われいたはりてこゝにあり。

師よ、われはなほ幸に候や。

我れ愛す、故にわれ在り。

われ、わが肉をたのまず、もはや。

熱せる情を包むに冷かなる面を假り、狂せる頭を抱きて死せるが如き靜けさにあり。

憂愁に身をおくは小さきころよりなり。

あゝわれ終に快活なるあたはず。

走るがまゝに心をはせ。

行くがまゝに身をゆだねん。

今宵青き雲流れて田の面に風まつはる。

狂しても泣きても青き雲の美しさは存じ居候

七つ子の髪の長さに早苗がねたましく候

夏生れて秋去る短き生にも美しき夢はさふらふべし

おもへばわが夢は餘りに長く、我生はあまりにみじめに候はずや。

わが師の君　参る　　あや子

嗚呼、血の洗禮、みじめだけれど事實である。

母はあまり自分の病氣を人に言はなかつたらしい、忙しい中をつとめて他人手を借らずに介抱して呉た。

S、Mに手紙を書き終つた時、また出血した。母を呼ばんしたけれど、手操られ出る血に妨げられて聲が出なかつた。身動きすると出る。

物を言はうとすると出る。

血は十の指を洩れて枕よりシーツに傳はつて。

醫師二人。

父と母と花兄七とに手がきにされて次の間に移されたのは、三日目—七月十日の朝であつた。

この夜はじめて月を見る。

『日本アルプス』第二卷を讀む

▲自分の愛讀する書物は人にも勸めたい、『日本アルプス』は私の愛讀書だから矢張他の人にも愛讀させたい、ほんたうなら此處に私が『日本アルプス』を愛讀する原因、卽ち私が自然を好む理由を述べ、併せて女性も亦自然を愛するやうにならなければならぬと云ふことを說きたいのだが、さうしてゐると本書を紹介することが出來なくなるから、直ちに本書の內容に就いて述べやう。

▲小島烏水君の紀行文は、私ばかりが讃嘆するのでなく、天下の讀書者が皆讃嘆してゐる、それほど君の文章には牽引力がある、君は山岳のことを熟く知つてゐるから地理學者に近いやうに思つてゐる人もあるが、君は決して地理學者ではない、文章の天才である。

▲私が君の文章を知つてから殆ど二十年近くになる、其間に君の著述は十冊も出たであらう、書物が出る度に私は愛讀した、時代と共に私等の心持も變つて來たが、矢張君の著述は出る度に私等の心を惹いた、そして其の最も新しい著述が『日本アルプス』第二卷である。

▲北アルプス、卽ち飛驒山脈の紀行文が本書の中心を占めてゐる、君の山岳を描寫する文章は印象がはつきりとして如何にも能く其山岳の個性を表はしてゐる、普通の人には山といへば何の山でも大抵同じやうに見える、君には個々の山が、皆個々別々の印象を與へる。

▲山は泰然として動かずに居る、然し雲あり、霧あり、水あり、雪あり、自然は一刻の間も山を同じ表情にして置かない、山岳描寫は此變化を有の儘に再現する力を俟つて初めて完美する君の文章には此力が充分にある。

▲『雪の斷裂面は山から吹き下す風のためであらう、何が巨大な爪で搔き挘つたやうな、掌大な痕を印してゐる』『一團の霧が槍(槍ケ岳の、尖頭)へ吹つ懸けて、白い煙をパッと立てるので一時は姿を沒したが、又穗先だけ銳く突き出す』『煙で胴中を縱斷せられた黑鞍岳の、右の方に引き落された傾斜の一線は、雲の海に沒して、雲は高い浪と低い浪と、襞を重ねたやうに、隣り合つてひろ〱と湛へてゐる』何頁のを開いても斯んな描寫が杉並木のやうに並列してゐる。

▲富士及び裾野の篇には、雪中登山記や、裾野の描寫がある、殊に裾野の自然と人事は自分の住んでゐる土地のやうに、隅々まで行き屆いて觀てある、別に東海道名所記の一篇がある、氏は所謂五十三次の中の廢驛となつた金谷の宿から小夜の中山邊の紀行で、見た自然はつまらぬものだらうが、追懷の抒情式文章が思ひ切つて彈力を持つてゐる。

▲論文として北アルプス風景論、裾野論他數篇を收めてある、君の山岳描寫が文學的藝術的である如く、君の論文も亦文學的である、地理學者の地理論とは全然性質が違ふ。

▲之を要するに、君の文章は火山的急激性裾野的緩和性を兼ね具へてゐて、火山的急激性のところに、より多く君の文章の男性的個性の著しいのを見る、君の文章ほど女性的の分子の少い文章は珍しい、由來我國の文學は、何の時代にも女性的傾向を持つてゐるが、君の文章を見るに及んで、純乎たる男性の文章に接した感がある、ものゝあはれを知つて居ても武士的に語るのと、女性的に感ずるのではない、女性なるものが男性を賴みとするものとあれば、君の文章ほど賴もしい文章はないと思ふ、之を女子文壇紙上で批評するから然う云ふのではない、突浮然う思ふからである。

▲『日本アルプス』第二卷は菊版三百四頁、山岳會員が珍藏のコロタイプ寫眞や、山岳畫家の彩色したる繪を多數に挿んで、天金、函入の美本、定價は金二圓である、發行所は京橋中橋廣小路前川文榮閣書店(醉者生)



黒い建築に囚はれたる女

覆面女



罪人！あゝ罪人。

彼の女等が罪人ならば、私も罪人だ。私が罪人でなければ、彼の女等も決して罪人ではあるまい。

然し、然し、彼の女等は、法に罰せられた罪人なんだ。

私等は天に罰せらた、罪人なんだ。

私は天の罪人だ。それは知つて居る。けれども何が故に罪人なのか知らぬ。

彼の女等は何が故に自分は、現世の犯罪者だか知つて居るだらうか。

あゝ彼の女等と私等とに罪の意、眞實の罪なるものの意を語りきかしめよ。

恐怖に打ちふるふ手にうすむらさきのパラソルをしめて、高い堅牢な人造石の門を潜つたとき、「あゝ現し世の罪人をしばしなぐさめて」と、思つたのは仇だつた。

應接室から出るとき、私の身は冷たいものだつた。心は冷たいものだつた。

「身を正して心に何事も思ふな。沈默して」と注意された。それではたゞ罪人の起居を見る計りかと思ふとかなしくなる。

黒い上着を召した女の教誨師に、脊の高い看守長は先にたつて、私共十名計りは姿勢たゞしく、しづ〳〵と從つて行く。サクサクと砂をふむ音のたえ間に息が聞える計り此邊は廣い道だつた。眞黒な丈に餘る塀の間を、めぐつて居る。

シンとして音もなく聲もなかつた。

けれど、こゝにも强烈な光がふりそゝいで、道にしきつめた、こまかい砂の石英が、キラキラと光つて居た。

一同は、尙沈默をつゞけた。足は無意識に運んだ。

扉もないと思つた所に鍵をあてられると、ギイーッと音がして太きな黒い扉があいた。

一同はスーッと、一列のまゝ這入つた。

「こゝが女の獄舍です」と看守長が仰ると、はつと計り私等は、吐息をした。恐怖にみちたものだつた。後はまた元の沈默、然し胸の鼓動は烈しい。

教誨師は、始終珠数を右手にして、何事か口の中で唱へて居られる。

眞晝の日光の中に、うづくまつて尚暗を保つ若き罪人の寢床、隅の方には、藁蒲團の積みかさねてあるのが分る。

あゝこゝで、床の莚の褥の中に寢て、夜毎如何な夢を見ることだらう。

罪ある若い女は!!!

こゝを過ぎると、無恰好な藍色の筒袖の着物を着た若い女が、板敷に額をつけて、お辭儀をして居た。

しばらくすると頭をもたげる。

涙をはらはらとおとした。その涙は如何なる涙?恥



らひか、はた感謝か、知らないけれど、二十に足らぬ女の瞳からホロ〳〵と落ちる涙の如何に、私の胸を、ぬらしたでせう。

あゝ、許して下さらないか。彼の女等に一言の慰藉の言葉なりと。

うつくしかるべきそが黒髪なるに……………ほてりに染みし、そのいたましさよ。

私も涙を、おとした。けれどこれは許されぬ涙だつた。

一同と共に足は歩をうつして次の所に行く。

こゝの女も一目見るや板間に額づけて、しばらく頭をもたげなかつた。

「私も罪の女だ。そんなに恐れないで」と、いひたかつた。

私も、彼の女があんなにすれば、この板敷にひれふして、共に罪を謝せなければならぬ。とまで思つた。

たれが知らう、私等のこの苦しき思を！心を！。

私等の筒袖のキチンとした後姿が、こゝを去ると女共は、手仕事をはじめた。

一言もいはぬ。たゞ沈默は沈默へと續いた。

物洗ふ女の群、機織る女、色褪せた橙色の、着物に淋しい顔の色が配つて、何ともいへぬ寒い樣な感じを起させる。こんな女の群を冷かに見つゝ、紫の袴の我姿を我と想像して誇りの樣な、さびしみの樣な感じがした。

今に、たれかゞ、あんな褪げた着物をもつてきて、この小供らしい着物と袴とを奪ひさりはしまいか、と不安でたまらない。周圍を見た。

強い午後の光の中に弱い息をもらしつゝ、疲れた樣に皆は行く。「あゝさうだ。誰も私の着物を奪つては行かない」、と吐息してあるいた。でも不安だ。誰か追つかけて來る樣だ。

いつか私等の一行は、牢獄と牢獄との間の道をあるいて居た「こゝは年の行つた女が寢る所ですよ」、と殊數を手にせられた教誨師樣が仰ると沈默がその後を、奪ふ。

草一本ないけれど、この廂の下には、白いサフランモドキが、屋根からすべる光を吸つて光て居た。この花の香を夜毎獄舍の女はきく事だらう。

中をそつと覗いたが、只暗黑、一種の恐怖におそはれる。どうしても、私をこの中へ引き込まなければきかぬといつた風な恐怖が近づいて來る。たへられない。早く早くとあせつて、こゝをはなれた。

又次の獄舍の格子の間から、蒼白い、端座せる一人の女の顔が見える。私は女の面をみつめた。女は私の顔を見つめたゞらう。白晝の光の中の女と、暗の女と心はいづれも暗なれど……語るに由なくてこゝを去る。

以前くゞつた入口を逃れる樣に、丁度犯罪者が獄舍を逃出する樣な勢で出ていつた。あゝ獄舍といふものだつたのだ。

さらば女よ罪の女よ！

今日は何のためにしか見る事が出來た。

獄舍で相見た顔は互に忘れないで、又何時の日か逢はう。その日罪を語らう。きつと……

そして私共には、罪でない事をいつて泣かう。

黒い扉には鍵がかけられた。さらば！さらば！

赤い卓掛のかゝつた圓卓を、廻つて、十人の者は罪の女の話をきいた。

眞白なカーテンの間から綠の香を含んだ風がそよそよと吹く。私共の息はその中にゆれる、しづかに。

私共は只恐しい夢見た後の樣に、熱した顏と目とをふかせた。あゝくるしかつた、ほんとうにくるしかつた。

眞に我にかへつて、パラソルで日をさへぎつた時は黒い大きな恐しい建物を後にして居た、監獄だ、あれが…………

もう安心だ、といふ樣な氣がして、おのづと足もゆ



るんだ。堀川端に木を挽く人の歌が現世の聲をもたらした。

私はあの獄舍の女の面がたれといふ事もなく幻の樣に浮んで私に迫つて來る樣だ。

あゝどうしてだらう。友はあんなに安らかに行くのに。「お前さん達は罪人でない。愛の化身だ、お前の心に、宿つた愛が、世のいふ罪と代つて産れたのだ」と誰も人なきにいはうとした。氣がつくとおそろしくなる。

「さうだ、貴族にも戀はあつた。奴隷にも戀はあつたお前さん達にも戀があつた如何にも濃厚な甘い、その………………」けれど貴族には

戀ふべく何物もさまたげるものがなかつた。思ふまゝ人をこはしめた。

けれどお前達には神は戀ふべく他に何物をも與へなかつた。

たゞ愛をあたへた計りだつた。そが糧をあたへなかつた。そが糧を得んとして、愛は世の人のいふ罪を犯した。

平等無差別を標する神も、あゝ如何に不公平なることよ。何故貴族にも、彼の女等にも同じく富を與へなかつただらう。愛を授からなかつた自分は、天の罪人故にか？

されど糧を與へず單獨の愛のみならば、むしろ與へられないのが、世のいふ幸福だらう。

天の罪人は現世の幸運兒？

あゝ私は、初めから愛の味をなめなかつた。私は、幸運兒？

何も知らぬ！何も分らない！

たゞこんな世の中だ。

不幸兒は幸運兒――淸い愛は罪のもと――

冷かな目で道行く人を嘲つた。

上流

三ヶ島葭子

一とせはわかるゝ道の三辻にいさめて君と遊びえしかな

飛ぶことは君がゆるさずかく言ひてわれの心を守れるは誰

わが思空しからずと言ふがごと蜘蛛の絲にもたまる淡雪

鐘鳴れば心の中の吹流靜に垂れぬ春の夕ぐれ

ことごとく君が心にとびゆけとわれわが花のわが蝶を追ふ

捧げんに足らぬ心かとられんに惜しき心か嘆きためらふ

袂より羽音はげしく鳥の立つ心地かあはれわが秘密洩る

くらやみの海に捨てたる櫂なれど底の玉よりたのもしきかな

わが心火なるを君に恥づる日も君しら花とわれを嘆くか

わが心菰をとりたる牡丹よりさはやけきかな三月の朝

生れ甲斐なき貴族の血統

ゆみ子

處女の身で大膽と云へば大膽、又破廉恥と人は云ふかもしれないが、秘せば秘す程胸の苦はます。或は告白したならば苦悶も薄らぐのではなからうかと、何事も包まず、唯顔みられぬがせめてものうれしさに。

すぎし御禊の日にも、けふ迄の罪汚を洗ひ清めやうとして、××神社からもつて來た人がたを紙包からとりいだして、書かれた文字、見るや否や、何かに強く胸をつかれたやうに、苦しく悲しさに、目に一杯涙がたまつた。

「あゝお父樣、年をおかきになりまして」、といふと、父上は、「年を書かなければいけない……」と。

「でも、いやでございますに……。」

母上は、「いゝではないか、年をかいたとてだれも見はしないし、お宮でも後には燒きすてるだらうから。」

と仰になつた。が堪へられないで人がたを、手近な鏡臺の上にのせたまゝ、部屋に馳けこんで、椅子によりかゝると熱い〳〵涙が頬をつたふた。

あゝ私は年を秘さうなどゝは、露思はないが、――!自分ながら年を思ふがつらさに忘れやう〳〵としてゐるのに、――明らさまに寅年――女と書かれたのを見ては、身を切られるやうなせつなさ、うらめしさ。

年丈は加へたくない、遲生れであらうとも年は年、私も遂に二十を出たのだと、又しても頼りなさに涙がわく。

重樣は二十五の時にも三十位に見られたいと仰有つた。

男の方は老けて見られねば信用が薄いからであらうが……女は、若く裝ふとする女は、もしも年を多く、見られたら……又自分で顧みた時はさぞ悲しい心細い事であらう。……けれど若く〳〵見られる私もつらいうら耻かしくてあゝもう今其年であつたらと思へば口惜しい樣な何か惡い事でもしたやうな、身をせめら

れる心地して不覺の涙もおちる。夢まぼろしに遊び暮したのではないが、いか程の財を積うとも、再び過去の年を見る事は出來ない。

あゝ十年といふも、唯瞬間にすぎなかつた、思へば年の悲哀はつぎ〳〵にわいて。卓の上の一輪ざしのダリアを見つめたまゝ遠く隔つた世を戀ふて。苦しさ、淋しさの思ひは止め度なく、胸は掃きたてられるやうに亂れて。あゝ、二十年の過去は餘りに短かつた。

私は母から才も美貌も與へられなかつたが、上古の××命から打續いた家に生れ、幾多の人の尊敬と羨望のうちに育つた、母の身をめぐる貴い血汐の分子の幾分を授かつたのは、私の身にもつ、唯一の寶である。母より賜まつた離れられない血統に繫がる伯父伯母從兄弟のすべて、數へ盡せぬ多くの人々は、公侯、伯子、男爵のどれにも續いてゐる。……これが私の大きい誇であり時に又苦痛ともなる。……公家よ大名よ大臣よと、云はれた重い地位と、高き名譽深き信用ある人を父とし母とした從姉妹は皆勝れた容姿を備へ富貴に育ち、生れながらの美しく優しい心に伸びたち、或は學習院の才媛よ、誇よと歌はれ、社交界の花とめでられてゐる、畏れ多き××宮妃殿下を從姉と仰ぐ從妹は、子爵の姫として時に宮樣の御舞踏の御相手に參殿し、又或は外務大臣邸や、各大公使館の夜會に淡紅のスカート長く曳いて、白魚の手にダイヤの輝きさんらんたる電光の下に立つ花の姿は、幾多の貴公子を惱殺する力もあるに。

戀すてゝ人妻となつた從姉は、日本の名花を代表して、××の社交會に異彩を放ち、如才ない交際ぶりをもてはやされて、其芳名は數千里遠い故國の新聞にまで傳へられてゐる。

あゝ、多くの從姉達は、幸多く天の寵ふかく、輝く社會の表面に立つて、光彩ある身を誇つてゐるけれど同じ血統をいく分うけたこの身は……家の衰微を歎き苦痛に泣き、美しい從姉達を羨む。あゝ家が火事に遇はなかつたら、失敗もなく、欺かれもせなんだらうから迄にはならなかつたであらうに。……今は我から卑下するのかもしれないが、境遇も境遇も隔てるのでなからうか？。

某侯爵夫人を見、××伯を想つて、その從姉にあたる母をかへりみた時は、氣の毒の感じが起らずにゐられない。

移ひ易き運命の神に弄ばれて、嫁した家の不遇を

見、昔に變る實家の權勢を思つたなら、どんなに口惜しい事であらうか。……その昔の××姫よと人々の敬慕に生きた人としては後の三十年間はあまり苦痛が多かつたであらう。日毎々々にまさりゆくらしい、白き髮肉はそげて艶やかな昔の華の姿は名殘もとゞめずあゝ、母上は世の荒い風に老いゆかれたのだ。

幸ある從姉の多くを見て自分を思つて。月日は同じ時を與へても、幸は人に、涙を自分にそゝぐのではないかと、悲しんだ事もあつたけれども、あゝうらやみますまい。

せめては戀がなかつたら自覺もしなかつたら、此苦しみも、すくなく、もつと優しくあつたらうに。

も早にがきを知り、醉ふ年ではないと思ひつゝも、人戀ひしさに堪へで、新しき人のなさけを得たいとも思ふ事がある。あゝもう私の心は矛盾してゐるのだ。

××先生は「あなたの寂寥は贅澤の寂寥である、世には我等の如き苦しみの人あるを思ふて、足を止めて考へて下さい。戀は一度すれば足る。二度は求め給ふな、×せんよりは結婚せよ、君はかくて救はれん」と厚い御敎なされて下さつたのは喜しくて涙にむせんだ。……お跡とりの千據が、「百合樣、貴女いつお嫁き遊ばします。同じくは花なる今お嫁き遊ばせ。若孃と云はれるは口惜しうございます。」とお文のうちに見出た時は嬉しいとも思ひ又考へもしたけれど。

私の心はさすらひ人のやうに落つかで迷ふてゐる。

私は泣いて〳〵涙がつきたら人妻ともなるであらうが此泣くのが又うれしいのだ。……老孃と云はれるにはまだ〳〵遠い。

同じ血汐うけた兄弟さへ他人のはじめと云ふ位だから眞の我の永久に獨りであるとは知るけれど、……女はをんなはさびしい。

心の宿を失ひて寂寥になく女に、夜の淋しい景をめで寂れゆく情緒を好き涙のわくかぎり泣いてみたいと云ふ私に溫い手をかし膝にすがらせて苦痛をきいて下さる君あらば、波浪に荒める心も暫くは靜まるであらうけれども優しいほゝゑみを浮べる子ともなれ樣が……。すでに味はふた者に誰が手を貸さう。

强者につく人、富者に從ふ者ある世だけれど弱者をかへりみる人あるとも思はれず。

「値無き生存は又自ら値無き死を以て畢へしむべきか碌々の生は易し、死は卽ち難し。我は悔いて人となるべきか？。死してその品を全うすべきか」あゝ。

日光隨行記

市子

◉上野にて

久しく東京の市民を恐がらした低氣壓は、未だ去らないで、市內は可成風立つて居た。上野に着いたのは發車に餘程間が有つた。私は二人分の着替や小道具を入れた旅鞄を下げて、ミセスエフは二人の洋傘と案內書を持つて居られた。

停車場は可成混雜して居た。土曜日に當るから恰度諸所に五割引の回遊列車や、某々新聞社主催の遊覽車も出るので、小さい着替の風呂敷包を小脇にした人がプラットフヲームから溢れ相になつて居た。入口を入る時に並んで立つてた鐵道院の學校の生徒がミセスエフに目禮した。

「私戴きませう」後から鞄を引く者が有つた。私は不思荷を渡して終つた。鐵道院の徽章をつけた詰襟の制服の人が笑傾けて從いて來る。ミセスエフの側にもよく近頃の東京の學生に見る……如何にも世慣れて恥ぢないで、それで禮義正しく親しみをもつた……なつかしい青年が同じ樣な制服で、洋傘と案內書を運びながら快活に笑つて話して行く。

私が考へて居た通り、ミセスエフが職員養成所の教師で有つたのでフリーパスが貰へた。

鐵道院でも自慢してると云はれて居る居心地のいゝ一等室に入つた。職業が職業丈に鐵道院でも、風采の上つた品行方正な秀才を選ぶんだ相で、窓の下に立つた制服の二十幾人の中には、貴公子の樣な人も見えた此人達がそれ〴〵成長して、凡の停車場の驛長が數ヶ國の語學に長じて、驛長が自身で多くの國人を應接する樣になる世の中の光榮がうれしかつた。

「御機嫌よく」

窓に近く立つた人の手から美しい果物の籠が恭々しく捧げられた時、――後に並んだ人々の手は一樣に帽子

にふれた。「有難う、皆さんによろしく」若やいだよく通る聲は、餘韻を長く引いて、汽車は靜かに進む。(八月六日)

●霧降路

高山の天候は定めないと危まれたけれ共、私は下駄を捨てゝ草履に替へた。爪先上りの道は森を分け小川を渉りて雲に入る行程三哩半、世に後れて春は茲に滿つ、野生の菖蒲夏淺き都の水邊を思はせて、香かぐはしき白百合は月並の歌を吟ました。名知らぬ紫の曉の花かと思はれるものも有つた。かうした雲深く、春短き山里の少女の心とも思はれる淡紅色の花も見えた綠淺き草を分けて、覆盆子の赤を求め、かゝる年かうして旅に暮れ行く二人の一日もおぼえた。



ある山合で有つた。五十に近い男の二人、尺半角許の椽の生木の六尺餘のを運ぶのに出逢つた、靑銅の銹びた色に鬚髮モジヤ〳〵と伸びて、自然との苦鬪を示す深き皺の顏よりは、老にあまる背の生木の重きに、絞り出す汗は瀧と流れて、力とすがる杖さへタド〳〵として居た。行き過ぎて顏見合せた二人の目に二人は自分の淚を見た。私は言ふこともなくて、靈あるものの如く聳ゆる杉の老木に額をあてゝ淚をのんだ。(六日)

●ホテルの夕暮

假橋の側の急坂をよぢて

ホテルは聳えて居る。流水巌を食む大谷の岸より小徑ゆるく上りて、庭門に入り一轉して鶯多く白百合美しき小丘に通ず。瑞西のそれに似ると聞く。
純白の服に美しく髪を分けて、入口に控へて居た廿前後の給仕の二三人は、一齊に正しく立つて、麻の葉くづしの着物に帶赤く眼の大きな娘を迎へた。
玄關の廊には一列に數十の椅子が並べられ、茲に故郷遠き人々は樣々の夜食服に、こんもり茂つた藤棚や綠の色淺い櫻や梅の青葉を通して來る風を、胸一杯に吸ふて、夕食後の數時間を送る。白髪雪をあざむく溫容なつかしき老紳士を圍んで、快活に論ずる青年も有つた。人を離れて詩集らしきを拔き瞑想するらしき紳士も有つた。支那人の保姆の乳母車を靜に押し過ぎ押し返へすを笑ましげに眺むる亞米利加人らしい若い母も有つた。五歳許の男兒の碧眼に白けたる縮毛美しきが、給仕の一人と野生の花を集めて、宣敎師らしき女にせまりて、花束に編ませるのも有つた。庭にも若き戀人らしく樂しげに逍遙ふ人々も見える。富めるオーストリアの女は、愛犬の定時の散歩を守り池を廻り葡萄の葉蔭を通して導いて行つた。
此處で私は「人生は遊戲に有らず」と叫んで山に退いた熱情ある青年山田さんに逢つた。夏を迎ふる六歳「都の便と云へば下らない繪葉書でも、なつかしい。樂と云へば、夏場はかうして必知つた人の稀に來るのか、冬は狩に出かけて、兎や雉子をあさる位のものですね」詩有るとは云はなかつた。私は霧降の道に聞いた、高山植物の寫生に一生を捧げて、世を知らず近く逝つた畫家の生涯と、思出多い都を落ちて、草にかくるゝ人の生涯とを思ひくらべて、ともすれば流れ易い涙を贅澤と思つた。(七日)

◉參拜の後

縞の羽織に名も知らぬペラ〳〵とした袴をつけて、案内者は鄭重に導いた。
德川の流が世を治めた三百年の太平は何時も私に、一歩秀でたる人智の如何に價貴きかを思はせる。好運兒家康の廟には、流石に胸のをどるをおぼえた。
神樂殿の薄暗に丸髷の女の、忍びやかに靜やかに打ち振る鈴の律呂に合せて、水干の袖打ち振つたもともすれば、醜きものゝ聯想を起した。
三佛堂の一隅に眼を閉ぢて、明るき南國の片田舍に

暮らす無智の母を思ふた。
鶴髮童顏の老僧は餘に浮世を知つて居た。純白の服にパナマの帽子を格好よくいたゞき說明每に輕くうなづく西洋の女に恭々しく親切に說明した僧は、次に來た一團の田舍人らしき人々に向つては、にはかに丈長く白髮よりは、光を出すと見えて、喨々たる音聲は暗を貫く。

「恐れ多くも右に渡らせらるゝは不淨なる女人を濟度せんと、御身をかへたまへる千手觀音、左は畜生に迄も慈愛の眼を垂れてすくはん爲に、



畜生の形をかり給へる馬頭觀音、中央は本尊阿彌陀如來樣、皆さん貪欲瞋恚愚痴の妄念を去つて、十惡五逆の罪惡を捨てゝお拜みなされや」

塵埃の巷を遠く放れ、自然に親しみある地に朱塗の殿中昔ながらの暗重き處に、此種の矛盾を見樣とは思はなかつた。

母は佛に生きる人で有る。私は此無智の母を無智のまゝに死なすべきか、無宗教にかへすべきかに迷ふ。老いて便なき母は、私共が今味はふ苦悶にたへらるゝだらうか。（八月）

◉中禪寺に

二臺の車は默々と山路を行く。御用邸の松青き御庭を左に、白崖の小橋をわたり、小丘をてゆれば、南國の故鄕の山陰に見し炭坑の小屋の一群を見る。排水惡き低地に、無造作に立てられし小屋よりは、古川の煉礦所に働く人の青き顏の世珍らしげに道行く人を見送る。「坑夫」に見た恐ろしき足尾の坑内をも思ひ起された。

道々三四頭より十四五頭位群をなして、金澤礦山より、日光に鑛石を運ぶ牝馬に逢ふ。夏短く物の音遠き里に育ち、世の榮華を知らぬ顏に先導の馬の打ち振る鈴に歩調を合せて、夜黒き木下道をも辿ると聞く。馬返しよりはその鈴の音も、坂と共に轉じて稍緩く、チリーン〳〵と木の間をもれて群あるを告げ、時には調哀しき馬子歌もきく。

彼の姿美しく風貌猛き先導羊の群羊を導くは巨木空を蔽ふ北米の沃野や、群星神秘を囁くアラビアの野か。此處には綠蔭苔滑に、行水あはたゞしき高地の小徑を背景とす。（九日）

* * * * * *

◉白雲の瀧にて

流るゝ水の何處より來りて落ち行くを知らぬと云ふ人生は吹き過ぐ風の如く何處に起り何處に歸るを知らぬとも云ふ。何程の博學、如何なる詭辯がよし一時にても我等に安心を與ふるに足る解決を與ふるや。只私等は初めも知らず行末も知らず其刹那々々に生きて行く刹那々々に花は笑み、鳥は歌ひ、鳥は歌ひて我等は長く生きて行く。（未完）

▲獨逸の大使館員が、二人の美人に道を尋ねられて、親切に敎へてやつたら、大いに感謝されて抱きつかれ キスまで頂戴したのはよかつたがあとで氣がついたら、ポケツトはからになつてゐた。

▲『われ〳〵のくらぶにしてゐる家の女中が明日結婚するさうだ、平生の忠實に報いる爲に皆して祝つてやらうぢやないか』と發議した男がある立どころに二百＄の金を得た、次ぎの日チヤーチの長老の前に立つて、新人の手を把つたのは誰あらう醵金の發議者である、ヤンキーはひどい。

田舍娘に金色夜叉を語る

松竝紫花

私の生れた故郷は、僅百戸程の農村で、町へ半里、市へ三里の片田舎なので、眺めに不足はないけれど、娘などは年頃が來ても、農繁なのと、村に良師はなく市町へは遠いのとで、白い手拭、紅襷に親しんでゐる許りで、裁縫の稽古が後れ勝に年をとつてゐる者が多い。それ等の娘達が、私の宅へ稽古に來たいと云つて來る。無論そんな資格のない私、平に斷つたのであつたけれど、如何なる口實も用ひられず、是非といふ再三の懇望に、それ以上斷り兼ねて、甲に許せば、乙も許さねばならず、軈てつれを引き友を呼びはからずも裁縫私塾が偶然開設された次第であつた。

中には先生の私より年上のもあり、同年のもあつたが、それ等はおほかた尋常小學校さへも卒業して居らぬので、裁縫の力は反つて年少の者より幼稚であつた然し元來芋の葉末の白露の樣な、清い心の里少女の事故、只管殊勝に熱心に稽古をするので存外進歩も著しく、殊に同村に共に育つた師弟の間は、實に穩かな暖かい、恰も眞綿にくるまつた樣なものであつた。

最初は亂れ勝であつた膝も次第に正しくなつて來るし、眉をひそめる樣な話もせぬ樣になり、いつとはなく朝夕の往き歸りに庭の花など賞し合ふ樣になり、或時は自分の家の流槽の下の水萩や、畑の隅の（しゆんぎく）や、垣の槿を折つて來たりなどして机の花瓶や柱の一輪挿に投げ挿にして樂しむ樣なやさしい少女となつて來た。

或日何から云ひだしたのか、金色夜叉の話を私にして呉れと皆がこぞつて切望した、私は默つて首振つて詳しく知らぬと云ふと、それでは貸本屋で借りて來るからといふ、それ程懇望するものを話さなかつたら、かへつて徒に惡い想像を逞しうさせるであらう、それよりは寧今丁度文明の餘光のさしつゝある片田舎の、惡く虚榮に走らんとして、所謂皮相の高襟に染んとせ

る輩故、此機を幸に、虚榮の夢に憧憬れて、かへらぬ悔に發狂した宮の生涯を語り聞せやうと思つた少女等の清い瞳は一樣に美しう輝いて、待ち佗ぶる無邪氣さ、床に生けたる緋薔薇も花の小首を傾けて、只何となく樂しい空氣が室に充滿してゐるのであつた。

先づ解り安い樣に、孤兒の貫一が宮の家に養はるゝところから說きはじめて、次に婚約の成立、其次に歌留多會を持ち出して、其時宮の美しさを、紅葉先生の精密なる筆を、そのまゝ不調法ながらも、言葉をつくして說いたので、朧氣ながらも一同の腦裏に絕世の佳人を想像させた、が、其の美しい宮がやがて富山のダイヤモンドに心醉して煩悶すると聞いたとき、一同の眉は等しく曇つて、もどかしがるので、可笑しいやら可憐なやら、皆の顏を見渡して、私は思はずホヽと笑つたが、話進んで熱海が濱の別離の節となつた。

幸に海岸に近く生れて、朝は朝陽、夕は月を、共に松原の間から見てゐる少女達には、熱海が濱の月夜の風情は、たやすく想像し得るので、初は其月下の海岸を貫一と宮のそゞろあるきを只美しう憧憬るゝ樣に聞いてゐたが、間もなく貫一が或は怨じ、或は憤り、又は子をすかす樣に、眞心こめたる訓言も、宮の心はかへらばこそ、虚榮の夢の覺めればこそ、聞けども／＼遂に動かぬ宮の心に、皆の顏は又曇りはじめて、青く青い、さながら疲れ果てた樣な顏色に陷つて仕舞つたが、遂に怒りのあまり貫一にハタと蹴られし宮が傷きて波打ちぎはに轉び泣くのを見て、貫一が又近よつて來てやさしくいたはると聞いて、其深切に只歎息の聲をもらす計り、返事も滿足にするものもなく、中には袂を顏にあてゝ忍び泣くのもあつた、そして皆の心には今に宮は思ひ返すであらうと只管それを期待してゐる樣子であつたが、早これ迄と決心したる貫一が、遂に丘へ驅け上りていづこへか行かうとしたが、今更棄てし宮ながら、昨日の睦み懷かしく、宮もそゞろに戀しさ貫一の影を逐ひ、月の光に透しつゝ。

貫一さアン…………宮さアん…………

互に呼び交す聲はかすかに隔りて、戀しき人やら松の影やら…………其生別の情緒にやさしい子等はどうして堪へられう、皆殘らず俯き込んで仕舞つたが、貫一さんはどこへ行くだらう？、と誰かゞ涙聲でつぶやくと、同じ想ひの堪り兼ねて、皆が一時にワッと泣き出した、ア、貫一さんはどこへ行く？――、オ、やさしい同情よと私は泣くがまゝに美しう靜に泣せて置

いた。

然し餘りに泣き疲れた樣子、且つ先の長い話なれば一先づ切つて殘りは明日、と講談師の眞似を云つて見たけれど、是非續けて貰ひたい、せめて貫一が何處へ行くか、其の落ちつく先丈けでも聞かぬ内は夜が眠られんと皆で切に賴むので、又心弱くも話を續けることにした。

それからは筋道計りを簡單に走つたが、軈て宮が富山の情の冷たさに、かへらぬ悔悟の煩悶憂鬱と暮す時には、罰よく〳〵と口々につぶやく樣に云ひ合つてゐたが、遂に切ない悔ひの極、發狂して跣足のまゝに驅け出して、只貫一の名を呼び續け、眼前懷しき貫一に逢ひながら、其れとも知らぬ迄に狂ひ亂れしいぢらしさ宮を追ひ來し母も泣く、かたへの人も貰ひ泣く。

宮よ許すと貫一が男ながらに泣く聲も、あはれや狂ひ果てし宮の心に通ふよしもなく、昔は花の面影も、變り果てし狂女の淺間しさ、可憐さ、狂する迄の悔悟の心情を察しては、憎かりし宮もをかりし宮も、曾ては其の變心を罵りし事も打ち忘れた樣に、初め貫一にそゝぎし同情を再び宮に繰り返して、いたましい同情のために、涙惜まず咽び泣いてゐる。

語り終つた私も、只何となく女性の果敢なさが淋しう淋しう感じられて、美しう泣く子の眞中で共に〳〵ホロ泣くのであつた。

ちやうど、どこからともなく花橘が馨つて來た、夕陽に色增す青葉の上に、柿の花ホロ〳〵とこぼれて、如何に懷しい夕暮であつたか、……………

私は言葉を改め、呉れ〴〵も虛榮を戒めて、幸ある前途をあやまらぬ樣、今日の涙が僞でないならば、どうぞ〳〵誠の道に進む樣にと賴む樣に語り聞すと、袂を顏に當てたまゝ幾度も〳〵深くうなづくしほらしさ、沼より咲き出し白蓮か、み空の星か、白露か、此の瞬間のてゝに泣く少女は眞に淸い少女である、

然し乍ら餘りに悲哀を語り過して、あたら少女を泣かせし罪を今更悔いて居ると、やさしき少女等は涙を拭ひつゝ今日の話しと敎へとは、今後如何に遠く別れ行くとも、決して忘れはしませぬと、やさしい誓を繰り返し繰り返へし、泣き腫らした顏に笑みを浮べつゝ樂しく歸つて行つたが。

以來已むを得ぬ事情の爲め、はかなく別れて既に一年、三百尺の山の上に故鄕を忍ぶ此の夕花橘よ、柿の花よ、語を聞いた少女達は何うしてゐるであらう。

開かれたる窓より

順子

雨戸の節穴から流れ入る明くなつた外の空明にぐつたり眠つた、しまりの無い顔が、いくつも、いくつも黄色く浮んでゐる。私はむつくり起き上つて坐つた。生温い夜のいきれが、生嗅く顔を包む。私の頭の中には、昨日アメリカへ行くと云つて暇乞に來た×様の若々しい力の漲つた頰と美しい瞳とが、ハッキリ彫りつけられてゐた。あゝ、アメリカ、アメリカン!!、名を聞いた、だけでも、新しい力を覺える。世界に知られて僅か、五百年の、其新しい土地に、新しい空氣を呼吸して新しい思想と、烈しい不靜止のエネルギーを以て活動してゐる。あゝ其アメリカへ!!。たゞに之ばかりではない。「貴女は幸福ですよ。少くとも私の知つてゐる人の中の最も幸福なる人ですよ、名譽あり地位ある人と婚し得る人も幸福には違ひないけど、それは、たゞ華やかな空な幸福とでも名くべきものでせう、それに對して云へば貴女は、じみなさうして充實した幸福と……云ふとちつと變な語かも知れないけど……と思ひます私も、多田様の様な力の人、男らしい男となら結婚したい」。これは別れる時しみ〴〵云つた私の言葉であつた。

ちやんと、秤にかけた一日の食と、仕事とを與へられて狹い薄暗い中に忍びやかに細い呼吸をしてゐる、其呼吸!、呼吸さへ人の爲にしてるのか、自分の爲にしてるのか解らないのである。かうした型にはめこまれた生活!、私はつく〴〵、つまらなくなつてしまつた。あゝ寄宿舍生活!、斯う思つた、だけでも、重い因襲の塵埃と、うすつぺらな形式的の濕り氣とが對流作用と云ふ事は、夢にも知らず、久しい間に結晶した暗い冷い空氣を感じて、胸は重苦しい壓迫を感ずる。―私は一體、誰の爲に、こんな暗い石疊の中、……社

會とは沒交渉な……に飼つて貰つてるんだらう」しみじみ斯う思ふ。私らはどうしても社會の一隅に住つてやしない、普通の人間扱にせられてやしない樣な氣がしてならぬ、あゝ私は、このきせられた薄黃なはがゆい、ヴェールを搔きむしつて活活した力の脈打つてゐる華やかな彼方の世界へ飛び出して行きたいさうして、自分の力で、狹くても可い、厚い寂しくつても可い活々した、青く光り白く輝く、我道跡をいりつけておきたいのだ。



希望だの、理想だの、斯うした、空な物で、我身を飾り將、欺いたのは昨日の事である。あゝ行かねばならぬ!。勝つても可い敗けても可い當つてみれば其處に新らしい境地が拓けるのだ。あゝ新しい境地!。私の行くべきは其處である、たゞこんな處にグズ〳〵してゐて何の樂しみがある?。「あゝ明日は何の樂しい事があらう!。

斯う、遙けき明日の旅路を望みつゝ快い寢につく、私は、斯うした人をつく／″＼羨しく思ふ、私は汗ばんだ額を押へて外に出た、柔いうるみを、帶びた朝の滴は白く脈打ちつゝ流れてくる、私は思はず、深く、深く吸ひこんだ、おゝ！！充實したる若き生命の色よ、朝の青葉！。おゝ鬪へる友よ、若く／＼しき群集よ！！。私は、裏門の朽ちた柱に倚つて外をみた。群青の歡にぬれた、稻田は活々とはてしもなくつゞいてゐる。其中を頬冠に鍬を擔いだ黑い影がそちこち見廻つてゐる。私には故鄉の老父の姿が浮ぶ。「來年は是非弟も中學へ入學なけりやいかぬ、俺はお前の卒業ばかり待つてるよ。此頃はな、稅は高うなるし、ちつとでも早う小遣の一つも取るやうになつてくれんと困るよ。」斯う云つた父の言葉が思はれる。あゝ、父は何故私を便りに思ふんだらう！！。私の胸は、薄黑い、矛盾の密雲に重く閉された。「オヤまあ何、梅が落ちて！。」誰かが云つた、見ると、井戸端の六月梅は、成し遂げた、努力の誇に赤く額を染めて、執着もなく、落ち散らばつてゐる。「憎らしいわね、小まちやくれて、まるで、自分等のグズ／＼してるのを嘲笑してる樣だ。」小崎さんが、斯う囁いて苦笑した。皆が髮結に苦心した、嚴しく止められた白粉を塗つては洗ひ落したりしてる間に、私は二階の食堂から町の方を見下してゐた。暗綠色の××公園の森を背景に、灰色の朝霧に煙つた一帶の町は、をやぐらの貧民屈である。耳を澄ますと其邊から細い、蚊の鳴く樣な聲の集りが、聞えてくる、老いし者、幼き者、若き者、斯樣した貧しい人達が、貧しい朝飯に着かうとする苦しい生活の聲では無からうか、私はいつも斯う思ふ、けれと、彼等は、私よりはいくら充實した生活をやつてるか！！　私はきつと斯う思ふのである。

英語の先生が缺勤したので、自修と思つてゐると、松下先生が見えた、此先生の癖で誘惑の恐るべき事と師を敬ふべき事について大いに說かれた。

「誘惑に近づくべからず……」斯う云つて、誘惑と云ふ者を、何か、斯う別世界の王者の何かの樣に、非常に恐い強い者の樣に云つて居られる、先生方の頭を私はつい冷笑せずには居られない。誘惑が來たからつてすぐ身を任せる。云ひ替へれば、自分で自分を、目茶苦茶にして浮ぶ瀨も無い者に、打ちこはしてしまふ。之程、馬鹿なことがあらうか、之は自尊心の無いのと、人格の低いのと、批判的の頭が無い爲にかうなるのだ

全體誘惑を恐しいものゝ樣に敎へるからして間違つてゐる、誘惑の、どてが自分より强いよ!! 自分より劣つた者に身を任かせるなんて隨分馬鹿な話である、之と云ふのも、男を見る目が、餘り狹く、貧しいから間違が起るのだ、告白すれば、私は、極く嚴格な家庭に預け育てられて、ほとんど、男子と云ふ者は知らなかつた。たゞえらい者だと云ふ事だけは知つてゐた、それは十四五の頃である。其家の主人が病歿したので、私は家に歸つた、此處で嚴しく止められてゐた、小學校の校友會等の集會へも出る事ができた。私が、男と云ふ男を見初めたのは此時とでも云はれやう、私の友等には、いろんな若い男が、面白く、口をきいてゐるが、私には、誰も物を云つてくれてが無い。私は、耐らなく、淋しくも妬ましくも思つた、他の友等に負けた樣な、口惜しい、侮辱を感じたのだ。私は此時、誰でも好い、どんな男でも、私に一人親しい男があつたら……。私は、てんな事を思つた。周圍の若い男はすべて、自分より强く懷かしく見えた。どうかして男の心を買ひたい!!。私は此爲に、愚かしい表情もした。然し之が私の最初に持つた男に對する觀念であつた。一人の男を得た、歡の間もなく、其餘りにあつけない失望に伴ふ冷い嘲笑は遂に私を、自覺した女にした基である。

誘惑に近づくべからず! 斯う麗しく、說き立てるよりも、人格の修養、男子に對する自尊心なんかを覺らしめて、根本治療をしなくちや駄目だ、たゞ、上つらへ膏藥を處々張りつけた樣な、やり方では徒勞に終るばかりだ。男女の對話と云ふ事を無暗にむづかしく云ふ、だから、何かの場合に、たつた、二人限りになつた時、非常に有意味な機會!と云ふ樣な物を感得するさうして、お互に耐られぬ肉の閃きをみるのである。私は、どうしても男をみる目が、てえてきなくちやいかぬと思ふ。

少し過言に失するかも知れぬけれど、私等の敎を受けてゐる先生方の頭と自分の頭とを比べて、自分の頭の方がずつと、世間が廣くズッと、對流作用の力が鋭く劇しく思はれてならぬ。今の敎育家なんて、氣力の乏しい、たゞグン〳〵進んでゆく、新しい思潮を望み、みて、「あゝ何樣しやう、何樣しやう」。かう云つてあがきながら、其癖何事もよう爲ず、ふりむきもせず進んでゆく、若い子等の後から、口惜しまぎれの大聲を出して「其道へ行つちやいかん、いかん」と云ふ。



殘りゆくもの

山田邦子

今しがた通りすぎし明るき雨の一しきり烈しくふりしきる最中にて候ひき。いさゝかの用事ありつと開けて立ち出でたる白き障子の外、折から銀箭の入り亂るゝ天と地は、青葉の甦りたるが如く明かるく、其障子の、面に浮かせて、淺黄濃き浴衣の袖の細く短き振を斜めにうちしふきゝ濡らし行きたるなまめかしき縁の柱に寄りつくしたる姿は、淺黄の色に魂までうちつかり居り候ひき。雨やみし今、紺の匂ひのほのかなる飛白にかへて筆とれば、あやしきまであざやかに白き雨と淺黄の浴衣のなまめかしき印象を明るく明るく殘しゆき候。

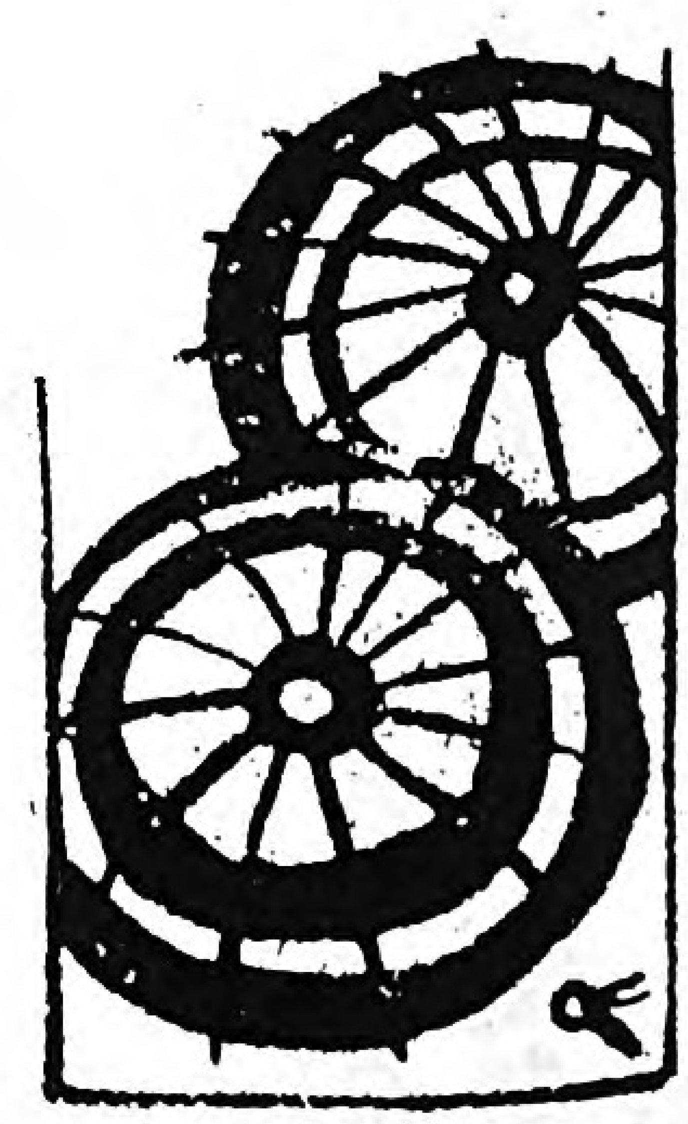
そは何日にて候ひしか、妾の髪には赤きうばらのかざゝれて有りしが感覺には殘り居り候。夕日の沈みゆきてより、しばし、我が世の上に微かなる、微かなる底の明るみのみが殘りたゞよふ夕にて候ひし。あとには殘らねど、何ものか悲しきものゝ胸をよぎり居り候ひしまゝ、うなだれて、歩み靜かにそと明けたる我が部屋のかすかなる、いとかすかなる光りの中に、黄八丈のほのかなる被布が柔かうぬぎ捨てられてありし物なつかしさ、若き愁に甘え來りて涙流れしは今も忘れず。

内なる心の痛ましくて外なる多くと離れ行きたる、そは我が二十歳の夏にて候ひき、唯此蔭にとのみすがり寄りし、師の君の御住居は、庭にさま〴〵なる草花の咲き亂れ居り候ひき。ともすれば深うのみ沈みゆく孤と成りし魂にふれては、白き夜の露のハラ〳〵としもこぼれ候。星靜かなる天が下心こまかく濕ほひゆく夜の氣の上に、ほッと音もなく開くと知りし月見草は、戀しき花の一つとなり候ひぬ。

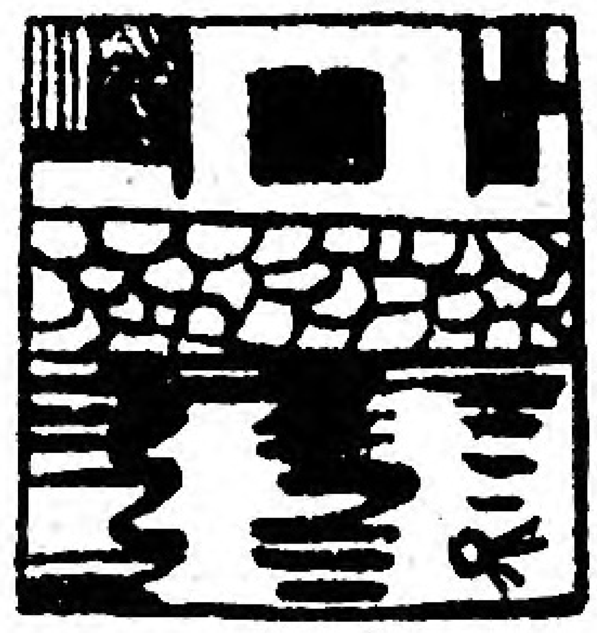
電燈の光はほのかにて候ひき、眞白きシーツ、眞白き枕かくも眞白きものを眞白き蚊帳は、いとゞ眞白く之等を包み候ひぬ。此内にそと身を横へて電燈のほの光りに射されし時此白き背景の外に現れし身の餘り不細工なるに、いたくも驚き申候。かくて妾は長き祈りを、涙と共に神にさゝげて候ひしよ。



大阪の婦人



髪かたち



岩野泡鳴

内では梅干とお粥とを喰つてゐても、外出の衣服は和かいのを着ようと云ふのは、大阪流の男子もさうだが、大阪の婦人は殊にさうだ。見えるところばかりを立派にして、鳥渡裏手へまわるとひどい汚れが見えるのも厭はない、そこへ行くと、東京ツ兒は上方連中に笑はれるが、見えないところを絹物にして裾などをわざ〱木綿同樣の物で出すことがある。一枚々々脫いでゆくに從つていゝ物が出ると云ふ様な意氣は大阪では見られないのである。

東京で束髪もしくは廂髪が少くなつて來たのは近頃のことだが、大阪で少いのは初めからである。十中の八九までが島田、銀杏返し、丸髷で――すべて根が下りすぎてゐる。從つて丸髷などは一が引けて根がけは下からのぞいて見なければ見えないほどだ。一體に髷形もよくないのだらう。花菱形などはまだしもいゝ方だが、東京の雲井形ほどにはならない。然し藝者どもでもこの頃は髷の根があがるやうに望んでゐるらしいが、前髪の幅を廣く取り過ぎる上にその出し方が短いので、たださへ長い顏が多いところへ持つてきて、おでこなどがそツくり現はれてをかしいものだ。且前髪を幅廣く取つた結果鬢の幅がないので、如何に上鬢に

梳いてもふッくりとは行かない。髱も出てゐるのもないではないが、充分とはいへない。

然もその髱で衣物の後ろ襟がよごれるのを恐れて、町家のかみさんなどには、ハンケチもしくは手拭で以て襟を卷いてゐるのが、汽車や芝居の中で隨分見受けられる。それに髮を洗ふのに無性かして、縮れ毛もしくは癖毛の女が多い。ただに髮ばかりではない、立派なお召を着てゐても、その襟が——氣發でゝもふきとればいゝのに——よごれたまゝになつてゐる。また襟の合せ方でも、脫き衣紋は、東京には藝者社會にも殆ど全くなくなつたが大阪にはまだ澤山見受けられる。よしんば、きッちり合はせてゐるらしいのも、東京の殆ど一文字になるやうではなく、逆さ三角に開いて胸の上部は見えてゐる。

帶は、六つや七つの女の子にまで廣い堅い帶をさせて苦しさうだが、一體に帶あげが高く飛び出してゐるので、大きな急須ぐらゐは乘せられさうだ。おたいこに結んだ輪が短いので、帶どめが帶幅の——東京なら三分の二ほど下にいくのが——三分の二だけ上に行つてゐる。それにまた結んだ輪の舌が長過るほど出てゐるので、歩く時、大きなお尻と共に左右にひよつこりひよつこり動く、それが樣子を如何にもをかしく見せてしまう。或藝者が『おいどの動かんやうに歩きとおまッさ』と云つたのに對して僕はそれにおはしよりをもッと上にして、しごき、乃ち腰帶をもつと上に締めるやうにしろと敎へてやつた。さうすれば、丈も自然に高いやうに見えるのである。

一體に大阪婦人は衣物の着こなしが下手だ。その上何かと云ふと、裾をまくつて長襦袢もしくは腰卷を膝以上に出す。汽車の上や公園でそれを見ても『またか』と思ふと、美でもなければ挑發でもなくなる。渠等には、襟に手拭を卷くと同樣、衣物をいたはる心がけだらうが、あまり裾をまくり過ぎて、胴裏の穢い絳綱や紅木綿が見えても平氣でゐるのは色消しの極だ。東京ッ子は裾まはしは木綿でも胴裏には絹物を使ふ。而もそれが意氣がる程赤ではなく白羽二重などとてある。裾

まはしも白いのが東京では上品だといつて流行してゐる、本願寺の式能を見にいつた時、同寺に關係ある貴婦人はすべて白裏であつたが、大阪では殆ど全く見られない。

以上のやうな風俗で衣物を裾短かに着、駒下駄も早くへるのを恐れて野暮なほど高いのを穿き『お辨』といふ物を持つて、一年に二三回、外出嫌ひの大阪婦人連は、天王寺とか、濱寺とか、箕面公園とかへ遊びに行くのである。而も急用が迫ると立ち小便もする。そして口數多くおしやべりをするのであるから、いやになつてしまう。



大阪の婦人はまた一體に色彩の觀念が乏しいやうだ色と云へば、赤、紫、藍と云ふやうな濃い原色ばかりを選ぶ。衣物の柄の好みになると、東京などではぼかした色の調和をおもんずるのとは違ひ、色その物を目的にする。從つて色としては派手のやうだが、そのいろんな種類を集めた柄となると、變化に乏しく、こッてりと重くるしく沈んで、ぱッと活々したところがない。

衣物と帶との關係にしても、白ッぽい衣物には黒ッぽい帶を、黒ッぽい衣物には白ッぽい帶を取り合せるのが引き立つ所以だが、そんな考へは殆ど全く持つてゐないらしい。且、夏の盛りになつても、純潔と

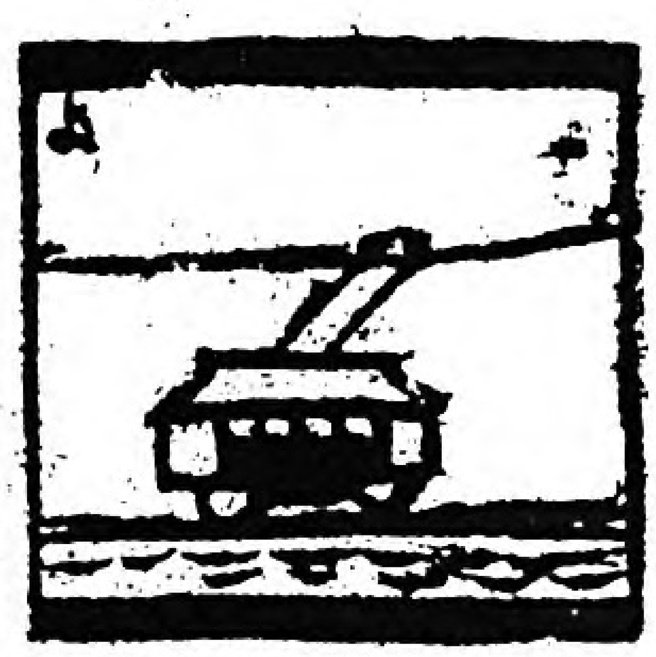
輕快と涼味との感じを與へる白地を着ない。その故を尋ねると、顔の色が黒く見えるからと云ふ。さうして顔にばかりこッてり白粉を塗ることを熱心にして、髪を洗ふことをしないので、癖毛や縮れ毛になつてゐるのもかまはないし、衣物の襟のよごれてゐるのもかまはないし、帯のくしや／＼になつてるのも平氣だ。

大阪の婦人は物をかまうやうで、而も無智から來る無性を脱してゐない。さうして下らない迷信を澤山持つてゐる、白い衣物を着れば色が黒く見えると云ふのも、それで若しさういふ心配があるなら、襟の白粉を顔のよりも少し濃くすればいゝことを知らない。髪を洗ふと抜け毛が多くなるとは云ふが、洗つた跡でいゝ油をつければ、そんな恐れがないことに氣がつかない

から惡口ばかり云つてると限りがないが、一方から見ると、大阪の婦人は日本國中いづれの地方の婦人よりも快濶である。おしやべりなのもそれが爲めで、知り合ひの人々でもゐると、電車の中でも、芝居の幕合にでも、なか／＼よく語り、よく笑ふ。默つて人のしやべるのを聽いてゐて、その人のゐないところで、あの人はおしやべりよと陰口を云ふやうな卑劣な女根性はない。この點は一つの取り柄だ。

大阪が平民的であるだけに、大阪の婦人も亦平民的である、言語に於ても、表情に於ても、衣物の好みや着こなしに於ても、すべてさうだ。とこを歩いてゐても、出會す大阪婦人には上品とか、崇高とか云ふ感じを起させる顔はない。美人であつても位が乏しい、愛嬌があつても品を缺いてゐる。然し平民的で愛嬌があるのが、大阪婦人の特色である。

女の見た女



柴井やよ

△路行く女

家並びのわるい町だ。

今にも降りさうな空合なのに、まづ雷が鳴つて、一際暗くなつた雲の影を氣にしながら、歩いて行く人に

は男が多かつた。

見上げると、土の牢屋見たいな窓や、印象の殘りさうもない看板を背景にして、大粒な雨がぽつ〳〵落ちだすと、路行く人は尚さらあはて出した。

年増な銀杏返しの女は、憎らしさうに空を眺めて、すぐわきの軒の下に這入つた。袂から縞の風呂敷を出して擴げてくるりと後に廻して帶にかけ、稍心強さうにさつと歩き出した。

雨の落ちる音がきこえはじめる頃に、栗の皮見たいな色に塗つた格子を開けて若い女が出る。

美人だ。と思つて男が見る。美人だと妬ましさうに女が見る。つゞいて念入りにかゞんで小さな丸髷から先に、『御家さん』らしい人が出る。娘は紫色の蛇の目開きかけたまゝ足をイの字がたにして、こいさん早うしなはらんかいなあ。

二人が語り乍ら歩いて行くと母親は、傘に映えた娘の白い横顔や、亂れ麻の葉の浴衣の仇つぽい着こなしをぢつとながめては嬉しさうにほゝ笑んだ。

黒繻子に半巾入れた片みち帶の、せまいとも思はれぬほどの腰のほそさ。母親は娘を見い見い行くので平らかな路だのに、こつ〳〵引つかゝるやうに歩いた。

こいさんの振りのふちの紅梅色は、四つ橋にふる雨を艶ににほはした。

築港の方に行く電車はこんで居た。

「ゑらい人や」車掌臺に上り乍ら娘はこう云つて空席を探したが、席をゆづつて呉れる人はない。

ぶら下つて居ると、顔をしげ〳〵見る人々の視線をうるささうに窓の下の土手の下の川を見る。その時にはもう引きかけ帶がすこしずるけて、洗朱の伊達巻がはづかしさうに覗いて居た。

晴れた日の心齋橋通りはにぎやかだ。

家根から家根に幕を渡して、店の代物はなるたけ前に持ち出してある。呉服店、洋品店、小間物屋、めいめい、意匠をつくして並べてある。それを見い見い、女が行く。男も行く。

日にやけた近在のお婆さん連のぐたりぐたり歩くのをきりぬけて日傘が行く、紺に白地豆絞り形のふちとりである三本格子が恐ろしく引き立つて見える。向へから來た近江ものと思れる麻をきた肥つた女は、行きすぎた後姿をじつと見てゐる。不粹な『御家さん』だけど子供だけは美しく藍の勝つた友禪ちりめんに、草花模樣の繻珍の帶を船底に結ばせて得々と歩いてるおもひ月に鹿の子かけた頭が傾いて鳥渡かけ引きの鼻がなる、『御家さんは』よし、よし、と云つたやうに、眉のない蒼白い顏で、二度も三度も、頷いて、さてかけ引の、仕方なささうに小間物屋にはひつた。

黑地に藍の七五三のあらい縞きた女は、白木屋のかざり人形の煙草吸ふてるのに吸はれてか、だん／＼歩みよる。非翠の根掛けが青くかゞやく。

いく段も竝べてつり下げたリボンの蝶や花のすかし模樣を珍らしさうに見上げた女の子のお下髮の前髮の根は低くかつた。

おゝんとでむ輪が走つて縞明石を着た藝者が行く。淡化粧の顏にびんがふわ／＼してるのが氣になるか、鳥渡手を擧げてさわつてみた。

木綿縞の女中が見てゐる。

△圖書館の女

六人の本よむ女の心は智識慾でいつぱいだ。

粗末な椅子だけれども少しそりかげんに、よりかゝつて洋書よむ袴の女は、小さな字の竝びを一心に見入つて居る。

一番奥の壁の前に『八犬傳』を二冊重ねてよんで居る人の束髮は前にのめりさしだ。そのせいか。褪めた色の着物を着てるせいか、額に暗い、痛ましい色が見える。もう紙の色が黄ばんで活字のすはりがにじんだやうになつた部の厚い本をあけたまゝ、くしやくしや束髮の人は立つて窓に行つた。帶の結び方がまづい。

圖書館が一段高いので石造りの窓に手をおいて、そつと下を見ると、雨あげくの濕つた路をころ／＼歸つて行く小僧がある。若い木も若いた木も晴天とちがつ

てかげひなたはないけれど、何とはなしに薄い霧につつまれたかのやうに、目ざめの前のひとゝきのやうに綺麗に可愛く立つてゐる。

（……の無理情死）（大阪女の今と昔）と、赤い字の見出しをさげて、新聞うつてる子供がぶらついてる。

あの若々しい芝の色、生に勞れて、衰へたなきがらから生れたあをい芝の強い呼吸。と思つたのかしら、その人は戻つて再び本を取り上げた。



艶のない髪と野暮な柄の着物持つた人は入口の方に後を見せて圓くなつて居る。

丸髷の――あんまり意氣でない若夫人がまご〳〵し乍ら這入つて來た。不馴れの調子で、小說欄の汚れた目錄をくつてゐる。

兩ひぢを机の上に張つて、あたま抑へてる人は、隣の人の筆記する鉛筆の音をかるさうに見る。

云ひ合せたやうにその人々のつくろはぬ服裝、配合のわるい色彩の置かれてある空間々々にはかすかになつかしい、おなじ空氣がうまつて居る。

△巡航船の女

不規則な輪をいつぱい並べたやうな絞りをきて、白地に墨繪で笹を畫いた帶をした女が乘つた。

息子らしい少年を連れて……筑前橋である。

見まはしてすいてゝよかつたと云ふやうに低い天井を見上げ、そして紺碧の流れを見下した。

冷いまばらな雨が斜に落ちて、風は寒いくらゐ、數人の男、二三人の女の目はみんな船の中心にそむいて居る。その法則に洩れないでこの人の目もひとりでに外をむいた。

赤ちやけた煉瓦の船が下る。銀色に光る石油罐の船が上る。岸に傘さして釣する人も見える。はつと驚いて首をぐつと出したのは、船の後から、向ふの舟に談しかけた男の聲が轟いたからだ。

ちやぶ臺のむなしく並んだ蠣舟には、煙草盆をいくつもいくつも重ねて、男がぽかんと水を見て居る。あほらしさうに「ふゝ」と輕く笑つて。少年が指さす方を同じやうに指さしては、はなしてゐる。

なだらかに抑揚の少い大阪辯を、殺風景な蒸氣の音がだ、だ、だ、だとせはしく追つかけて壓しつぶして波の中にほうつてしまふ。

天神橋に着けた時、その女は陸に生れたものは陸が宜いよといつたふうに、見むきもしないでさつさと行つてしまつた。

△入浴と涼み

御飯が濟むと御寮人さんは、タオルのかぶさつた金盥を持つてお湯に行く。

涼しさうでもない中形の浴衣ののれんをくゞつて利久をぬぐ。葭の衝立をまはつて、着物ぬぎ乍らちよいと横目で鏡――おやない鏡にうつる自分の姿を見る。

男湯とおしやひのいはゞ半分の電燈のあかりに人は皆赤く暗く見える。烏渡身體をぬらしたがお湯が少しあつかつたか、そのまゝ浴槽のぐるりについてる段に腰かけて、重くてその割にお湯のたんとは入らない桶

を一つ大事さうに膝の上に乗せる。そして面長な肉づきの宜い——大阪女の型の顔を洗ひはじめる。

むつちりふくらんだ乳の邊を洗ふ時、サフアイアの指輪がきらりとする。まるくした腕をてすり乍ら隣の人を見る。その隣の人をも見る。髪の研究、顔の觀察。一人づゝやつて、一巡した頃には御寮人さんももう磨き方は濟んでしまつた。丁寧にくせを直して、口を枉げて鬢を梳く。眉を擧げて前髪をとく。かくて下



髪の所謂粋な新蝶々が美しく整へられたのだ。

湯氣が懸つてともするとぼうつとなる小さな鏡に向つて白粉をつけやうとすると光線が後から來るので「きらひやの」と呟いて鏡を眺めたら、鏡の中にてつち向いてる顔があるので、あはてゝ何げない顔をした

半時間の後、雨絣が絞りに代つて青磁色の帯しめたその人は、夫と二人で涼みに出かけやうと店に立つて蒼白い瓦斯の光りを見上げた眼はぞ

つとするほど凄かつた。

「義太夫に行かうか」と風采の甚だあがらない夫は云ふ。

「見にかいな、聽きにかいな」。女は笑つた。

車が二臺並んでは通れまいと思はれるせまい町には床几に涼む人が多い。腰巻して綱しやつきた男と、甚兵衛さん着た男と、將棋盤をはさんで、かちかちやつてる。淡化粧の顔を並べて娘たちが通る人、通る人の缺點を探してる。

冴えた地唄の三味がきこえると。

「散財に行きなはらんか」とちよいと氣を引いてみる。

「さいな」

と男もわざと宜いやうに云つたが、そろばん珠はじくやうに瞼をばちばちさせて、しな造つた女の横顔をみる。

橋に來る、みち潮時なので、あふれさうな河水に、ふとい材木がつながつたまんま、ぶくぶく浮いてゐる

「えゝ風やなあ」

窓といへば小さく、塀といへば高く造られた大阪風の家に住む人は、あのさえぎるものゝない川の上をゆつたり吹いて來る涼しい風がなつかしいのだ。

「東京は夜分ずッと冷えますさうなやけんど、大阪かてないに涼しうおまんな」

△若い女の心

大阪の女はあをッぽい色が好きだ。

御覧なさい。かの女の髪の翡翠の珠、納戸色の多い浴衣と青磁色の帯、藍と白の横段の引き摺りの鼻緒、それから着て寝る蒲團の裏の萌黄。

又柄は複雑なのが好きだ、縞ならたてよこ縞、模様なら小さい模様と大きい模様を重ねたの、そのしつこい模様の流行に反抗して、この頃では淡白な墨書や、一色ものも烏渡喜ばれます。流行の魁はやつぱり藝妓で――と云つたら怒られるかもしれないから土地風に「藝妓はん」と呼びませう。その稱には輕侮の念などつゆなくて、反つて羨望的の尊稱らしい。従つてその

勢力は大したもので、客に對してもつん〳〵してゐてどつちが客だか分明ない位ださうです。藝妓はんは、たいがい役者はんが好きですから、若い女たちも、それにかぶれて、芝居をする役者はんが好きです。

趣味が低いからだ。とか仰有つて此頃はだん〳〵近郷近縣の名所ゆきがはやり出しました。こんな、技巧化した大阪人にも、やつぱし自然性はあるものだと見えますね。

路を通ると女子が玩具の小間物店や紙店をかざつて遊んでゐる。小さなうちから見まね、き〻まね、大阪の女の商賣氣のあるのは最もです。利己心のつよいのも、人に對してかけ引の多いのも事實です、大阪の女は善い女たるより、むしろ賢い女たらんが理想でせう。



男を知らぬ十五の女が私をつかまいて、『あんたはんのやうな年頃にならはるとな、皆な男はんに會に行かはりまつせ』といふ。大の恐がりで戸をしめてあつたらひとりで二階にあがれない。昨日三階で五錢おとしたやうだといふと、『あつたら、わてのだつせ』とかけ上る。

大阪には全くはしが多いのね。

何のはしはおほい事おまものか。たつた五つしかおません。え。

あとは皆(ばし)だすがな。

將來の大阪婦人

山頭火

▲大阪ではつさいと云ふのは、東京のおてんばと同じ意味である、はつさいは發才であらう、才はぢけたと同じではあるまいか。

▲大阪の婦人は、着物を溜る爲に生きてゐる、尤も女と云へば何處の女でも、着物を生命のやうにしてゐるが、殊に大阪邊の女は烈しい、着る爲といふよりは、簟笥の中へ收つて置くためだから、着物に對しても氣の毒なやうである、まさかの時にひけを取らぬ爲だと云ふが、物質的に云へば好い心掛だらう。

▲類型があつて、個性がないと云ふことも、誰でも云ふ個性は全然無いのではなからうが、發揮する動機が乏しいのであらう。

▲大阪の孃さん達は未だ〳〵天下泰平の夢を見てゐるのが多からう、周圍の刺戟がいつかは泰平の夢から覺ますであらうが、物質的の刺戟が烈しいから、何うしても此點から自覺を促がされることになる、あまり遠い未來のことでもなからう。

▲大阪—對—東京と云ふことは、いろんなことに問題になるが、思想上のことの比較にならぬのは云ふまでもない、その見地から直ちに大阪を罵倒するのは間違つてゐる。

▲大阪には大阪の獨立した都會的情調がある、粋とか優美とか、温雅とか云ふやうな形容詞の附く美人は大阪に多い、感じが柔かい、東京では然う云ふのが段々無くなりつゝある。

▲大阪には純日本の型が殘つてゐるから、藝術的に見る大阪の婦人には或る價値を持つてゐる、理窟で惡く云へば、いくらでも惡く云へるが、必ずしも之れ大阪の婦人を知る所以でなからう。

▲山村の舞と云ふものは京阪人の誇として宜いものであらう、大阪の方では、それほど珍重しないが、正に珍重すべきものであらう。

▲將來の大阪の婦人を今少し自由にし、解放し、其都會性を發揮させたら、よほど怜悧な都會婦人が現れるであらう、理窟は云へなくても手腕のある婦人が出るかもしれぬ、大阪の歷史と、大阪の土地は、將來實世間の人として、相當にえらい女性を生まなければならないやうに思ふ。



蘆河畔の町

河井醉茗

甲府へ出るには桃林橋が落ちて了つて交通は杜絶してゐる、鰍澤の方へ行くにも笛吹川が氾濫して水深家の軒に達してゐる、恰度洪水に圍まれた形になつて、今夜も亦此蘆河の畔の市川大門町に泊らなければならない事になつた。

昨夜の事を思ふと何うなるかと思つた、延長七里半と云ふ蘆河の水源、女坂峠の木の葉の雫、崖の奔湍抑も河の發端から溪流に沿つて降りて來た、其途中も暴雨と出水に惱まされ、殆ど全身水浸しになつて、辛うじて山を出て了ひ、此市川町に着いた時はホツト蘇生つた思ひがした。

日は暮れても雨は瀑布のやうに降つてゐる、警察署の表には出水の虞ありと云ふ掲示が出てゐる、出水に馴れてゐる町の人は、さほど驚いた顔もしてゐないが流石に吾等の泊つた宿屋には旅宿人が少かつた。十時過ぎ睡眠に就くと、果然、出水の警戒を告ぐる早鐘の響が殷々と枕頭にひゞく。

一しきり撞き止むと、又烈しく撞き出す、休む度に撞く人が代ると見えて、強く底力のある響と、早くせきてむやうな響と、如何にも水が刻々増して來るやうに思はれる、鐘の音が休むと雨の音、ザアーザアーと雨戸や木立を打つ、風が少し出たやうで、雨は其爲に小降りになつたらしい、遠くでゴー、ゴーと蘆河の奔流の凄じく流れて行く響が聞える、早鐘の音も、雨の音も止むと、ゴー、ゴー、ゴーウと河流の響が大洪水のやうに聞える、雨戸に近く蟋蟀が只一つ啼き出した

あゝ靜かになつた、寢やうかなと思ふと又早鐘を撞き出した。

流石に旅疲れもあるので、不安ながら夢も見ずに熟睡に陷つた。

朝、眼の覺めた時には空には一つの雲も止めてゐない、山近い所ではあり、雨の後でもあり、宛然東京の十月頃の秋晴の朝のやうで、涼しさに心持が一變して了つた。

出水を見に行つたり、町の湯に入つたり、晝寐をしたりして終日を過した、船で降らうと思つた富士川へ危うく家ごと流されやうとしたのが、幸ひ此晴天になつたので助かつたのだと思つたけれども、歸ることも出來ねば、行くことも出來ぬ、遊んでゐるより仕方がない。

日は南アルプス連嶺の彼方に落ちて、山國的に變化の早い暮雲は、幾度も形態と、色彩を變へた、而して雲は悉く山の根に歸つた、山は黑く夜の色になつた、私は、私の友人の涙之助君と一緒に蝙蝠の飛ぶ町の中を歩いてみた。

氣が附くと月が昇つてゐる、月の昇つて來た山は何と云ふ名か、餘り町に近いので、町の人は名を知らない、此邊では月が山を離れても高くは昇らぬ、山の上を横に行くやうに思はれた。

此町は紙が名產だと云ふけれど、町には物商ふ家が多い、此附近の村人に取つては唯一の都會であらう、旅の人と云つては蘆川の水力電氣に雇はれてゐる技手とか、工夫ぐらゐなもので、歩いてゐる人は皆此町の人か近くの村の人である。

此邊では今が盆である、盆といふと村の男や、町の女が新しい履物の一足も買ひ、衣服の一枚も新調して仕事を休む樂しい時期である、物賣る店の美しく飾つてあるのは尤もだ。

二三日前、中央東線の汽車で甲州路に入ると、山の中の淋しい村にも、七夕の竹が立つてゐた、五色の短冊や色紙が青い大きな笹に結び附けられて、家の表に立てゝあつた、表を流れてゐる山の水に小さな水車を

仕掛けてある家や、大きな水車の廻つてゐる納屋庫の傍などに、七夕竹の立つてゐるのを見て、私は山の中の初秋を思つた。

旅する間に七夕は過ぎた、此町では盆が來た、秋の初めの心持を冴えた月が語つてゐる私等は町を出外れて、蘆河橋の上に立つた。橋は長さ三十間許りの木橋である、此橋は昨日の水に流れなかつた平素は大部分河原であらうと思ふが、溪流のならいで、一日の晴天ですつと水は減いたとは云ふもの丶、まだ川幅一ぱい



にザアー、ザアーと奔流の勢は凄まじい、川上の方は高い暗色な山に塞がつて、月は其上に動いてゐる、雲が早いのだ。

橋上の欄干に凭れてゐると、涼しすぎて寒いくらゐだ、今、私は凡てから放たれて、只、早い水の音と、山の上の月影とに、私の心を持つて行かれる、旅は好い、こんなに私の心が輕く空しくなつたことはない、然うして斯んなに親しく山の影や水の音と道連になつたことはない、私は町に泊つてゐることも忘れて了つた。

先刻から暗い町の通りに、チラ、ホラと紅提灯を持つてゐる子供を、何の氣なしに見てゐたが、彼方に一團、此方に一群と紅い色彩つた提灯を持つてゐる女の子が、澤山に出て來た、橋の上を彼方此方と渡つて行く、私等も其子供等と一しよに渡つた、何處かへお參りでもするのかと思つたら然うでもない、只、お盆だからと云ふので、子供が紅提灯を點火て、町の中を步いて行くのであつた。

秋冷の、稍はだ寒を覺える蘆河の畔の町に、紅提灯を點火て步くのは、如何にも好い感じであつた、私は其邊にあつた日用品何でも賣る店に立寄つて、早速一つの紅提灯を買つた、浪之助君は一袋の菓子を買つた

浪之助君は紅提灯を點火て步いてゐる子に、一人一人袋の中の菓子を遣つた、僅の間に菓子は無くなつた子供等は不思議さうに吾等を見た、大人だつて紅提灯を提げてゐる者は一人もないから怪訝の眼を以て迎へた、吾等は何等も關はない、只面白いと思つて紅提灯をぶら〳〵させながら步いた。

宿の女は、市川男に甲府女と云つて、甲府には別嬪さんが多いが、市川には女よりも、好男子が多いのですと云つて聞かせてくれた、私は此邊の男子が特別に好いとも思へないが、只聯想から所謂俠客などの居さうな地だとは思つた、成程美しい女の居ないことは事實らしいが、浪之助君は今朝或る家に現代式のハイカラを見たが確に美しかつたと云ふ一つの反證を提供した、そりや一人位はあるだらう。

私は、美しい女の子が居たら紅提灯を遣らうと思つて、子供の群を見ながら步いたが、何れを見ても山家育ち、近く寄つて見ると色の黑い汚い子供が多かつた

冷然と身體に置く露を感ずるやうになつた、月は高くも昇らないが、だいぶ山の方角が變つた、未だ更けたといふほどでもないのに、小さな町は早く淋しくなつた、紅提灯を提げた子供も何時の間にか居なくなつた、吾等は此さき永い旅をするやうに思ひながら宿へ歸つて來た、私の持つてゐた紅提灯は女中へのお土産になつた。

海拔一萬二千尺

寺田よし子



▲女で富士山に登れないやうな女は、家庭の人となつても健康を疑はれる、富士登山を無事に爲し遂げたら健康の保險を付けても可い、世の中へ出ても活動の出來ることは保證いたしますと、氣焰は揚げるもの丶其實少々は苦しかつた。

▲偖て登山は吉田口からして、淺間神社の大鳥居前で一行七人の紀念撮影をした、女は野口春子さんと私と二人、男子は土屋詮教氏に寫眞屋さんに其他三人、生れて初めて馬に乘つた、絲經を背に負ひ、菅笠を冠つた姿は、女の案山子のやうでをかしい。午前五時半に出發した。

▲六合目からは熔岩の上を登つて行く、落葉松、其他の灌木や雜草が斑らに生えてゐる、山も齡を取ると禿るのであらう、八合目に着いたのは夕方の五時であつた、そんなに疲れたとは思はない。

▲暮れゆく富士の神々しさ、宵の明星は彼方に輝き、天空蒼茫として心は果てなき空に通ふ、人生の雜念は一切山の下に置き忘れて來た。たゞ靜寂、たゞ崇高、狹い天地にばかり生きてゐる女の身も、偶には海拔一萬尺の上に立つて、廣大無邊の空を俯仰するのは、胸が開けて何んなに心が大きくなることでせう。

▲八合目の岩室に宿る、廣い岩室に人が一ぱい寢てゐる、皆晝の疲れに熟睡してゐる。流石に私共は眠れない、岩室の一方の隅に寢たけれど寢返りさへ出來ぬ苦しさ、煤けたランプが今にも消えさうに明滅してゐる時計を見ると十一時、折々骨の髓にまで泌み入るやうな冷たい風が頸首を撫でる、萬感雲の如く往來して、山上の夢は結ばれなかつた。

▲黎明の空は未だ暗いけれど、身支度して室を出た、時は四時に近かつた、八合目と九合目との間、海拔三

千五百米突の標ある傍の岩に腰かけて、御來迎（日出）を見た、温度は華氏の四十二度、風なく、雨なく一天清澄にして荒れ易き富士にしては珍らしい快晴であつた。

▲富士山上の日の出、凡そ自然の美觀の中で、此れくらゐ壯嚴な美觀はなからう、月は西に薄れて、東の空漸く微紅を含み、刻一刻と雲は濃淡の色彩に染め出され、雲の變化の迅速なる、形はみる〳〵變じ、色はみる〳〵濃く、曙光、天の一半に擴がれば、忽ち朱の如き紅の一線、雲を貫いて空を射る。紅燃ゆる櫛の如き太陽の一片の遙に浮び出づると見る間に、忽ち半球となり、大圓となり、光芒四射、團々として空に上つた時、私は何事か大きな聲で叫びたかつた。

▲六時四十分、九合目に着く、雲切神社の神官は私共の爲に諸々の罪を清め給へ、拂ひ給ひと祈つた、今は昔と違ひ女人禁制のお山は天下に無い、何故昔は六根清淨の境に婦人を入れなかつたであらう、私共の穢と罪は斯かる壯嚴偉大なる天然の洗禮を受けてこそ、清く美しく洗はるゝのではなからうか。

▲頂上に達したのは正に七時十分、私共は今本土の最も高い地に立つてゐる、雲は下に流れ、悠々として行き、團々として聚る、私はあの雲に乘つて何處へでも行きたいと思つた。

▲一休みしてお鉢廻りをした、淺間神社に詣でゝ我が名を石に刻した、銀明水、金明水を口に入れた時、胸まで冷たくなつた。

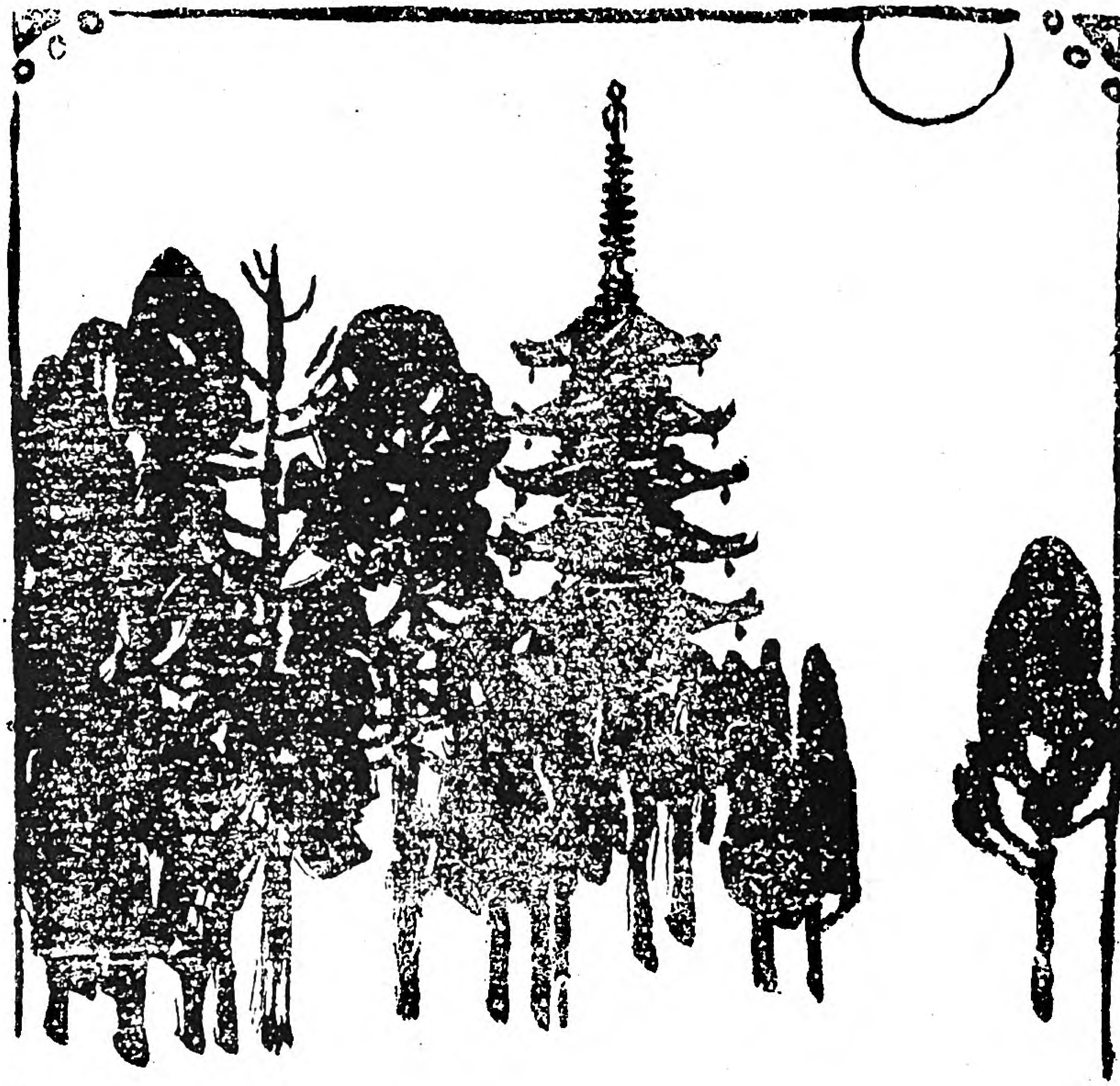
▲銀明水、金明水を點耳して、ぢッと耳を澄ますと聞きたいと思ふなつかしい人の聲が聞えて來るさうだ。私には誰の聲が聞えて來るでせう、私は斯んな無邪氣な迷信も面白いと思つた。

▲下山は須走口からした、一瀉千里の間に草鞋を三足草履を二足破つて了つて、轉がつたことが二度、其爲に兩膝を擦り剝いた。

▲午後二時半、須走へ着、御殿場まで鐵道馬車を買切つて、馬を急がせた、裾野は秋草の盛りである。あゝ平和なる野よ、原よ、富士の裾野の緩やかな傾斜は、登山者の爲に唯一の慰藉である。

▲御殿場に着いたのは四時五十分、ふりかへれば富士は巍然として雲表に頂を表はしてゐる、あゝ彼の雲の上まで登つて來たのだとホッと息を吐いた。身體は疲れたけれど此心持は何うして忘れやう、六根清淨！

繪の東京（六）谷中の塔　荒井寛方



何處から來たともなく
何處へ去ぬともなく、
月の重く濡れた光が
默つて其處に淀んでゐた。
風に痛められた街端の
屋根が疎らに見えて、
濕きつた土の底からは
幽かな何者かの聲がしてゐた。

胡夷

月の夜語　坂東太郎

●昨年廢せられてサロニカに晩年を送れる土耳其皇帝は四百人の皇妃を持つてゐたが、如何なる人も皇妃に謁することは許されなかつた。謁を乞ふ者あれば、それはサルタンを侮辱するのだと思はれてゐた▲宮城縣七北田某の妻、茶摘の歸りに蛇に追はれ色を變じて逃げたが、其夜、蛇の閨に入來たると夢見て氣絕した、それから姙娠したらしい覺えあるので、加持だの祈禱だのといふ錢をとられた。恐怖の結果ふと月が狂つたのである●エスキモーと日本人は種が同じだとよく書かれたがエスキモーの女の歩きぶりは全く日本人と同じ内輪であるけれど、男子と女子の容貌に著しき區別無く、喧嘩など一切しないとあるから、露西亞に勝つた吾人は少し違ふようだ。▲今年三つになる子に小便をするとおちんこを切りますよと口癖のやうにいふ母があつた其留守に七つになる兄の子が弟のそゝうしたのを捕へて、鋏で切つてしまつた、そこへ母が歸つて來て怒りに任せて兄の子のも切つた、二人共死んだ、信濃羽根村の事▲馬のしつぽの毛を引拔いて青大將を縛り、竹の先へつけてふり廻す腕白があつた、十四になる女の兒が通りかゝつたのでほら〳〵と叫びながら其胸へ蛇を投げつけたら、毛が切れてする〳〵と胸から辷つて足へ卷きついた、女の兒は氣狂ひのやうになつてかなぐり棄てたけれど、家へ歸つてから發熱し蛇のことを言ひ〳〵死んでしまつた、青森の片はづれ泉館の事である●今の女は、其虛榮心を傷けられた時でなければ、滅多に顏を赤くしない「盃となれば流石に泣いてゐず」どころか、嫁入の門出に涙をこぼしたのは千年も前のはなしで、三馬すら「悅氣鼻の先に現はれて籠に乘るのを待遠しがる」と罵つた。少し法外だけれど、ヴィアンエーと呼ぶ佛の耻かしがりの高僧は八十になるまで若い女にあへば必赤面した。ブレパント料理店の一給仕人は、女の客となるといつも面喰つて、或時はレデーの頭へスープをぶちまけたことさへあつた▲夜中登校を女生に命じた先生がある。身體檢査にかこつけて一人一人女生の乳をさぐつた先生がある、

足を椅子の兩脚にからめて終に動く能はざらしめた先生がある。課外教授と名けて得々として「生理」を説き、首を擧ぐる者なきに至つて止めた先生がある。「和歌山に五百二羅漢有り」とうたはれた先生がある。さきに自殺した宮本きみ子の悲劇の一半は矢はり下妻高等小學校教員の作るところであつた●奢侈を極めて亡國の因を作りし前の葡國皇太后、『醜男子は女子を樂ませ得るか』といへる問を發して、諸國皇后の囘答を求めたことがある「然り、美男子に近づき得ざる時は、醜男子を厭はざる女子ありと信ず。露國皇后」。「十五歳より三十歳頃迄の女子は美男子を好み、五十歳以上の女子は男子の容貌を意に介せず、伊國皇后」。醜男子と雖女子の愛を受るもの多し、只容貌の美なるのみにては美男子と雖女子の愛を得る能はず、バッテンベルグ王后。」皇太后は曰ふ「性質純良なる者は女子と男子とに論なく兩性の愛を受るに足る。最も賤劣なる男子は自美貌におごりて女子を侮蔑するものなり」たゞそれ信ずるなり、理想なり、實行に至つては、われあづかり知らんや。「○○親王さまはおでこだから嫌だ」と言つた姫君もおはしますし、國教を捨て、あまんじて改宗したる現西班牙皇后ピアニストと奔りたる獨逸大公妃もおはす▲高仲菊子といふ女は「東海林」といふ姓の人を珍らしさうに書いたが、一寸八分、大佛、形部、鹿伏兎、薬袋、束稲、吾孫子、兕上奇、言語道斷、釋迦無二佛、皐朶など、早く『中央公論』で見たことがある●アフリカ、ニゼリアには、今だに奴隷の賣買が行はれて、大人の女は二磅、二十歳前後の女は五磅、十四歳より十七歳位の女は九磅十志、『帝國評論』に見えた、日本の女よりは高いか安いか、乞ふこれを帶代を貰つて嫁に行く女に聞け●印度バベールに子を携へて野良にゐた女、不意に蝗群に襲はれて單身逃げたが、暫くして行つて見たら、子は喰はれて骨ばかり殘つてゐた、蝗は稻を喰ふ小蟲である▲大分縣臼杵に三年越懸想していひよるけれど、女がウンといはないので、中人を頼んだら承知した、で十五錢がとこの燒餅を土産に買つて女の家へ行つた、女は茶をいれて餅を平げたが、ついと立つて隣へ行つて了つた、男は訴へ出た「被告(女)は原告の私とねんごろにならねばならぬと思ひますと」の申立てゐる。土産が惡かつたのだらう●グリーランド土民の女子は一着二萬圓もする毬を有つてゐる、銀狐の皮など一枚も日本へは來てゐまい▲丹波龜岡に晝の内美しき女の有る家を見てお

いて、夜其寝顔を見に忍び入る男があつて、家宅侵入罪に問はるゝことすでに十四回●米國教育局にて千五百萬人の兒童に就きて彼等の恐怖するものを調べた、最も恐るゝは雷鳴、次は蛇、次に見なれぬ人、暗黒、火事、死、疾病、野獸、水、蟲、怪物、又同一數の男兒女兒につきて恐怖する物の數を比べると、女は千七百六十五、男は千百〇六、女子の鼠を恐るゝもの七十五人に對し、男子は十三人、雷鳴、蛇、盗賊を恐るゝことはいづれも年と共に増加す。怪物を恐るゝは他の兒童の談話、繪畫より來ること多く、父母の話より得たるは百分の一に過ぎなかつた▲神戸山川某の妻、縫針一本を室にのこしおき夫に注意されたのを氣にかけて自殺した、同じ地に亡夫を慕ひて、發狂し夢野の墓地に迷ひ行きて夫の棺を掘り出し、其中に入りて咽を突いた女がある、仲士の妻だ、同穴の契何ぞ美しきといひたい▲三十年間男子の生活を續けて妻をももち巡査と喧嘩したこともある女、死後はじめて其性を明らかにされた、臺灣には十七年間女裝したのがあり、名古屋某座の新俳優木村某も、かつて女裝して結婚したことさへあるといつてるが、何をいふかアテになつたことではない▲島根縣都賀村通信「本村は風俗淫猥と世間の評判なれど、私通にて妊娠するものばかりで墮胎などはない」或新聞に曰く「磐手艦は長さ十三萬千九百十九米突、幅二萬三千百九十米突」『福岡日日』の廣告所見「親の口よりは申がたく候が、僕の次男は實に無類の一大美少年に候、聟にお望みの方には無代價にて進呈す、見本御入用のお方は郵券三錢御送附次第寫眞一葉を贈る」『信濃毎日』に出た廣告も振つてゐる、「私事男狂ひ致すやう申觸らす者御座候へども私はまだ嫁入前に候、嫁入前の娘が男狂ひする筈はこれなく候」●パーミンガムに怠け者があつた、自分で髯を剃るのはいやなり、床屋へ行くのもめんだうだといふので、細君に剃らしては顋をなでゝ友人に誇つてゐた、ある時細君は例によつて顋の髯をあたつてゐたが、剃刀の手を休めて顫ひ聲してさも決心したやうな顔で、「此間の着物は買て下さるでせうね、」驚いたのは亭主だ、馬鹿言へのバを言へば、ツブリよ、來るに極つてゐるので、たうとうウンと言つた▲山梨縣知事武田千代三郎氏、秋田に居つた時、氏の夫人愛子を入學させた小學校の先生を呼びつけてのたまはく「秋田の兒童は風儀が惡いから一所に遊ばしておくれでないよ」

― 此次は秋の夜話で話はまだ〳〵つきない

荷葉にうたひふねにのり

花つみのする夏の夢

内藤千代子

三ツ組にした髪のしつぽをつよく引ばられて眼がさめた。登志さんクス〳〵笑ひながら「濱へ行きませうよ、從姉樣、來たてにばかり早起したつてこの頃はどうしたのよ、だん〳〵この比例で進んでいつたら歸京時分には一日寢て了ふのね「馬鹿にしてるわ。エヽいま起きてよ、……朝つぱらから安眠防害だわ、貴女ゆふべころげて人をけとばしてちつとも寢かさなかつたもんだから……」

ねむい眼をこすり〳〵枕元にちらばつてるピンや前櫛を探しあてゝ、髪をとめながら蚊帳を出る。

薄紫の朝雲たなびいて、江の島のあたりは夢のやう、靜かなる朝のさまよ。

蓮池の方ではら〳〵と露のこぼれる音がする。

「濱へ行かなくつて、從姉樣」

「エヽ〳〵」

お揃ひの華手な牡丹の浴衣に、帶も緋縮子の七寸巾を小さく結んで、つれ立つて庭先の枝折戸から出た。薄紅の可愛い龍田がたくさん咲いてゐる、玉のやうな道芝の露ふみわけて

みよしのゝ花の香や、
　住の江の松の風
その風がそよふきて
　その花が今日かほる
春しもぞ白雪や
　消えなくに出でゝ見よ

はすのはなぶね
　さをとめて
なにをながむる
　そのすがた
なみしづかなる
　はなかげに
きみのかたちの
　うつるかな
きみのかたちと
　蓮つばなと
いづれうるはし
　いづれやさしき

見つゝこゝ八千種の　一もとは花いかに
うれしくも樂の音や　十六夜の宵の灯に

　登志さんは透き通るやうに好い聲だが惜むらくは少しふるへる。前髮こそ出してゐるけれど十八にもなつて、それも私より背の高い人が、いつまでお下げで通すつもりだらう、三ッにあんだでく先を一寸眞紅なリボンで止めたのがたまらなくハイカラで好い。

　オレンヂ色の光りを浴びて、まばゆいやうに輝く金波銀波、打つよく白砂青松、富士の裾にもパッと薄く朝日が映じた。

　老も若きも男も女も三々伍々さまよふ中にまぢつて二人はぶら〳〵一まはりして、うちに歸つたのは蟬時雨ふるやうな七時過ぎ。

「乳母、お腹が空いちやつた」

「ばアやすぐ御飯にしてね……」

井戸ばたで砂まみれの足を洗ひながらわめく。

　滅多にお叱言も有仰らぬけれど、あまりお行儀が正しく物がたいので何よりけぶつたい伯母樣が、昨日一寸御歸京なすつたので、登志さんも大よろこび、御飯後はいつも二時間の復習だけれど、けふはどうでせう二人ともうちは片手に長くなつて、くすぐりつこしたり背中を打ち合つたり、大きな聲を立てゝ笑ふ。

　お隣家の二階からまた手風琴で「己が姿を花とみて……」が始まつた、毎日〳〵根よくくり返すことつてそれが十八ばかりの中學生なのだからあきれて了ふ。

　十時のお茶に藤村の羊羹の折を開けたから、露のたれさうなそれを厚切にして玻璃器の菓子鉢に入れ、二人して兄樣達のとこへおしかけて行く。

　はじめは此家に伯母樣と登志さん達兄妹でゐらしつたのですけれど、私と兄樣とやつて來てから、兄樣と武兄樣は山川樣のお離れへあづけられて了つたの、いゝ氣味よ、だつて私達をいぢめてばかりゐるんですもの　でもお二人は高等文官試驗を受ける御準備なので、ウッカリ行つてさわぐと叱られるのよ。

　お庭口からお椽の方へまはつてみると、六疊を二間通したお書齋に、うちの兄樣は居ないで、登志さんの兄樣と大野さんが夢中になつて腕相撲をして。

「今日はア」

「兄樣ア」

　いくら二人でクス〳〵笑ひながらどなつてもきこえない、登志さんふりむいて、あの美しい眼に物云はせ

て、手早くその蚊帳の釣手を外して兄樣の黑メリンスの帶へつないで、はじを柱にくゝしつけて知らァん顏。

「兄樣ッ」

更に耳もとでどなるとびつくりしたお顏上げて、

「あゝまあ來たか」

だつて、ずゐ分だわ、きのふも伯母樣にあれほど二人をたのみます〳〵つてくれ〴〵云はれて、やれ女のお守は厄介だの、こんなベソ子孃はね子姬の監督は出來ないのつて散々恩に着せて引うけながら、一度も見舞ても下さらないで、また來たかですと。

「おめづらしくはありませんけれど少しお裾分を、」袂のかげから羊羹を取り出すと、

「御馳走さまだね、ま、上つて遊んでお出で！」

現金な方だこと、大野さんは私の顏をみて「御無禮！」つて高いお辭儀、登志さん他方むいてすまして、腰かけた足をぶら〳〵させながら唱歌歌つてる。私はまじめになつて



「兄樣、すみませんけれど新らしい帝國文學おあきになつてましたら拜借な、ちよつと、」

「よし」

いきほひよくお立ちになつたとたん、きつく後にひかれてよろめいて、ふり返つて御覽になつた。ワアつて登志さんはにげ出して了つた。私も一緒になつて飛び出して來た。

おひるには乳母に手傳つてせまい臺所での大立ちまはり、二人ともレースでかざつた料理前掛胸からかけて、後は十文字に袖をからげて、凜々しいいでたちであるが、小鯵を三枚に下ろすつてキヤア〳〵云つても、ちつとも庖丁が切れないで、これぢや皮むきだつて笑つて了ふ。

食卓にならべられたのは、眞黑こげのしほ燒きや、酢のきゝ過ぎた胡瓜もみでも黑燒は癪の藥だの、酢をのめば骨がやわらかくなるのつてやますに口きゝながらみんな平げて了つた。

長椅子に凭つて女學世界を見てると、登志さんはヴアイオリンをかつぎ出してキユー〳〵やり始めた。二時頃からまた濱へ出かける、經木の海水帽まぶかに、草いきれの中を走りぬけて……。

立ちならんだ海水茶屋、見渡せば渚には數しれぬ人出、黑色水色時色の水泳服、黑白だんだら龜甲形のメリヤス水着、赤銅色の自然服、ブイにからんでジヤブジヤブやつてる女や、板子かゝへて浪乘りの令孃、深碧の空高く晴れて、パツとくだける浪がしら。

うちの兄樣達も來てゐらつしやるかしらと探したがどうしても見當らぬ樣だ。さう〳〵きのふ私のとこへ舞ひこんだ何だか妙なハガキ『生は貴女の文中に時々引張り出された者の友人です、目下當地に滯在してゐますが失禮と存じてお訪ねもいたしません、毎日眞黑になつて濱で泳いでゐるのがそれで御座います』だつて、みんな同じやうな人ばかりで、どれがどれだかわかるものですか、正眞正銘の印度人は黑の下帶してる強力で、足のうらと笑ふとき剝き出す齒と眼の白いとこばかり目だつて化物の樣だ。

濱で名代のゆで小豆、うちの兄樣はね、お一人で九杯召し上つたんですつて、私が「まあ」つてあきれたらもつと食いたかつたんだけれど、もうお錢がなかつたからよして來たんだつて、ホヽヽヽ。掛行燈に『××名物、一杯三錢』と薄い紅筆のあと。

花でざしいた緣臺を二人で占領してたのに、登志さ

んの方へならんで腰を下したのは、早稲田の徽章つけた夏帽子かぶつて、皇太子式の口髭美しき白飛白の人羽二重の兵兒帶なんかしめてよく××館のあたりで見かける人で、なれ／＼しい笑顔をみせて、何か云ひかけさうに見えたので、登志さんの袖を引ぱつてふいと立ち上つたら、痛快、ばたんとはね上つて、まさかころげ落ちはしなかつたけれど、アッと兩手をもがくやうにのばしたていさいと云つたらなかつた。歸途に東家の前を通つたら、二階の椽に芳子樣が立つて手招ぎしてゐた、早速はひつて行くと芳子樣も下の廊下まで出向へて、

「いまね、あなたのお兄樣がお隣りの室へ來てゐらつしやるのよ。面白いから……」

「うちの兄樣が、あらさう、どんなお方なの友達かしら。」

「やつぱり大學の方だわ、園池樣てね、眼鏡をかけた立派なお美しい方よ、」

「おや私の知らない方だわ、みつかると叱られるからしづかにしてませうね、」

廣い階段を上ると右の三番目が芳子樣のお室、小母樣は下階のお座敷へ話しに行つていらつしやるとかで見えなかつた。暑い／＼と兩人は汗でへばりついた後れ毛をかき上げつゝしきりに額に麻のハンケチあてゝるので、芳子樣はわらひながら、水のたら／＼たれるやうな水密桃をむいて下すつた。此室からは濱が一目でまだ盛んに黒坊主や印度美人が活動してゐる。隣室の兄樣はまもなく歸つて行つた。

そら、と欄に身をのり出して

「兄樣――ア」と呼んだり「百合子樣の兄樣ア」と手をふるやら、兩人が下らないまねをしたものだから、たうとうお隣室の方にみつかつて了つた。私が會釋すると默禮を返して笑つてゐらしつた、白飛白をみじかく召した背の高い後姿がよかつた。

「お百合さんの眼つきは素的だわネエ、」

「夢二式つて云ふんですもの、大きくて黒くつて二重まぶちで睫毛が長くつて、「この目、一度閃めかば、いかなる男子といへども、いかで參らざるを得んや……」

年下の二人に散々冷評かされてしまふ、でも私はこの頃こんな人達の相手になつてるのは、わづらはしくてなりませんの。

夕がたお風呂にはひる時、私が登志さんの足をふんで、思はず「痛い」つて云つたのでまた大笑ひした

長い袂に浴後の風を心地よくはらませて、夕飯の箸とつてるところへ、兄様方がお揃ひでねらしつた。武兄様は帝國文學を私の机の上において下すつた、先刻の事を思ひ出すとお氣の毒になつて了ふ。

散歩に行かないかつて仰有るので大よろこびでお供する。ステッキ打振り〳〵莨の煙薄紫に、その後から私たちは浴衣のもすそつゝましう取つてつゞく、烈烈たる天日は箱根山のかなたにかくれて、しづかな夕映の雲の色。

いつかまた海岸へ出た、ずゐ分知つた顔の人にも出合ふ、一々頭を下げるので首が痛くなつて了ふ。先刻の園池様でおつしやる方にも逢つた。江の島の灯が美しうまたゝき出す、夜は波の音が高くなる。

うちまで送つて下すつた兄様達を、水密桃のジエリーで引とめて、椽がはでいろ〳〵お話する。

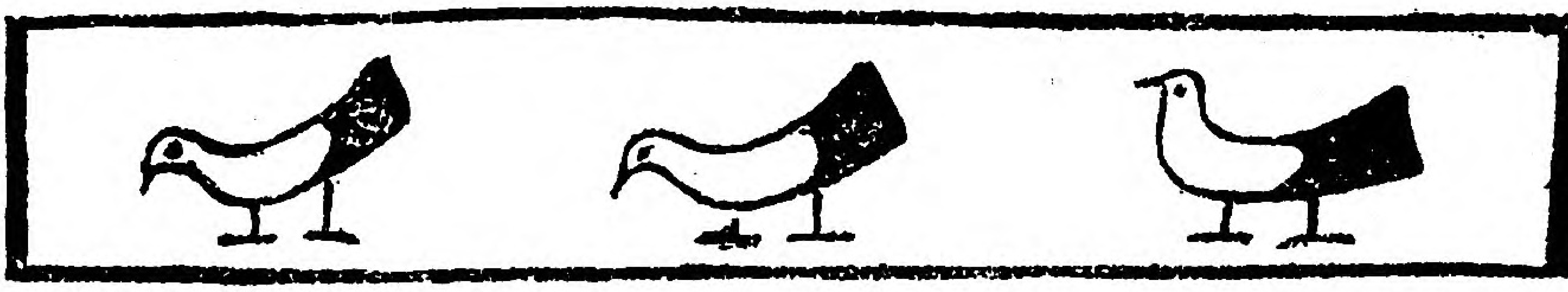
　二人してさす一張の
　傘に姿をつゝむとも
　情の雨のふりしきり
　　　　＊
かわく間もなきたもとかな

なんてガラにもない武兄様が口ずさむ。私も一しよになつて

　顔と顔とを打ちよせて
　あゆむとすればなつかしや
　梅花の油黒髪の
　亂れて匂ふ傘のうち

登志さんはうちの兄様つかまへて、明日伯母様のお迎へにみんなで停車場まで行く約束してしまつた、まあ駄目よ、兄様達はおみやげのお菓子が目的なんだから…………。

十一時を報つたのでお兩兄は口笛ふき乍らおかへり遊ばす、私等は蚊帳にもぐりこんだ。床の間にはほの白い百合の花がつよい香りをたゞよはせてゐる。月なき空の星のさゝやき…………。



花のくるしみ

章子

日を一日
花はくるしむ
くらき雨てふなきあめは
おしろいの花の口唇つよくふれ
紅の雫をしぼる

日を一日
花は形骸の夢になげけり
しわだめる昨の花のなきがら
冷やしつゝ、くらき雨、聲なき雨は
なやましく、
いま、あてやかに花はくるしむ――。

コスモス

軟らかに、いたはりてなづれば
みどり子のうつたふる如く
また風にふるへ心
悲しいこゝろに
たゞれし神經に
いたみが徹る樣に
ふるへなき

崖落際――
捨られびとの
小さいコスモス
その青いなげき
あゝそれは、けふを
世にさかり、やめる少女の
狂へるこゝろの涙しぼらせて
(軟らかい頬のしゝの顫へ)
みよ風は遠のいて
月が沈んだ心にさえかへり
天に啼かうとする
蟲のふるへでゐ
こよい僅にも伴侶ある
なげきの天地――。



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉

問　腋臭の療法と目の霰むのによい藥劑とを御教へ下さい（新潟、井戚）

答　腋臭の療劑として種々の處方ありますが、先づ腋窩の毛髮を拔き去り、上等の石鹸で能く局部を洗つた後、水楊酸四匁、龍腦精六匁、酒精二十匁、薔薇水十五匁の混合液を、毎日三回づゝ指先で塗擦なさい、目の霰むのゝ療法は、化粧問答の範圍外と認め、且つ私より豪らい專門醫が世間に澤山ありますから、御答は遠慮して置きます。

問　色の黑いのを少しでも直す方法はありますまいか此頃廣告に見えて居ります色白藥は効きますでせうか若し外に有効ものがありましたら何卒（なにがし女）

答　私の見聞し實驗した範圍では、この頃廣告されてある色白劑なるものに、一つとして有効なものあることを知りません。古來色白藥として堂上人や大奥に使用されたもので、塗身香といふのがあります。これは比較的奏効が早いと存じます。その調製法は、丁子二匁、甘松三匁、麝香二匁、白檀十匁、雷丸油四十匁、陶土二十匁、龍腦一匁を細末にして合せ、三日程經た後、火でヌル〳〵として煉り、紺布で漉し、風にあてて固めるのです。それは單に皮膚の色を白くするのみでなく、肌理こまかにし、腫物の發生を防ぎます。これは素「秘傳蓮記」といふ書の中に秘記されたもので容易く世人に知らさない方劑ですが、私は特に我愛する女子文壇好讀諸子のために秘藏寶鑰を開呈致します。（南國黑顏女）樣外六名の御方も、これを御覽下さい。

問　コールドクリームの原料と分量とを御教へ下さいまし（大分の女）

答　一樣でありません。美身劑としてのクリームの處方は、前號に屢々明示した筈ですが、茲には特に夏季用として最も適當なものを申上げませう。先づ安息香脂五匁、ワニラ精二匁と靈猫香二分とを細碎して、扁桃油十五匁、鯨蠟五匁、豚脂十匁と密和し、五十度乃至六十度の溫度で二十四時間放置し、沈渣するを待ちて、それを傾瀉して除去するのです。

問　たしかな瘦せる藥を發賣して居る所を御教へ願ひます。猶はヨード丁幾は實際効力あるものでせうか（釜山、はる子）

答　瘦藥の發賣所は、また聞いたとがありません。併しそんな藥を御服用にならんでも一切の食用品を廢して、牛肉のみを白湯で二十日間に三度御食しになるとキット瘦せます。但し食後必ず三十分間の運動をなさることを忘れてはいけませんヨード丁幾は何に効力あるかと御尋ねなさるのですか。

問　脂肪の澤山出ますには酒精を水に混じたもので洗面するとよいと聞きましたが實際でせうか、又吹出物の出るのに魚肉を常食としては害があるでせうか（土佐、困難女）

答　酒精混入液で洗面するは舊式の方法で、それを長く續けると、顏が赤味を帶びるやうになります。魚肉を食べるから吹出物するのではなく、吹出物する質の人が魚肉を嗜むものだと醫博士が申して居ります。

問　キセロールクリームを塗つた上に煉白粉を用ゐることは不可ませ

んか又このクリームを水に溶いて使っては効能が薄くなるでせうか（大阪一少女）

答　何れも差支ありません、但しその溶水は蒸餾水のやうな軟水でないと不可ません、最もよいのは橙花水で溶くのです。

問　一、縮毛を直すには、二、黒い手を白くするには、三、白粉の中で何が一番よいでうか、四、博文館發行の新式化粧法の定價、以上御敎へ願ひます（徳島、愛讀女）

答　一、根本的に直す方法は、今の所で見え出されてありません、若し、一時的のものなら、銀座尾張町明進堂荒川如水氏の發賣して居るヘーヤダムがよい。二、コールドクリームで摩擦なさい、三、煉白粉では薬の露おしろい、粉おしろいではキセロールプードルドリーと思ひます四、四十五錢です。

問　多毛性で困りますから、前號で御示し下さつたトルコルスマを塗布して脱毛致さうと思ひますが、如何なる方法に塗布すればよいのでせうか、使用法を（福岡、愛讀女）

答　脱毛すべき部分を先づ加里石鹸で洗つて、其上にトルコルスマを水でドロ〳〵にして、木匙で塗るのです。而して薬が乾燥くか、又は皮膚に灼熱を覺えるやうになつたら、直ぐと洗ひ落して、其後にラノリンのやうな無刺戟性の脂肪を塗り、猶その上に亞鉛華と滑石とを等分に合せた粉をふりかけて置くのです。最もトルコルスマは、通常五六間で奏効するものですから、その御心得で御塗けなさい。

問　七月の本欄で、多汗性にはオードトワレツトが、有効の由拜見致しましたが、それは何處で賣つて居りませうか（田舍一少女）

答　日本橋通三丁目丸善洋品店、両國米澤町紅屋等で賣つて居ります。御請求の節はキセコールオードトワレツトと仰しやらないといけません

問　藤波先生の御宅は只今牛込東五軒町に御引越し遊ばしたさうですが、その前には赤城下町に御住居なさつて居らしつたとのこと、その赤城下町の光雲堂と申す所から縮毛剃毛によい薬が發出され、それは先生が御調製になつて賣らして居なさるのだと聞きましたが本當でございますか

（本所、てる子）

答　東五軒町へは臨時に引越しましたので、只今ではもとの赤城下町に戻つて居ります。併し光雲堂とか申す家は、同町に居ながらまだ、私の目にも觸れず、無論その様な薬を調製して賣らしてなどは居りません、もし其様な噂があるとすれば、それは何か爲めにする處があつて、誰かが云ひふらして居るのでせう。

問　都新聞の「相談の相談」に折々化粧の問答が出て居りますが、聞けばそれを書いて居なさるのは、矢張り藤波先生とのことですが、全く左様でせうか（日本橋、たけ子）

答　それも前の「てる子」さんよりの御尋ねと同様、いい加減な浮説です。最も私は曾て都新聞に居つて、而もその「相談の相談」の擔任記者をやつて居つたことは事實ですけれど、主筆の田川君が東京市助役となられたと同時に私も退社して、今では何の關係もありません。

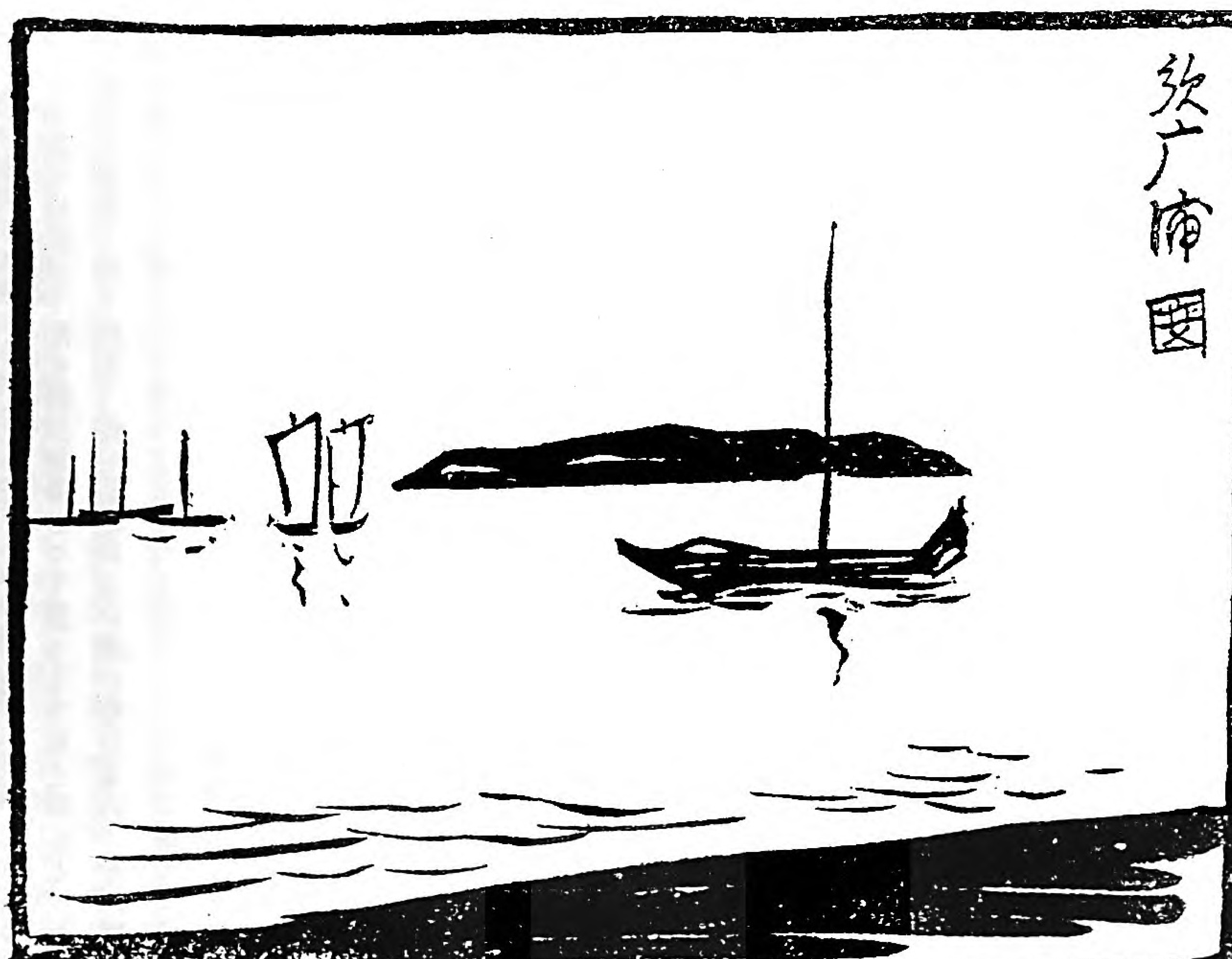
問　化粧問答の藤波先生と申す御方は御醫者でございますか、どんな御資格の御方でおらつしやいますか、御歳格好も合せて御敎へを（質問女）

問　藤波先生は貴公子風な非常なハイカラな御方でおらつしやいますつてね、お幾年位の御方でせう、もう御子様など御ありでせうか知ら（名古屋、花はしとい）

答　これはまた異る御尋ね、化粧の問答に、私の身分や戸籍の御調べとは少々恐れ入りました。私は醫者でもなければ何等誇るべき資格あ

る人間でもありません。只今自分が多大の興味をもつて化粧道の研究をして居るまでの者に過ぎないのです。明治九年初めて此世の光りを見て、今では人の子の父と呼ばれて居る、至つてバンカラの田舍漢でございやす。實は斯樣な御質問が、今までにも二三度ありましたが、本欄の問答とは何等の交渉なく且つ他の有用な御尋ねが澤山あつて、それすら載せ切れない程ですから、右樣の御尋ねには御答してなかつたのです。然るに月を加ふる每に質問者が多くなつて參りまして、今月から本欄を一頁殖やすことになりましたから、この場合を利用して、まげて御答致したのです。若し今後斯樣な御質問は直接私の宅の方へ下さるか、でもなければ本欄では「化粧問答」の題下に直接の因みあるもの丶外は御答せぬつもりです。こんな事に一々御答申上げて居つては他の多勢の方々の折角の御質問の邪魔となり迷惑となる譯と思ふからです。

序でに一寸申添へ置きたいのは、藤波は醫師かとの御質問です。成程近來糸左近君その他の御醫者樣方が衛生問答とかいふ題下で、ニキビがどうのソバカスが斯うのと云はる丶を御覽になつて、私も矢張り其邊の開業醫であるかのやうに思召さるは無理ならぬ所ですが、無論、宗敎家と倫理學者とは密接の關係あるが如く化粧家と醫學者とは關係して居ります。けれども倫理と宗敎とは、各個獨立の本領あつて存すると等しく、お醫者樣は、化粧のことを承知しては居らない筈ですその立脚の本領と、範圍を異にして居るからです、化粧道は醫學衛生の學術以外に獨立して居る立派な一のサイアンスです。少くとも私だけは爾か信じ爾か任じて、これが研究と實驗とに憂身をやつしつつあるのです。



若き男女の不注意

顔一面に吹出物

ポツ／＼のザラ／＼となる

男女十四五歳より卅歳位まで顔に小さき吹出物がして中に黒點ある之を爪で摘めば白い脂肪の固りが出る。恰も蟲の様である。これを俗にニキビといふ。これは面皰といふ一種の病氣で、男子百人あれば少くも四五十人はこのニキビが出るもの故、世間の人は之を療治し様とも思はず打捨て置くが、これは甚だしき心得ちがひである。もし不潔物が着いて口が塞がると豌豆大に赤く腫れ上つて痛みが劇しくなり、もし又運惡く局處に化膿黴菌が入つて膿を持つと嫌な臭氣を發して恰も癩病患者の様に汚くなる。長く治さずに捨て置くと慢性病となりて一生なほらず、時に自然と治る事があるが顔色が暗褐色に變つたり、色素斑が出來たりして終にポツ／＼のザラ／＼と柚子皮を擦る様になり人には嫌はれ良き結婚談も破れて一生の不幸の基となる。故に成るべく早く全治させる様にするがよい。然し世の中にニキビ取りの藥は少くないが、其多くは無効であり時に有効なれば劇藥を加へニキビは治つても顔は反へて汚くなるのもあるから注意せねばならぬ。

然るに維也納醫科大學の教授兼皮膚科醫長ドクトルカポジー先生は苦心研究の結果ニキビに最有効なる合劑を發見し之を皮膚科講本に發表せられた醫學界では之を先生の名を取りてカポジー氏軟膏といつて我國皮膚科專門病院でも盛に賞用してゐる。此藥は又ソバカスにも特効ある故多くの人を救ひたるのみならず顔につけてゐても人には知れぬ程の色と匂もなく且其効能に著しい。殊に顔の色を黒くせぬ許りか幾分か美しくする副作用があつて見惡い痕跡を殘す心配など決してない故にニキビの藥としては是以上に良いのは恐らく世にないのである。輕症用五拾錢、重症用一圓五拾錢送料各八錢、東京神田錦町三ノ二、高柳藥房へ代金を添へて注文すると送藥する。此藥あつて始めて青少年諸君は天性の美を發揮し得る事であらう。

石鹸一個の代金を節して本書を熟讀實行せば最幸福なる根本的の美人たるを得べきなり

最新美人法

一冊送料共 金廿七錢
振替送金は 金廿九錢
切手代用は三錢を十枚

本書は醫學上藥學上の學理實際と幾多令孃令夫人の實驗とより成り然も何人にも實行しやすきを本旨として記述せしもの也。乞ふ世の雜書と同一視する勿れ。

白色法 醫學上より見たる白色法●色白くなる飲み藥●色白くなるつけ藥●實驗有功の白色法●色白くなる簡單なる方法●キメを細かにする法●日にやけるを防ぐ法●手の色を白くする法其他種々

美髮法 髮の毛を美しくする法●髮の毛をやわらかにする法●つやをよくする法●毛のぬけるを止むる法●毛をのばす法●ふけをとる法●ちゞれ毛くせ毛うす毛赤毛白毛等をなをす最良法其他種々

美顔法 愛嬌と愉快●顔を洗ふ眞の方法●油の多過ぎる顔と油のたらぬ顔●赤すぎる顔と青き顔との療法●顔を醜くする貧血●しわのよらぬ法●歯を白くする法●ニキビそばかすホクロの療法

治療法 やせる法こえる法●鼻高くする法●聲をよくする法●おしろいやけイボあざシモヤケわきがヒゼン田虫タコなまず等の最良療法●毛をはやす法●赤鼻眉毛のさか毛手のあれを治する法其他

養生法 根本的美人となる平素の養生法●食物と美人との關係●充分に睡眠せよ●寢る時の心得と寢具●運動はかくの如くすべし●醜婦も此の如く常に注意せば亦美人に優く●婦人病と顔色の關係

化粧法 入浴中行ふべき美人法●此の如き化粧品は反つて恐るべき結果を來す●化粧品の選擇法●おしろいのつけ方●鼻高く見する法●目を大きく見する法●唇をうすく又は厚く見する法其他種々

服裝法 ●服裝を美しくする法●衣服の材料●衣服の洗濯●衣服の色●衣服の縞●呉服店にて染色縞柄をえらぶ秘訣●此の如き模樣と縞柄とは甚しく美人を醜婦とす●帶のしめ方●前のあわせ方其他種々

これ目次の大略のみ、眞に婦人の寶典也、眞に少女の必讀書也。御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め。

發行所 東京神田錦町三丁目 振替東京一六一八番 學友社

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒根治特効の新藥なり故に黴瘡及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。いゐ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばい。そうかい。こ〜。腐毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することを確證す從來醫療賣藥等に方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢 貳劑分壹圓九拾錢 特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新劑（瑞西新輸入藥）

内服 **トニチン** TONITIN

本劑は瑞西國ウォルフエンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は……男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精虫缺乏。不姙娠。合症發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試みよ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**たる世にありふれし無効賣藥と同一視することと勿れ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿性多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓廿錢 着金即刻送藥す

世界唯一 痲病消渇の根治確證新藥

痲滅（りんめつ）

痲滅は最も進步したる最新の痲病消渇即治療新藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學と効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**痲病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せ！新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す 但し彼の舊式注淋劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者諒め之を諒せよ 藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の疵、はつぱうはげの疵、やけどの疵、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮沓々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視することと勿れ

特別製分金五圓三拾錢 中瓶貳圓廿錢 小瓶壹圓廿錢

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

●らい病根治新劑

▲藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症なることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治することに到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共
壹劑分 五圓拾錢
特別製分 拾圓拾錢

●美しき聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し、然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し、初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢
特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

腦記臆增進

本劑は獨逸大家スタリーボワト氏の新處方に基き醫學的の原理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進することと誓て確證する所なり[illegible]より實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓參拾錢壹週分八拾錢
(送料)各拾錢宛

月やくおろし

流下する特効あり本劑壹劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず安全に流下す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥販はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全に快通

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美顏に除去すること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ゐて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨はくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用二割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)着金即刻小包郵送す

以上五藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

梅どく りん病 ぢ 疾症 わきが 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科 中央醫院

東京淺草瓦町廿八 淺草橋通瓦町電車停留場横 ◎朝八時より夜九時迄

色の黒き人 にきび 子宮病 月やくとまりたる病 子なき婦人 皮膚病

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ た蟲等

生殖器諸病 神經衰弱 陰萎 遺精早漏 發育不充分 記憶力減衰

專門醫中央醫院々長處方の特効新藥 病狀を記し郵券四錢を送れば其病を速治する說明書を送る

▲東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横 中央藥院

代々家傳の妙藥

月やく 通經丸

調劑元

東京市丸の內

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難症の月經滯りし時腰痛子宮等を痛めず安々と通じ難症なるは其夜に來ること請合也但し藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價を返還せしむ定價廿五錢五十錢一圓郵券二割增小包送料を要する方は八錢を要す

有樂町二ノ三

江戶屋

子のできる器及子のできない器 懷姙避姙自由自在器

（▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

本器は產科婦人科日東病院長醫學[illegible]醫學博士[illegible]吉先生の發明に係る最も簡易安全にして[illegible]常なる懷姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器は卽ち本器により膣內へ[illegible]

[illegible]孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に**懷姙**することを得らる故に子の無き人は用ひて目的を遂ぐべく又本器により膣內へ姙孕素を消失する藥劑を入れ**避姙**[illegible]の目的を遂し得る所なり且つ本器は多年實驗上確證する所なり[illegible]用ひて**梅毒淋病**其他の病毒を[illegible]子宮を[illegible]防[illegible]**子宮諸病**[illegible]本器は[illegible]し得る[illegible]**自身治療**する[illegible]天然の[illegible]を[illegible]本器は[illegible]世界唯一の[illegible]

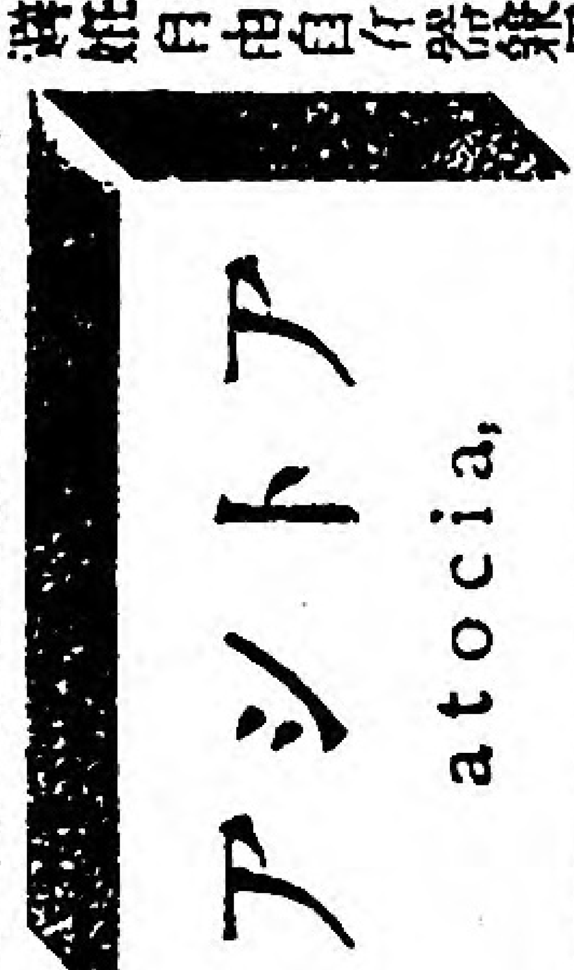
但し詳細なる說明書及使用法並に[illegible]

（正價）ニッケル製壹圓拾五錢。銀製特別製參圓拾五錢。

醫學得業士

（醫藤乙吉先生發明）

實用新案登錄特許



（膣內插入小器具）

[illegible]婦人衞生上必ず備ふべき所用の良器なり。
新現品に添附し小包郵便密封にて送付す。
郵券代用貳割增し。着金卽刻發送す。

世界一手專賣元 東京市神田區五軒町十九番地（電話番號下谷五百四十六番） 日新館藥房

女子文壇
十月十日第三增刊



二百餘頁
畫入美裝
定價 貳拾錢
送料壹錢五厘

娘時代

◉文字に現はるゝ娘時代の表情

『娘時代』と一口に言つても、其人の性質や境遇に因りて千差萬別、淑女もあれば、おてんばもあり、能く泣く人もあれば、能く笑ふ人もあり、不平家もあれば、樂天家もあり、只、其等の若き婦人を通じて現代の空氣に觸れてゐることだけは確かで、其語るところ、歌ふところ、皆新しい若い女の叫びです。多數の若い女を代表した聲です、身の上話や、戀の物語や、失意の涙や、得意の誇や、讀んで行くうちにさま〴〵の人の若い心持が分つて面白いのです。特に今度の增刊は『娘時代』と名づけた丈けに、告白や感想の長い實のある文章は勿論、課題詩歌の類に到るまで、凡て若い婦人の手に成つたもので埋まつてある、舊い思想や、滅びた藝術に影も形もない、これほど新しい香氣の高い文集にないのです。

▲娘時代の告白と感想 數十篇

▲短篇小說數篇

▲和歌俳句數百首

▲八月の日記十數篇

▲課題『わが故鄉、わが手文庫、わが親友』

◉現代的色調の強烈なる婦人文藝

▶發行所 東京京橋大鋸町 女子文壇社 (振替口座東京第一二七九一番) 全國各書店取次販賣す◀



創作

小説　水野葉舟選



○猫（天）

小笠原さだ

「清ちやんおひるですよ」母親の呼ぶ聲が奥から聞えた、清子はジッと臺所の戸口によつて、どこか心配そうな悲しさうな顔をして、默つて彳んで居た。

「早やく入らつしやいと云ふのに、清ちやん、御飯を食べないの」亦母親はぢれた樣にこう呼んだ、清子はやはり動かない、井戸端やひくい竹垣や、遠くの屋根や、白や赤の干物が暖かな日光にてらされて、チラチラ光つて音もなく動いて居る――靜閑とした淋しい眞晝時の有樣を、うるんだ目をしてじッと見て居たが、「たま／＼――たま、たま／＼」とかすれた樣な、はゞかる樣な、聲をして呼んで見た。

「いつまでそうして居るの清ちやん、云ふ事をきかない子ですね」と今度はおこつた樣な聲をして、またお母さんは呼んだ。

「今ッてば」と半分は鼻をならして一寸まゆをよせたそしてよう／＼思ひ切つて戸口を離れたが、「たま／＼玉ちやん／＼／＼」今度は透る聲をはり上げて呼んで見た、そして今度こそと云ふ樣な、目を見はつて垣根

と隣屋敷の壁との間から、白と黑の美しい、ぶちをした小猫が、「ゴロ〳〵」とのどをならして、飛んで表はれて來はすまいかと、暫く其所を見つめて居たが、やはり何の返事もなかつた、で清子はがつかりして、一層悲しさうな顏をして內に入つた、「居ないのよ、お母さん」清子はぺつたり膳の前に座ると、母に甘へた口調で涙聲になつて云つた。「此子はまア」と母は呆顏にしほれ切つた娘の樣子を見て居たが、「まアどれ程猫好きなんだらう」こう云つて笑ひ出した、二十にもなつて此樣な事に屈托するより外は、何の思にふけると云ふ事も知らぬ、ひ〳〵な透き通る樣な清い娘の心を思ふと可愛くつてたまらなくなる。

「御飯をたべてからにおし、母さんもその邊まで見にゆから」「ねほんとう？、まアうれしいきつとよ、さがして頂戴ね」清子は急に元氣づいた樣に、御飯をかつ込んだ、其樣子を母は可愛ゆくつてたまらない樣にしげ〳〵と跳めて居た、「母さんはあの寫眞やの裏の方を見て來て頂戴、私は空地の方へ行くわ」母にさしづをして、清子は臺所から出た。

「たま〳〵、たま〳〵」歩きながらこう呼んで居た、そして外の家の裏口や、臺所などを恐々ソッとのぞいて見たりした。

「あのう白と黑のぶち猫が此邊に居りませんでしたらうか」清子は近所のものを見る度にこう問ひかけた。

「エ猫ですつて、見かけませんでしたね」

どの人も同じ樣にこんな事を云つては、ジロ〳〵清子を見た。

其近所を隈なくさがして見たが、玉のなきごゑすらきこえなかつた、「こう〳〵玉は居なくなつたのだ」と思ふと、氣ぬけのした樣に清子はグッタリして終つた。

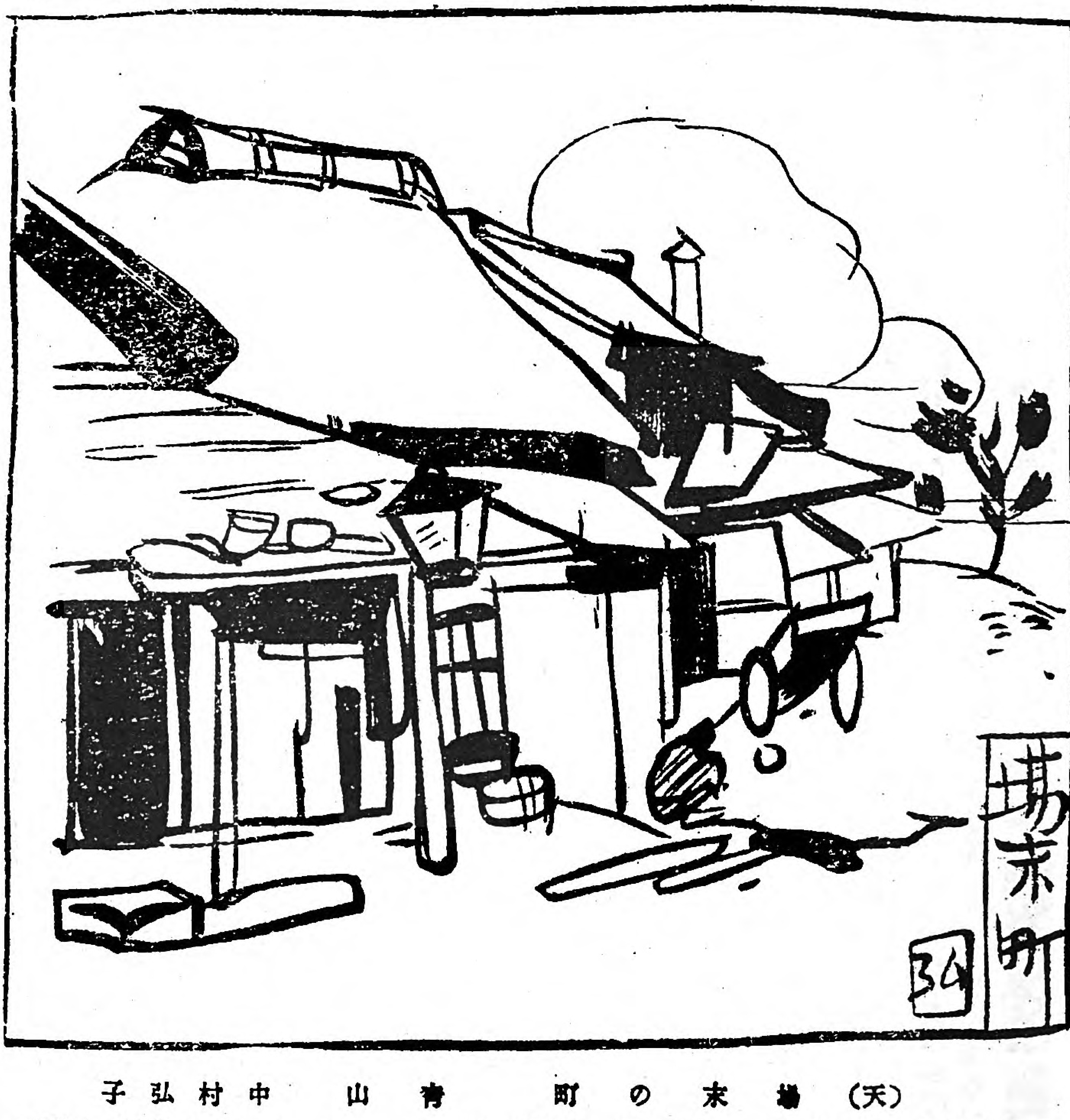
「たま〳〵」自分の家の裏口まで來ると、表の方からかすかな母の聲が聞えて來た、「もしや」と思つて清子は母の處に飛んで行つて見た、「居て？」門口にボンヤリ立つて居た母は、「どうも居ない樣だね」と云つたが、「今は、さかりが來てるんだもの何處の猫だつて家になんぞ居るものかね、まアうつちやッとき……きつと歸つて來るから」と母は先に立つて家に入つた。

清子はもう落ちついては居られなくなつた。

もう再びあの可愛い、鈴の樣な目を見る事が出來ないのか、まアあの絹布の樣な眞綿のかたまりの樣な、フワ〳〵したあの美しい體を抱く事は出來ないのか。

清子はどうしてももう一ぺん小さな小猫を抱かねば氣がすまなかつた。

「だけどあれ程私になじんで居たのだもの、私を忘れるなんて事はない筈だのに」こう思ふと、玉は必ず歸つて來るのだと云ふ氣もする、夕方清子はこつそり家を出て、家の傍の空地に行つた、空地はもう西日が一ぱいにさして、青青した夏草のかすかな涼しさうな葉ずれの音が聞える外は、シイーンと



（天）場末の町　青山　中村弘子

して靜まり返つて居た。

向ふに並んだ長屋では、夕飯時でもあるのか、人一人の影すらも見えなかつた。

清子は草むらの中に立ちすくんで、あつちこつち草の動く邊りや、石ころのころがつて居る邊りに目をくばつて居たがフト向ふの青い中にチラチラ白いものが動いて居るのが目についた。

清子はもう何の隙もなく一散にかけ出した、けれども

そのもの丶一間許手前まで來ると、ピタッと足を止めて終つた。それは、その時耳の長い白い小犬が、クンクン云つて走んで行つて終つたのを見たからであつた小犬の後姿をじッと眺めて居た清子は、前より一層氣がいら〳〵して、涙が止めどなく流れて來た。

氣がつくと遠くでかすかに猫のなく聲が聞えて來た樣に思へた、清子はハッとして體中の神經はもう耳に集つて終つた。兩手をしつかとくみ合して、目をじッとすゑて、耳をすました、今の音を聞き出すには、胸の動悸すらもひどくじやまになる樣に感じた。

「…………」またかすかに……然し今度は確かな小猫のうなり聲が聞えて來た、清子はソッと足音をしのばして、聲のきこえて來る方を考へ〳〵歩いた。

細い半ば朽ちた竹垣の外まで來ると、手に取る樣に猫の聲がきこえてきた。「たま〳〵、たま〳〵」一生懸命に清子は呼びながら、竹垣にすがつて其隙間から中をのぞいた、其所はもう古い朽ちた家で、長い間空家になつて居る家であつた、清子は熱心に呼びながら、暗い家の中を見つめて居ると、「ゴロ、」不意に中から白いものが飛び出して來た。

「これ！、玉や!!」發作的に清子はこうさけんだ。そして竹垣の細い間からいた〳〵しゆう手をさし入れて玉をとらへ樣とした、小猫は垣から少し離れた所まで來ると、おびえた樣な目つきをしてジッと人を眺めて居た。

「玉や！どうしたの、玉ちやん!! こつちにおいで」清子の指さきがチョッと玉の體にさはると、玉はゴム毬の樣にフワリと一間許り飛び退いて終つた。

そしてまたジッと考へる樣に、小首をかたむけた。

「これ玉や、私を忘れたの！玉や私だよ、玉ちやんや!!」清子はヒステリーにかゝつた女の樣に、はげしく恨む樣にさけんだ、が小猫はやはり遠くの方で、清子の顏をジッと小首をかたむけて眺めて居る。「玉やこれ玉ちやんや！」清子は夢中に小猫を呼んだ、此時暗い家の中から、「ゴローンニヤー」とにごつた男猫のなき聲がした、と玉はキッと耳を立てゝ前足をつッぱつて居たが、ヒラリと身をかわして陰氣な家の中へ飛んで行つて終つた。

「まア」清子はあつけに取られて終つて、暫くボンヤリして居たが、「まアどうしたと云ふのだらう」と云つて身をふるはした。

清子はどうしても此儘歸つて終ふ事は出來なかつた。

空家の表にまはると、玄關の戶が幸ひに一枚あいて居た。

でてわく／＼と足をふるわしながら、下駄のまゝソッと椽に上つた、内に入るとムッ／＼濕つぽいおとんだ空氣が顏に氣味惡くふれる樣に感じた。そして何かしら物のくさつた臭と、壁土のむれた臭とが強く鼻をついた。

奥をのぞくと、障子も雨戶も無くなつて、所々壁はくづれ、ひさしは半ばおちかゝつて、庭からサッと流れ込む青い光線に、物凄く死人の樣な骨ぐみがあらはれて居る。つきあたりに見える小さな庭には、一本の草木もなく、土は傷ましくほり返されて、木を引きぬいた跡許が、そてゝに謎の樣に深い穴になつて居るその上に血汐の樣な夕日が淋しくてつて居る。

淸子は何かしら物にひそんで居られる樣な氣がして、體中寒氣がして來た、立ちすくんで居ると、突然また玉らしい猫の聲が、庭のすみから起つた。見ると玉は赤土の上にころがつて、美しい毛を惜氣もなく砂の上にゴロ／＼とすりつけて居る、そして時々「ゴロ、」とのどをならしてこびる樣に男猫の顏を見た、玉から少し離れて、大きなねずみ色の男猫がジッとすくだまつて、其を滿足氣に眺めて居る。玉はまた男猫の頭や背に自分の首をこすりつけたりなめたりして居る。くびにまいたよだれかけも鈴も無くなつて居る、自由な露骨な二匹の有樣！。

淸子はそう思つた、若し今「玉や」と自分が呼びかけて行つたなら、二匹は直に牙をならし、あの鋭い爪をむき出して、今にも飛びかゝろうとする姿勢を取るに違ひないと……そして急に恐しくなつて來た。

もうあの小猫は、人間の手に抱かれる樣な、やさしい動物ではなくなつたのだ、何と云ふ變り方だらう。

淸子は人間のふむべき處でない所に足ぶみをした……樣な罪をおかした樣な氣持がした。

フト淸子は足音を立てた、と二匹はキッと耳をたてゝ目を光らして暫らくジッと淸子の方を見つめて居たがノソリ／＼と二匹とも奥の方へ入つて行つて終つた。

淸子はもうそれをおふ氣も起らなかつた。やがてコッソリと空家を出たが、思はずホッと深いためいきをした、そして前よりも猶一層失望して終つた、淸子は力なげに歩いた。

○酒屋（地）

神田貞枝

お幸はこの盆に麹町の伯母を訪ねた、伯母はお幸の血色の優れないのをみてひどく心配した。お幸は四月以來病氣でぶら／＼してゐた事や、世間話の末にこんな事も謂つた「横町の飯屋の爺さんがね、長らく心臓を病んでゐましたがね、米を磨ぐにも三十分位轉がつては休み／＼していたんですがねえ、それがあんた到頭十日程前死にました、葬式の日に良人が參られませんので妾しが代りに送りましたんですよ、山路でもう、息が切れて苦しくて耐らなかつたので途中から歸つて了ひましたが……、何だか妾のもあの爺さんとよく似てるんですよ、そりや氣にもかけはしないけれど」伯母夫婦は一二ヶ月家に居て靜に養生をしたらばと強て引止めて吳れたけれどさすが庄吉の手前をはゞかつて「何、大した事はありませんから」と一泊して歸つてきた。

お幸はだるい兩足を伸して苦し相な呼吸をした、庄吉は帳場で新聞を讀んでゐる、まだ十一のお蔦さんは店に當り鉢を持つてきて味噌桶から甘鹹等分に混ぜて入れた、くり／＼とした眼は愛らしいけれど頭部に大きな禿がある、それをまた始終氣にして他人に「あたし赤ン坊のとき腫物が出來てこんなになつたの」と聞かれもせぬのに言譯する樣子は如何にもいぢらしかつた、お幸は後ろから「ちよいとお蔦さん、それ、そんなに綻び切つてみつともないわ、中形を下してお了ひな、袖が長くて好きだらう？またお正月に着せるからネ」といへばお蔦さんはニコ／＼と忠實にたち働いてゐた。

やがて朝餉の膳を運んできた、お幸は箸も付けずに退させた、そして冷しておいた水藥を盃に注いでのんだが「苦いッ」と眉をひそめたまゝ簞笥の上の折詰のカステラをつまんだ。庄吉は絹絣の單衣に着換乍ら「鮨なり丼なり取つたらどうだ、え？小供ぢやあるめえし自分の口に合ふものでも食つて力を付けたらいゝぢやないか」「ほゝ、とんでもない事、胃も惡い所へソンな物食べたら本當に死んぢまう」淋しく笑ひながら足袋を探してゐる。

庄吉は凝つとお幸をみた、氣の故か首筋や手のあたりげつそり痩せた樣に思はれる。

人を見る時、眼を心持すがめて瞳を軟げるのが此の男

の葬であつた。「荷が來たらそこに積ませておけ」と云ひつけて出掛けた。「お蔦さん、お香の物はまだあるかい」「えゝちつとも（と強く）ないの」「氣が利かないねえ、妾しが居ない時にや親方にそういつてお錢を貰つて買つて漬けたらいゝに」と錢箱をガラ〳〵ゆすぶつて銅貨を投げ出す。「お内儀さん向ふの家へいつたらイヤなの許りだからやめて來たの、多町まで行きませうか」「あゝ色のいゝ奴をね」「えゝ」と馳り出す。



（地）夏の川　青森　立花とも子

弟の宗八も小僧も御用聞きに廻つてお幸は只一人になつた。然う然う、こんな時にと呟いて立ち上つた。

簞笥から黒縮緬の羽織を出して黒も廢つたなと思ひ乍ら擴げて見る、樟腦の匂ひがプンとあたりにこぼれる。今度は鏡臺の底から元結鋏をとり出して振ればヒラリ落ちた拾圓紙幣一枚

お幸は店の利益の幾分かを貯蓄してゐた、素より誰にも秘密であつた。

お幸は内緣の妻で之は何とやらいふ商賣をした女だけあつてどことなく垢拔がしてゐる。親しい友達などによく話した「どうせ妾なんか身體は弱し、小供はなし何日秋風が吹き初めるやら……」と。

無器用な手つきで紙幣を羽織の衿に縫付けてゐる所へ店で下駄の音、お幸はギヨツとして顏色を變へて夢中になつて簞笥に打込んだ。

「涙の花を五合……」とお客樣が立つてゐる。

お幸は悸々する胸を抑へて俄造りの笑を浮べ乍ら美しい齒をちらと見せて、お世辭など云つた。

○三十女（八）

春田順子

夕方になるにつれて雲がきれて小雨が止んだ。柔なか、うるみをもつた美しい夕日が、暗綠色にぬれた庭の木立にしつとり流れた。雨後の潤ふた空氣は靜かに淀んで向ふの新しい草屋根からは水蒸氣が白く仄かに立昇つてゐた。おかるは椽の柱に添ふてうつとり立つてゐた。

「叔母樣、不思議だわねえ、すつかり晴れちやつて。」「あゝ、梅雨の夕晴れつてね、いつでも今頃になると晴れるよ。」叔母はこういつて、洗髮を、根下りの銀杏返しに結つて素肌にセルの單衣を緩く着た。スラリと意氣な、おかるの湯上り姿をつく〲みてゐた。「かるちやん、今晩は是非泊つてお居でだらうねえ」「えゝ、私ねえ、泊めて頂きたいけど、今夜はどうしても手のはづされないことがあるの。」おかるは叔母の前に坐つて、うちわの柄をいぢりながら、こう云つた。「そんなら、仕方が無いがね、私もいろ〱しんみり話したい事も、聞きたい事もあるんだが……」、叔母は重い調子でこう云つた。おかるは默つて其顏をみた。暫く叔母は默つて何か考へてゐた。おかるは何となく胸騷ぎがしだした。「叔母さん！」暫くしておかるは、輕い鄕愁を帶びた瞳をして、こう呼びかけた。「私ね、さつきから、しみ〲思つてたのよ、たつた一人の伯母樣に隨分心配をかけたわねえ。」「何あに、若い時は誰だつてねえ。……」叔母は幽かな笑を浮べたが、すぐまた六箇敷い顏をした。

おかるは、之迄、家を出て十何年と云ふものしみ〲考へると云ふ事はなかつたが、此頃はともすると

椽の柱なんかへ倚つてつい考へに沈んで終ふ日があつた。

「あ、また考へてたのかしら。」こう思つて我に返るときつと、目瞼は柔い涙にしめつてゐた。そうして便りない思がさめ〴〵と湧くのであつた。三つの時母に別れて伯母の手に育てられた。

「板橋の煙草屋の看板娘。」町の若い衆等にこう云つてもてはやされたのは十七八の頃であつた。旅役者の女形と夜逃げをしてからは、田舎芝居の蔭引もした。幼い時習ふた踊を便りに聞き覺えの曰で狹い舞臺の其場を濁した事もあつた。それから銘酒屋、料理屋の酌婦にまで成つた。歩いた國は徳島、多度津、大阪、名古屋、横濱 東京、こうした處をたゞ浮々と、新しい男、新しい男に從いて渡り歩いた。其末、また生れ故郷の土佐へ舞ひ戻つたのは三年前であつた。其頃は待合の女中を勤めてゐた。久し振りに叔母を訪ねるのは其時であつた。

十八年と云ふもの切髪姿の後家で堅い身を通してきた昔風の叔母の前に坐つてはさすが、そうも云ひ兼ねて本町の××館の上女中をしてゐる。こう云つてあつた。××館と云へば來縣した諸名士の泊る高等旅館であると云ふ事は叔母も知つてゐたのだ。おかるは、種種な人に接し暗がりを歩いた割合に、ちつともすれてゐなかつた。正直で横着でない女どこか初心な間のぬけた樣な、可愛い處は、昔のまゝであつた。「ねえ、かるちやん、お前が、家を出てから十何年と云ふもの、私はどんなに心配したか、けども、昔は昔、今は今、爲た事を云たつて仕方が無いから、私はもう何にも云はんがね、たゞ之から先、どうする心意かそれが聞き度いんだよ、いつまで宿屋の女中なんか、さしといたがやお前を賴まれた、姉樣に向つても濟まなくつてねえ」しみ〴〵こう云つた、叔母の聲は濕んでゐた、おかるは妙に胸がせまつて俯いた。おかるは、此、半年ばかり前、或相場師に思はれて、圍はれてゐた、然し叔母には何とも云つてなかつた。

叔母は暫く、其顏を見守つてゐたが、「後妻にでも嫁くんなら、隨分好い心當りもあるんだがね、まあお前ようく考へてお置き、人つて物はねえ、行先の闇く無い樣な考をつけとかんといかんよ」伯母は優しくこう云つた。おかるはつゝましくうなづいてゐた。

叔母は寬いだ樣に朝鮮へ行つてゐる一人息子の桂二さんの事や、新しく貰つた嫁のことなど、ニコ〳〵し

て話した。おかるは、其嫁の若い年を聞いた時、ふと、二十九！、この自分の年が、冷く閃いた。

「あゝもう婆あだ！」おかるは叔母の家を出て夕月に濡れた淋しい町を歩きながらしみ〴〵思つた。「かるちやんお前も今の中だよ、しつかりおしよ、私の樣に成つてごらん三十越して四十が見えだしちやお終だよ、口の缺けた盃みたいに捨てられちまつて、さ。」四五年前額の禿げた内儀の云つてたのを思出した。「後から後から若い女が出てくるんだもの！、」こう思ふと、「いつそ叔母樣の云つた後妻にでも成らうかしら」。こう呟いてもみた。「嫌だわ、馬鹿らしい後妻なんて。まあ好いわ、どう成つたつて、乞食に成つたつて好いわ。どうせ成る樣にしか成らないんだわ。」おかるは、嘲ける樣にこう云つた。

心の底の方では、自暴自棄になつた樣な心がうごめいてゐた。

そうして叔母の住んでゐる世界と自分の渡つてゐる世界とは別物の樣な思がせられた。

「まあ好いわ、どうでもなるわ。」おかるは寂しさに弱つてゐる自分の心を引き立てる樣にこう呟いた。

○復讐

信濃優梨子

「小夏さん——小夏姐さん………」と何處か遠い處で呼ぶ樣な氣がして、小夏はふいと眼を醒した。ともうそれを待ちきつて居た樣にすぐ、昨晩の事がさま〴〵と判然浮んで來て、小夏ははら〳〵とした。

くいと頭をもたげて邊りを見廻したけれど誰も居なかつた。只向ふの障子際にお[illegible]紋の光代がさも疲れきつた樣に、黄縞の搔巻から白いぶつくりした顏を出してぐつすりと氣持ち好ささうに寢て居る許りだつた。椽の障子には欄干を辷つた明るい日が、強く一杯にさして居た。下階からは調子の高い笑ひ聲が、朝のすつきりした空氣をゆるがせて、賑やかに聞えたけれど小夏はいつもの樣に忙がしさうに起やうともしなかつた。

宿醉でぐら〳〵する頭を、いら〳〵した樣に強く振つて見て、濃い恰好の好い眉を顰めるとまたがくりと俯伏した。そして、誰が今夜行くものが、甚麽にしたつて行きやしないわ、いつも〳〵下手に出て居れば好い氣になつて餘りな〳〵、といら〳〵するこんがらかつた胸の中で強く〳〵、けれども低い小さい聲で叫んだ

下階の掛け時計が大きく八時を打つた。

小夏は何か思ひ返した樣にくいと起きた。そして何時もと同じ樣な顏をして下階へ行つた。

「おや小夏さん　よく寢てネ最も昨晩遲かつたもの」

と姐の松吉が優しく云ふと

「え、隨分お寢坊しちまつて」と小夏は何時もの樣に柔かく莞爾した。

お晝頃皆と一緒にお德さんの處へ髮を結ひに行く時も小夏は大きな聲で笑つたり他愛ない事を喋つたりしてわざとはしやいで居た。

そして夕方お湯から歸ると光代のお化粧を直してやつたり、帶を好い恰好に結んでやつたりして、自分も皆と同じ揃ひの黑紋付を着た。けれど皆の樣い明るに街を通つて××座へは行かなかつた。紅い緒の草履を履いたまゝ皆の後から默つて林家を出て、暗い裏道からそつと福壽樓へ這入つた。そして昨晩宴會で逢つた馴染の竹下に電話を掛けた。



（人）涼しき夕　大阪　大關さとの

竹下は小夏の顏を見るとすぐ

「今夜はお浚じやないか」と聞いた。

「お浚だつて好いじやありませんか妾なんか用がないのですもの」と小夏は何でもない樣に投げる樣な云ひ方をした。

「何故？、兩國遊山船か何かするんじやないか」と竹下は不思議さうな顏をして小夏を見た。

「妾には無理だつて勝江さんが云ふんですもの、だから妾彼の人に賴んだのよ、自分でするが好いわ、いくら妾が馬鹿だつて餘りだわ彼麼宴席で自分に恥をかゝせて――……なんで行くものですか」と小夏は昨晩の事を思ひ出して、もう抑へきれない樣にいら〳〵して云つた。

「あゝ昨晩の彼麼事位氣に掛けて居るのかえ？僕達は

何とも思つちや居ないのに」と竹下は何時にない小夏のぶり〳〵しい強い仕打ちを氣づかはしさうに見て云つた。そして

「それで眞實に行かないのかえ？」と念を押す樣に聞いて見た。

「誰か行くものですか、何時も優しく出て居れば好い氣になつて」と小夏は力のある低い聲で、強く云ひ切つた。

「たまには思ひきつた事もして見るさ」と竹下は氣づかひながらも冗談の樣に斯う云つて見た。

そして二人は離れの中座敷で默つて飲んだ。

小夏は一寸も何時もの樣に恍惚した好い眼で優しく莞爾などしなかつた。いら〳〵した胸を無理に抑へつける樣にぐい〳〵飲んで許り居た。

××座では常盤津のお浚ひ式三番から始まつて、おこま才三の白木屋が終る頃まで、誰も小夏の居ないのに氣づかなかつた。三好家の勝江さへも、それ程昨晩の事を氣にも留めて居なかつた。

「あら自家の小夏姐さんは！もうじきですのに、小夏姐さ――ん」と光代が急に思ひ出した樣にそこいらを見つけて歩いた。

「誰！小夏さん？さう云へばまだ一寸も見えないじやないの」と急に皆は騒ぎ出した。勝江はハッとしたけれど、わざと知らない顔をして居た。散々見附けあぐんだ光代が、福壽樓の薄暗いよく拭きぬいてある廊下を幾廻りかして、離れへと小走りにバタ〳〵と行つた時、小夏は矢張り默つて飲んで居た。そして其草履の小さい音を聞くとハッとした。

「あら姐さん什麼なすつて？恁麼處に、まア甚麼に見つけたんだか、もうすぐですのよさサ早く被入しつて頂戴よ」と光代は竹下へ挨拶も忘れて、あはたゞしさうに小夏の傍へ踞んで、其袖を握つた。

「什麼もしやしないのよ、光ちやんあの三好家の勝江姐さんにネ、自家の小夏姐さんが什麼ぞお願ひ申ますつて、云ひましたつてさう云つて下さいな」と小夏はわざと落ちついて、赤く潤んだ眼でチラリと光代を見て云つた。

「あら什麼なすたのよ其麼事……」と光代は喫驚して小夏の横顔を氣づかはしさうに見上げた。

「好いのよ何でも……………早く行つてさう云つて頂戴つてば」と小夏は思ひきつて手強く云つた。

「だつて皆が待つて居るんですもの困るわ」と光代は

何時もにない小夏の荒々しい様子にをと〳〵しながら斯う云つて、困つた様な泣きたい様な顔してまだもじもじして居た。とまた遠くから急がしさうな足音がした。小夏は默つて俯向いて居た。

「まア小夏さん什麽したの？恁麽處に」と松吉が大きな聲で云ひながら這入つて來た。

「什麽もしやしませんわ、私の變りは勝江さんがやつて呉れるでせう上手い人がした方が好いじやありませんか」と小夏はチラと松吉の顔を見上げて捨てる様に云ふと、それきりまた俯向いて默つて終つた。

「まア何云つて居るの？先刻がたまで機嫌よくして居たじやありませんか、あゝ昨晩の事を氣にかけて居るので！小夏さんの氣の小さいのにも困つたわね、其麽事で藝妓が勤まるものですかネ？竹下様、さア〳〵行きませうよ」と松吉はわざとはづんだ調子で、けれど何處となく優しみのある聲で云つた。そしてよく今まで默つて知らない顔をして居た小夏の我慢強いのに喫驚した。「だつて昨晩許ゝじや無いんですもの………」と俯向いたまゝ云つた。小夏の聲は少し潤んで小さかつた。

光代はよく理由が解らないので只氣づかはしさうに小夏の顔を見て默つて居た。

「好いじやありませんか彼麽人何て云つたつて餘計なお世話だわ、さうしたら猶思ひきつて喫驚する様に語つておやりなさいよ、ネ？さア行きませう、お師匠様に濟まないじやありませんか」と松吉は小さい子をなだめる様に云つて小夏の袖を握つた。

「行くが好いよ姐さんが恁麽に云ふんだから」と竹下はどうせ小夏には思ひきつた仕打ちは出來得ないのだと思つて何となく物たりない様な、けれど可憐しい様な氣がして眞直な普通の事を云つた。

小夏は無理に松吉の手を拂はうともしないで、默つて薄暗い廊下を二人に連れられて行つた。そして自分ながら餘りに意氣地がない、餘り弱い！

と思ふといら〳〵した胸の中は猶更かきむしりたい様な氣持がした。

竹下は矢張り小夏は弱い女だと思ひながら默つて其後姿を見送つた。

「兩國遊山船」と大きく太く書いた番附が張り出された時、金屛風の前に列んだ五つの顔の中に、小夏の顔許りが目立つて赤かつた。そして其大きな潤みを持つた黒い瞳には、或るもの に勝ち得やうとする強い重い

輝きが見えて居た。抑へつける樣にぢつと沈めた胸の中には、復讐、小さな復讐！と其言葉が絶えず強く小さく叫びを立てゝ居た。
ふつくりと生え際の濃い額には、もうしつとりと汗が染じんで居た。

選評

選　者

近頃の暑さは格別である。自分にはこの夏に爲ねばならぬ爲事が三つある。その爲めに殆んど旅行をすると言ふ事は、不可能だとあきらめて居る。その爲事と言ふのは、第一が「妹に送る手紙」と言ふ書簡體にした婦人論を書いて一冊とする事。第二は「湖畔」と言ふ紀行をこれも一冊にする事。第三は「少年」と言ふ長篇の小說を書く事この爲事を成る可く夏中に爲上げてしまひ度いと思つて居る。

△酒屋（東京、貞枝）　まだ馴れない話し方だがうまい處がある。この人は進んで行く人と思つた。

△猫（東京、小笠原さだ）　この作は動物がその本能の力にかられて、飼はれて居た人間を忘れてしまつた處を書いたもの。まだ力がたりない何處となく思ひ付きがいゝと思はれる處がある作だが、拙くはない。

△宿の女（佐渡わかば子）　生きた人間を見る事が第一でせう。生きた人の如何なるディテールスも、この作の如くいゝ加減に書いたものより藝術がある。

△私（岡山、有本靜江子）　しつとりした感のある筆だが、私の說明が概念的になつてしまつて居る。

△春ちやん（津、泉よし子）　この作も概念的だ。

△お光（岐阜、中島幸枝）　拙い。

△宵の廓（東京、小桃子）　この斷片を書かうとした心持は面白い。だが、もッと見て考へてないとたゞ、書いたと言ふだけになる。女が見たこのやうな生活には、男のわからぬ印象がありさうなものだ。物足らぬ感がある。

△其返事（東京、露木雅子）　思つた事は充分に言つてあるが、その「思つた事」が極めてコンエンショナルである。

△光子（近江わかば）　女優志願の女が書いてある。願ふ處は、も一重底にある「人間」が書いてほしかッた。暢達ではあッたが、幼稚な感がした。

△渡淸（神戸、百合香）　つまり、心の上皮が感想的にふるへて居る。そこが書いてあるに過ぎぬ。

△淋しい身（遼陽、山鹿菊乃）　これも前と同樣の言葉を繰り返さねばならぬ。

△手紙（東京さすらひ）　妹として、兄を思つて居る、一種の不合理な同情——この中には複雜な意味がある同情はよく受取れる、不滿の點は多いが。

△復讐（信濃、優梨子）　終の一部は、作者が自分の感情の滿足の爲めに書いたものではないだらうか？。上手になッたが、もッと、一心になッて努力してほしい。

△父の死（福島、春子）　も少し描寫——理解のある描寫と言ふ事を思つて見てほしい。

△お市ちやん（牛込さかえ）　この人達の「生（ライフ）」は、この作が生れる程度だらうと思はれた。いゝ作でも惡い作でもない。

△三十女（土佐、誓田順子）　平凡ではある。センチメンタルではあるが、人を引く力もある。

△車の行街（東京、智代子）　紅葉の生きて居た時代に書かる可き手法である。

△暗い夜（日暮里、水仙子）　しつとりした處があるが、新味が無い。

△女から（橫濱、千鶴子）　藝術としては、個人の自らを快ふする情が入りすぎて居る。

○お市ちやん

五六日前から、早大が休みになつたので、下宿人の多方は歸省して、今は早稻田の××館も暇になつたので、今夜も亦、月のいゝのを幸ひ女中達は庭に涼み臺を出して、お神さんの、遠緣の四月ばかり前始めて、上京して××館へ來た、お市と云ふ今年十六に成た娘を相手に戯談言ひ合ながら笑ひ興じてゐる。

「全くお市ちやん美い女よ」と一番年上のおたつはお市を戯かつて云つた。

「ちよいとおたつさんね、私お市ちやんは新橋の七人組のおしやくでほら、誰かににてると思ふのよ」と色白のよく肥えたおとよは、常ものにこ〳〵した顔して云つた。

「私もそう思てるの、そう〳〵吾郞さんのアルバムにはさんで有るわ。七美人のあれはあと、榮龍と云つたつけ私七人の内で一番いゝと思ふの」

「えゝ其の榮龍よ全とにお市ちやんそつくらよ」

「うそ〳〵私しなんぞとても足元にも追ひつきやしないわ、其那事言たつてだめよ騙りやしないから、嫌やだわ二人して戯かつてばかり居るんだもの」とお市はやつとこの頃おぼへた、東京言葉で云つた。



リボンの芳ちやん　京都　岸田富美子

お市は色も黒いし顔立もあまりよくは無いけれ共、愛嬌の有るどこか人なつッこひ可愛らしい娘だ。

「まあ誰が、お市ちやんなんか戯かふもんですか、全との事いつてるのよ、ねえおとよさん」とおたつは、眞顔になつて云つて、でも眼は笑つてゐた。

「えー其うですとも、とても追ひ付か無いなんて其那事無いわねえおたつさんあのきりようですもの、え色が黒いからつて、ほゝゝ其那事心配し無いだつて、白粉で物が幾らも有るじやありませんかほゝゝゝ」とおとよは花やいで笑つた。

「全體おとよさんは色が白すぎるのよ、お市ちやんと取かへつてすると可いわ」と笑つて、「お市ちやんの眼は全とに可いのね特別上眼使する時なんぞふるひ付たい程いゝわ、其那いゝきりようを以てゝなぜ下宿やへなぞ來たんでせう全く惜いわ、ねえお市さん一層藝者になつたら如何う、いゝきものをきて贅澤に暮してそしてのんきでさ何程いゝでせう。私も最ちつと若くて、お市ちやんの樣なきりようだつたら藝者に成るんだけとねお市ちやんなんか賣妓に成ることおきまりだわ」

「ちよいとお市ちやん藝者におなりなら市龍ッて名前がいゝわ龍て名前のつく藝者で賣れない者はないんですつて」

「もう／＼嫌や人が田舍者だと思つていろんな事云つてからかふんだもの」と云た、お市は冗談と知りつゝも、きりようよしとほめられゝばうれしかつた。

「ねえおたつさん私ね藝者よりも女優に仕て見たいと思ふの、どんなにいゝでせう、律子なんかそつちのけだわ、そう／＼俳優の事ては面白い事があるのよ、ほら此の間の大學が休みになるつて云ふ三日だか前ね、あの時貴女が本所のお母さんとこへいつたでせう、彼の日お神さんとお市ちやんと私と三人で早稻田座見物に出掛けたのさ、知つてるでせう、彼の日中幕で敦盛をやつた雷藏つて俳優ね、彼れがお市ちやんのたいへんお氣に入つちやつてね、いゝいゝつて大さわぎなのはほゝゝ怪しいわねえ」と、よく笑ふおとよは又思ひ出し笑ひして、隣りに腰掛けてゐたお市の背中を輕く叩く眞似を仕た。

「おとよさん其れぢやあんまり酷過ぎるわ只いゝつて言つただけぢや無いの大騷ぎなんか仕やし無い事よ」と憤きになつて、おとよの言葉を打消した。

「其れぢや何も歸りに舞臺になぞへ上て樂屋の方なとのぞいて見なくともいゝもの」とおとよは又笑つた。



散文

編輯局選

○薄荷の水（天）

西多摩　山の女

封を切つてから汗のとほつた單衣を脱ぎ、浴衣を着てから叉手に取つた新しい雜誌を、この家中で一番日に遠い東の縁側の隅の柱によつてよみ初めた。けれど片はしから日でよみのやうに順に一頁づゝ繰つて居られないほど、目次を見ただけで私の心は躍つてしまつた。見なれてゐる皆樣のお名前が嬉しくつて、どことなし匿名でないのを作者にお目にかゝるやうな心地で拜見してゐると、汗が出るのと扇をつかふので咽が乾いてたまらなくなつた、どなたのどの言葉が私をこんなに狂ほしくさせたのかそれは言へないけれど、花の如く白き顔も輝ける明眸も持たぬ。土臭い皮膚の田舍の女も卷頭と同じ御言葉を以て勵まして下さる忝けなさを感じたのである。やつぱり醉茗先生の間接の御言葉だと思ひながら、私の心はその誌友のところへ走つて行くのである。

　何物も壽と言ひては口にせぬわれはいたくも痩せにけるかな

　まだ容易に火など焚きつけさうもない、うすらぬるい鐵泉の湯を飲まうよりは、と思つて「小母さん今御馳走を汲んできますからね」と言ひながら、赤味の杉の新らしい手桶を持つてうちのより深くつて冷たい隣の井戸へ行つた。誰がたぐつても十五六間太い繩へ飛びつかなければ釣瓶汲めないのに、たま〳〵の貰ひ水では釣瓶の方が馬鹿にしてゐるやうに自由にならないので、いら〳〵しながらも、意外の輕さに獨り、得意になつてたぐつてゐたら、もう、手の方が間に合はないほど速かにからからと頭の上の車のところまで上つてしまふので啞然として見てゐた。

　ろくに雫も滴らない空釣瓶を、やうやう引きおろして、こんどは少し上げてから、わざと突くやうに落すと、どーんと底の方で、水の入つた音がしたから、一生懸命に汲み上げた。細い腕の筋がちぎれるやうに重かつたけれど、この重さが確かな證據だと思つて、安心してからは、全身の力を注ぎながらも、井戸側の向ふに咲いてゐる金絲梅を見て、花びらへ蕋がやつぱり五つに分れてついて散る妙な花だなどゝつまらない事を思ふ餘裕があつた。

ざあッと手桶を近づけて、あける時、もう少しで山の向側へ紅の雲を殘して落ちやうとする遠くから這つて來るやうな弱い光線を送つて、刹那の美觀と言ふのは大袈裟か知らないが、あッタ日がと思はせてくれた。一分の地平線をも見出だし難い周圍の山や、この二三日打ち續いて同じやうな華やかな色あひをして暮れて行く空や、同じ音して流れてゐる川や、もう皆暗夜でも目に浮ぶほど飽きた單一な景色も、ただ一歩移せばこんなに珍らしく映るのかと思つて、汲み入れた水が鏡のやうに落ちついてしまふまで、じつと立つて、淡い紫に埋まつて行くやうなそこより低いところの村の一部分を見てゐた。

水どころかお茶すらやたら飲まなかつた身體へ、幾年ぶりかでコップに二はい半も試みた時の冒險的な心持は、言ふに言はれない妙であつた。いくら冷くつても水は水であるけれど、澤山な三盃と、一滴の薄荷のおかげで、氷に劣らない涼味と、何か酒のたぐゐでも飲んだやうな、興奮とを得て、再び雜誌を手にして外へ出た。

せめて讀むだけでも、頭の痛くなるほど讀んで見たいと心の中に叫びながら、日中の熱を放つて安々と夜の呼吸をしはじめた、夏草の鼻を動かすやうな匂のする徑を歩きながら、二三頁讀んだ。いよ／＼活字の上へ夕暗が降つてくるやうに迫るので、詮方なく閉ぢて數日の後に來るべき運命と一つどうかして戰かつて見たいと思つた。わづか一時の薄荷の刺戟かしれないけれど、身に不相應な強い心が起つた。雜誌は言ふまでもない新文章である。

刺戟されて一氣呵成に書いたと云ふところが、却つて此文章に新しい呼吸を吹き込んだ、精神の跳躍は確に能文の一條件である（略者）相變らず嬉しい響が在る。この人は思つた儘をなだらかに書く癖があるので、一寸見ると乾いたかいなでの描寫のやうに見えるが、嚙みしめて見ると甘い滋味が齒をついて出て來る。盡きせざる未來の發展に多大の望を囑しておく。（白羊）

○星（地）

大分　あかき花

きら／＼と銀の玉をまいた樣に、青い梢の葉がすみきつた月に美しう輝いてゐる。學校の先生は此の樣に明るい夜は、床にゐるのが嫌だと仰有つた。月も好い！清く美しう光りを散らす月を觀るのも嬉しい!!

けれどもスヰートな、面白い、夢の涼み臺に扇の音立てるのも樂しいものを、何故に厭だと仰有るのだらう先生だもの一きつと美しい敷布ものべてあるだらう?!柔い寢臺も揃つてるだらうに。夢！夢！嬉しい聲だ。樂しい囁きだ。この聲を、姫百合ほゝ笑む青い／＼野に座つて一慕はしい○○樣の文机の上に載つた、涼み

みの調べを、月だにもれぬ茂り重つた樹木のかげに、立つてきいたなら、數知れぬ悲哀も憂愁も逃げて終ふだらう?! すや〳〵と愛くるしい眸をとぢた幼子の夢！ほうづき赤き庭に立つと、何かしてその汚れなき夢を知りたいと思ふ。私も幼い時はあつたのに、無心に眠つたまゝ笑つた事もあるだらうに、……何故に覺えてをらないのだらう？母樣に問ふた事もあつたが。母さんは何ともいばれずに、微笑まれて穴のあく程私の顏を見られた。私は恥かしくて何といつてよろしいやら、茂つて夏草の中に針拾ふ心地になつて、



あさがほ　青森　立花とも子

しげ〳〵見返した。同じ幼子でも、其の夢は違ふだらう？メリンス友染のふとんにうづくまつて微笑む時と涼しい座敷のハンモックにゆられた時とは。私は幼子になつて見たい！甘い戀の夢みる若い心にもなつて見たい!! 姫百合の樣に紅い唇をもるゝ溫い呼吸の女になりたい！

今夜の樣に月の好い夜は野の花も、若い男女も、さびしい、私も冴えた月には見とれてしまふ。青草の露にぬれた中のさすらひ！如何に興味多く胸にひゞくだらう？淋しげに、弱々しい光りを投げる螢の限りなき愁を、こんな夜生れるのだらう。哀愁！

私の胸にも森の中にも、花の中にもひそんでゐる。私はあらゆる愁を白い糸巻にまきつけて行きたい様な心地がする。胸の烈しい痛みを得てもう大分久しい月日を送つた。この時に覺えた苦痛！十六になつて知り得た人の世のさびしみ！吁夢が戀しい!!!

知らずまに書き綴つた歌反古をくり乍ら、昔の出來事など考へてゐると淋しくなる。スヰートな苺の香が流れてきた。突立つて窓を押すと、若竹の中に月光がかくれてゐて、五色の短册が風になびいてゐた。星の宵とすぐに解る。緋房つけたる風鈴の音がしつきりなしに、更け行く夜のさびしさをさゝやく。樂しい夢に入るのがうれしい！日記なんかよしてそこ／＼寢衣に更へた。星姫がすゝりなくのか、夜風が身にしむ。青新らしい蚊帳がゆる／＼ゆれて、ゆうれいの様に顔をなでた。

此君に將來あらむ(8)
まだ／＼幼い所はあるが、幼い乍らに人を引きつけるやうなシンミりした情趣がある。餘ゴかないおほどかな書振もいゝと思つた。決して永くエトセトラの列にあるべき人ではないと思ふ。(Q)

○雨ふる日（八）

横濱　千鶴子

ぽたり／＼雨はをやみなく降續ける、私は仕樣事なしに窓際に歩をよせた。

戸外の冷え切つた空氣は偉大な突進力で窓の透間から押寄せて來る。凡て潤ひをもつた空氣の中に、煙の出てゐる二本の煙突と、長方形のや、圓形の高い屋根の幾つもが淡く立つてる、白く赤く淡水色と。

神秘的な聖堂の楕形の窓硝子が、青く見えて、スツと立つた黃金の十字架が雨に光つて、いつに無く無限に重々しく見える。雨は横様に吹いて若葉の茂を動搖さして、細い／＼電線を呻吟さして、フイスル／＼と泣いて、そしてくる／＼町中を驅廻つて消えてゆく、——頬の圓い小さな雨粒はいた女のクールヘヤを白い顔に亂れさしたり、イギリス風に裝飾した、ボンネット被た女のスカートを吹いて、そして、身幹の細そりした、牧師風な男の山羊のやうな、黑いモヂヤ／＼した顋鬚をなびかせて……ぽたり、……ぽたり、……雨垂は絶間無く淋い音を立てゝ、地上に落ちてゆく、其遲鈍な響があとからと／＼

ひめ／＼した幾筋かの黑い轍を刻んだ道路は、小石の露出した汚ない地に變つて了つた。

雨はウインドペインにたまつて、小さく波たゝしてる、凡てが一緒になつて、そして驅足をして町を走つてゆく。

ハヨー、ハヨー、雨のしたゝりよ、お前は何處まで驅けてくの？

チヨイプ、チヨイプ、スパローは雨を突切つて、どこ

かへ飛去つたと思ふとまた歸つて來て、皷翼しながら細い小枝の上で搖られながら、ぬれながら、枝から枝へと飛廻つて、絶間なしに啼いて居る。

芝のまわりの小徑の赤い〳〵女の戀の心を語つてる樣な、チメリヤや、しだらない女の樣なアジサイヤ、淡紅色イキシアも、ぬれ〳〵て沈滯な色彩でふるへてる。輕い風は戰慄いてゐる眞紅のバラの面をなでゝ花から花はキッスを續けてる。花壇の花は頭と頭とすり合せて泣きながらさゝやいてる。

インジゴーを溶した樣な南の國の、軟かい天地を連想させる、棕櫚の切れ〴〵の綠の葉は細かい漣を起して慄へてる、サラ〳〵の葉擦の音が雨の中に響き渡つて附近の深綠の濃い山も、森も麥畑も、忍びやか晞噓きしてゐる。

灰色なしかめた空のその底にひそむ、不思議な强い力よ!

銀の線條は、劇烈にがらす窓に打ちつける、音となり點となりまた線を引いて……。

横濱だけにハイカラも本式に來てゐる、下手な散文詩のやうで、ぽつん〳〵と切れてゆく文章だけれど、苦心は大いにしてある、のびすぎたダリアの莖のやうに、ひよろ長くてよろ〳〵した文章よりは好いかも知れぬ(S)

内容の虚しい極めて淺膚な文章ではあるが、斷片的には中々すぐれた清新な句が盛られてゐる。この點が作者の長所でもあり、やがて短所でもあると思ふ。願はくば此人によつて、もつと徹底した、統

○晴間の夕

京都　しづか

私は又何時もの樣に柱にもたれてじつと雨霽を見て居る、葉においた名殘りの雫から發するのか、つやゝかに濡れた地上の小石が光るのが淡いながらに透明な光りが漂うて、暗い七重の雲の下にうす明るくひろがつた五月雨の晴間の夕、夢ともなく千里萬里心は遠くさ迷ふのである。濕ひに疲れた花びらの樣に双の袂は重くしほれて、しつとりと物なつかしく腕にまつはる、かひなき膝も柱にまかせておのづと安らかな胸に流れて居た。帶の重さや髮の根のゆるみが感じられる。

遠く行く雲を見つゝ、眼にともつかず、心にともつかず、電の樣に瞬間にあらはれては、瞬間に消え去る、ある美くしいひらめきを見る。

水の退いた後の黒い河原の石にやゝ惱ましげに、河下の方へ一樣になぎたふされた雜草に肘つく樣にして咲いた月見草の黄な面輪。

軒燈に灯の入つた計りの夕暮の街、兩側の家並の瓦の數も明らかにみとめられる、ト奥ふかい商店の柱に白く鋭くかゞやく姿見、白刃の樣にさつときえて、し

したる様なみどりの森、たゝずむ私の袖も裾も息も靑くてりはえる。遙かな奥の小路を曲らうとする少女の赤い帶がちらと見えた、それも束の間。

椋の木の蔭に小供が四五人遊んで居る。幹は二抱へに餘るだらう、その眞晝の地上にひらげた蔭はなほ、幾千幾百の人を抱くに足る、そこに小さくかたまつた赤い頰黑髮、帶の紅と着物の青と、ふとその中の一人がつぶらな眼を上げてじつと私を見た、つぶらな眼赤い頰、人込みの中をすうつとぬけ通つた一條の匂の様に、物なつかしいやはらかな感じをとゞめて消え去つた、さながら森蔭を行きつゝも梢の隙に見る月光の様なひらめき、いづれもかつて野に街に我が得し印象である。去年のもあらう、今年のも、一昨年のも、引つきりなしに現れてはそれからそれへと移りうつり消えて今淋しいうつゝに私は一人取り殘された。よろこびの影も悲しみの影もそはぬ、かつて行きずりの道に我が見流せし事實はひらめきのそれよりも、更に更に淡いものであつた。遠き對岸の風物をそのまゝに映ずと云ふ伊勢の海の蜃氣樓に似たる我が胸よ。

雨の音わびしき日毎、心は悲しく伏し沈みて、深き灰色に閉ぢられると、束の間の晴間にも夢を追ひ夢をもとめて、止まぬあはれさ、母は我によつて生きたりと云ふ、強ききづなの如くすがらるゝ、身も心はなほ若く幼く淋しいのである。笛の音もせぬ、話し聲も聞えぬ、凡ての物のひらきから忘られはてた様な地上は、死んだ様にさびしい。

葉には葉の蔭ができ花には花の蔭ができて次第に深いくらがりに落ちて行く。

私はやたらにシムボルめかす、たとへば小川未明の作るやうな文はきらひである。文字は花やかだけれど内容は案外貧しいやうに思はれるし、一度は足を入れてもいゝ、長くさまよふべき境地ではなさゝうである、奈何。が「戀のうた」といひ、これといひ何といふ目覺しい作品であらう。語を寄す監獄の裏はやぶさよ、君の强敵出現せり、つとめよや。（板東太郎）

如何にも能文には違ひないが、前の戀のうたと云ひ、此作と云ひ、性が何處にも現れてゐない。然なくても女性ならえらいが、男性なら困つたことだ、疑を存して置く（辭若）

○本郷通り

本郷　古那夢

笑つてさへ居れば人は「幸だ」といふ、泣くべき運命に坐し乍ら笑つて居る、これが私の性格である。私の過去と現在が「灰色だな」と振りかへることさへ許されな

かつた境遇が人を欺いてまでも笑つて暮させた身の上が、この性格といふものを生み出したのである。

こんなことを考へたら、切通しの坂を半分程登つた時、高い塀の内に日ぐらしの聲を聞いた。眞赤な夕日が斜に廣い坂を照らして居る。それが前に行くゴム輪に反射して鋼鐵の様にきらつく、追ひ越し追ひ越し行く電車の運轉手がまばゆさうな目つきで、ハンドルを握つて居る。唐人まげに結つた白い顏の女が右の手に持つた撥で左の手の平をピシヤ〳〵叩き乍ら線路を渡つてこつちへ來る。凄いほどの目でぢつと見たまゝ行き過ぎて仕舞つたが、私は妙に此女のとが氣になつてふり歸り〳〵坂を上つて行く、散漫として浮ぶ唐人まげだの白い襟だの、赤い帶を勝手に垂げたり除つたりして居る内にいつの間にかかねやすの前に出て仕舞つた夕ぐれの足は忙しさうに人の胴や頭を運んで居る。



電車待つ女　靜田　吉岡けん子

私は電車と緣を切つた右の通りへ曲る。刻々靜まつて行く靑い空の上皮に、薄白い雲が刷毛で擾拂つた後の樣に筋違ひに長く浮いて居る。そして今迄紅の運命の內にまき込まれて、狂ひ廻つて居た多くの人の上に、薄い〳〵羽二重を覆ひかぶせて、だん〳〵と別の世界へ連れて行く。板橋通のガタ馬車の馬が、背に痛い鞭を受け乍ら、眞黑な運命の下に服從して居る。

角帽と二本線が此通りは己れのものと云つた樣な顏をして肩で風を切つて步いて居る。通りすがる度に汗の臭が鼻柱をゆする、古本屋の店にもそれ等の類が電燈に脂ぎつた半面を照らされ乍ら、うろ〳〵して居る。本鄕通りは湧きかへる血潮の海である、朽ちざる墓に寢ね殘れる名に殘らむ爲に動搖して居る若い男や女の活氣がそこらへ一杯である。若い……若いと云ふ名にこそもれないが私は――あゝ私は……灰色を包むだ紫の風呂敷包を、大事さうに抱へてトボ〳〵步いてゐるのがつまらなくなつた。

氷と書いた涼しさうなのれんが、風に吹かれてちらちら動く、煙草屋の白熱瓦斯の下に、眞白な顏の女がぢつとうづくまつて居る。まるで石膏の化物の樣だ、葉茶屋の店に番頭が往來をにらみ乍ら茶をすくつて居る。何げなく私は薄れ行く空を見上げた時、後から「としちやんじやないのエ？私本鄕へ行つたの嫂さんがまつていらしつてよ、早くお歸り、また叱られるといけないから、さよなら」あら姉樣―と振り返つた時は、もう二三間も先に。私は兩方の袂を握つたまゝ、胸に波打たせて飛ぶ樣にして暗い細道へ入つた。門の前へ來たとき、ほつと一息ついた空には薄い月が高い梢の頂にぬつと出て居た。思ひきつて小門をくゞつた時、ホヽといふ華やかな笑聲が聞えて突き當りの障子に、大きな丸髷がぽつとうつツた。私は格子に手をかけたまゝで入ろうともしなかつた、涼しい夏の風に浴衣の袂をなびかせ乍ら……。

たしかに熱がひそんで居る。人を馬鹿にしたやうな態度も氣に入つた。も一歩進むとえらい文章を書くだらう、その時が待たるゝ。一體自分より人格の低い親、自分より智識の劣つてゐる兄弟にたゞ長上なるが故に從はねばならぬほど味氣ないものはない、無論どうすることも出來ないけれど。（坂東太郎）
坂東太郎氏の評に異議なし（S）

○緋葵

蛾

宥して下さいませ、先生、靑い色の天地がしだいに暗く變てゆく〳〵、あのゆく春の夕の告白は、何のためでは御座いましたらうか、風もないのにゆらぐ前髮は、卓にふるゝばかり、御顏を仰ぐことも出來ず、悔の淚に身も心も淨海に流され運ばれたかと――それは只四五日のてと、消えたと思つた

惡念の、いよ／＼燃えさかるこの頃は、宥すと仰有て下さつた神に代て、宥してあげると涙にかゞやくおんまなざしでみつめられたあの面ばせを、思ひ浮べるも恐ろしく、制し難い煩惱に、日となく夜となく苦しめられて――宥してと申す言葉さへ云ひ得ないので御座います。

何物をも秘さぬ赤裸々の自分――その一部分を御目にかけた師の君――先生をまでまたあざむいて、なすまじき事をしましたのは何等かに刺戟された一時の感情と云ふのぢやなくて、生れながらに持つてゐる悲しい性故で御座いませう。制へに制へ忍びに忍んでどうかして現はすまい、人に知られてはならないと意地を通して來ましたのがもうこの頃は堪へられず疲れて、いはゞ餓ゑた人が食を求めるやうに手あたり次第にむさぼらうとします。邪念の充ちたこの身體、これでがやさしい母を持つかとはかなさに泣きたうも御座います。

あゝ先生、到底救はれない身御教へ甲斐のない者をあはれんでやつて下さいますか、にくんでやつて下さいますか。



結婚前　岩手縣　黃川田加代

先生の御手であの白刄でこの胸をつきとほして惡血をとつて下さいませ、なまぐさい毒氣を含んだ若血をしぼつて下さいませ。

女の身のあられもない、人を誘惑し共に魔道に引き入れて焦熱の火にやかさせる、このやうなすさまじいあさましいこゝろを、先生、何と御覽下さいます、どこまでもその人の味方同情者となつて共に罪に泣いてやると仰有る厚い御情にも、もはや、おすがりすることもかなひません、さればといつて一方には Passion のとりことなりも終らず、良心（もと云ふことが出來ますれば）の責にさいなまれてつらいその日を過して居る。かつては敎へ子であつた私を――あゝおん胸の片すみに殘しておいては下さいまする、すてゝ下さい棄てゝ下さい、すがりついて思ふ樣泣いて泣き死に死たいこのむねをおつとおさへてすてよと云ふは――つらい、苦しふは御座いますけれど、せめてさうでもしていたゞいたらも少しどうにかなるでせうと――

もがきにもがいて暗い道をまつしぐらに驅け去らうとする乙女をば呪つてやつて下さいませ、嘲つてやつて下さいませ、決して決して一しづくの淚も注いでやつては下さいますな。

噫では先生さきへいらしつて下さいませ、祈る資格は御座いませぬが――

書きぶりが稍女子文壇式にはまりかけてゐる、氣をおつけにならぬと狹い天地に陷ります、何處までも自分の心を自分の文でお現はしなさい（Ⅱ）

思索的の文章は、兎もすれば淺薄な小乘的の議論に落ちる。この方面に筆をつけやうとするならば、更に勇猛精進の大覺悟がなくてはならぬ、才媛希くは三思せよ（Ⅹ）

○北の國にて

越路あけぼの

繪硝子の南窓を明けて栗の花の白いのを見乍ら、いつも母様を偲びます。母様、母様、呼んでは淚が溢れ出ます、拙い運命に生れた子だとお仰つて下さいますか、強いおこゑと其のおやさしい瞳とを思ひ出しては狂せんとする心を、わづかに鎭まつてまゐります。

母様、はるぐ〳〵と越路の空にさまようて、さびしいわが影に泣いた時はありませんが、辛いさだめをひたすらに憎むのでございます。憎んでゆく私の心は以前の私ではなかつたのでした。二里を隔てた北の海の、其の暗い淚の音はきこえませぬ、私が來て以來五月雨の暗い空は、わが心を暗く包んで降り泣くのでございますもの、幾度も枕をかへて、つひに床の上に坐つた夜も度々でございます。

輕卒に信じたとは思はなかつたけれど、今になればそれがわるかつたのでございます。男が泣く淚はもう聖いとは思ひません、眞情が尊ひと云ひはつた私を哭て下さいますか、男の心はなぜ浮調子に出來てをるのでせう――世間がわるいのでございます。きのふの警

をけふ消滅するのをゆるすではございませんか、——苦しい悲しい思ひにくれたる時、鐵道線路に汽車のひゞきをきく時、私の胸はときめくけれど、たまらなくなつては殘忍な其人のひざに面を伏せて、だまつて心を鎭めます。切角美しう大きく育てゝくれた母様の子は、つひに惡運の極度に走りました。

情ない私の身を辛い私の心を眞から痛んで下さるのは、母様、母様！たゞひとりの母様のみでございます、それを思へばどうして死などを考へられませう——げに死は最後でございます。

別々の心をいだいた同じ天地に生きようとするのは如何にもつらうございますが、どうしませう、どうしませう！私は……私は男が持つ輕浮な心が持てませぬ容るされぬのでございます。お母様！ゆるして下さいますか？この不孝な娘を——。

遠くに北のくにまで泣きに來たのではありませぬ、母様も苦しめよと送つては下さらなかつた、あの強いおことばは今も耳にのこされてをるのでございます。必ず神經を起さずにとお仰つたのも忘れませぬ。

殘酷な人の心に活きようとするには、あまり私の心は弱くはありますまいか？

たまらなく思ひつかれてきて、目が眠くなつても頭が氣狂ひさうに亂れます、熱します。

お母様、私は決してみすぼらしい自分の影を淋しいと思つて泣いた事はありませぬ。殘酷な人の行爲と其根底のない心とに泣かされますが、けれど時には不思議な自分の運命を顧みては恐しい夢のやうにも考へられます。弱い！とお叱り下さいますか——。

お母様の爲に活きようとした私の身は、今何の爲にいきてゐるのかわかりません。

越路の夏も青葉のそよぐを見る計りでございます。

此君、土佐より越路に越えても、なほ激したる感情は冷めない、あゝ情の子よ、不幸なる君の爲には越の白山も、北の海も慰むるところはあるまい、君の心いつの日にか平かならむ(醉茗)

あゝ何ぞ君の音の疲れたるや、一讀潸として淚墜つ。予は白日の下に曝されたる冷たき「情」の殘骸を見るに忍びず。(白羊)

○我生命

秋月薪江

熱し易く、さめやすく、怒り易く笑ひ易かつた私の心も雄大な青葉の世に入つて少し落ち付いて來た樣である。耳の所爲だと母は云ふ、然うなくて什うしますとも人は云つた、無意味〲願はくば何も語りたくない、何も聞きたくない、一生涯の努力、一生涯の痛苦は何を以て死んで行くか、萬の人に捧げられた玉串が何になる、裂帛の調歔欷の律、心腸を掻むしる樣な樂の音に送られて草にかくれた御祖父様は果して何れだけの慰安を得られたか、安らかに眠れる人は幸福よ。

詩

河井醉茗選

○圓い綠の山（地）

越後　星野かへで

肉附のよい少女の肩の様な！
まるい山の頂きよ
何をさう嬉しさうに
輝いて居るの？
降りそゝぐ黄金の日光に
今日ばかりに面ばゆげもなく
いつも霧のうすぎぬをぬいで
青い空と接吻してゐるね
だけどお汝は薄情
空がくもつて灰色に成ると
すぐ輝きはなくなつ
老けた四十女の様な！
生色のない青褪た色して
少し雨でも降らうなら
すぐうすぎぬを被るもの
今日ばかりはいつまでも
いつまでも接吻してお出
お汝の姿の見えない日は淋しいから

女性といふものは現れてゐるが、山といふものは現れてゐない、併し斯ういふ主觀の詩にそれを咎めることは出來ない（評）

○銀の雨（人）

東京　琴子

粉のやうな花が音もなく
垣根近くで散る時に
銀糸のやうなはる雨が
ものやはらかに降りかゝる

黒い髪もつ女なら
椽のはしらに身をよせて
歌よまうとて花もみよ
結んで垂れた紫の
リボンのいろなまめいて
せきちく色の帯の上に
なみをうたせたくろ髪の

戀に死ねない女なら
いつそ默つて石のよな
つめたいからとならうもの

どこへ行くのか果しらぬ
旅も面しろさま〴〵な
世はみちづれのおかしさも
心なぐさみみちばたの
色とり〴〵の花に似て

ほのかに沈みくれてゆく
春の夕のわびしさの
中にてもる神秘ぞや
少女二十の血をきよら
泣いて流して死なうよと

思つてゐることゝ、言葉とが矛盾してゐる、此詩の格調は孰れかといへば輕い、滑らかな快い調子である、處が内容は烈しい青春の熱を歌つたものだ、お汁粉を盛るお椀に酒をついだやうでをかしい、要するに理解力と感受

力は相當に持つてゐる人だが、詩に經驗が伴はない所爲であらう、此次にお作りになるなら强いて形式に囚はれずに、思つたまゝを口語か何かで緊縮して表現して御らんなさい、却て好く出來るでせう、此詩で注意を惹いたのは第一節だけである。(評)

○暗と女と

港の女

獄舍——
若き女の肉を食み
血をすゝる——暗と沈默
なまぬるき感觸をもやる
うゐたる怪獸の如き暗と沈默
今——白晝の恐怖にみてる獄舍——
夜のいとはしさ——あゝ晝の物うさ
虛無に求めしむなしきものよ
凡ての物に飽はてたるいたましき
女は
光を見んとてか
格子のほとりによりぬ。
獄舍を周る
午後の白き沈默——白き花
甍を辷り落ちたる日光に白きサフランモドキの光れるうとましさ——恐しさ
女は神經を傷つけられしかあはれ——
その眞白き花のかゞやき——
暗の女!



濱の眞晝　筑前　坪井芳子

極端な暗黒を歌つてみるのも好いが、文字を並べる努力に傾いて、心の虚しいのは好くない、更に〳〵脱却したる自覺を要す。(評)

○晝

西島　枝折

ぢろり—ぢろりと道端の赤土
わけもなくこぼれ
晝顔の花に、うす黒き蝶みぢろがす
悲しき白光痛ましきまで羽根に輝りつく。
見渡す限り打つゞく畑中に
我もまた草取りをれば、悲しさぞ増す
稗の葉豆の葉の黄なる—うめきて
よれに、よれに、よれよれに。
弱りゆく午下り
其がかげに息つく三角草の
またゝく如き、ひらめき夏の午光り。
ぢィ　ぢィ　と彼方榎の木の蟬の聲
風無き畑の午下り、
詮すべもなく、暗き我等が安らひに。
身をば横たふ野邊にさへ
焚かん許りのするどき光り、
まばゆく遠く——
明るく晝の野を掩ふ、
忙しきまで蟬ぞ鳴く、
悲しき心の午下り、

技巧はいゝかげんにまとめて了つたものだが心持は一寸傳へられてゐる(評)

○或る日

同人

時たま我のまどろめば
無限に　無限に打つゞく
我憂愁に連なりて、
黄色の目玉の猫がゆく
赤い足のうら見せて、
わが肩の上を越えてゆく、
斑猫の尾の氣味惡きまで
長たらしいのが氣になつて、
黄色の目玉のその猫の
柔かい毛も赤氣になつて
柔かいその足のうらが恐ろしい
憎らしいまで落ちついて
わが肩の上を這ひまはる——
又もつゞきぬわが憂愁よ………

作詩の態度にまた誠實を缺いてゐる。(評)

○日ざかり

薪江

くわっと照る極熱の
日に悩む赤煉瓦
血と汗と油とにじむ其が面
ちりくとちりくと
日はまじろがす
黄に濁る瞳を明けて、日はじまろがす
其脇の公手は深くうなだれて
傷手に沈默す
あゝ熱湯を吐く横町の
ちやるめらの聲——。

唇と瞳

離れにも許さぬ

火の様な愛を胸に秘めし
君はゝと微笑めば
紅き花の唇より
歌ぞこぼるゝ
紫水晶の御瞳
さつと流れて
腕の星を射る時
詩の律は消ゆ！

○薬室

懸谷かず子

劇薬
普通薬
棚の文字のいたくしき。
雛妓の白き肌の如き快よき薬品の匂――
無言のまゝ、
一人は水薬を瓶に、
一人は粉薬を忙しげに紙に包む。

窓ぐはの明るき窓、
すり玻璃の斑點のなげき、
看護婦の白衣に反射する光線のゆらぎ。



桐の花　岩手　黄川田かよ

○白き色

信濃　二葉子

夕暮華かな光線の眞白き壁に映ゆる美くしさよ

あたりにせまり来る淡闇に
光による壁の色をすかしすかして纏上げし白き衿よ
今日しも祝賀の式を終へてふと鏡臺の前にたつた時

おどろきとおそれとは潮の如くよせ来りつ
只一時のつくろひに――いつはりとは知れど
おほひたる下には友禪の色鮮やかにひそむ
あゝ白き色よすべてのものを包まんとする白々色よ
光は肌を透してすべての色をうつす

眞昼の強き光線にうなだれた柔き葉は
静かに頭上げ白き花はほのかに匂ふ
スイスイと伸びたいねの淺い緑をゆるがせて
かすかなるさゝやき傳ふるそよら風
心急ぎつゝ

悲しさ
ピリピリと心地よき絹の破れる音白きおほひを
取つた時
赤い色はほゝ笑みて
あゝそのほゝ笑みのおそろしさ

○海

淡路　内海千鳥子

薫風さし入る窓、
若きおみなの潤ある瞳、
夢みる如きまなざし、
淡紅の片頰を柱につけ何物かを見つむ。
せゝらぐ小川に耳かたむけつ、
楽しき音楽を聞く如面かゞやきて見ゆ。
播州路の空！
雲の峯おそろしげに立ちてあり
下ゆく帆かげ船西に東に走るを眺むる時、
白鳥の舞ふ如飛ぶを見る間の歡楽、
常にあるを覺えず。
かくて永久に女神の頰の紅あせざれ！い
うるはひある瞳のかはらざれ!!、
變らざれ……………………
若き心…………姿…………

○暗い夜

近江　わかば

暗い夜
眞黒に茂つた木立
星も見えない暗い空
空氣は重く／＼沈んでゐる。
木の葉は死んだ魚の鰭のやうに少しも動かない
ピピ、ピツ
激しい汽笛の音は靜かな空氣にひゞいて悲しく
打顫へてゐる——
あれ／＼また／＼
危急を知らせる汽笛の音——
轟と凄唔い唸り聲を立てゝ
大蛇のやうな汽車は止つた
つと飛び下りる煙火の光
光つた線路にこびりついた黒い血潮 あれ／＼ま
た煙火が走つてくる。

○夕の別

知多　榊原　銀子

瞼を閉さて見送る時——
心は燃え胸の脈は皷を打ち鳴す如——
——悲しの汽笛が響く——
思を乘せて行く影は何處に？
淡くかすかに、
黄昏は來り、空は黒幕に閉さる
聞ゆるはたゞ響のみ、影は見えず……
云ふことの浮かび出しに項垂れて立つわれは

絶えず朦朧とした幻想を心に寫す
寂し
われは世に只一人呼吸つく
あゝ止みたる雨は甦りて
また地を鳴かす……、

○白晝の香

廣島　佐藤喜美枝

濃やかな青葉にともすると日の强く ふる五月の
白晝——、
盲ひた女が新らしい白木の欄干に双手を重ね
靜やかにものゝ香をかぐとき——
夕べ咲いた月見草の甘つたるい香は、
ふら／＼と其くづれた花形からまよ
ひ出て、ゝさもなつかしく
さながら幼ない日の夢を想はする樣に、
强い白晝の光の中をぬすみ／＼たどり來て、
全てを忘れ去りし空虚の胸にしみて行く——
心やすけき白晝の恋。

薄暮

栗の花はづかに白く柿の葉は濃き綠
あゝいま、おもむろに
たそがるゝ青き淋しさよ
歌は起れり
彼方の丘に、女のわかき聲よ



和歌

與謝野晶子選

○(天)　神戸市　たんぽゝ

うつろなる戀をばなげく我に似て泣きくづれたる磯の浪かな

○(地)　本郷　平塚白百合

糊つけしてはき單衣をかづく時節に住むかと淋しさの湧く

○(人)　山梨縣　鷹谷とみ子

淸らかなるわが魂はやるせなきあてがれのため泣きてさまよふ

佳作

○　相模　中村貞子

河ばたのあざみの花に羽おきてねむれる蝶に白き露ふる

○　神戸市　川口登茂

枕べに藥の瓶をならべつゝ悲しき歌を慰めとする

○　横濱　石引なほ子

うたゝ寢の夢よりさめて嗅ぎよりぬがらすの鉢のくちなしの花

○　岡山市　田上桃女

何花か夕に咲きぬわが心その花のごと白くかよわし

○　大阪　大關里野

柔かき瞳持つ子は罪ふかしそのてらしめに君を賜ひぬ

○　横濱　石黒香代

しのびつゝ逢へる二人の語ること甘きに過ぎて涙あふれぬ

○　千葉縣　松崎きよ

我ばかり悲しきは無し冷たくも夢よりさめし戀のむくろか

○　京都市　島本久惠

日の早く入りぬる如く飽かぬまゝ思ひのこして別れし夕

○　美作　草苺

海邊より人は文しぬ夕暮の浪を聞きつゝ君を想ふとある

○　福島　春子

うつくしき花のいく枝を手にとりて君の來ませる霧深き朝

○　京都市　千代子

夕風に港の蘆のさゞめきて海の濁れば船かへりくる

○　秋田　愛

いつしかに若き命の誇りなる血汐は冷えて髪の亂るる

○　甲府市　山田喜江

笹舟のゆらげば子等ははやすなり水の底より月のうかぶと

○　大阪　むら子

大長寺小春治衛の戀の塚日のくれぬればかはほりのとぶ

○　下谷　小原あい子

ひたすらに心は叫び炬をふりて走るやうなり戀をつくれば

○　廣島　平田美也子

戀めかし男あまたにさゝやくはわかきわが世をいはへる言葉

○　神田　石田美子

あな大事をとめ老ひぬと二十二の秋にあひたる愕きごころ

○　麹町　島　葉がくれ

琴をひき花もてあそびことさらにきらきらひかる日をおくれども

○　近江　鈴蘭

亂醉の男が三味を彈くかともアカシヤの木に蜩のなく

○　宮城縣　齋藤靜子

二三寸葡萄の蔓のゝびたりと足つまだてゝ云ふは誰が子ぞ

○　北海道　海姫

其昔源九郎などこしと云ふあぞの海邊の松にすゞみぬ

○　沼津　舟の子

あさましきこのなげやりの心にも髪の落つるはさびしかりけれ

○　琴子

狂亂かあはや女の一念の裂けて火となり空も燒くらん

○　伊豆　西島枝折

この上に更にも君に忌まれんと好みて泣ける我ならなくに

○　宮城縣　沼倉冬子

月かげの裂けて散るかと思ふまで高き空より來る螢かな

○　岩手　ひなげし

あゝいつか長き沙漠の盡きぬべき甘き清水をひたてひて行く

○　大阪市　しづ子

涼風や湯より出でたる夕ぐれの眞白き肩になびく黑髮

○　王子　竹村壽尾

いく年か忍び泣きする少女子も思ひあまりて文多く書く

○　駿河　勝又和子

めでたくも血潮をどりし若き日の思ひ出に咲くばらの花かな

○　會津　桑原仙子

泣きながらわれをながめし若人も名を獲んために戀をすてゆく

○　大阪市　夢みる子

けがれたる世のあさましき男の子らはをとめ心の價しらじな

○　大阪　樫内あい子

濱寺の松間を出でゝ汝あみぬさざなみも無き清き夕ぐれ

○　加賀　村田糸子

清らなる底にぞ見ゆるわがかげに多くおとらぬ白菊のかげ

○　青森縣　朝山まつみ

夏の夜もいといとはしくはしたなくなりぬ舞妓のませし所作事

○　深川　春川花舟

たそがれに濱よりきたるすゞ風はながき秋と黑髮を吹く

○　牛込　環の花

かたむける軒のもとにて蚊遣たき子をば眠させぬやつれたる人

○　王子　大浪せい子

かりそめの病にだにも涙する少女心のあはれなるかな

○　豐後　吉田散る花子

この宵も吾れのことなど思ひつゝ淋しく笑みていねたまふらむ

○　廣島　後藤壽美枝

泣く子等は皆つどひこせ陰れ家によろしと見ゆる大銀杏かな

○　岡山市　石井明子

酒倉の赤き煉瓦の壁たかくつるのばしたるつたの男々しさ

○　宮城　馥子

つば廣き帽をかぶりて庭鳥の雛に餌やりぬ柿の木のもと

○　陸前　浮草子

みどり濃く匂へる草に白銀と黄金を散らす秋の初風

○　陸前　小岩やなぎ

月光を前よりあびて物思ふゆかたの人に夏の風吹く

○　茨城　田村りき

さらぬだに悲しき秋の夕つゆにあはれ萎れし菊のひと本

○　京都市　戸田光枝
白百合の花の香まじりしみじみと夏の夕の涼かせぞ吹く
○　いばらき　咲かぬ花
ともしびに面そむけて泣く人の片頬の如き白百合の花
○　福島縣　船田豊子
小雨ふる木の下陰にぬれもせで幼きむれの遊ぶうれしさ
○　信濃　へに百合
神たちが遊びするでと思はゆる青野のはての白雲の峰
○　長崎市　永井主子
磯づたひ青き日傘を傾けて貝など拾ふ美くしき君
○　失名
蘆の葉の青くなびける澤水に溢みだれて涼しき夕
○　宇都宮　松井鹿蓮子
泣きうみて寢入れる小さき妹の片頬の涙うつくしきかな
○　三河　磯谷とも江
一つ家の二階の窓を夕榮のしばし染めたる茜色かな
○　大阪　田野靜子
あはれにも夕の風にまじるなりあしひたる子の鳴らす笛の音
○　播磨　伴とき子
醉ひ臥せる我の寢息をあさましと幼き身にも思ひぬるかな
○　大阪　岡本春子
うつくしき花びらあまた散ると見て船にあそべる晝の夢かな
○　東京　若菜子
夕まぐれひとり米など洗ふ時身の行末に涙ながれぬ
○　土佐　穂山春水

おばしまに短き夜の更けゆけど君は來まさず月かたぶきぬ
○　美作　水田邦子
をろがみて廣前すゝる大神の八幡の宮の夕ぐれの月
○　美作　美津田
失ひし戀をかなしみ過ぎし日を嘆ける涙は乾くまもなし
○　三重縣　駒越くに子
底黒き淵のよなかに小さなるわが運命は漂へるかな
○　岡山市　立岡房之
くらがりの隅によりてすゝりなく少女と聞きてなつかしきかな
○　長崎　門の草
若き日も戀無くて經しかの女清きを誇ることの寂しさ
○　土佐　はぎ子
一人來て一人にて行く我さだめ淋しけれども如何にかはせん
○　越後　田巻てい子
青梅を食むことさへも叱りしが九つにして弟は逝く
○　京都　九鬼きぬ子
見たまへる夜ごとの夢も如何ならん故郷に病む母ぞ戀しき
○　伯耆　新田文子
我が戀の終りは來る大空を一人仰ぎて寂しく笑まし
○　下關市　木本鶴子
わりなくも別れはせまるいざせめて此一夜をば物語りなん
○　廣島市　香川玉代
夏草はおのが時とや茂るらむ霜にあふべき秋をおもはで
○　栃木　蘭生子
物おもふ重き心を覆ひつゝ晴るゝ方なきさみだれの空

○　鹿島縣　夢露

しめやかに軒に雨ふりくるる日にひとり思ひぬ己がゆくゑを

○　和歌山縣　宇田すが

紫陽花とあだ名をもえてし少女子もとつぐとかきくふるさとのこと

○　麹町　牧野銀杏子

萩の月君と別れて芽の葉に白き露おく野の道をゆく

○　富山市　あけぼの

かぎりなき寂しさをたゞ歌よみてなぐさめんと思ふあはれさ

○　和泉　田中きよ子

水道の水のしたゝる音すゞし街の小路の夏の夕ぐれ

○　和泉　金田ふみ子

くち舟の甲板に居て月を見ぬもの思ふことなきに似る人

○　山口縣　姫小松

快く眠れるちごと静かなる蘆間の水と相似たるかな

○　新潟　星野かへで

川の上に白く光れる月かげをわが影の如ひとり眺めぬ

○　大阪　杉山かし

うつくしく色變りゆく紫陽花は處女の如くほこらしきかな

○　岩手　清子

雨の打つ竹の葉音のさびしさに小猫を抱きて柱にぞ倚る

○　横濱市　金井きよ

長き夜の黒き衣を脱ぎ放ちましろくなりぬ曙の空

○　大分縣　あかきはな

新しき愁に悶ゆ夏の日のくるしき如く人を戀ひつゝ

○　名古屋　加藤[illegible]

まばらなる竹の葉垣に凉しくも薄月さして夕顔の咲く

○　前橋　みどり

ほゝ笑みて默せる君よくちなしの花にかよへる白きおもざし

○　香洋子

夕暮のすだれをわたる凉風にやさしき君が袂さへ見ゆ

○　越後　貞子

願くば野末の露に身をかりてさゝめく星の聲を聞かばや

○　大分縣　小原落子

凉しくも木立の奥の君が家水の音して栁の露散る

○　長岡市　秋月鈴子

すさまじき稻妻のひかり天地をかき曇らして荒き雨ふる

○　仙臺　橋本政子

夕立の名殘凉しき庭の池石橋にきて蓮の花見る

○　下澁谷　横谷ゆき子

入梅の雨降りつゞきたる夕暮の日に見てうしやどくだみの花

○　下澁谷　倉増すゑ

我心知る人もなし山寺の朝の木魚をたふとげにうつ

○　大阪市　小泉貞子

大いなるかなしみ事もそれとなき笑もてつゝむはかなき少女

○　佐渡　わくらば子

手文庫の中に秘めたる君が文あかずながめてゑめる五とせ

○　信濃　三村

よく笑ふ人去りし後ちりはへるもの、本など見るはさびしき

○　大阪　田野しかよ

共にあらぬ母とかたりし夢さめて窓の上なる月を見るとき

○　大阪　浪子
荒れはて、夏草茂る我が門をいで入りすなるかはほりのむれ

○　北海道　古館圓江
戀といふ宇宙にすめるわれなりと思ひぬ髪も細らぬ十とせ

○　宮城　長谷川紫葉
萱の月僞捨てられて忘れえぬ女の戀を見るここちすれ

○　宮城　齋藤なよ子
大綱引く音のきこえて菅沼の水の底より涼風ぞ吹く

○　岐阜縣　中島幸枝
病める夜は虫などたかる灯影さへ我を呪ふと見ゆるものかな

○　越後　幸子
秋の日や井づつによりてわが影を見つめてあれば涙流れぬ

○　城南　美露字
はかなきに泣ける泪もかれはてし我世に似たるひるがほと見ぬ

○　常陸　古島花子
うとうとと眠りてさめて泣きつるをさびしく見たる軒の常盤木

○　羽後國　くに子
とらはれに報いんものと思へども一つ二つの歌もかけなく

○　四島枝折
風吹けり小雨のふりて土におつ蝶のなきがら花のなきがら

○　信濃　白瑠
三千年の前に見なれし影のひと月の面ににほふ悲しみ

○　美濃　有本靜江子
尺八の音をおもひて涙しぬ風の唸りの似るとなけれど

○　札幌　秋山みどり
をちかたの島をはなれてここに居る芭蕉の葉色なつかしきかな

○　靜岡　すか
戀つくり物におそるる少女子の心の如くゆるる木のかげ

○　三河　水梓
山いちごうす紅のしる吸ひし暮に吹く泉のしぶき

○　千葉縣　坂本ろく子
月かなしこの若人の泣きに行く濱にあるなりいとほの白く

○　甲府市　濤子
ほのかなる岐阜提灯のかげゆらぐ簷が生みたる水色の風

○　備中　小見山春子
黄はみたる一かたまりの落葉に秋は寂れんとするらむかなし

○　淡島　宗原美津子
少女てふ名は華やぎてあるもののさびしかりけり歌も知らねば

○　淡島　田山清子
銀の鍼もて縫つくらせん初秋の日の風をきくべく

○　茨城　岡田朝花
湯あみして髪すき居ます御姉のはたへに夏の月光流る

○　高知　しづ子
秋に似る蟲ぞなくなり五月雨にかゞみの川のみづまさりつゝ

○　牛込　西村しのぶ
ちらちらと君の瞳の底にして灯ぞゆらぐなれ初夏の家

○　大分市　白き花
歌がたる外にはおほく物言はぬ君とあるとき月は上りぬ

○　信濃　二葉子
戀こそは若き命を咎むるに金砂もてするおくつきと知れ

○　備前　[illegible]谷かず子
一人ならず少女を離ふる故郷の兄見て泣きぬ初秋のころ

○　福岡　すみ子
わがはたち胸のちしほはもゆれどもさだかにいまだ戀はしらなく

○　しもつき
ひそやしの淋しき際にたそがれのあはれもましぬふるさとの道

○　山城　木の花
誰が君のおち葉なるやもの實ひの緒にちれるがいとあはれなれ

○　丹波　大槻房枝
相泣きて別れける夜に似たる月わが髮にてる初秋の園

○　島根縣　山代なつ子
あひよりて手をとりかはすその刹那落つるは黄泉の國なるもよし

○　島根　百合子
われ死なば泣かんと云へどわが骨を抱けと云はばそむけまし顔

○　芝　上口たつ子
かなしきは別れんと言ひ別れ得ず岸の木影にたたずめること

○　石川縣　中西豐子
夜はことに雨のふるこそあはれなれひとりし居れば涙はてなし

○　陸中　大山白百合香
いくそ度とゞめんとすれどとまらぬはうき戀を泣く冷き涙

○　茨城縣　田村紫色女
星淡く光れる空を仰ぎつゝ街のどよみをきくここちよき

○　常陸　久木野花
とおさとの雨の水無月來てぞ見よ野山みどりにけぶりこそすれ

○　赤坂　高力かざし
物を縫ふ時さへ夢を見てありぬ憶するこどのよろこびのため

○　麹町　露木雅子
百合にほふ野の細みちを君と行くいとここちよき夕月夜かな

○　近江　植村ひろ子
五月雨にふるさとの川水あふれわが薔薇の木のおぼるらんころ

○　越後　泥醉
いつの日かこひしと見てし其人の面影のうく夕月夜かな

○　淡路　内海千鳥子
雲の峰播洲なだにわきいづる此頃うれし島の住居も

○　伊豆　渡邊やす
戀人に逢ひ見し夢はうれしくもうくもありけり夜毎夜毎に

○　姫路　[illegible]菜
ともすれば寂しと云ひてすゝり泣く二十四の人病むあまつさへ

○　金澤　くちなし
紫のよき振袖も捨てられてかへり見られずあはれいくとせ

○　渡島　岸浦文江子
あたたかき國をよろこぶつばめの子若き男をよろこぶ少女

○　松前　藤山富美子
夕風を待ちもよろこぶ少女子のうすものに似る矢ぐるまの花

○　渡島　花子
君が文ありと思へば手箱にもむおかるゝ樹のおきふし

○　越島　西須藥久子
いつしかと待てど來まさず夜の更けて松風きくはかなしきものぞ

○　ゆき子
秋の夜に尺八の音聞く家の少女は讀みぬ平家の草紙

散文（其二）

編輯局選

○黴の匂

金澤くちなし

ゆふべ眞夜中に母を起して床の間に活けてある白の鐵砲百合を臺所へ遣つて貰つたのが、夢のやうにもあり、現のやうにも覺える。

ソツト夜具をたゝんで靜かに持つて出て行かれる母の輕い足音に目がさめて、眤と目をすゑると、をとゝひから降出した雨が、今日も又降りつゞいて、狹い我が假の室のうつたうしさ、新たに建つたとは言ひながら、青壁の黴の匂が、ふたりの寢息のこもりと、自分の高度の熱の臭氣と、ゆふべ取りのけた百合の殘り香とに交つて室いつぱいに重々しく漂ひ、只さへ氣の滅入りさうな私のあたまへ、壓へつけるやうに沁み込んでくる。

手を伸して障子を一枚あけると、昨日微か騷ぎの爲紛ることを忘れてあつた雨戸がみんな開け放してあつて、障子をあけると同時に凉い風がサツと兩の胸に流れこんで、お乳のあたりが縮み上りさうな氣がした。胸を蹈かくして、横になつた儘、清い朝風に頰を撫でられて、思ふともなしに、地面に黄色く散つたきんしばいや枝に赤くついたいぢらしい花のざくろを眺めて居ると、いつしか瞼が疲れてしまつて、夢は赤いトンネルをたどつて居た。

不意に我が名を呼ばれて、まばゆい眼をあけると、父が與つ白い湯呑を手にした儘、つゝ立つてゆらしやる、湯呑から絶えず漂うてくる[illegible]

性のくずりの句、あゝことしも愈々夏になつと思ふと、もう悲しくなつて世を恨む身を恨むよりも一層自棄の生活を送つてやらうといふ氣が、むらむら湧いてきて、我ながらつつけんどんと思ふ位の荒々しい聲で「とれ飯むんですか」と訊いた「あゝ好い子だから飲んでくれ」柔かに仰るにさつきから靜かに座つておゐらしつた母樣が思ひ出したやうに「をとゝしの夏や其又をとゝしの秋などは素直によく飲む子だつたに」とつぶやくやうに說諭するやうに言ひなさる、だつて私今はもう望がないからですもの、心臟だけ癒つて何になろう、十九の夏のやうな、十七の秋のやうな其病一つならはこんな譯の分らぬ我儘は言ひませぬけれどももとの身だつたら、あゝもとの私、たつたもう一度もとのやうになられるのだつたら、どんなにがい藥でも飮まうけれども——心の中でこんな事を想ひながら、ソツト涙を夜具の裾で拭いた。

我が命たぞ、死んだらどうする、と言つていやと云のを無理に飮ませられたは昔のこと、今は却つて年寄つた親に縋りつく樣な願ひで飮んでくれと手を合して賴みなさるのには如何なる自棄の私もつい泣いてしまう

自己の苦痛を忘れる爲に、自ら、親より與へられし此身を蹈あくたのやうに粗末にして、只術死の福音の早く來らんことを希ひ居た私、あゝ許して下さい此身の不心得、私は本統に利己主義だつた、生きるは誰もつらいもの、世に不幸なは私ばかりではないお父樣の在ます中はいゝえ天命の來る迄は樂しく世と戰つて行きます——恁う決心して目には一滴の涙も出さず、いたづらつ子のやうな筒袖のねまき姿を、起きあがつて我儘さうに藥を飮んだあとの口をゆがめながら、父の顏をつくづく見守つた。

まだまだ文章の垢拔がしないが、よほど忠實に描くやうになつたのは進步であらう、あなたの文章を讀んで私は何となしに、貴女の深い惱みの領分に引入れられるやうな强い實感的刺戟を感じた。文章の一句一句が重石のやうに胸を壓する。其巧拙はさて措いて近來これ程私の動かされた作はない(Ｈ)

○歸り道

鳥取　八重子

「では伯母様歸りますから」「まだいゝたらう今夜宿ってお歸りよ」「はあ又宅で心配しますから」

そばの内を出たのは、夜の八時頃であつた、幽靈坂の靜寂な道を從兄と二間程離れて步て居る冷氣を含んだ風が身にしむ程、心地が良い、十七日のおぼろ月夜は二人の影を細長く寫して居る、道で相あふ人々が、明かにも自分等を見る樣で、何だかはづかしい樣な嬉しい樣な感じがする。

あゝ私はこれまで何も知らなかつよ、神經が鈍い社會を無視して居たのである。

あゝ私はいたづらに人世の春と云ふ念が頭に浮び出した、人世の春人世の春とは何ぞ、不思議な精神の作用をする時期である、私はたへずこんな事が、頭の内を行來して居る。

やはり敬樣と二三間離て步て居る、大連寺の前まで來た……と見れば今まで居らつした敬樣の姿が見えない、アラと思って前後を見廻しても何も見えない、確に今まで居らしつたのに不思議、私はもしこわいのと、心配なのとでハラ〳〵とたんに後から、私ゝ眼をかくした者がある、アッと思つて其の手を、シッカと握つた、見ればお人の惡い敬樣「いゝ事よ敬樣覺えて居らつしやいよ」と云つたら「かんにん〳〵滿樣の心をためした處だ」なんて、ずい分な事、もしこれから宅まで一丁餘り寂しい道は尙寂しくなつた。

グラウンド多き人生は私の十七と云ふ年を知らせてれくたのである、風はそよ〳〵と今通つた大連寺の參詣者のつく鐘の音でせうか、ゆる〳〵細くながくゴーンと……

あゝ十八年の天津風、茶目君の辭詩だ（凸坊）

○月夜のひとり

麻布　百合香

初秋に似た風が木々を渡り蘇生したやうな涼しい夜、柴折戶に近きかなめの生垣のそばに椅子をもち出して、ひとり月を仰いだ。

今宵は星まつりといふに、平素になく白雲が多い。

白衣の牽牛と、水色のうすものに、和肌の艷々しい肌を薄くすかせた棚機姬とは、今一年ぶりの會見をするであらう。天の川ちかく。永久に若く、美いさめぬ戀を語るを活々した、其面影は輝く姿は、あの月と星ばかりはかいま見るを許されるであらうか？

あまき語らひ、美しいいひならはしを思ふて、自分をかへり見た時は淋しい〳〵思ひがした。

ああ、過去はみんな美しい色彩をのこした夢であつた。夢は二年まへにすでに醒めておたけれど、なほ幻の世界にあこかれてゐた。二十年間のゆめは、……あまりにはかないものたつた。

過來つる昔の夢はかひもなし、

行末みせよ手枕のゆめ。

もたゆる女に一年後の夢でも見せよ、ゆめよ。

眞の心は變らずとも日々事物に觸れては迷ひ、時に氣まぎらしに事をしてすぐ後に悔ゆる、――さめて苦しむ女の眞の情緖は、――さめぬ人にわからう筈はなく、語らねば知る者もなく。世は廣く人は多いけれどたゞ一時の休ひに、膝をかすものもないであらう。

人に逆き世を呪ふ女は、寂寥を喜び夜の景を懷かしむ。

あゝこんな夜青山墓地へ行つてみたい。人は私より去れど、過去の私を見、未來をも見るあの月は無言な、永遠の爲であらう。あゝと思はず太息して木の一葉をとると素足の上にポツタリ冷やかな露が落ちた。

夢のやうなこゝちよさ。短い夏の夜は、月の步みと風の音にふけゆくらしく、胸はひし〳〵と淋しませまり、冷たい涙がほゝを傳ふ。わびしさにたへで。

輕く目をとぢて、まんび歌を誦したが、こゑは細く〳〵ふるえて。

頭をたれて、荒い竹の浴衣の膝に置いた手を見れば、敝山のいたつきに、やつれて月に青白く、藥指にはめた赤と白のルビーが、恨めしい程、輝いて、襟に涼しいローズの香も立つ。散らば惜しまれる今、美しくちりたい。

生きるならかひある生活をし。人に逢ふなら不快の感を與へまいと心にもなく日々の化粧をし、香水もそゝぐが、…あゝ、心の荒んだ女は

飾る要もない。

此指輪を、ソツと土に埋めたら、誰も知らずに、金は、寶石は、永久に世に出ないたらう――が、それはあまり可哀さうだ。あゝ指輪よ、私にとて、北米からわざ／＼來たのだが、不幸な人の手に埋れ樣よりは……。ピアノのキーを輕く走る、美しい少女の白く柔かき手にゆけ――と心に叫んで外すと幽かに音して、土の上に落ちた。私は美衣美食を願はない。望むは平靜な心か、美しい安らかな永き眠りばかりよ。風靜まつて人も木も靜寂を守るこの時、遠い澁谷の汽車の響がして、冷やかな夜氣が身にしみてさびしかつた。

吹雪野細谷京子さんが兄さん(P.J)にからかはれて、おこつて指輪をしわくちやに嚙み潰したことは知つてるが、藥指にはめた赤と白のルビーいふとまさか文錢のでもあるまい、私は世を白浪の君達にすゝめる、麻布はかすみ町の一番地……伯爵の庭に忍び入りて見よ、七月七日一人子なる姫のなげうてるリングの地に輝くがあらむ、(Y)あなたの文章はいつもだら／＼となかすぎて精彩がない、先づ筆を儉約する必要がある(M)

○京都と近江

はる子

峠の茶屋で力餅を喰べたのみではなけれど、下り道は樂であつた。濃綠の杉木立の中ではとゝぎすがないてゐる。サブライトな感に打たれて私等は默つて步いた。阪本の町は故鄕の△町を思ひ出させた、どの家にも日てりのかゝつた、夏蜜柑と繪はがきがおいてある。道行く人は皆私等一行をふり返つてみた、百鬼夜行とでもいふか――大島の羽織の裾を尻白にして、叡山の絶頂で拾つた丸太を杖にしたＥさん、ブク／＼肥つた體にツンツルテンの袷を着て、素足に破草履をつゝかけたＥさんは肩から斜にズダ袋をかけてすましてあるいてゐる、Ａ叔父は五尺八寸のからだに、三尺二寸の木綿の紋付羽織、兵兒帶に草鞋ばきといふ出でたち、僅に人間らしい氣もちでゐる私とＮ子さんも、早くから五里の險路を經して來たあとて、髮は下つて亂れつゝかけにした、草鞋の先は破れてゐる。持つまもなく汽船は來た、足なげ出して坐る、油を流したやうな琵琶の湖、近江富士も紫にかすんではみえるが、さて――きてみれば左程にもなし富士の山――ものたらぬふじのみが多い、月夜にはさぞとは思はせたけど――椅子をもたせて入つて來た西洋人の三人連れ、雪白の洋裝した十八九のが、後から見ると、たまらなく美しいけど、前にまはると惜しや星の如き青眸は、トラホームか何かに侵かされて曇つてゐるやがて何とか港につく、辨天樣の少し手前でみた、唐崎の松も此所でみを、つツぱりした杭のみが目に立つて――大津についたのは四時疎水下りの舟に乘る、僅か舟が二艘ならばれるだけの幅で、時折、舟の屋根がトンネルの端に支へて、ゴリ／＼と音のするのがふるえる程氣味がわるい。衝突を避ける度に時々ワツと大きな聲をする、船頭の顏が點々につけられた電燈の光りで、やうやうそれかと思はれる位の暗さである不安と好奇心と私の知つてゐる、凡ての人より先に此處を通るといふ誇もとゴツチヤになつてムサ／＼するやうな氣もちになる細聲で歌つたロールライが小さな反響をおこして、トンネルを母けて出る二十五分の樣外に出る右も左も滿山、これさつきといつた風、目のとゞく限り紅の雲がかかつてゐる、川岸には紫や黃の花が青草の中からのぞいてゐるのがみえた。

第二、第三、のトンネルは短かくて無氣ない、五時半といふに南禪寺の下についた此處で下りるのだといふ、インクラインを通るのだと思つてたのしんでゐたのにＮ子さんと、顏み合せて思はず失望の聲をもらした眞如堂の前を通つて吉田山の下の家についたのは、六時殿かな御飯をたいて待つてあつた、今でも目をつぶるとはつきり思ひ出される橫穴のある所には電氣がついてゐてそこには仕事してゐる、人の青黑い顏がみえた、京都印象記の第一頁を私は叡山登りと疏水下りの記とで埋めた。

矢張はる子さんたけあつて何處かうまいところがありまゝ、もう少し進んで物をよく觀るやうになれば結構ですが――。(S)

○獨ぼつち

高橋　靜　子

姉さん、私始々とあなた方と一しよに海岸に行けばよかつたと残念で堪まりません。そら御覧、私の云ふた通り一週間もたゝない内に其麼弱音を吐くからとお笑ひでせう月に見える様ですわ。笑はれたつて構はないあなた何時か私の事を思ふた事を一切喋る正直者、お人よしと仰有いましたのね、いくら私だつて彼れ程迄に皆さんと面つきして、海なんぞへは行かない唯一人だつて如何でもないから海抜何千尺と云ふ處で一夏を送ると、千丈の氣焔を吐いてきたんですもの心中にさう思ふたとてあから様に云ひたくないんだけれ共、正直者の手前お人よしの手前嘘百ふり罪深いから偽らないで云ふの、ああ眞に私お人よしは海なんぞへと云ふた其のなんぞへ今更岡容々と行き度いなんて。

何故嫁になつたとお聞きに成ませう?今時分は家などに居ては、ヤレ



参州御おちたの小豆の草取り豆の草取つて炎天の下に汗水たらして、赤黒くなつて働かねばならんでせう、風采のよくないのに一向構はんお仕度(?)して居るから私、よく家のおさん女史に見られたのね其れがどうでせう、夏は何處に居たへいと思はるゝやうな價値に積な物を縦にもしないで、常の夏には瀬笥の中に縮り勝の單衣は帯心に着て、冬子様のお譲様つのこあがめられて暮すんだもの何の嫌な答はないですわのど元過ぐれば熱さを忘れる、あゝ慾よ慾ですわ、私ね不滿に堪へないわ、共に疲ね倶に起き倶に樂しむ人がないのです。オヤ這麼事を云ふと一寸妙に聞こえるんぢやないかしら可笑しく取つて下さいますな良人を欲しいとて三日泣いたと云ふ女とは生れが違つて居る、私の云ふのはね、皆姉に於ける蒼生ちやんの様なのよ、吁寂しい、眞に淋しい。いくら我から

かみゆい　山口縣　糕畑かの

望んで來たにもせよ住みなれし里を遠に隔てゝ、望鄕の念を語り合ふ人もなく、あゝ獨りぼつちゝゝゝ獨りぼつちと云ふ感は痛切に響くのであります。浮世なんて煩いものだ此の世乍らの極樂なる尼寺にでも行つて一生を淸く暮さうとは人にこそ云はざれ常に腦裡を往來しつゝある思ひですが、今度での度び沁々と机上の空想とさとつたのです。旅は道づれ、世はなさけ、私なんかの樣な俗物は到底人の情けがなけりや寂寞に堪へられませんわ、そりやあ私だつて苦木の性でもなし一人や二人の一寸したお友達は六日間のうちですもの出來ましたわ山澤さんて千葉縣の方でね私とおなじ年位の人が居りますの、未だ深く交はつた譯でもないからよくわかりませんけれど、人の深切相な方、此の人えらい高慢よ、おもしは素的なローマでねおしろいはあの女優の村田かく子嬢のうつしゑの位に眞白に塗るの、書生さん達は、この人に遇ふ度、私なんどの樣な「あの英語で禿頭の事を何んと云ふへ」と聞いて「英語ではねハイトマルスペル」「さう」など、眞面目になつて聞いてる樣な、わからずやには何を云ふのか解されませんが何んとか彼んとかと、蛙の歌の樣な事を云ひますの、此の人私あんまり色が黑いと思ふてゞせうか、昨日ね「お塗りではなかつた、「おつけなさいまし」つて、レート白粉をくれたの 私も流石は女よ何とはなしにア嬉しかつたんです、だけれど塗け致ませんわ、だつて右を向いても左を見ても若い男子の多いこと「君、見給へ彼の女はきつと誰れかに惡はれたくてたらうよ、など、笑はれては一生の恥だから……。

此の人の外にお糸さんちう私の樣な私見たくない女中さんも心持がよくて好きな人です。私の隣室に早稻田の書生さんが三人居ります、運動家と見えてお尻の大きい事、大尻は婦人の專有物の樣に男子方は云ひますがこれこそ「大け尻かくして知らん顏」ですわ。

この方々は快活相な、いや快活な方々ですからお近づきしたら――嘸面白いでせうがくさもちや辻君でもありやしまい一寸見會ふた男になれなれしく物云ふはいさぎよしとしませんから啞おじき丈で濟して居ります。春様其の後一向御消息お知らせ下さいませんわね何故下さらないの淋しいからお案じ申されるから木で鼻をかんで石にぶつ付けた樣なのでもよいから是非下さいな。春生ちやんは如何ふゆよりも好いですか私はね私の方がよからうとかたく信じて疑ひませんネ……太相なうぬぼれね、けれど自惚も是位のはむしろ可愛いでせう。姉さん――今頃はあなた春生ちやんとお揃いで渺に氣取つて海岸の松の下かげを御散步でせうね時にはおに互金切聲を出していさかいもするらしい。いかゞえゝ。私、誰れもさう云ふ親しい人がないから室に居る時は何時も小說に齧りかぢり付いて居ます。かしこ

夏向きにはこんなものもよし。(禿頭を英語で何とかいふわミス町田にきけばよし、佛蘭西語ではと恐ふならマダム大河內を紹介しませう、私の方ではハダカ山と申します別に謝金はとられません、共にいね共に起き共にたのしむ人がほしいつて、あなたは母さんもあれば姉さんもあるぢやないか、尤お氣の毒だがお二人は女に候(菜目)

○ゆかんとして

前橋みどり

K樣、お驚きないますな、私は遙々ゆかねばならなくなりました、人は皆、自分の事の樣に、さわいで呉れますけれど……私はやるせなうございます。

あと一月の後には、家妻と云ふ優しい、そしてあはれな名の下に、美しかつた過去も未來もすべてのものを葬つて終つて、永く〳〵、自由のつばさを收めねばならぬ、……

毎日心難して縫ふ針の手も、滯り勝ちにうしろの簞笥に、熱い頭をもたせかけて、幾度おもひ亂れるでございませう、K樣、今までの私を、ゆるして下さいまし。

私はあなたに、罪を犯したのでせうか? なつかしいK樣愛らしき人よ二人は今まで、姉妹とう思ふて來たんですけれど――、人に秘めて、手文庫の奧深く、幾通もの、青い赤い封筒の表を見てさへ堪へられぬ程胸がふるへます、おゆるし下さい。もう何もお聞き下すいますな。弱い私は、子をおもふ情の切なる、父母にまかれて、總てを忘れてをります、想出多いお手紙はいつか月の曇つた晩に庭へ出て、こぼれた松葉で灰にするつもりでございます、あゝ其時私はきつと一生

忘れないで居りませうよ、一片の烟をとげて白い灰を殘してゆく、二人の戀もおもへば、淡いものでございました。

これから、一生を頼るべき人にも秘して、死ぬまで、いゝえ、死んだ後も、此の白いむくろは、私を離れずまゐりませう。なつかしいK樣二度とお目にはかゝれますまい。

人をも自分をも忘れ歎いて、私はこれから苦しい新しい生に入ります。葬られてもさげすまれても……。

此ところひやかし無用、眞面目なればなり（S）

○渡米の君を見送りて

楓子

五年前の春の一夜、短かき花の命を傷む心も同じ詩の友五人ばかり、月朧ろなる高樓に集りし折、はからず知り初めしTの君を、今日は見送りにとて橫濱埠頭に出かけぬ。見るから重苦しく冷き感じを傳へる大船のいかめしに浮ぶ烟の海の煩はしさ。元よりTの君は藝術の境に身を置く人ならず、さりとて黃金の價のみに眼留むる方ならず、まこと能く世渡りの術教へられし有爲の君なれば、見送る人は種々の階級に渡りて數多かりし中に何のあやなき我の交れるを怪しむ人も有らじとおもひて只一人××丸の緻のきざはしを昇り行きて見るに、某の夫人、それがしのマダムと知名のレデー大に出遇ひしかど、ミスらしき人は見あたらず……Tの君は常よりもねんごろに我友情を謝し給ひしが。

月の半ばを波の上に過して着き給ふさきは夢にも似たらむ榮華の都會——あゝ名のみ慕はしき紐育！

君よさきく渡航しませ！とのみ口の中に云ひて云ひしれぬ胸のなやみに絕え兼ねて船を去る時見返りし甲板上の君！　あはれ船は時に支配されて靜かに無情の錨をひもときぬ——

故國にかへる外人の笑ましげなる面と、うら若き大和なでしこの袂にぬるゝ其の面かげも、皆淡々水輪の如き心地してたゞ刻々に岸をはなるる船のみぞ恨めしと思ひぬ。Tの君送る壯き人々の男ましき Ferewll の叫び、わがひくき「左樣なら」の我弱き胸の扉に銘しての君のために我がベールはながく〳〵風のまに〳〵たゞよひつ——

あゝゆるけれど速き船のあゆみよ、Tの君の御顏は明かに心に映れど立ちつくす我に見送りまゐらす力もぬけて獨り淋しく家路をたどる。（六月廿一日夜室）

思へば奇しき君とわが縁にし哉。趣味高く情あつき人を懷しとおもふなべての人心なるをともすれば卑しきひがめに見當ちがひの色めがねかけて、美しき仲をもあし樣に云ひふらす者多き浮世に、幸多かりし君と我が交はりかな。「未だ花ざかりの笑みを望まぬ我れに浮名立てられむは片腹いたし」と折々の給ひしが世にすね者の此の身も亦た名をいと惜しむものからながき春秋の交はりもいと高く潔く天地のひろき中に一點のくもなかりし友情の美しさよ。

されど我人に嫁きて後、君をけふのまごゝろもて一すじになつかしみ得べきか、はた今日のごと心のまゝにへだてなく……君の曉朝を祝し得べきか。あゝ若き生命はとゞめん術なし。數年の頃には知らぬ人妻となりて逢ふべしとはかねて笑ひて物語れる事ながら、——今の千里の彼方に別れ行く君とし知れば中々にきのふの我れの冷けきことばの飽きたらぬ心地されて。

文も想も舊いと云へば舊いがしつかりした女性の俤が分る（S）

○家庭の一日

和歌山　波奈子

灰色の底に明るみを持つた梅雨の空から、音もなうあめが降りつゞいてゐる、南の椽はしぶきにぬれて氣味がわるい。又何かにかびが生えるんだらう。

「今日は八百やで御座います」〔行〕やは使に出たから私が出てゆく、「何があつてPあそう〳〵じやが芋を持つて居るの」「へえ今日は白丈けで御座います」

おや白と黑があるんだらうか「白ぢやないのが有かえ」「いえ赤い方は

ございません」って、まあよかつた。

「あら其ずみの圓い青い物は何？」「之ですか、げんこべで御座います」何だらう、やつと思ひついた、いつか奈良漬につかつてあつた瓜だ。

おばあ様が床におつきなすつてから、俄主婦の私は隨分まごつく事が多かつた。一昨日もお隣りの伯母様が、「美いちやん御父様はモドコ御すきでせう？」と仰しやるから「モロッコてなに、たべる物ですか」「ほゝゝモドコつていふのよ、御酒のお肴によろしいそうですよ、他から貰ひましたから」つて下すつたのをみると、ぬる〳〵した海の藻なんですもの。お禮には田邊の酒盜之も氣味ハ餘りよくない物だ。

「こんちはいかゞ様で」つて黄色い聲を出す肉やが來る竹やは大きらひなので返事をしない「こんちはいかゞ様こんちは」やかましいから「竹や」と呼ぶと「まあ要りません」て大きな聲を出す。

「お孃様あんな嫌な奴には、私返事してやるまいと思つて居ました」につて怒るから「だつてあんな聲を何時迄も聞いて居るのは堪まらないから」「ほんとに、ほゝゝ」

お臺すんで竹ははなれのおばあ様のとこへ、私は書齋でバイブルをひらく。此間からは教會へ出る事もむづかしいので毎日五章づゝよむ。直譯的の意味が通じない所も其まゝにでもヨハネ書迄來た。

閉ぢるとはげた表紙が目につく、之はなくなつた母様の御かたみ、若くして世を早うした母様は熱心なクリスチヤンであらしつた。

机の前に座つてじつと庭をみつめて居ると、熟した梅の實がぽとりと落ちた。私の思は八年前の昔に返る、時間をまつてあんず畠へかけ出したのは、十一の折であつた懐しいあの家あの頃今は誰が住んでおよう？雨が止むで障子にうつる夕日の色は刻々にうすれてゆく。

あゝ學校を出てもう一年餘！　變化なき淋しい行路をたどるうちに、又夏が來た。晴れた空には夏のかゞやきが見えて、新しいのぞみを抱いた若人もあらう。私のしづんだ胸でさへも、サンマーケイムーとひゞくと何とはなしにおどつて、ロング、テスト、を待つた學校時代が戀しいもの。

夕方父様大阪から御歸宅、明日は串本へいらつしやるんで忙しい。

女らしい生活をすら〳〵と書いてある（S）

○暮れ行く町

佐藤水仙女

十一日には、兵士が六百名程宿るのだ、と、五六日前から町中大評判である、近所の子供は、皆よろこんで兵隊さん〳〵と待ちこがれて居る。さらぬだにせまい店の中を、一ツパイに散らかして、暗うなつても火をつけようともせず、大きなお尻を、どつかりすゑて、睡さうな大あくびを連發してゐる向の荒物屋のおやぢさん、さも〳〵嫌さうな顔して云つた。

「アー嫌だ〳〵、何だつてこう錢の要る事計り出來やがるんだらう、おらー此度は斷よくことわつてやらうなーおふじ――」と後ろに立つて居るお内儀さんを見返つた。

そないな事云つたかて、皆なら仕ようがない――と、長く引張つてじつと門を見つめて、うす汚れた前掛の端をいじつてゐる。

お前はいつもそう人のよい事計り云ふとるけんど、――おふじは又かと云つた顔して、ついと入つて終つた。と汚ない暖簾の端がゆれておやぢさんの眉に引つ掛つた。

夕ぐれの街は何となくそわ〳〵しい、點燈屋がまはつて來た、どこの家先も皆あかるくなつた、それでもおやぢさんの店丈け、眞暗だ。

あかるい此方からはもう人がゐるか、居ないか見えない、いかなおやぢさんでも、もう灯をつけるだらう

となりの三河屋の二階でゆるやかな、三味せんの音締めの音たのし相な笑聲、

かくて、暮れの町は、夜の町に代り行く。

文字に囚はれずに書いてある（M）

○その夜

牛込　齋藤環の花

あゝ最う六時になつた、今二時間足らずのセコンド懊く余身如何にすべき……あゝ君懐しの終日よ、夕飯も一椀に濟して牛込見附にと一散に駈け出した、橋の上には風のまに〳〵なびく柳の姿はあるけれど、戀しの人影……は求むる御姿は遂ひに見えぬ、嗚呼失望―絶望―雨と流るゝ涙を袂に拂ひながら、神樂坂の方へ足を向けた刹那吾が行く時も歸る今も、自動電話の側に立つてる人影よ、若しやあなたが、夢に現に忘れ得ぬ戀しの君ではありませんか、と心ばかりに喚たお言葉を交はす男氣が出ぬ意氣地の無い私だあゝ何といふ意氣地無しだらう、お言葉ゝ交はす男氣をだに持たぬ位なら始めから、人等戀はねばよいに戀に捧げし命なら潔に捨つるがよいには、誌友の一人も云ふたでないか、何しに今日一日を悶え通して、今亦此處まで來たんだらう、私は大馬鹿だ意氣地なしだ、戀しき人の御姿が見えぬとなら仕方



井戸端　京橋　鈴木よろづ子

もないが、今目前に居らるゝではないか、お言葉を交はす事も出來ぬやうな者なら今通る電車にひかれて死ねばよいだらう……、満身の男氣を出して伺ふた、吾が胸の鼓は外に現はるゝかと思ふ程激げしく聲さへ慄へたあゝ夢に現に憧れに〱し君を目前に今見たる私は如何に幸多いだらう……。

天に感謝し、地に伏して、謝した、一世に君程優しい方が又と無いと思ふた。

今迄は親の外、戀しい人は無いと思ふたのに、親以上戀しい優しい人の此の世に居ますとは夢思はざりき、あゝ戀しい慕はしい私はあなたの外に心の主は無い、私は永久君を心の主として此ゞ淋しみの世を慰めやう……あなたもね。

夜はいたく更けました、御病體にさわりましよう、お別れ致しましようか、あゝつらいですね、明日は早く目おもじ致しましよう。

ではサヨナラ、君を乗せた電車は四谷の方に走つた、何の遠慮もなくおゝ憎らしい電車だ。

今宵は樂しかつた、嬉しかつた、あの橋に二人が立つた時私はあのまゝ消えたかつた。

あゝ眠れない、四隣森として聲なく、今鳴つたのが一時でないか、胸は激烈なる戀に破れるとも燃ゆる耳は熱い、頭痛がする、あゝ苦しいと叫んで寢返りした、夢は結べない、二時、三時……あゝ病氣になりそうだ、昔しは戀病があつたと小説に書いてある、私は笑ふた、いつも笑ふた、今私は其れに似た病だ、あゝ馬鹿！此のまゝ病床の人となつたら優しい母に何と申譯しやう、あゝ寢やう〱、お母様御赦し下さい、私は二十才になろうとする十九才迄育てゝ戴きながら、今戀に捕はるゝ身となりました、激烈なる初戀に！願はくは甲斐あらしめて下さいまし、一度は外へ嫁ぐ此の身ですもの、今迄青春に燃ゆる男子から幾度も手紙をよせられた事もありましたが、其の都度誘惑漢！と罵倒し嘲笑し、ましたが今度は私から求めたのです。

あゝ三時半だ、妹の靜かな寢息さへも耳にさわる、明日より休みたいから寢ずに想ひを續けやう。

戀しい君は何を夢見て居るだらう。

明けがたとろりとしたら夢を見た、なつかしき君の御姿、明けの夢は正夢とか、嬉しい、眠れば夢に現れて下さる君！

あゝ御慕はしい永久、私の心の主で居て下さいまし。

外は晴天らしい、今朝は早く起きやう、然し頭痛がする、目まひがする、あゝ苦しいわ。

此戀、嘘か、誠か、危いか、危くないか、一切を讀者の判斷に任す（S）

○雨後

神戸市　足立春子

赤いせきちくの花に、何處からか小さい蝶が舞つて來た、畑に近い所だけど、私は上京して始めて蝶を見たのでなつかしかつた、昨夜の大雨を忘れたやうな日本晴なので、少し濡れた疊二枚を割木の上にたてかけて、机と本箱とを椽に、色のあせた雜誌を亞鉛張りの廊下の屋根に干した。後に殘つた一枚の疊の上に、柳行李が一つ横はつて居るのみ。私の居間は惨なものだ。昨夜夢も知らずに眠入つて居ると、急に顔が冷こい氣持がしたので、ふと我に復へると、ぼた〱生温い雨が漏るのだつた。暗闇の中を机や本箱をこそ〱かたづけたも、床を片隅に引き寄せて雨漏りの防戰に困り切つて居ると、三時が玄關で鳴つたので、漏れるなら漏れ濡れるなら濡れろ……それなり蒲團被つて仕舞つたものゝ、つまらぬことが思ひ出されて苦しかつた。その故か、今日は妙に瞼が腫れぼたいやうで可笑しい。午後、思ひ設けぬ人から一年振りに、思ひも寄らぬ手紙を受取つた、胸が痛い程迫る。古い追憶が、そろ〱幻燈畫のやうにかけ廻る私は今の生活に這入つてから、すつかりあの人を忘れ去つて居た、それでは濟まないことはあるまいか、と考へて見たけど、やはり私には忘れるより外に途はなかつた。

女らしい文章です、今少し味がついて來ると好い（S）

○病む身

川端　美登里

へいぎはのざくろの花の咲いたのを、縁にあつた倉の草履はいて、みのまゝたよりなくも庭に下りて數へてから、がつかりしてまた床の上に横はる。

葉様が飽きるだらうと云つて、おくり越してくれた、この間帝劇で演じたハムレットも、もうよんでしまつたし、アルバム寫眞帖とあたへられたるものをあき〳〵するほどみる、せんかたなく目を閉づれば疲れて居るためか、夢から夢へとはしりゆく。

夏蜜柑のすつぱいのが食べたいと母様にねだつ買てらていたゞく食べたい、食べたい、と急にもの欲しくなつたものを、あれもこれもと、幾色も枕下にならべてみるけれど、思つたよりおいしくなくみんな少しばかり手をつけてよしてしまふ。

昨日の夜も、今夜も、病床に居て窓からみえる裏の倉の白壁に流るゝ月の色をみて、何かはしらず冷めたく冷めたく、胸にしみついて拭へども、拭へども、にじみ出る涙はおふむけの頰を横につたはりて流れた。

孝様がきのふみまひにと云つてもつて來て呉れたナスタシヤンの花のもうくづれ散つた片々を、ミルクをとりに行つた間に床をすべりでゝ、一片一片づゝひろいとつて唇にあてた、愛よ——、あゝとこしえに、かの人のみの世だと胸ふのに？

十五の年の夏、まだ私は五寸の赤帯をかいの口にしめて、つゝそでの少女だつた。

石原河べりの螢追ひのかへるさ、川向ふの宿やの二階に樓のやうな華かな灯のゆらめき！

つゞみのあだな音が、靜な川面に高く高くきこえた。うたにつれて稚き二人の半妓は、あけのふりかざして舞ふた。さすてひくてのあざやかさ。何も思ふことなき少女心にはどんなに美しいと思つたらう——螢狩りきてかくされし月は川底にも淋びしい色を落してゐた、歸り道ゆくりなくも一緒になつた孝様にとはれて心のまゝを好きだと口走つたのを、今もなに忘れずに——、云はれるのはつらい。

それは女だもの華美なことは好むけれど…………

これも華盛なお嬢さまかもしれん、ちがつたら御免あそばせ(K)

○御花のかへり

よし子

活けてる間に今までかんしやく起して物でもはふり付けるやうな勢で降つて居つた雨は、すつかり止んでしまつて、太陽はキラ〳〵强い光を凡てにあびせかけてる。切角のコートも雨傘も餘けいになつて口惜しいやうな腹立たしいやうな感じがする。けれどもまさか先生の御宅の玄關へそつと知らんふりして置いて行く事も出來ない、二三年前まではよくそうした藝とうをして、家の者を困らした事もあつたけど。

コートを一寸袖疊みにして、傘と二つ左手に右手には桔梗を大切に持つて、そして昔はあんまさん下駄〳〵と厭ふたし其足駄引きずりながら、幼かりし過去をふり返り振り返り巣鴨の道を家へ急いだ。

とある横町を廻つた時、二人のハイカツた女學生風情の人と逢ふた、一人はマガレットのこつてり、他は目がねかけた人、兩者ともヴワイオリン片手に。

丁度、それは私のひがみかも知れぬけど、私をあざけるやうな目、勝ちほこつた顔して見、すれちがつた。其せつな二人は御令孃にあられもないクス〳〵と笑ふた。バラ、スミレ、私には何だかわからない只だ醉はせるやうな、よい香りのみ後に殘して、私はふり向ひた、四五歩過ぎて私が再び振り向ひた時は二つの人かげは消えた。

○病床にて

近江わかば

開け離した六疊の壁の方を枕にして、水色の淡い麻布團をふんわりと胸まで掛けて、白いシーツの上に、横になつた。

二三日前から、熱のあるのを知りながら、こらへて居た、其疲れが出て、身體の節々が一時に解けて、筋肉は一つ〳〵緩んで行くかと思はれた。

茂つた庭の木立は、七月の日光に古沼の面のやうに青黒く光つてゐる。緑の色が烈しく空の中に流れ込む、そつと、自分の手を上げて見ると、

まあ甜蜜のやうな!!――恐らく自分の顔色も、此通りなんだらう。聴診器を出して見ると、三十八度二分、――はつと思ふと、續いて烈しく咳嗽が出た。あゝもしや、此儘死んで行くのであつたら!此緑の中へ、すうツと此儘消えて行くのであつたら――そしたら少くとも藝術的の……すぐあとから馬鹿!と、罵る聲がした。自分ながらも、其麼空想を、笑はずには居られなかつた。

そつと、寢返りを打つて机の方へ眼を遣ると新刊の書籍や雜誌が、入り亂れてある中に、風にあふられて波のやうにうねつてゐる、自叙傳の切抜が眼に入つた。「あゝあの女、――彼の激しい性格の、………」妾は、堪まらず胸に手を置いて眼を閉ぢた。眼の前に浮出してくる、血みどろに傷ついた女を見るにしのびなかつたので、………「あつあつあつ」

冷やりと冷たい切先を、額に浴びせられたと思つて、思はず叫んだ。

自分の聲に驚いて、はつと眼を醒ますと、枕許に座つてふつくりとした白い顔に、黒い眼を鳩のやうに瞠つた、光ちやんの、溶けるやうな笑顔が眼に映つた。

未だ胸は、大波のやうに動悸をうつて居た。額へ手をやつて見ると、氷の塊りがお湯のやうに溶けて、だら〳〵と涙のやうに頰を傳はつてゐる。

「まあひどい!」きつと、睨みつめると、光ちやんは、おど〳〵しながら、「母さんが上げておいでつて、いつたのに、あまりよく眠つてるんだもの、」「そしたら彼方へ、持つていつたらいゝんぢやないの、」「だつて……」今にも、泣き出しさうな顔をしたので、可哀さうになつたから、默つて此方を向くと、光ちやんは、急に立上つて、チヨコ〳〵と逃げるやうに、次の室へいつた。大柄な白絣の浴衣に、チヨキンと結んだ黒い兵兒帶が襖戸の影に隱れた。

○上京して

茨城　田村紫色女

昨日午後一時半華やかなる都につきました。先づ第一平凡なる私の目に入つたのは若き女ですの。あくまで色白な表情に富んで居る夢二式の美人がベールとか云ふ物をかけて私の乘つた、電車の中に入つてきてすぐ私の隣に腰かけましたの、エンデヤンとまでニツクネームのある私と其の美人とのコントラストは……さぞ見物でしたらうと自分ながらおかしく思ひましたよ。あの本郷の切通しをぬけて、朽ちはてた灰色の壁に日本女學校と云ふなつかしい文字を見た時、私の心は異樣な感に打たれました。思へばあの學校が大塚なる新校舍に移轉さるゝ前の日でしたね五年のクラスにかけてあつた額を、はづしながら「もう此の校舍に明日よりは來る事が出來ないのね」としみ〴〵おつしやつた貴理のお言葉は今尚初子がハートに深く印象されて居りますよ、心地よく電車にゆられながら、なつかしい街を物珍らしさうに、ガラス越に見て參りますと、なつかし母校の生徒が、リボンなきお下げにして通りすぎます。よくパンを買ひに行つたあの角近電車がかゝりましたのよ、下車して私は急ぎ足で一寸學校をのぞきましたの、處が受付の前に、吉岡さんが、アラと言へばマアーと、かけ寄つて、互にシークハンド、無言の中にも、ロンゾミーニングは暗示されて居たでせう、昔の事務室の廊下の方に灰色の袴が見えました。思はずB先生と呼びましたら「あらまあ田村さん」「うれしうございますわ先生」「よくお早く御出でになりましたね」と慈愛に滿てる先生の、み顔はほゝえまれてありました。明日また伺ふ約束して、五六名の寄宿生に門まで見送られて、電燈のともる頃姉の家に參りました早速鉛筆とつた次第ですの。母校の有樣や同窓會の事は、後便にて、くはしくおもらし致しますよ。華やかなる電燈の下にて、

○電話室にて

長崎　門の草

一秒も早く動げとく進めざれば我等はかたく結ばれた業務の鎖より逃れんと來る日も身體の開放さるゝ時刻をあせつて心ひそかに賴む針は今一時半を指して居る私はイラ〳〵昂奮した頭を無理に耐へて雜誌に落して居た眼で無意識に今それを見たが別に早く進めとも願はない筆のさわ

めきで聞き取る事の出來ないセゴンドの小刻がチク〳〵と痛い程胸奥に響く。

若い日の夢醒めて幸ある人も供に哀愁の涙をそゝぐ青春の去り逝く日に私は些の執着も殘さず單純な過去を追懷して一種の淡い誇りと甘い寂漠に泣いた優しい心も今は無く疑惑の底は益々深い未來の近づくのを怖れながらも其暗がる崖に刻々と導く時の進み早かれと一切を忘れて祈るのである只現在を今瞬間を離れたいばかりに。分外の務を怠たるな尊き職業の前には犧牲の覺悟を以てと說かるゝ刹那人は一樣にうなだれて感じ入つて居るけれど扨て誰が身を犧牲にあへてするであらうか。針の歩みがもどかしくて遲いなあと幾度もため息つきながら機械に放るゝ時刻のタイムを待遠しがる私に何で分外の務が出來よう冷へた空氣のよそよそしく動くあの暗い家でも懷かしくて早く歸りたいのである囚はれた現狀を離たいとあせりながら悲しいけれど餘りに理性の勝つた自分は懦怯く希望も永劫に葬つて只々家のため現在にのみ生き働て居る弱い自己に對してにじみ出る熱い涙が冷めたい頰を傳うてあせた紫色の袴にポタリ〳〵しみ込むのは幾度だらう更け行く夜はいよ〳〵たけて快よくしめつた空氣の漲ぎる室に傾きかけた廿日の月が青白く冷めたい自然の光りを投げ込む。雜談の口繪から眠むさうな眼をはなして今呼ばれた番號に應答する友の聲は哀れにも低かつた〇〇局から〇〇局を呼ぶ音響機が一しきり靜寂な四邊の大氣をゆるがしてハタとやんだ私は手を背後にくんで室内を二三度行き來して見たが耳を澄ますとガタ〳〵運轉する機械の響が私の上草履の音と妙に調和して遠く〳〵私の耳をはなれて行くギーと扉が開いて之れも睡眠不足の赤い眼をした友は二人お早うと入つて來た薄暗い電燈に眉をよせながら

針は今午前二時半の交替時間を指して居る。

○雨の日

大阪　小泉貞子

よく降る。

物おも淋し淋さでは止むまじとようー降りしきる雨。雨よ。この眩き切つた私の胸もうるほはしてくれないか!?

しと〳〵と河岸の樹々の濃いみどりの葉をつたふておつるしづくはよき色に染つて。巷を美くしき人の蛇の目傘にそゝぐであろう。美ふしき雨こ濡れて行く美くしき人!　それがどの樣な。どんな姿した人かわらないけれど。今の私にはその美くしい人が偲ばれてならない。ちいつと蔦の小さな若葉にそゝぐ雨に見惚れた。私は蔦の葉にさゝやくあの雨の聲が聞きたい。

「氷い雨だなあ」「また明日も雨だよ」

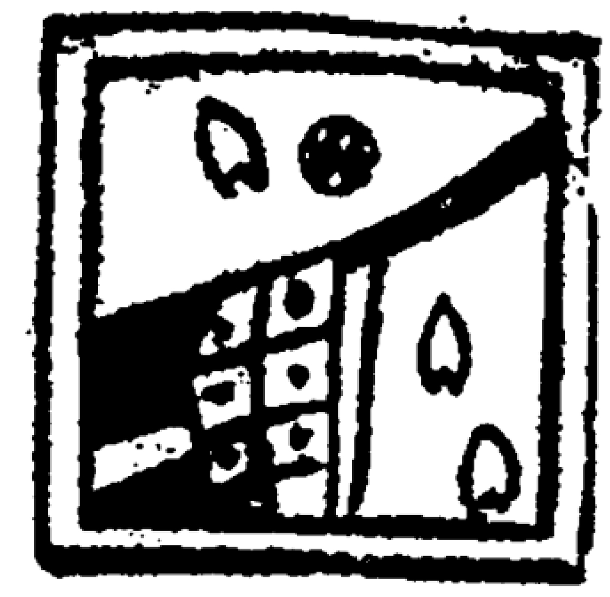
ふと我に返つた時。塀の外を男の太い嗄枯れた聲であゝと嘆息しながら行く、あの哀れな細民よ。一日の勞動にかふ一握の金。それによりて其日をすごし行く人々等は如何にこの雨を怨むだらう。厭ふだらう。雨を好む人もないだらうけれど……厭な雨！いやな雨！

けれどかつて遊びし京の雨のみは好きだつた。毛せんの掛つた宿の二階のおばしまに。長い袂をからませて。仰いた雨の京は美くしう淋しかつた。細い雨にけぶる紫のまろき山のすがた四條五條のあたり蛇の目傘傾けてたどる美くしき人もあらむ。

額ふせし東山より北山かけて。頂のみは白う夢の如。たゞ大比兒の峰のみかすかに淡くそびえたつ。かの山のかげ。比兒のふもと。美しき村にそひて流るゝ一すぢの淸きいさゝ川のほとりに。淸き少女は幾束のうつくしい花を頭にして可愛い聲に賣り歩いて居るだらう。雨にぬれた紫の花。白の花あゝその花が慾しい。私は雨の日を一日待ち暮したけれど駄目だつた。花屋は來ても。私の望んで居た樣な。美くしい少女はなかつた。

夜は淋！さのまさるにや。雨もほそりて靜かに更け行く古き都。私は水の音をなつかしみ。靜かな大川端にさまよひ出た。かすかに煌めく街の灯を搖がしてゆるり流れ來！鐘は祇園か。淸水が。たゞ寂れた寂しう我胸に泌みこんだ、靜かな街。寂しい夜、ものすべてが寂しう靜かな。美しい京の夜の巷に、たゞゆきずりの若人の瞳のみはずるどう我眼を射た。深う傾げし傘の内よりかいま見し若きひとのすゞしき眼よ艷々しき頰のいろよ私は今に忘れないけれど……

あめはまだ降つて居る



俳句

内藤鳴雪選

〇（天）

人乘せてよろこぶ駒や初嵐　　麴町　牧野銀杏子

〇（地）

朝山の鏡にうつる涼しさよ　　和泉　田中きよ子

〇（人）

いさゝかの紅つけて妻の夕涼　　府下　都南子

佳作

此の風や月と海との間より　　信濃　百瀨若子

比良の雲我鮓桶を壓すべし　　島根　長崎百合子

秋近し小田守る老の物憂さに　　大阪　樫内あい子

みかづきや二人となりし初涼　　周防　美女子

小萩野を出づれば茄子の古畠　　山城　木の花

大牡丹扇の風に搖れぬなり　　牛込　西村しのぶ

口笛の君も來ませり涼み臺　　上毛　知世野

扇一つ拾うてかへる夕涼み　　渡島　宗原美津子

夏痩の腕を撫しけり扼しけり　　備中　小見山春子

コスモスの籬の内や箏の音　　稻岡　有本靜江子

雁かへる松風寒き古城哉　　常陸　古島花子

夏川に木影〳〵の面白し　　羽後　くに子

草摺を繕ふ夜半や時鳥　　深川　小も子

橘香の娘髪よき納涼かな　　越後　幸子

忽然と天より湧きぬ雲の峰　　岡山縣　中野露子

うりの苗早や枯れそめて秋近し　　大阪　田野しか子

白木槿はの白うして夜は明けぬ　　大阪　小泉貞子

里の子の戀を照して夏の月　　下谷　小原あい子

影のさす人しのばるゝ靑すだれ　　靜岡　詩贊

雨傘の乾る匂ひあり雲の峰　　札幌　波山みどり

薫風や珊瑚採るなる土佐の海　　失名

月さびて藤も散りける湖畔かな　　松前城　藤山富美子

温泉の宿に繪心もする夕哉　　茨城縣　花岡千代子

紫陽花や牧師の家に咲きたわむ　　姫路　磯菜

雲の峰くづれて夕日なゝめなり　　淡路　鎌田あさの

燈ともして藥をさぐる夜寒哉　　本郷　城本美知子

となりには笛の上手や夕涼み　　磐城　齋藤すみれ子

五月雨の中にも潮の滿ち干哉　　島根縣　山代なつ子

麥の秋飴賣笛も聞えけり　　尾張　加藤靜枝

七夕や湖近き宿に旅寐して　　尾張　榊原銀子

靑嵐高くなりける浪の音　　小田原　下枝よし子

我が庵を訪ふ人もあり夏の月　　波島　川原華子

桃の花硯の海に散りにけり　　東京　若菜女

夕灯燕の腹の光りけり　　埼玉縣　高橋エツ子

夏の月鉾の上に更けにけり	淡路	柏木よしみ
笛の音も鉦の音もして夏の月		靜子
琵琶もる丶加茂の小家や冬葵	沼津	舟の子
欄に迫る青葉の山や温泉の匂ひ	岡山市	田上桃女
田舍女の湯まき美くしき田植哉	備前	浮草子
たそがれの鐘やつゆよりつゆに入る	牛込	環の花
女どち端居して居る月夜かな	王子	大浪せい子
來る人に讓る夏野の小路かな	岡山縣	野崎よし野
五月雨や人まつまどの日は永き	淡海	拗子
取るよりも追うてをかしや螢狩	群馬縣	新井よし子
路分ける裾は深し蟲の聲	群馬縣	内山しげ子
夏痩の鏡に向ふ涙かな	近江	植村はる子
詩を吟ず松原道や星明り	加賀	村田糸子
禪寺の伽羅の香や夏の月	山梨	鷹谷とみ
鵑啼く物置藏や夏の月	同	鷹谷久子
夏の月五百羅漢をてらしけり	同	鷹谷やす
水增して川邊を流る螢の人	美作	貞子
さす棹に水キラキラと夏の月	京都市	平井千代子
ほしものにとまる蟬あり夏の暮	京都市	櫻井きよ子
一夜酒四十九年の非も語る	越後	藤原竹子
松風や暖過ぎば落れて汝涼し	東京府	竹村はがら
魚をどる稻田の朝や避暑の人	熊本市	河野千茂子
衣白き女を見たり夏木立	美作	美津田
古堂や青葉の隙に清水滴く	尾張	みどり子
水に遊ぶ石竹薔薇同架かな	蜜島	香川玉代
寐覺りて針に物言ふ夜寒かな	大阪	田中桐子
月の夜は夢も引きけり君が爲め	神戸	杉本ふみ子
一人來て芝生に寐るや夏の月	栃木	彌生子
吾婿に後れて起きぬ夏の朝	長崎市	永井主子
美しく摘みあひたり藤かづら		失名
袴はいて水打つ寺の童かな	宇都宮	松井玉子
神の灯の微かに洩れて森のかげ	三河	槌谷とめえ
君去りて夕淋しき夏の月	大阪市	靜子
木がくれに今日凱旋ののぼりかな		松尾久子
蝸牛の這ふや地藏の御頭	駿河	勝又和子
晝靜かに大木の陰のつゝじ哉	播磨	伴時女
薄ずみの文字にも似たり月の雁	大阪市	岡本春子
午雨や草取る人の笠の數	土佐	鍵山香水
涼しさやつばくろ多き町外づれ	福岡	つくし
ほゝづきの君の袂をこぼれけり	前橋	みどり
群れ殘る山百合の花微白し	横濱市	金井きよ
紅梅や月踏む女戀もなし	下關市	木本蘭子
日最中は動くものなき暑さ哉	山口縣	姫小松
夕涼み一人は淋し橋の上	和泉	金田文子
朝ぎりや高峰の松は其上に	伊勢	瀬木八重
登山する白衣の人や夏木立	伏見	試芳子
櫓の館明るき灯かな		失名
年を聞く花こ老とや今日の月	大阪市	夢みる子
蓮咲くや野寺の僧の空念佛	大阪	田野靜子
戀ならで歌も書きたる扇哉	宇都宮	松井涙鈺子



『新文章』批評

○短評（天）

ひぐらし

一呼吸

これはどうしても普通のお嬢さんではないと、或る選者がお被仰つた事があつたが、實際なみの女のタイプにははまらぬ方らしい。或時は慮女の體面を自から目茶苦茶にふみにじつた樣な文を作るかと思ふと、理性にかつた意志の强固な立派な作も見られる餘り破格な文を作られるので女と云ふレコードを破つて居る人かと思つて、誌友會にあつて見れば羊の樣な方だつた、何しろ私の樣な平凡な女にはこう云ふ作の評は困難だ、只急所を針で刺す樣だと云つておきたい。

七色の虹

讀んだ中で此作が一番好きだ、妙に世に反抗して居る樣な、他の文章とは異つて居るそうかと云つて矢張世間にすねて居る方らしいけれど、只どこまでも優しく女らしく書けて居るのが嬉しい。

解けし謎

大變氣取た書振りの方だと思つたら、中からすつかり眞面目になつた、本誌にはこう云つた樣な文章が多くのせられて居る、美しい書ぶりの割合に引つけられなかつた。

さみだれ日記

こう云う風に苦もなく筆のまはる方は幸福だと思ひながら拜見した。

尼になつた若い女の半生

廣い世間にはこんなのもあるかと思つて讀んだ限り、內容の割合に深もよほさなかつた。

不經緯に生れた嘆き

今迄にこう云つた樣な文章は、本誌では餘り見ない筆つきは誰やらに似て居る樣に思ふけれど、其方のお作は別にのつて居る、是は新しい人の作かも知れない內容には同情するけれど、こんなに變形にならなくとも宜さそうに思ふ、終りの一ページはよく女性の心を表して居る。

男子の手紙に迷ふ

是は實際の事を書いた物らしいけれど、今の私にはこんなのは讀でも作者に氣の毒程何とも感じない、むしろ馬鹿〴〵しい感じがする、こうした事にとやこう心をつかつてるうちが人生の花樂しみな時代であらう。

更衣室

筆はお達者だけれど、失禮ながらつまらぬ作、何の印象も殘らぬはたに勝れたのがあるので見おとりがするのかも知れぬ。

學生の都會

讀んで居てつり込まれさうな活潑な筆つき、とかく涙つぽい作の多い中には一そう光彩を、はなつて居る樣に思ふ、しつかりは分らないが何うも內藤さんの筆つきらしい。

初夏の人々

作者の態度があり〳〵と現出される、やはり筆に力があるせいであらう、いつも此方のお作は印象が深い。

覺め際の淋しみ

眞面目なるべき人生觀、道理でもつともと云たい、女とは何せこう云ふ者、私は親に等ならぬ先から知つて居る、何にせよ文章もお上手に云はうとした丈の事を筆にされた事を感服する。

絵筆

文章をかく間にも繪筆を握られる事をお進めする。

一人子の運命

眞面目な事を眞面目にかゝれたので、讀みながらしんみりと胸の底へ

しみてゆく。

淋しい道

未だ廿の聲にも一寸間のある方だと聞くが、いつも自由に材料を求めて自由にかゝれる、御自分では私は學校もろくにしないし世間も見ないからとお仰つて居る。そうとすれば猶更天才と云はなければならぬ。

心の離散

妙なたとへ方だけれど、いつも自から求めて暗やみを無中で走つてると云ふ樣な文章をかく方だと思ふ、此作も矢張そんな感じがする、此方の作にはいつも引付けられる樣な氣がしてよむ氣になる。

生の斷片

印象の深いお作。

五月の水邊

いつもながらしんみりとしたお筆つき。

姉の家

いつもとは一寸書ぶりが變つてる、此方はやはり自己本位でかゝれた物の方が光彩がある樣に思ふ。



黒き蝙蝠傘の世界

此方も天才の一人でしやう、いつものお作にくらべるといさゝか見おとりがする。

自ら警むる記

此方は女の本分をよく解して居られる幸福な方だと常に思つて居た。此方にもこう云ふ文がある、なる程と思つて拜見した。

私の心は破れて居る

恐ろしくいら〳〵した筆つきだと思ふ、讀んで居て息がつまりそうだ、餘りはげしく云過してかへつて同情を引きかねる。

機巻く家

大變酒り切つた樣な文章だと思つてよんだ。

落日のかなた

これと云つて讀んで深く味ふ處はなかつたけれど、美しくすら〳〵とかけて居る處は、餘程筆なれた方だと思ふ。

別れて居る間

一寸變つた書ぶりなので一入面白く讀んだ。

年のあぢはひ

内容の割に調上げてつよい印象を殘さない。

水邊　　茨城縣　花岡千代子

無理にむづかしい文字を用ひずに書いた事情に同情される。

　　別れの涙
　　母の感化力

これは婦人ノートへでも書かれる原稿だと思ふ、こゝでは外に烈しい作が澤山あるのでさつぱり引立たぬ、而しよい經驗談の一つと思つてよんだ。

（評）批評の態を得てゐる、稍完全にちかい。

○三篇（地）

大分　原田澪子

ザツと目を通す丈に十日も費すと云ふやうな讀方なので、讀み終る頃は初の方は忘れかけてるやうな事です故、批評等とはチト烏滸がましく聞えますが、その讀ではすうツとぬけて行く中に一寸胸に響いたのを行儀もなく並べてみませう、こう申すと餘り不忠實なやうですけれど添乳して子供の背をたゝき乍ら眼を通すのは一人私許りでも無からうと思ひます。

萬壽子さんの淋しい道、は何時も乍ら達者な筆です、お寫眞で見たまゝ子さんも、隣の人も、私の想像の人もそれは優しい美しい方だけれど筆の力強い事は驚く程ですね。彼の種の女のキビ〳〵した物の言ひ方も氣に入りました。そしてスラ〳〵と少しも筆のしぶらないのが羨ましい。不幸な弟に對するお母の心持も、又弟が男勝りの姉にオヅ〳〵として、「姉や、まだ歸らないの」と云ふあたり姉弟の姿が見えるやうです。「お前ね、あの、姉やと一所に死なないか」云々から終りまでは殊にいいやうです。素直な暢達な筆です。

月のたまさんの女の爲に呪ふべき時代。一寸〳〵の暇を盗んでの走り讀みなので再讀するなんて事は全然ないのですけれど。此文許りは繰り返しました。文章の批評は第二として私は同じ境遇の人の心が嬉しく讀まれました。何時かの本誌に才ある妻の眉は常に顰むと云ふ事が書いてありましたが、此の文を短かくした言葉だと思ひます。私も人形の家を讀んだ時はノラの彼の男氣と斷乎とした決心とが泌々羨ましく思はれました。自分の者と思ひ切つて居た男に、足許から鳥が立つ様な驚きと悲しみとを與へて立ち去る所は、女の爲めに痛快だと叫び度うございます。

夫に仕へよ、子を育てよと云はれてヘヘツと跪まづいての一言に、私の胸中に疊み込まれて居た不平？が飛び出して思はず苦笑して果ては吹き出しました。藝者になりたい、女優が羨ましい」にはニツと快心の笑をもらして心強いとさへ思ひました。けれども月のたま樣よ暫くでも籠の中に飼はれた鳥が、そのせゝこましい天地から放たれた時に、勇ましく羽ばたきが出來ませうか？心許りは自由を得た喜悦と或る物への憧憬とにはやりたけつて居ますれど、重苦しいそして衰へた體が心と同一に戚つて大空がかけられやうかと思つて私はそれのみ恐れて居ます。終りに私等の語り得ぬ所まで解放して云ひ盡して下さつた（？）大膽を有り難く思ひます。

白木糸子さんの自ら警むる記泣く子と共に自分自身が憐れになる、悲しくなつて一緒になつて泣き度くなつてしまふ。實際ですく〳〵。私は自身の肉を分け、血を注いで居る子が泣くのに、何故腹が立つのだらう、憎らしいのだらう。悲慘なる生ひ立ちに心がねぢけたのか、さなくば母として餘りに若い故か、或は愛情が足らぬのかと自らを疑ひ且つ悲しんで居ましたが、同じ心の文を見て安心しました。神經が尖つてる時に聞く泣き聲は、我が身の肉の殺げるのを覺えるやうに辛いのだが。子供にとつては唯一の言葉であると思つて見れば、何かを訴へるやうな泣き聲がいぢらしく胸に響くものです。

晶子さんは違ひますよ、と平氣で答へたが寂しかつたはまことに同感です。

大勢の病氣勝な子供の世話をして、御庖丁を取り、針を握り、其の上たゆみなく筆をふるひなさると云ふ家庭の記事を讀んだ時は恥づかしさに消え入りたいやうでした。實に晶子樣は家庭の主婦としても作家としても申分の無い方です。要するに晶子樣は文を書かうとする女の爲めに大なる教訓を與へて居られるのだと思ひます。

（評）最もしつかりしてゐます。

○刺戟（八）

梨の花

また、種子ならば蒔いた許りの、芽が出るかどうか解らないやうな私が、御歴々の御姉樣方の御作の批評なんて隨分生意氣なと、思はないではありませんが拜見して感じたゞけを述べさして下さい。

一體『女子文壇』は、若い女の叫び聲が滿ちてゐるやうですが『此新文章』は、美聲が殊に強いやうに思はれます。

私の心を一番刺撃致しましたのは、あけぼの樣の、私の心は破れて居るで御座いました「社會は何故宥すのか」の叫び聲、あゝほんたうに殺人犯よりも深い罪を、何故宥すので御座いませう、けれども／＼あけぼの樣、若しも其等の罪人を宥しましたら、世に罪人でない人が幾人あるでせう、高位高官の胴もと思ひますと私は悲しまずに居られません、胸が痛みます傷ついた此腦が……忘れませう、忘れませうと思つても又私を惱ませる言葉御目に入ります、月のたま樣の女の愛に呪ふべき時代、藝者になりたい……女優が羨ましい…なんて痛切な叫びでせう、私も一度はさう思つた事が御座いますもの。

枯木のやうになりたいと仰つしやる若杉樣、暗い夜を御迎へになる、白ふじ樣、いづれも悲痛な言葉が溢れてますものを私の心は亂れました。

御羨ましいのは山百合樣、其の御幸福のいつまでもいつまでも、續きますやうに祈つて居ります。

埋木樣、私はほんとに慕い方だと思ひます、私のやうなお多福で鼻びしやで、それからあの三田文學の、薄情の女の目の色はつていふやうに、目ばかり大きく光つていても白粉もつけれは紅もつけて、平氣でみつともない顏を何處へでもさらけ出して居るのが恥かしくなりました。燦殿守樣は「只此世に見ゆ歩の影のみ」と仰つしやる「及びなき淋しさなりや凡人の一人なりけり此日さめ時」とあゝ淋しい淋しい……遠く蛙の聲が聞える。

筆子樣の、心の離散、私の見やうが違ふかも解りませんが、どうしても小姑根性としか思はれません、御母樣も姑根性を持つておらつしやると思ひます、おや御怒り遊ばしますの、でもかげの人を御覽遊ばせ廿歳で悟つて居らつしやるぢや御座いませんか。

はやぶさ樣、御若い方とは知りながら御人形を學校まで持つて入らつしやるやうな御可愛らしい方とは存じませんでした、それでゐて此御作此御心には只驚くの外御座いません。

小說は皆面白く拜見致しました、ゆり子樣つて安藤先生の奧樣の御妹樣ぢやないかしらと思ひました。

淋しい道の終りの、お靜の心がよくこんなに顯はれたものと感服致しました。溫泉宿では町ちやんは牧野さんにお嫁入りすればいゝのにと思ふ、私ならよろこんで嫁くのだけれど賀では「頤使してやりながら使賃さへ呉れぬ横着物だ」の言葉淋しく感じた。

小もゝ樣の漁師の娘、彗のやうに顯はれた、名作がどうか私は知りません、けれども人の作物をそつくりそのまゝ一字一句もなほさいでよくまあ投書なすつたと感服致します、之と同じ作を見た本書いた人の名何も知らないのですけれど、私は二三箇月前まで何を見ても名を見た事が御座いません。其故女子文壇でも隨分長く愛讀して居りながら、作者の御名は少しも知りません、否少しもとは申されませんでした、山田樣は友からよく話して聞かされたので知つてますし、今は名を變へて出しておらつしやるかどうか知りませんが、もと北越の雪を書いて入賞した、阿部秀子樣は友達なので知つてます——、昨年の春お兼ばあさんを書いた上毛の人小澤さん、之は作中に町田さんといふのがあつたので、名を見たらやつぱり同郷の人でした、其町田さんは今本鄕に工學士夫人となつて新家庭を造つておらつしやる。こんな風なので書いた人も知らぬけれど一度見た事のあるのは確です、そんなら雜誌を調べたらいゝでせうと云はれるかも知りませんが、わざ／＼押入れから引きずり出して座敷一ぱい散らばして澤山な時間を費すのが惜しいから、それよりも好きな本を見てる方がよつぽど樂で面白くつていゝのですもの。

一番終りに長々と惡口を書きました御免遊ばせ。

（評）穩當。

○熱と力

小石川　天衣子

「新文章」を讀んだ。ありのまゝを言ふと私は、女に關した雜誌といふものを、この數年間、殆ど手にしたことがない。それがどういふ心の廻り工合か、かうしかものが讀んで見たくなり、なるべくみづ〳〵しい、若い人たちの書かれたものをとたのんで、得たのがこの「新文章」であつた。初めは何の期待するところもなく、一枚々々と讀みゆくうち、私の心はあやし〳〵探へ出した。そのまゝ息もつかずに二百ページ近い紙數をはぎつ〳〵して了つてはつと深いため息をした時、頭の中に殘されたものは何者かにむかつて眞面目に訴へつゝある若き女の歸嘶をしぼる叫び聲であつた。

全體を通じて「？」と「！」とで埋められてあると言ふてもよいその文章には餘裕といふものを見ることが出來ない。それだけ、熱と、力とがみちみちてゐる。あゝ、我が友の一部はこゝまで來て居られたかと思ふと、うれしさはやがて羨望ゝ代つた。中にも、まだ人妻とよばれぬ君たちの上を、祝福せずには居られなくなつた。その充實したる心持、張り切つた胸よりとほばしる呼吸は、富士のあらしも力なく思へる。高く訴へる聲は天にもとゞくであらう。だれに遠慮も、會釋の要もない、處女時代は眞に花である。胸にありたけの事實を、精一杯の唇を開けて、歌ふも泣くも心のまゝである。哀みといひ、煩ひといふも、肉にけがれぬ人の心は開けて語る事が出來る。淡しいのは無垢なる人の現在であると思つた。さらば人妻――人妻はどうか、私の言ふのは凡人の名譽や富を唯一の財產と心得て、何の自覺する處もなく、そのひゞ〳〵を夢のやうに送る人の事ではない。深く自分を意識して、淋しさの中にも、充實した生を送りたいと思ひなやむ人の、暗恨の裡よりしぼり出す、やるせないうめき聲を聞かうとするのである。

或人は肉の破るゝと同時に、はげしく泣いたといふではないか。又結婚の日までは自分の前に、哀願の涙を垂れつゝあつた人から「おまへ」の初受けをした時は、碎かれた心と共に、夢見る人では無くなつたと言ふてをる。この樣な事は、習慣の眼から見たならば誠に小さい事であらうけれど、母のまへには男女の別なく、大空たかく生ひ立つて來た心にはながい稗めのなわの端を見せられたやうな心地がしたとの事だ、またはげしい反感を抱きながら、年々に凡人の子を産みつゞけてゆくといふ人もあつた。

人生の意味は深い。自意識と、習慣と、愛戀との間にもつれて起る心をどうする事も出來ないで、悲しい矛盾の中に悶えながら老いてゆく人の幾たりをも私は知つてをる。このやうな事について、誌上の諸姉がたはどう解決してゆかるゝだらう。「新文章」の中にも奥樣がたの手になつたものは少くない。けれども、その縱橫に走る筆の中には言ふに言はれぬ束縛がある。讀んでをる、私はいたましい心持になつた。新しいことを言はふとしても女の心は弱い。殊に一人をたのむ人妻の身であつてみれば愛人の感情をそこなふといふことがいかに苦しいことであらう。それ故、胸にあまる疑問をつゝみながら、默々として凡人のあとからついてゆくのだ。周圍の事情を破つてまで、思ふがまゝを語らうとするには異常な決心と努力とがいる。これをあへてする人の少ないのも無理はない。

人妻――と正式によばるゝ人でなくともよい。一たび處女期から次の境にうつされた人の口から、深いまことの心に觸るゝ或ものを銳い神經の感ずるがまゝに、つくらず語つてほしい。

（評）眞に『新文章』に通じた心持を捉へて言ふことを的確に言つてゐるのが欣ばしい。

○病床にて

古　那　夢

十五日發行と知りながらも、病床に臥して居た私は、七日頃から本屋に使を出しては『新文章』の催促をした。

天井の木目も、襖の破れも、數へ盡してしまつた私の目には、この新ら

しい美しい文章が、どれ程花やかにうつッたでであらう。
そして今病上りの身體を、未だ床の上に置いて、眞白になつた硯の海を、熱臭い口でふき拂つて、駄評をさせて戴き度といさゝかけなげな心で筆を取つたのである。
さて何から申あげやう。
花瓶にさした山百合の大きな輪が二花咲いた、風が吹き込む度に奥ゆかしいかほりが机の上にゆら〳〵とゆら〳〵。「い〻香だ」と思つて眞中の大きな蕋をぢつとみつめ乍ら、新文章のペーヂをはら〳〵と繰つた、ポーと目を落すと「山の彼方のなほ遠く〳〵に或る幸もやと迷つて行くのである」といふ句が目についた、左の手で一枚をつまんで折かへしてみると。
初夏の人々――としてあつた。
燃えかへる血潮を抱いて都へ出て來た女、自覺ある女の二十二がこれ程まで淋しいものとは思つて居なかつた、衰への初めがかほにまでにかなしいつらい思にかき亂されるものであらうか、三年後の私もこんな思に悶へることがあるのか知ら、あゝ私はこうして山百合の香を嗅いでいつまでも居度い。
夢殿守この人は始はいつもさつとしてはつきりして居る。その人の原稿が白い地に光る程の墨色で書いてありはしまいかと思はれてならぬ。
偽りのない告白をかくまで自由に寫す人の筆先がねたましいほどうらやましい讀んで居ると自然に目のふちがやゝ凹むだ頰の色もよくない二十二の夢殿守がぽつと目尻を追つて來る樣な氣がする。
淋しい道――前の轉宅よりもこの方が好きだ
「姉やお前國さんと喧嘩して惡かないかい」と弟の貞治に聞かれてお雪は「皆な汝が莫迦だからだい」となりながらも可憐な弟を愛して居た。「莫連者」と罵れても一人の弟の爲めになほも自ら世間の嘲笑を買つて居た。
白痴い弟に姉の心もくまずに今十八がから後三つ四つ年を取つたらいいお嫁さんを貰ふんだよと云つた、これ等の關係人の心と矛盾の關係を丁度絲をあやつる樣に奇麗にまとめてあるのがこの文の骨だ。
文は全然異がふが思想が一葉式の樣に思ふ。
五月の水邊――新文章の誌上を飾る花の第一はこれではあるまいかと思ふ。
いつもの樣に燃えて燃えてまつくろに焦げて居る樣なことがなく、細やかなまじめな寫實の文として私は面白く讀んだ。
「其舟は徐々に風を孕んで穩かに潮に上る、するとまたあとからゆつくりと動いて一つの白帆が見えて來る。その後に一つまた一つ」
丁度活動寫眞によくある圖だ。もうこれ位でいゝ加減に筆を擱かうと思ふ。
初めからくりかへしてずうつと讀んで見ると何だか皆貶めて書いた樣だけれど仕方がない、い〻と思つたのを引ずり出したのだから。
調子に乘つて今にどんなことを云ひ出すまいでもないからこれでやめる、私も人に憎まれるのは嫌な方だ。
最後に自分の作を見てどんな感がしたかと云ふことが一寸云ひ度、自分の作の批評なんてよつぽど妙だと思ふけれど、二月も前に書いたのだから、自分のと云つても、もう他人のも同樣切りはなした樣なものだ。
そこでお那夢なんてまづ名からして、おかしいどう云ふつもりでこん


夏すがた　深川　春川花舟

な名をつけたんだか、自分にも解らない、まああてづつぽうの名だ。そうして中の事柄もやつぱりあてづつぽうに自分の思つた通りをどんどん書いてある　女のくせに生意氣だ、文章もこの上なくまづい、たゞ最後の一句が非常によく出來て居る樣に思ふ、自分があんないゝ文句を頭から出したのかしら、書いた覺がないが。

（評）自分の作に就いて言つたのは面白い。

○思つたまゝに

佐分華影

私にはとても批評などゝ名のつく事をするほど、まだ分らないので御座います、例の通りに讀んでゆきましてはやぶさ樣のを讀み終つた時に、妙に何だか思つた事が書きたいと思ひました、然れども口惜しい事には思ふ樣に筆のまはらぬ事ですが少し言はして下さい。

第一表紙がすつきりして居て本當に好きです、強い色を使はないで、氣のきいた上品な繪です、中全體は皆若い女の爲に開放してある、張のある、懷かしみある現代の女の代表的雜誌靜思して居ると皆樣の血の音まで聞える樣な新らしい雜誌進んだものだと思ひます。

一呼吸。わかすぎ樣好い題です、初めから終まで自己と云ふ物を忘れて、あ一いきに讀み終つてホッとして我にかへつた時に、あゝ私許りぢやない……と、「ぱしみを銜ふ女よ、死にたいと云ふ者先づ死んだ例はあるまいよ」何故死ねないでしよう、の所又、自殺の扉からはねかへされてとぼ〳〵と……と云ふ處など、秒は暗誦する迄讀みかへしました、此處の處は讀みかへさなければをられませんでした、御達者な印象深い文御老熟な御筆。

七色の虹。のばら樣、たゞ私はあゝと言ひ知らぬ感じを味はつた、思ふ儘に御書き遊ばした、何故華やかなる事に沒交渉になつて居るお方とそれだけ深く胸を刺戟されたのです。

解けし謎。白ふぢ樣、涙のにじみ出る文です、御氣の毒です、此の樣な思ひに悲しみ悶えて泪して被在る方も、他にあるでしよう。向上心のある身には身を刺される樣な穴の中へでも落された樣な思ひのする言葉でしよう、同じ樣な思を持つて居る身に同情致します。

五月の水邊。長曾我部菊子樣、動揺や衝動に渦を巻いて居る都、其隅のはしの都の郊外、繪の樣で御座います菊子樣には物足らなくも思ひました。

寢息。蓮の花樣、人に考へさせる樣な散文だと思ひます、來客を投といて一日の疲勞に子に引き入られて寢る、處などこうして女は若い氣が衰えるでしようか短いけども人世を味はせる文ロミオとジユリエットの夜窓にて話して居るところを御書きなさつたところ一寸面白く切ない樣のところを氣の利いたと思ひます。

さみだれ日記。三宅樣、濡色の趣味と六月の心持と、女の一歩と男の我儘女の我儘、三味線の思ひで、皆それ〳〵意味多く讀みました、深川の空氣だん〳〵とお江戸の趣味がかはつてゆくのが書いてある。

學生の都會に更衣室。二つとも調子の高い文、東京の方だけに、學生氣質がよく出て居ます、内藤さんの文でも讀んでる樣な氣が致します、更衣堂も、女の外出前の部屋から起る言葉面白く讀みました終りの方がよく思ひました。

初夏の人々。讀みました時は何かこう自己と云ふ物を自覺させられる机によつて鏡を眺めて深く物思ひに更けつてらつしやるのが目に見える樣、山田樣のお作ですもの。

小說の轉宅、小笠原樣轉宅したいと思つて居るが實行されないのが、小事件の爲に轉宅すると云ふのである、自己自己の爲に家の爲を働く母子一郎の氣にさわらない樣にして居る、母子の樣がよく出て居る不平ながら一郎の言葉に借屋を探しにゆくところ面白く思ふ、一郎等の狂人に持つ不安等、御老熟です事。

淋しき道。佐藤樣、希望もすて弟の爲に犧牲に身をして世とたゝかつて居る姉の淋しい心持などだん〳〵と心の荒んでゆく内に又女らしい感じのある、お墓の所など哀れで御座います、二人がよく描かれて居る。

別れて居る間。同胞八人の中の二人が兄樣や妹樣の性質等を書いてらつしやる、同胞が何人かあるとどうしても皆違つた樣に生ひ立ちゆきます、私も十二迄六人兄弟、今は五人です、皆思ひの性質に思ひ思ひに進でゆきます、愛する妹もあれば、心の合はぬ同胞もある、ヒステリー性もあれば、落ちついて居るのもある、兄弟は兩手の如しとの言はだんだん遠ざかつて行くでしようか、生の斷片強い言葉です鋭利なる文、感情氣をよく發表してらつしやる、引きつけられる樣な文です。

黑き蝙蝠傘の世界。印象の深い作でした二度三度讀みかへしても讀み倦かない樣な文です、たゞはやぶさ樣の前にひざまづきたい樣な泣きたい樣な氣が致しました、私の筆の廻らないのが殘念です。

自ら縊る記。何故人は他人の事をじみにさせ樣、老いさせ樣とするでしよう、若い人妻の心持表白されて居ます。私の心は破れて居る、御氣の毒な身で御座います、張り出た叫びの言葉、離婚破約は悲慘事である離婚の爲に破れた心を抱いて悶えて居る女の方は哀れである、離婚等平然として居る世、女はどうしても弱い所です、私はもうこれで止めます、若き女の心のひらめき雜誌界に異樣です間違がつた事を書きましたかも知れませぬが、皆樣は私の失禮なる事は御ゆるし下さると信じます。

（評）まだ幼い、幼いところが取りどころです。

○『一人子の運命』を讀みて

相模　白花

一人子の運命を御書きになつたよし子樣に、私は何と申上たら好いのでせう、外の方の作よりも、我心を強くひいて三度まで、讀み返しました感謝と申しませうか、同じ樣に自分の運命を咀ひ自分の消え思ふ、情の向ふところに自由の翅がのばし度い許りに、大切な二度とは來ない勉學の時の多くを殺し去つても惜しまず、到底インポシブルな望願のために一週つた一時間の教育の講義の時でさへ、目許りはちつと敎師を見上げながら心は能はぬ望を追ふてたゞ運命を悲しく考へるより外はなかつた私詩人にてましますと聞きしが故に、御み足の立たざる方と聞きしが故に幼き情を動かしてと仰せられた、よし子樣と私はそれは境遇に於ては幾分の相違は免れませんけれどやつぱり師に對して淺からぬ同情を持つた私そして我が熱情は決して一時的でない、異なるものであるにも係らず冷笑し去られた、それでも尚それを消す事の出來ない私——の胸中が、よし子樣の御筆によつて遺憾なく（とは云へ私の情火はもつと熱烈なるものであると思ひますが）描き出されたのが實にうれしく思ひました。

多くの友は幸なる人と私を評します順境に育つた人だからどうしても思想が淸く愛らしいと私を愛してくれた友の一人は申しました、けれども私は決して幸だとは思ひません、ほんたうによし子樣に同情致します結びつけられた責任ほど苦しく辛いものはありませんもの。いくら責任と云つてもその始には大抵自由意志による撰擇が與へられてありますが、たゞ自分一人が父祖の血を傳へなければならない生れ合せ許りは、撰擇の自由が全くないのですもの。

賤よし子樣の御作によつて私に再この樣な事を切實に思ふべく餘儀なくせられました、悲しいのです、しかし自分の思ひを自由に筆する事の出來ない私、私にかなつて私の思想をかいて下さつたと思へるよし子樣のこの作のために喜びまた感謝いたします。

（評）眞面目ですが言葉が徹底しません、文を作るに熟れないからでせう。



初作

編輯局選

○葵（地）

いさを

暑い暑い、足がだるくて元氣よくあゆめなくなつた。から松の下の涼しい青い草の上に腰を下して休んだ。少しは元氣づいて又歩み出す今度はまへよりもはやく、――汗が出る――家に歸りつくが早いか袴をむしりとるやうにせはしくぬいだ、そしてぐつたり裏椽の柱によつて疲れた足をなげだして花園の方に目をうつす。夕日が竹の間からちら／＼とのぞく其度に、弱い光線が流れてくる。どこからか一羽の蝶が飛んで來た、ひら／＼と青葉の間をかけまはるぢつと見ていると向ふの竹の側にある梅葉にとまつたらしい。時々葉かげに白いはねが見える。

風につれて竹の古葉がさら／＼と靜に散る。そのはにつれてもとの花の方を向くと白い葵が二三輪蕾をやぶつてゐる。一重のうすい花瓣あゝ潔白！私はこの花がすき、つく／＼目のいたくなるまで見た。淡紅の小さいやさしい花。かたく蕾を守つてゐる夏菊、其上には美しい美しい緑の光を心地よくはなつてゐる。柿の葉がある。氣がついてみるといつか汗はかわいで思はず衿をつくらふた。

あの蝶はどこへ行つたらう。あの白いはねの蝶は？

野趣愛すべし（評）

○暴風雨の後（人）

安房　石井まこと

土色に濁つた川水が渦を巻いて重さうに海へ流れ込む水の涸れ切つた昨日の姿は何處へやら、砂が流されて意外な所へ露出した岩上へ、猛り狂ふ水はみる／＼白色の玉となつて飛散する、川底には何物も見えぬ、時時古帽子や禿げた蜜箱が威勢よく浮てくる曲り角へあたつて海の中へ捲き込むと姿は見えなくなる、浪の音はやんはりと厚く波頭が折れると見るや、竹や木の切端が無造作に渚に打ち上げられるのだ、眞白な泡がブクブクと日光に絶えると波頭は揉れ砕けて砂を洗つてはチャプ／＼と河口から突入した後、波は先波を追ひ越さうと岩も岸も用捨なく乗越えて葦の弱腰をたふしながら橋杭に無遠慮にぶつかる、先へ先へとザアザアと胸をゑぐる様な音を立て岸を洗つて行つた。

察觀が實際だけに一寸描寫に生氣がある（評）

○ゴム輪の車

廣島市　藤香

「今日もお暑うございますネ」と、いひながら、辰やが青磁色のパラソルをパチンと開いてくれた。靴の紐も結び終つた私は。立ち上がつて紫メレンスの包に、小さいお辨當持ちそへて、パラソル受取りさつさと門の外に出る。

スウツと吹いた朝風に、長い袂はひら／＼と舞ふ。「今日もゴム輪の合寢(？)に逢ふんだワ」私は思はず冷やかに笑つた。「逢ひたくない」それは私の眞情がどうしたつて逢ふ。本道なんだから。厭でも逢ふ。逢ひたくないけれど、……午傾けてとつく／＼急ぐ。頰にさわる風が心地よく、何だか甘い香りがする様だ。太陽は柔い光を私に投げてゐる。と見上げる様な煉瓦塀厳めしい門。之が此家の生命だらう。威嚴を見せるためには。たが私の目には何となしに羨ましく見える。と。忽ち音もなうシユウと、不意にリンリンと響く鈴の音ゴム輪の車だ。誇り高ぶつてあらゆる權勢を振り廻す强者が、その日／＼の生計に追はれて、足許も覺束ない弱者を叱咤する聲の様に、其の音を聞いた車は私を避けた。「二年昔をもう忘れて、？世辭の及ぶ限り父の許に來て、膝折つたはあなたの父様でしたネ。その折臺所口からソツト「奥様迄」とて、臺所の板場で頭すりつけたは、あなたの母様でしたネ。」あらゆる過去の追懐は、サツと私

の頭の中に電の様にひらめいて、それが何様ふものかといふ一種の反抗心となり、車の過ぎ行く刹那の間に、射る様に今の令嬢昔の律ちやんの顔を見た。と、パッタリ視線があつた。私は眸をたらさなかつたが、ゴム輪の車は早や三間も向うに飛んでゐた。「をかしいワネ」と、或物に呼いた私は、一人クスクス笑つて見た。然しその笑は淋しい笑であつた。振り返るとゴム輪の車は威勢よく走つて絶間なしに鈴をならして、道行く人を避けしむる、恰も勝ち誇つた王者の様に、私の目に映じた。

そんなに反抗することもなからうと思ふ（評）

○繪筆

山口縣　岩倉美智子

郡だよりの序に此頃盛りの河原撫子の花を齒き、三枝様に送るやうなし、絵筆洗ひにと脊戸の小川に出る、足音に驚いたかいきなり蛙がトホンくと水面を破つて飛び込む、立ち止つて蛙の行衞を無意識に見て居ると、蛍が足元を横切つて、叢にガサくとはいつてしまふ、小川の水面にはまだ波紋が消えぬ、ふと向ふの小道に目を注ぐと、學生らしい人が三人計り植物採取の歸りとでも云ひたい様な風袋此方を見て竹をむしつて投げたり、手を擧げて招いだりする、失敬な、然し田舎には珍らしい事、それより少し後れて鮎釣りの歸りの人がをかしい大股に歩いて行く、はて誰れだろう、また前の學生らしい人達は新道に出ない、筆を持つたまゝうつとり見て居ると、コッコツコッと烈しく鶏が啼きたてる、ハッと思つて振りかへると、雌鶏が一羽追はれて此方に逃げて來るいつもこの鶏、鶏舎に入るのが遲いので世話を燒かす、厄介鶏シッと追ふと小川を飛び越し畔に出てしまつた、下男と隣の榮さんとが兩方から追ひながら、漸く風呂場の方にかへらず、思ひ出したやうに色筆を先きに洗ふ紅の煙が水をくゞつて行く、かの様に綺麗だ色もはや薄れ行くと、もとの清きながれに返り獅子に似た雲が判然と寫る、見渡す青田は凉風に薬つれの翠を一層高めた。

繪筆を洗ひに出るところを描かうとしたのは宜い（評）

○日記

岡山縣　野崎芳郎

餘り寫し手の多うかつた爲め、四時の列車に、おくれた私は、六時には是非と、賑ふやうにステエーションへ來て見たら、早や來ていたのであ赤幅に頼んで切符を買つて貰らつて乘つた、その時パット電燈はともつた、同時に十五六人の乘客の視線は自分に注がれた自分は急に、顔がポカくしだした「少し御免んなされませ――」「サアどうか」と云はれて自分は女教師らしい人の側へ座した、丁度其前に中學校なら三年生くらゐの書生さんしきりに何か書いてをられた、寫生してゐるのだらうかそれ其何にかへ投書する原稿の下書でもしているのだろうか、自分にも此のくらゐの年の弟が上京してゐるがと思つた。

汽車は笛の合圖と共に、暗いレールをゴオーくと音立てゝ進行した――――――自分は今日寫した寫眞。初めて島田に結ふたのだからよく寫つてゐるたろうか『まあかつこうよく――』と寫眞館の奥様に云はれて、顔が赤くなつた事や島田を誰ぞ見て笑つてをりはせまいかと思つていつた、其内汽車は庭瀨に着いたので、自分は立つた、そして書生さんのノートブックへ『車中の人』として島田に結つた女が書いてあつて自分は飛び下りるやうにしておりた。

下りたのは自分と女教師らしい人と二人ばかりであつた。

○思ひ出

淺草　小貫いの子

水天宮前

人形町水天宮前と云ふ車掌のこゑに私は眠りから、醒めたやうに頭をあげて、角から三本目の柳を見た、五年前には此柳と電信柱とにつなを引いて献提灯を發つたこともあつたと思ふと、今の我身が何となく、不安らしい心地もして、過去、現在、未來、と夢のやうに思ひは馳せた、車掌が何か云つたやうだが　何だか分らなかつた。

晴着

縫きつくやうな蟬のこゑをききつゝ、風透しのいゝ椽側に出てせつせと里へ行く晴着を縫つた。

盆に着て來るやうにと手づから、糸を採つて、織つて下すつた姉樣はこれを織り上ると間もなく、急病でなくなられたのである、此柔らかい絹には優しい姉樣のお息が、永久もかゝつて居るのだと思ふと、限りない懐かしさに、涙が止め度なく流れた、やかましかつた蟬のこゑもいつか靜まつて、くりやの方では麥藁火の音がパチ〳〵として、夕のいそがしさを告げた。

蜘蛛

葉末の露が朝日に映じて黄金色に美しく輝いて居る朝であつた。昨夕の雨にめちや〳〵にされた、己が住家を彼方此方に糸を引いて、熱心に造り直して居る。蜘蛛共をぢつと見て居られた兄は、學校から歸つたら皆な取つて鷄の餌食にしてやると云はれた、私はそれが限りなくも可愛いさうで、兄の居ぬ間に、そつと叢に逃してやつた。

これは私が十一の夏であつた

昔の友

私には高橋さんと云ふ仲のいゝ友達があつた。

兩人は毎日誘ひ合つて學校へ行き、歸ると、兩人一所に其日の課目を練習した。それがすむとお定まりの一錢でお菓子を買つてくる、それから加留多をするのである、それが丁度規則のやうに毎日少しも變らなかつた、丁度小學校一年の時、高橋さんの一家は都合上東京へ引移ることになつた、別れる時にふたりは、手と手を取り合つて泣いた、今は此身も鄙に住む身となつたが、只石原町ときいたばかり、たづぬる術もなく十五年このかた只折々に思ひ出されるのである。

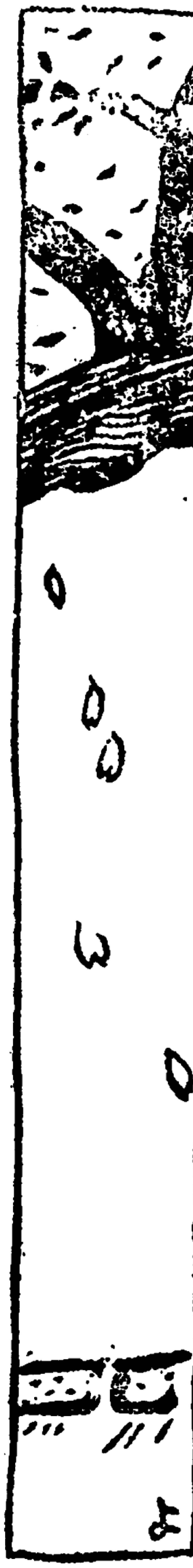
○水彩畫

浪花みどり

縫物をして居たが、それもあいてしまつて、見るともなく部屋の内を頭をめぐらして、ブラッと見廻した、と、壁の水彩畫の月の夜に目がゆくと思はず見入つた。

おゝなつかしいこの畫、からだはしらず〳〵畫に向つて居た、去る霜生の忘れもせぬ二十三日になつかしい君より賜はりしものよ、去年姉樣の宅へ遊びにいつた時に、毎夜月をながめては、故郷を思ひ君を想ひして思はず浮んだ一首を送つた時に、すぐ繪筆とつてかいたのであるといつてわざ〳〵送つて下すつた、あゝあの時のうれしさ、眞にうれしくて兩手でだきしめた。

御親切なお心をいつ〳〵までも忘れまいと思つてかゝげたこの畫、今はかなしい事ばかりも想ひおこす料となつた。今頃は草葉のかげでどんなに思つて居られるだらうか、前途有望と目されし青年畫家は、去るみな月なるかば、他郷の空でふとした事がもとで彼の世の人となられたのである。よろこんで戴いたこの畫、今は思はぬかたみとなつてしまつた。私が在學當時復習して居るとよく遊びに來て。話しが上手なだけに、熱心でいつも話は水彩畫の事であつた。それに感動されて、自分も水彩畫を一生懸命に勉強しようと思つて居たのに、熱心な師とたのむ人は、はやこの世にはなき人となられた。かたみとなつたこの畫、この畫をどちらがお手本かと判斷にくるしむまでならつて、淋しいこのこゝろをなぐさめん



読友くらぶ

御見舞を謝す

○暑中、風水害等の御見舞を下さつた方々に拝謝へたします、暑中、記者一同健康、編輯に従事して居ります、風害も水害も幸に本社及び記者に何等の被害を與へませんでした、わざ〳〵御見舞の繪ハガキ又はお手紙を下さいまして有りがたう存じます、左に御芳名の分つてゐる方々を擧げて答禮に代へます（記者）

牛込、廣澤靜代子　神戸　こと　千葉　工藤頭子　淡路　岡禰子　近江　佐和田芳　日光　高村たき子　秋田縣　小川筱香　岐阜縣　中島幸枝　京都府　はつゆき子　尾張　佐分富美子　府下　大浪せい子　福井市　北利子　田代いせ子　長岡市　江口みけ　神戸　田中港の女　西茨城　田村波津子、神戸　足立春子　美作　水田邦子　堺　白つゆ　松本市　矢口貞子　大阪　田野靜子　梨花　其他

交際を求む

○　朝鮮京城蓬萊町一丁目一番戸ノ二　森田敷子

▲おなつかしき　本誌の諸姉様よ私は此の朝鮮に參りましてより父を亡いましたのが丁度私が高等四年でした其後は家事にて母の手助をしながら淋しくかたわらにて女子文壇を拝見致しては皆様を羨しく思つて居りました諸姉様よ何卒私の様な身なれど御交際をして頂戴な御願ひ申上ます

○　美作國久米郡の山里にて　青北まさ子

▲初投稿　私は時々本誌を求めては皆々様の玉稿を拝見して、淋しい友の無い妾の無二の姉妹としてゐましたが、今月から不羞ながら思切つて大膽にもお恥しい文章を投書致しましたからどうぞみな様の妹と思つて御指導を願きたいのです。記者様初め諸賢姉様方よろしくお頼み申します

○　宮城縣伊具郡角田町目黒屋方　奥野環

▲寫眞と繪ハガキ　誌上の姉上様不束な妾を御厭なく御交際して頂戴な特に繪葉書又は美はしき皆様の御寫眞好きなのよ何卒どしどし願ひますわ妾も屹度差上げてよ

○　兵庫縣津名郡尾崎一一〇四　清木波留子

▲千鳥ケ島より　殘す休暇もわずかとなつて參りましたわねおやさしい誌友の御姉さんますます御壯健で？——妾は本年三月某高女を卒え今はこの淋しい離れ小島に女子文壇と地方の名所繪はがきとを何よりのたのしみに暮す不束なものでございますどうか誌友の姉様御地の名所繪はがき御惠みなすつて下さいな御禮には珍しくも御ざいませんでせうが千鳥ケ島の名所でいたしませう

○　群馬縣新田郡木崎町赤堀村　小澤竹子

▲淋しい秋　誌友の姉上様方群馬の田舍にも淋しい秋が來ましたよ妾は此の淋しい秋を只女子文壇を讀みては一人心をなぐめて居る者でありますす御情のある諸姉君様よどうぞ永久にレターや繪葉書の御交換を願ひたう存じます

○　大分縣速見郡中山香　露花子

▲涼風香る窓の内にて　久しく〳〵悲しみと寂しみとにとざされて苦るしみ悶えて居ました私も春

の頃スッキリ胸が明きまして夕風のそよぐ黄昏時など浴衣の袖をひるがへして露をおびた姫百合に夕映の色美しくさしそふ丘の上に立つて歌など想ふ種の心になりましたの　これも皆御同情の厚き諸姉様方よりお優しく慰めて頂きましたからなのです深かく〲感謝致します何卒今後も喜倍の御同情もて永久に清よい御交際を遊ばし下さい

○　大分縣速見郡中山香驛七、七番地
萩の季

▲暑中●●　お懐かしいお姉様、お姉様、はこの長いお休みをどうしてお過しになります此素敵に暑いことねくれ〲も御自愛遊ばす様に祈りますまへにかわらぬ清き御交際下さいませ

○　京都紫野大門
要司村韻子

▲しばらく●●●　今年になつてからある事情と學校の方が忙しいので暫らく御無沙汰しました、今は學校も夏休みで少し心が文學方面に傾きました、皆さまお交り下さいませ、神戸の浦上百合香様、須磨へ參りましたらおたづねいたします

○　岐阜縣土岐郡駄知町
成瀬久吉方　八千代子

▲お仲間入り●●●●●　私は八月號から本誌愛讀者の仲間入をいたしました、私は和歌、俳句、高尚な俚謠などが好きです、悲しい〲小說が好きです新已が罪をよんでむやみに泣きました、皆樣おん玉章をお惠み下さい

○　愛媛縣溫泉郡河野村柳原
沼田みや子

▲文學●●　片山里のいぶせき伏屋に女子文壇を友としてゐます。同じ御境遇の文學同好きの方々に御交際をねがひます

○　美作英田郡倉敷町
山内福代

▲山里より●●●●　私は山里に淋しく暮してゐるものです、本誌は二三年以前より愛讀して居ります皆さま末ながく御交り下さい

○　群馬縣桐生局天王宿
關口和香子

▲諸國●●　の純潔にして邪氣なき御婦人方に交際をねがひます

○　埼玉縣入間郡川越町井上方
高森操

▲皆さま●●●　隨分あつくなりました、お變りなくつて、私はレターを讀むのと出すのが一番好きです、何うぞ皆さま永久に御交り下さい。

○　佐渡相川町
小田切錦子

▲歸郷して●●●●　マー私の出產した事など、誰方がおしらせしたのだらう。私は永い間、文壇とお別れして居た。十一月の末に五つ月の大腹をかかへて越の長岡まで出かけた、此地の誌友○○さんとは、長岡座の大阪南部太夫の興行のあつた時、親しく語つた。そこで漸く三月の十二日に兩親に迎へられて我なつかしい家へ入つた出產は四月廿八日、午前二時で、女の子。父が雅子と名づけました、極壯健でございます。雅子は四十日目にとりましたのよ　夫と別れる時、分娩記念の撮影しましたけれども、今手元に一枚しかありませんから上げられません、あしからずね

横濱の千鶴子様先日は御手紙有がたうございました、かげの人Pつての は何號に出て居りましてつひ私は見落しました、御地誌友會は大賛成でしたけれど、こんな放れ島に今居てどうする事も出來ません。私は八月の末頃歸濱致します。當地は來る十三日お鎮山祭なので何處の家でもいそがしうございます

○　靜岡市追手町番城内
杉山[illegible]

▲ニコニコ●●●●　皆樣御仲間入お願申上ます、私しは大いのニコニコよ皆樣年中ニコニコで、樂しく暮したい御方は往復はがきか二錢郵劵封入で御申込下さいニコ〲の福音を一部宛ニコ〲して御分ち申ます。さやうならニコ〲

○　山形市宮町三三一
田中清枝

▲初めて●●●　私ははじめて山里から投書するものです、皆さま以後はよろしく御交際下さい、又美しい繪ハガキの交換をねがひます

○　伊勢國桑名町中町水谷彌六內
安井政枝子

▲名所繪ハガキ●●●●●　誌友の御姉君諸君よ何卒ネ永久に御交際を願ひます就ては誌友御姉君諸君の

内に名所絵葉書御交換御望の方はドシ〱御送り被下いませ、きつと御返禮は致します尚寫眞交通をも御願ひ申します

○　新潟縣　水下春子

▲御交際を　私は此の町の淋しい所に住つて居る不束者で御座いますが、御やさしい誌上の姉様方御手紙で御交り下さい、して繪葉書の交換も御願ひ申します

○　牛込區原町三丁目四十八番地　藤田ツル様方　みなしご

▲群馬の方　上毛の九輪草様荒井よし子様小澤硯様關口千代子様落葉様林文子様御住所御知らせ下さい私し群馬の方戀しくつてよ私は烏川の畔から先年四月當地にきて居りますのよ淋しくてかないませんどうぞ御手紙を頂戴な又誌友の皆様御文通を願ひます永久によ私文通が何よりの楽みよおみすてなくね

○　北海道釧路春採　北條光子

▲繪葉書御好きの　誌友の皆様私は諸國、風景繪葉書をあつめて居りますが私の好きな水の繪葉書が仲々集りませんどうぞ水のや月の繪葉書を御持ちの方がありましたら御送り下さいまし御礼には春採湖畔やアイヌの繪葉書を御送り致します又御玉章の御交りも御願ひいたします

○　東京府澁谷町中澁谷　本山さい子

▲初めて　おなつかしい皆様方私は此所始めて御交際を願ひますながく久しくシスターの如くしたいと思ひます私は某女學校の四年で十七歳と三ケ月ですなるべく同年位のかたがたがうれしゆうございます又雑誌がすきですから交換を願ひます

○　朝鮮釜山西町一丁目　長谷場純子

▲朝鮮より　記者様初め愛讀者の皆様御變りもございませんか私も五六年前から愛讀して居る者でございますの皆様にお交りをお願ひを致しますのよ此れが初めてゞございます何分よろしくお願致します

○　横濱　若葉

▲此度初めて　私は御交際を御願ひ申ます私は學識〱何も知らぬ者ですが幼い時から文學が好きでしたがつたない上に家事に取りまぎれて思ひを果されないのですがどうぞ是れから姉上様方の御やさしき御手に何卒〱御道引き下され度御願ひ申上ます

○　香川縣三豊郡観音寺　和田茂美

▲田舎者より　記者様初め誌友の諸姉様私は田舎に住む一少女ですが先月の女子文壇を見まして私一つ投書をして見たいと思ふ心がしましたこれから一生懸命及ばずながら投書するつもりですから誌友の皆様どうか御交り下さい繪葉書御惠み下さつた方には當地名所のをさしあげます

○　淡路野島村　國分光枝

▲短册　七月號にて諸姉様に御願ひいたしました自作の和歌短册に書いて送つて下さいました方御かげにて澤山ありましたほんたうにうれしいでした、どうか此の後も御交換下さいまし此度御返しいたしますから

○　茨城縣眞壁郡上妻村大字江四十三番地　平田喜子

▲常陸にて　誌友の皆々様不束な妾も先月から本誌の愛讀者になりましたから以後は宜しく水魚の御交際を願ひます誌友諸姉よ名所の繪葉書や寫眞の交換大好きでよ御返事は必ずします。

サヨナラ……

○　北海道栗山局區内　篠原てる子

▲北の海より　皆様私は繪や歌を好みます何卒ハガキに繪や歌を書いて御めぐみ下さい下手ですがきつと御返事致します、また御望みによつて北海道のゑはがきでもさし上げます

○　岡山縣小田郡美川村　川宅滝子

▲文藝研究　皆様御變りはございませんか今度私等が數名相集りて同士會なるものを組織し專ら新文藝研鑚を目的として毎月一回回覧誌を發行致すことに致しました皆様入會を願ひます但し少女にかぎります

○　茨城縣結城郡小貝村飯田隠居内

田中春江

▲寫眞と栞●●●　前號に於て皆樣に御願ひ申しました品物に對して一人々々御禮の品を差し上げましたつもりですが稀には洩れた御方は早速下名まで御一報願ひます。

次ぎに諸姉樣の御寫眞又は皆樣の會合の御寫眞或はみな樣の枝折でも御惠み下されし御方には左の書籍の中寫眞に依て二冊まで差し上げます而し如何なる寫眞や枝折にても一冊は御指定して申し入れて下さいな。　紅葉金色夜叉。花袋田舍教師。武藏野。肉彈。四十三年婦人世界。一葉全集。月影集。寄生木。多情多恨。夏子。俳句大全。美貌術。國民童話。生花獨習。歎かざる記。母の面影。夢二畫集ハルナツ

○　奈良市鶴福院町

岡田市松方　紫子

▲奈良より●●●●　御姿さきびしく御座いますのね皆樣には御變り御座いませんか、妾は本月から御姉上樣達の御中間入を御願致す積りです、青丹よし奈良の都ぞ一人鹿泣く聲のみ聞きて淋しき月日を送り居るもので御座いますから御心ある御姉上樣永久に御交り下さい、皆樣も御承知の通り奈良は名所の多い處ですから、色々な繪葉書など變つた物御送りしますから御手紙と繪葉書の御交際をねきつゝ願ひます

○　堺市吾妻橋通三町

高橋向子、岸子

▲ちぬの浦邊より●●●●●●　誌友のお姉樣方妾は茅渟の浦間に住むあはれな女で御座いますが皆樣方の中に思召しが御座いましたら一時的でなく御交際下さいませ

○　德島縣美馬郡半平山村

尾方まか枝

▲山中より●●●●　御慕しき諸姉樣方私はたよる姉妹の無き淋しい一人ぼっちなのですだから此山中に女子文壇を友として淋しく暮して居る不束者なのですあゝ御情ある誌友の姉樣方何卒私のようないたらぬ者でも妹と思召して御玉章の交換を幾久しくお願ひ申します

書籍交換

○　大阪市西區新町通り四丁目三六

岡本春子

▲所有書籍。「金色夜叉」「黒潮」風葉著「女」戀紙情「乙女の秘密日記」惡魔著「日の出島」「古今和歌集遠鏡」「晶子の歌集」「夢二畫集」(冬旅)「美文の資料」三種「あられ酒」「日清戰征記」「英和辭典」「言海」其他女學雜誌種々たくさんあります

△讀みたい書。「露伴叢書」「紅葉集」「眉山全集」「花袋集」「花守」「春」「寄生木」

○　旅順朝日町二丁目

上田春子

▲讀みたい書。源氏物語、枕草紙、つれづれ草、白秋樣の新體詩何れにても、御持の方は何卒御ゆづり下さいませ、相當の御禮はきつと致しますからそーして旅順の繪葉書もスタンプ付のを送ります

▲持つてる書。筆草、自然と人生、土佐日記、などであります

○　神田區豐島町二十二番地

大町八雲子

▲持つてゐる書籍。歌集朝夕(岡稻里)天地有情(土井晩翠)青山白雲、青蘆集、錦木(德富蘆花)ちび筆(大町桂月)新體詩作法(河井醉茗)霓裳微吟(武島羽衣)明治百家文選(久保天隨編)文章組立法(大和田建樹)趣味の地理歐羅巴前編(小田内通敏)中等英習文庫卷參卷六(齋藤)英文アラビヤンナイト(片山)等手元に御座ります故諸姉樣のうちにて泉鏡花先生小川未明先生の御作を御持ちの御方は何にてもかまいませぬ故御送り下さいませ御望の方は豫め御手紙を下しおかれます樣御願ひ申上げます

○　石川縣金澤市小將町二番町二

小柏すま

▲文壇の諸姉樣私は各方面の新聞雜誌等拜見いたしたいと常に思って居るのでございます御不用のものがありましたらどうぞ御送り下さいませお願ひ申します御返事及お禮はきつと致します。(但し海外のものを最も望む)

○　千葉縣夷隅郡西畑村市川

鎌田冬子

▲所有の物。「文章新辭典」「東海道膝栗毛」「三年の夢」「女子文壇懸賞文集」「新書簡文」「紅葉の錦」其他名所繪端書三十枚

△求める分。「千山萬水」「關東の山水」「乳姉妹」「寄生木」「破戒」「忠臣藏」。等右いづれも葉書にて問合せてからにして下さい

○　京都府南桑田郡本梅村

竹岡すゑの

▲皆々樣の内でもしや新學士と雛子を御知りの方が有りましたらどちらか一冊でも御貸し下さいませんか御禮には繪はがきを御送りいたしま

○

群馬縣多野郡新町　高橋夕星女

▲不用の書物で持つてる物。渡邊高等裁縫講義全一冊(定價一圓三十錢)家庭要鑒、女樂師、短歌作法、源氏物語、少看護婦、離合、實用編物自在

▲入用の物。コブシ後編、ヴアイオリン、ハーモニカ。希望の方は御一報下さいな私の方から先に送ります(何を下さるから何と何と都合何冊送れといふ樣に明記してね)

○

群馬縣多野郡鬼石町物牛町九三　新井つま子

▲持つて居る書物。私の許に下田歌子著少女文庫二編五編、竹久夢二花の巻、奥村冷秋落葉籠、尾上柴舟叙景詩、窪田空穂和歌作法、等あります、是非皆樣の御不用な畫集、歌集、詩集其他文學書と御交換下さいまし

○

岡山縣淺口郡鴨方　筒井松子

▲不用の書物。婦女界、秀才文壇、文章世界、女學世界、文藝倶樂部、以上少々古い物右の本不用につき左の書物と御交換下さいまし御情深き姉上樣に御願ひいたします

△入用の書物。婦人畫報、婦人世界

●●●●●●

個人消息

▲木村綾子樣おなつかしう私は貴孃より一級下にセーム、スクールを出た者ですよ、何卒お見知り置きを。以後ます／＼お振ひ下さい金田代志樣衷心より御同情致します、自愛遊ばせよ

横濱の千鶴さん先日は大井樣のプレース教へて下すつて有りがたうございました厚く感謝いたします

茨城より　波津子

▲親愛なる女子文壇第二增刊と云ひ八月號といひほんとに勢盛んですね新文章のは殊に異彩をはなちましたあの美しい口繪の友情涼しさうな小山水なは和歌一等の佐久間貞子樣二等の花守子樣三等の高尾樣四等のふさ子樣五等のひざくら樣五香楓子樣六等の赤蜻蛉樣目醒める樣な艶かな御歌ばかり一番氣に入りましたわどうか御住所御知らせ下さいませ私も愛讀者の一人で御座いますから不束ながら御交際を御願ひます

大阪　田野しか子

▲群馬縣の御姉樣にお願ひいたします昨年十二月まで碓氷郡磯部小學校に教鞭をとつておらした須藤美枝子さんの只今の御住所を御知らせ下さいましないさゝかながら御禮いたします

兵庫縣津名郡郡家局區内黑崎　清木波留子

▲廣島の莊子樣其後如何ばしましたのですかあれつきり一向おたよりもなく——私覺えて居らしつて？

鹿兒島　白薔薇

▲誌友の皆樣に伺ひます、今より十二三年前仙臺木町通小學校に一寸尋常科に入學遊した。金澤の方とほのかに覺えてます藤せつ子樣と云ふお方は今はどうなつて御出ですか御存じの方は一生の願ひですから御知らせ下さいな朝夕おなつかしくて居ります

仙臺　野菊

▲東京の小石川區の喜多島初代さん私は村尾春江の妹なの末長く交際ねがひますよ

皆樣レダーチヤウダイネ(高女、村尾靜子)

▲御手紙下さいました日本橋の久滿谷樣下谷の寺島樣京橋の細代樣本鄕の磯野樣埼玉の柳澤樣三河の槌谷樣に御返事差し上げなくてはなりませんですけど家では文通をゆるしませんものですから……何卒惡しからずおゆるし下さいませ

芝區愛宕下町四丁目北一　佐藤篤子

▲東京の川岡直子樣、吾妻美佐子樣繪葉書をお待ちいたします、若松の鈴木歌子樣あなたのが戻つて來ました繪葉書の御交換をお願ひいたします

米澤市免許町下一三〇八　佐藤志字子

寫眞募集！

▲誌友　皆さんの面影です
▲風景　山、水、市街、其他の自然
▲人物　婦人方の美しい寫眞
▲建物　女學校其他の有名な建物

右寄贈を願ふ、本紙に掲載したる上は速に御返送いたします、殊に諸友諸嬢の新しきお寫眞を望みます

雜報

颶風襲來

「颶風襲來」の四文字を、本年ほど多く新聞紙上に見たことはない、昔は野分と云ふ文字があつて、所謂二百十日頃の初秋の天地を荒れ廻る風の名になつた、此頃の颶風は野分でない、七月、八月に多く、暴雨暴風を伴ふもので、發生は遠く南洋のマリアナ群島とか、或は小笠原島附近とか、遙なる海上に低氣壓が生じて、空氣の大動揺を來し、一時間に十里以上の速力で襲來して來る、其襲來に先つて豫め警戒する新聞紙上の天氣豫報談は大いに注意して讀まれるやうになつた、而かも今年ほど多く其警報の發せられたことはない。

颶風の通過する處、豪雨を降らすから山は水を含んで、溪流は忽ち奔騰し、本州中部の山嶽から流出する大河は、平原に來て水溢れ、忽ち堤を壞し、畑を流し、家屋橋梁人畜の損害となる、地方では廣い土地の損害となるが、東京では狹い土地の中に大きな災害を受ける。東京灣の海嘯、洲崎、月島の大災害のやうなものである、此等は近年稀に見る颶風の災で、例年のことではない。

何故に不良なるか

不良少年と云ふ熟語は新聞紙の造つたものであるが近頃は不良少女と云ふ字を見當るやうになつた、しかも新聞紙其他のもの が稱して不良少年、不良少女と云ふのに必ずしも不良でないのがある、善良にして少しく理智の明かなものが職もすれば不良呼はりをされる、不良呼はりされるに就いては、彼等の一擧一動が皆不良的に解釋される、呪はれたる若き女は斯くして屢々世の人たちから誤解を受けてゐる

誤解は誤解なり、正解にあらず、いつの日にか正解となる日は來る、今日彼等の思想、彼等の行動が世間から見て不良と見えても、軈て世の中に立つ日は彼等の思想、彼等の行動は、一世の婦人界を率先して動かすものではなからうか、吾人は毎に若き人達の間に未來の光明を見出さうとするから、然う見えるのかも知れないが、舊い人よりも、新しい人に未來のあることは確實であらう、新しいが故に不良なりといはば我等の未來は暗黑さである。

何故に不良なるか、明かに聞きたいと思ふ、眞の不良少年少女、誤られたる不良少年少女と今日の如く混同してゐる時はない、未來を持つ若き女たちに一層愼重の態度を望むと共に、世の先覺者が彼等を誤りて見ることなからんを希ふ。

萩すゝき

△米價騰貴して細民はますます生活難を訴へてゐる、感情の實得に生きる現代の若きお嬢様達も、物質の實得を云つてはいけない。

△避暑も旅行も近年のやうに天候が不安だと餘りうまく行かないと、汽車不通になつたり、交通杜絶に逢つたりする、避暑旅行の時期に限つて天候不良が多いから、天もなかなか意地がわるい。

△水野葉舟氏は中澁谷七五二に轉居した、氏は目下新しい婦人論を書いてる。

△八月は紀行文の多く出版される月であるが大部分は古い紀行文であつた、紀行文ばかりは古くなつても面白い、今人の作でも古いのが三度も四度も異つた書物に現れて來るやうだ。

△同性の戀と云ふことは、男子から見て面白い問題だが、女子から見ては好い問題でない、男子から見ても、女子から見ても、古今を通じて興味を持たれてるのは矢張異性問題であらう。

△カフエープランタンは一部の文士間に評判であつたが、カフエーライオンは銀座の十字街頭に事々しく出來たゞけに多くの人に評判になるかもしれぬ。

△田舍の町を歩いて、日本の各地方に於けるデパートメントストーアの發達して居るのに驚いた。

社員の富士登山

本社員寺田よし子、松永和香の兩名は、社長の令孃に同伴して、前月初旬吉田口から富士登山を試みた、幸ひ天氣都合よろしく二泊とも快晴、無事歸京した。因に云ふ、主筆河井醉茗も前月初旬富士山麓遊覽の目的を以て、山麓の湖水巡りをしたが、途中大雨に遭ひ、豫定の富士川下りを中止して甲府から歸京した。本號の「富河畔の町」は其紀行の一節である。

佐々木邦氏の新著

「いたづら小僧日記」で有名になつた佐々木邦氏の新著「二人やんちやん」は愈よ本社から出版された、「二人やんちやん」は本社の「少女」紙上で評判になつた作であるが、本書には其外二三の作を添へてある、斯ういふ讀み物は罪がなくて家庭團欒の間に笑ひ興じて見る讀み物としては最も適當したものであらう。

誌友の噂

△若狹の杉若里子さんから若狹風景繪ハガキ數十枚寄附されました、ありがたう。
△岐阜の篠田葛の葉さんは東京の人となつた。
△山田邦子さんは目下信州諏訪に歸省中。
△平塚白百合さんは目下旅行中、自ら稱して無錢旅行といふ。
△若杉はま子さんは嚴父逝去の爲め古河に歸省してゐたが目下は上京。
△内藤千代子さんは相州鵠沼に歸省中。
△加藤渦子さんは良人朝烏氏と共に大阪に赴いた。
△夕ほしさんも下總に歸省中。
△神近市子さんは牛込に移轉、日光に行かれたことは本欄の紀行文にある通り。
△多くの人が地方に歸省する時、野村京子さんは東京に歸省した。
△本誌前號散文欄に東京ひなげしとして、「六月の窓」と云ふ作が載つてをります、評者の評にそれを「新文章」の表紙を描いた、ひなげし、即ち同誌に「挿畫」と云ふ文章を書いたひなげしと同人のやうに書いてありますが、全く別人です、本人からの申込もあり、また原稿も別人であることが明かになつてをります、表紙と挿畫を書いたひなげしさんと、「六月の窓」を書いたひなげしさんとは全然別人であることを讀者に於ても了知して頂きたい、因に云ふ、以來雅號をつける場合には成る可く以前につけてある人のある名を避けて頂きたいものです、紛はしくて仕方がありません、外にも同雅號が多いやうですから一言注意して置きます。
△服部貞子さんは郷里に歸省中、本月は上京の筈です。

△「青鞜」の創刊。平塚明子、物集和子などの女性が主となり、「青鞜」と云ふ文學雜誌が九月一日から發行された、主として創作を載せ。評論も盛んにするさうた、惟ふに純粹の婦人文學雜誌として高踏するものであらう、若き婦人達の爲には斯う云ふ企圖の起つて來るのは心を强うするに足る現象である。
△晶子女史自筆の屏風　與謝野夫人自作の肉筆の和歌百首を二枚折屏風に仕立てたもの、此は表裝に二種あり、幅物仕立としては紙又は絹に同じく自作を肉筆に認めたるもの、以上何れも世の夫人愛好者に頒つ由で、此度新に規定を設けて需用者を募つてゐる、申込は本年九月三十日限り、凡ての責任は夫人自ら負ふとのことである規定書希望の人は麹町區中六番町ノ三東京新詩社宛に郵劵二錢封入で申込まれるとよい。
△少年と婦人の雜誌　芝區宇田川町瑠璃出版社から少年の雜誌と、婦人の雜誌が新しく發行されるさうた、編輯記者は松美佐雄氏。

新刊

○女子作文全書　戸野みちゑ子　加藤正一　共著
前編には作文總説を、後篇には作法及び文例を擧げたり、文例に今人の文も、古人の文と共に引用したるは好し、記事文、紀行文、日記文、叙情文、傳記文、書簡文等皆具はれり、上欄には美辭類語、用語、など作文上必要の語句を蒐集せり、菊版五百餘頁、和綴の優美なる書物なり、定價金六十五錢は甚だ廉なり(博文館出版)

○赤穗義士銘々傳　仇討文庫
仇討文庫は我國の復讐美譚を一つの叢書として集めんとするものなり、先づ赤穗の銘々傳を出版せり、體裁は所謂いてふ本と稱する袖珍形のクロース製なり(定價金二十五錢、本郷弓町一丁目尚文館出版)

○曾我物語　同上
曾我物語も仇討ものとしては尤も有名なるは言はずもがな(同上)

○婦人病の警戒　日常百珍
日常百珍、十錢叢書といふ小形の叢書出でたり日常百般のことは何でも此叢書に網羅するといふ主義にて、定價は一冊十錢均一なり、手輕なところが何よりならん、本編には婦人の病氣に就いて精細に述べたり(京橋西紺屋町良明堂發

賣）

○健康之秘訣　同上

此は十錢叢書の一冊なり、健康の秘訣は少食にあることを詳しく說明して、斷食療法と云ふものをも說明せり、健康に注意する者は一讀の價値あり（同上）

編輯通信

御見舞

本年の夏は氣象に變調を呈して、或は暴雨を降らし或は颶風を起し、其爲に全國各地到る處洪水や風害がありました、本誌愛讀者諸君の中にも此災害に罹られた方が少からず有ることゝ御察し申します、記者は其地方の人々に多大の同情を捧げます、もはや節も秋に入つて、氣候も定まるでせう、雨や風の爲に惱まされた皆樣方も御安心なさつて宜しいでせう、此處に謹んでお見舞の辭を呈し、併せて皆樣の御健康を祈ります

○岡山の誌友會　十月には岡山市に於て本誌誌友會が開かれます、詳しいことは次號の紙上で發表されることになつてゐます。

○口繪　本誌が數ケ月前から挿入して居た木版口繪はやはり石版の彩色口繪の方が好いと云ふ方が多數ありますので本號からは以前の通り名流畫伯の石版口繪を入れることにいたしました木版の繪は特別號に限り挿入することにいたしませう。

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛、未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る、長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は每月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▼女子文壇定價早見表

每月一日發刊、年四回增刊

冊數	定價前金	郵税	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四拾三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹年分）	一圓六十六錢	拾八錢	壹圓八十四錢

定期號及增刊號とも	定價前金	郵税	合計
增刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓三十三錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十六錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時には必ず右誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、用紙は最寄郵便局にて無料にて與れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增なること。（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

壹等	一頁參拾圓	（半頁廿四字三十二行）
貳等	一頁貳拾五圓	
參等	一頁貳拾參圓	半頁十二圓
	一行四拾錢	（壹行五號字二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年八月二十五日印刷納本
明治四十四年九月一日七年第拾壹號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本包
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話　京橋　六〇七番
振替貯金口座壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、其外全國書店

現代婦人百人一首

上は有栖川宮妃殿下の絶調を初め奉り各宮妃殿下御五方、九條公爵夫人以下華族の令夫人、宮中女官、婦人教育家、軍人、實業家其他名流の夫人一百名の得意の和歌一首宛を收む、挿入するに此等作歌者の寫眞及び筆蹟を以てす、單に此の『現代婦人百人一首』のみにても永く保存するの價値は充分にあり

山崎紫紅作『祇王』（脚本）

（三十二頁）

帝國座初舞臺に脚本『賴朝』を書き下して才名一時に擧りたる新進の脚本作家山崎紫紅氏が、本誌の爲に執筆されし新脚本にして、題材を平家物語中の祇王祇女佛御前の事蹟に取り、表白は凡て現代語を用ひ、舞臺面の變化等も逐一注意したれば、居ながら新時代の一幕物を觀るの興味あり

婦人月旦 與謝野晶子論

上田博士をして平安朝の紫式部、清少納言に優るとも劣らずと斷言せしめたる當代異數の天才與謝野晶子女史を或は歌の方面より、或は生活の方面より評論したるものにして、論者は凡て名ある畵家文士なれば所論孰れも根柢あり、與謝野晶子は如何なる人なるかと云ふことを知らんと欲するものは是非此一篇を熟讀せざるべからず

我が好む演劇と音樂

史劇、社會劇、喜劇、西洋劇、義太夫、長唄、箏、西洋樂等其他の分類の下に、我が好むものは何なりと題目を擧げたれば、一目にして其人の嗜好を知り、全體に於て現代娛樂趣味の傾向を知るを得べし、之を擧示したる人は文士、劇評家、詩人、音樂家、畵家等凡て四十八人の名流のみなり

有益なる一覽表

▲世界百文豪
▲日本百文豪
▲女庭訓

新浮世繪

木版極彩色奉書刷
滿願の日『竹久夢二筆

以上の一つを得るも優に新しき智識と、豐かなる趣味とを享受すべし、況して之を一冊の中に合せ得らるゝ『女子文壇紀念第百號』を見免すは讀物を愛する人の迂濶と云ふべし

●紙數三百二十頁、木板、寫眞版口繪及挿畫澤山挿入
▲定價金三十錢　送料二錢五厘　五月一日創刊

●全國到る處の雜誌書店に取次販賣致して居ります
若し最寄書店になくば●東京京橋區大鋸町女子文壇社へ宛直接に御申越下さい着金次第速に送本す

日本一の少女

石版極彩色
寫眞版挿畫美

九月號發刊

定價　一冊金十錢（送料一錢）
半年分前金六十三錢（送料共）

▼（少女小說）運の善い子と運の惡い子……佐々木邦
▼赤い傘の夢……兒玉花外
▼歌に名高い阿波の鳴門……長曾我部菊子
▼夏の夕暮……田中空雷
▼自分の家（下）……小野小峽
▼白い船……大内艶子
◎（科學）獨で汽車に乘る犬……大久保獸醫
◎（少女戯曲）暴風雨の夜……萬代恒志

●（少女日記）畿內見物……佐分華影
●おりヨウさん……けい子
◎（繪ばなし）阿波鳴門巡禮唄……竹久夢二
◎乳母の家……ふみ子
△（訪問）公德心厚き米國の少女……こう子
●本社新案　東京女學校番附

▶東京市京橋大鋸町　女子文壇社出版（振替　武七九）賣捌　到處書店◀

◉口癖の樣に頭痛がするといふ婦人あり

御婦人は十人寄れば、七八人まで頭痛して困ると仰しやいますが、頭痛の起る原因に色々あるけれども、婦人病の殆んど總てが頭痛の原因となるといふ事は、どの御醫者さんも申します、併し多くの婦人は、頭痛のするのは、時候の爲めだとかいつて、顳顬へ頭痛膏だの、梅干の皮などを貼て、それで治ると思ふ人もある樣ですが之れは大なる誤解である、婦人病の根治を圖らない内は、頭痛は決して止むものでない、上述の如く頭痛がして困ると云ふ方は、多くの場合に於て婦人病に罹つて居るのであるから、特に是等の婦人の爲めに、婦人病の兆候及び療法に付て簡單に述べて見ませう。

ヒステリー症は俗に言ふ血の道で最初は頭が重く氣がふさぎ次で頭痛が起る、もう一歩進むと癇高ぶり、些細の事が氣にかゝり、過ぎ去つた事や、取越苦勞をする樣になる、白血赤血こしけは子宮内膜炎の結果で多量のねば〳〵した帶下を漏らし、其帶下は時としては、血液又は膿を含む事があり、甚だ惡い臭がする、此病氣は懷姙の機能を奪ふから子供を擧げ難く、顔色は常に蒼く活氣を失ひ、年頃になつて月の物を見ないとか、たとへあつても、時期一定せず、其量に多少あり、月經時に苦痛を感ずるのは皆病氣の結果である「つわり」は姙婦の持前の如く考へて治療を怠る方があるけれども、營養分を攝取することが出來ない爲めに身體甚だ衰弱し、之が爲めに難産小産する恐れがある其他腰足が引釣り痛み、又胸先へ差込み錐を揉み込まれる樣な痛みを覺えるとか目が眩んだり、耳が鳴つたり、肩が凝つたり、腰足が冷えたり、顔がほてつたりする容態は、多く婦人病から起るのである、此外産後古血が滯ると色々の病氣が起る、肥立ちが惡るければ手足が水腫が出來たり、しびれたりする、以上述べた所は、婦人病の大要であるが、是等の病氣に對する治療法は、津村順天堂の自宅治療法を以て最良とする、津村順天堂には内服藥としては中將湯あり以上の諸病に特効があります、外用藥即ち子宮坐藥としては中將球があります、此兩藥を併用すれば、藥効は内外相應じて一層著しいどういふ時に中將球が必要かといふと、子宮内膜炎とか白帶下、赤帶下、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答完、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、前の惡臭、前の掻痒、月經時の疼痛及び夫の淋疾に罹り居る時等に中將湯を服用して中將球を兼用するの必要があります

◎中將湯、中將球は全國到る處の藥店にて販賣す、若し無き時は病人の容體詳しく書き添へ、本舗、東京日本橋通四丁目津村順天堂へ注文せられよ中將湯には數種の加減藥ありて本舗は其病症に應じ適當の加減藥を發送する

中將湯代價五週分貳圓五十錢、三週分一圓六十錢、二週分一圓十錢、一週分六十錢、四日分三十五錢、二日分廿錢

中將球定價百二十個入五圓、四十五個入貳圓、二十個入一圓、九個入五十錢、試み三個入二十錢